秋田県文化財調査報告書第427集

狼　穴　Ⅲ　遺　跡

―一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ―

２００８・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7㎝、凝灰岩。

狼（おおかみ）穴（あな）Ⅲ遺（さん）跡

―一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ―

２００８・３

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道7号大館西道路建設事業に先立って、平成18年度に大館市において実施した狼穴Ⅲ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代の貯蔵穴や、平安時代の竪穴住居跡等が検出され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所、大館市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　　言

1　本書は、平成18(2006)年度に発掘調査した狼穴Ⅲ遺跡の調査成果を収めたものであり、一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の６冊目である。

2　調査の内容については、すでにその一部を埋蔵文化財センター年報などによって公表してきたが、本報告書の記載内容を正式なものとする。

3　本書に使用した地図は、国土地理院発行の ２万５千分の１『大館』及び国土交通省能代工事事務所提供の１千分の１地形図である。

4　遺跡基本層位と遺構堆積土層中の土色の表記は、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1994年版によった。

5　本書に使用した空中写真は、株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したものである。

6　第５章の「自然科学的分析」に示した各種分析は、株式会社加速器分析研究所に分析を委託した成果報告である。

7　本報告書の作成にあたり、以下の方々からご指導・ご助言を頂いた。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

板橋範芳　伊藤武士　工藤雅樹　今野公顕　澤谷　敬　島田祐悦　島原弘政　鈴木琢也　趙　呉成　冨樫泰時　村松　稔　八木光則　廬　燕玲

8　本書の草稿執筆並びに編集の分担は以下の通りである。

第１～３章　新海和広・巴　亜子

第４章　　新海和広・小松田博嗣・巴　亜子

第６章　　新海和広

編集　　新海和広

凡　　例

1　遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を冠して、検出順に番号を付した。また、精査の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

ＳＩ･･･竪穴住居跡　ＳＢ･･･掘立柱建物跡　ＳＡ･･･柵列　ＳＫ･･･土坑　ＳＴ･･･捨て場

ＳＫＦ･･･フラスコ状土坑　ＳＤ･･･溝跡　ＳＫＰ･･･柱穴様ピット　ＳＸ･･･性格不明遺構

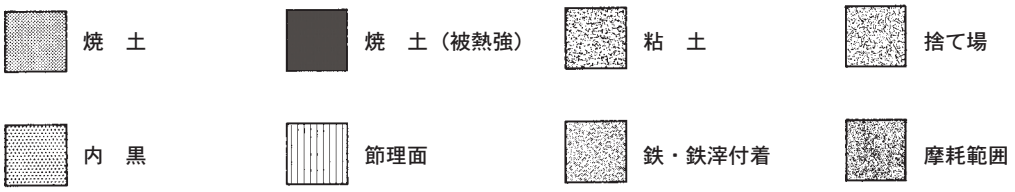
2　遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構内層位には算用数字を使用した。

3　挿図中の遺物番号は、各挿図ごとに土器・石器・鉄製品を問わず通し番号を付し、図版には●図－●と示した。なお、遺構図中に記したＰは竪穴住居跡に伴うピット、ＲＰは土器、Ｓは礫を示す。

4　重複関係にある遺構の説明文は、遺構番号順を替えて連続させている。

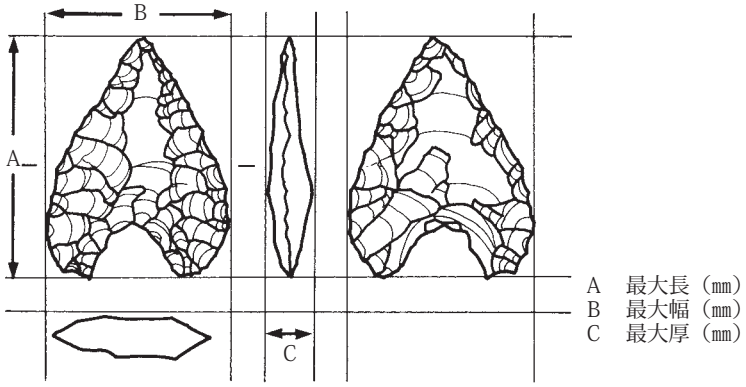
5　出土土器のうち、胎土に繊維を含むものの断面には▲を付けてある。

6　挿図に使用したスクリーントーンは、下記の通りである。



7　土師器の実測図に用いた調整の表現は下記の通りである。

8　石器の計測部位は下記の通りで、鉄製品・鉄滓もほぼこれに準じる。計測値の単位は、土器の長さ等が㎝、石器・鉄製品の長さ等が㎜、重さがｇである。なお、(　)書きは推定値である。



目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次
第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……1
第２章　遺跡の環境……2
　第１節　遺跡の位置と立地……2
　第２節　歴史的環境……4
第３章　発掘調査の概要……7
　第１節　遺跡の概観……7
　第２節　調査の方法……7
　第３節　調査の経過……8
　第４節　整理作業の方法と経過……11
　第５節　遺物の分類……12
第４章　調査の記録・……15
　第１節　調査区１の記録……15
　　１　基本層序……15
　　２　縄文時代の検出遺構と遺物……16
　　（１）フラスコ状土坑……16
　　（２）遺構外出土遺物……24
　　３　平安時代の検出遺構と遺物……27
　　（１）竪穴住居跡……27
　　（２）掘立柱建物跡……39
　　（３）柱列……39
　　（４）土坑……42
　　（５）溝跡……44
　　（６）性格不明遺構……45
　　（７）柱穴様ピット……49
　　（８）遺構外出土遺物……51
　第２節　調査区２の記録……53
　　１　基本層序……53
　　２　縄文時代の検出遺構と遺物……54
　　（１）フラスコ状土坑……54
　　（２）遺構外出土遺物……55
　　３　平安時代の検出遺構と遺物……56
　　（１）竪穴住居跡……56
　　（２）柱列……98
　　（３）溝跡……100
　　（４）柱穴様ピット……104
　　（５）捨て場・・・……104
　　（６）遺構外出土遺物……106
　　４　平安時代以降の出土遺物……108
第５章　自然科学分析……109
　第１節　出土試料の放射性炭素年代測定……109
　第２節　出土炭化材の樹種調査結果……113
第６章　まとめ……116
抄録
奥付

挿図目次

第１図　遺跡位置……2
第２図　地形区分……3
第３図　狼穴Ⅲ遺跡と周辺遺跡……5
第４図　調査範囲と狼穴Ⅳ遺跡……9・10
第５図　調査区１遺構配置……14
第６図　調査区１基本土層……15
第７図　ＳＫＦ02・03・04・09・19……17
第８図　ＳＫＦ84・92・93・94・96……20
第９図　ＳＫＦ128・138　ＳＫＦ出土遺物１……23
第10図　ＳＫＦ出土遺物２……24
第11図　調査区１遺構外出土遺物（縄文時代）１……25
第12図　調査区１遺構外出土遺物（縄文時代）２……26
第13図　ＳＩ05……28
第14図　ＳＩ06……29
第15図　ＳＩ06カマド・遺物出土状況……30
第16図　ＳＩ06出土遺物……31
第17図　ＳＩ07……33
第18図　ＳＩ07カマド・遺物出土状況……34
第19図　ＳＩ07出土遺物……35
第20図　ＳＩ08……37
第21図　ＳＩ17・出土遺物……38
第22図　ＳＢ101……40
第23図　ＳＢ102……41
第24図　ＳＡ103・104……42
第25図　ＳＫ01・10・11・18・90・95・110……43
第26図　ＳＤ67……46
第27図　ＳＸ106……47
第28図　調査区１ＳＫＰ配置１……48
第29図　調査区１ＳＫＰ配置２……49
第30図　調査区１ＳＫＰ配置３……50
第31図　調査区１遺構外出土遺物（平安時代）……51
第32図　調査区２遺構配置……52
第33図　調査区２基本土層……53
第34図　ＳＫＦ34……54
第35図　調査区２遺構外出土遺物（縄文時代）……55
第36図　ＳＩ21……57
第37図　ＳＩ21カマド……58
第38図　ＳＩ21炭化材・遺物出土状況……59
第39図　ＳＩ21出土遺物１……60
第40図　ＳＩ21出土遺物２……61
第41図　ＳＩ21出土遺物３……62
第42図　ＳＩ22・カマド……64
第43図　ＳＩ22出土遺物……65
第44図　ＳＩ23……66
第45図　ＳＩ23ピット・カマド……67
第46図　ＳＩ23出土遺物……68
第47図　ＳＩ24Ａ……70
第48図　ＳＩ24Ａカマド・遺物出土状況……71
第49図　ＳＩ24Ａ出土遺物１……73
第50図　ＳＩ24Ａ出土遺物２……74
第51図　ＳＩ24Ｂ……75
第52図　ＳＩ25……76
第53図　ＳＩ25出土遺物……77
第54図　ＳＩ115……78
第55図　ＳＩ115カマド・出土遺物……79
第56図　ＳＩ26……81
第57図　ＳＩ26カマド・出土遺物……82
第58図　ＳＩ27……83
第59図　ＳＩ27出土遺物……84
第60図　ＳＩ28……85
第61図　ＳＩ28カマド・遺物出土状況……87
第62図　ＳＩ28出土遺物……88
第63図　ＳＩ29・出土遺物……89
第64図　ＳＩ112……90
第65図　ＳＩ112カマド・遺物出土状況……91
第66図　ＳＩ112出土遺物……92
第67図　ＳＩ113……94
第68図　ＳＩ113カマド……95
第69図　ＳＩ113出土遺物……96
第70図　ＳＩ114・出土遺物……97
第71図　ＳＡ119・120……99
第72図　ＳＤ32・33……101
第73図　ＳＤ38・137……103
第74図　調査区２ＳＫＰ……104
第75図　ＳＴ141出土遺物……105
第76図　調査区２遺構外出土遺物（平安時代）……107
第77図　調査区２遺構外出土遺物（平安時代以降）……108

表目次

第１表　狼穴Ⅲ遺跡と周辺遺跡……6
第２表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果……112
第３表　樹種同定結果……115

図版目次

図版１　遺跡全景・調査区１・調査区２全景
図版２　調査区１全景・調査区２全景
図版３　ＳＫＦ02・03・04・09
図版４　ＳＫＦ19・84・92・93
図版５　ＳＫＦ94・96・128・34
図版６　ＳＩ05
図版７　ＳＩ06
図版８　ＳＩ07
図版９　ＳＩ08
図版10　ＳＩ17
図版11　ＳＢ101・102、ＳＡ103・104、ＳＫ01
図版12　ＳＫ10・11・18・95・110、ＳＤ67、ＳＸ106
図版13　ＳＩ21－１
図版14　ＳＩ21－２
図版15　ＳＩ22
図版16　ＳＩ23
図版17　ＳＩ24
図版18　ＳＩ25・115－１
図版19　ＳＩ25・115－２
図版20　ＳＩ26
図版21　ＳＩ27
図版22　ＳＩ28
図版23　ＳＩ29
図版24　ＳＩ112
図版25　ＳＩ113
図版26　ＳＩ114
図版27　ＳＡ119・120、ＳＤ32・33・38
図版28　土師器甕（大型）
図版29　土師器甕（小型）・土師器坏
図版30　鉄製品
図版31　出土材樹種１
図版32　出土材樹種２
図版33　出土材樹種３
図版34　出土材樹種４

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

大館西道路は、大館市街地における交通渋滞や騒音の緩和と県内の高速交通ネットワークの形成など、地域の文化と経済交流の活性化を目的として計画された路線で、大館市根下戸新町地内を起点とし、同市商人留地内を終点とする延長6.2㎞、幅員22mの自動車専用道路である。そのうち、根下戸新町地内から釈迦内地内の国道７号までの4.6㎞が部分供用されている。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから､道路工事に先立って建設省（現国土交通省）東北地方建設局能代工事事務所より、文化財保護法に基づいて埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、計画路線内の分布調査及び確認調査を実施し、記録保存が必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施することになった。

狼穴Ⅲ遺跡の確認調査は平成12年度に行われ、平安時代の遺構と遺物が確認されたことから、平成18年度に発掘調査を実施するに至った。

第２節　調査要項

遺　跡　名　　狼穴Ⅲ遺跡(おおかみあなさんいせき)(遺跡略号　２ＯＡⅢ)
遺跡所在地　　秋田県大館市釈迦内字狼穴21－１　外
調 査 期 間　　平成18年６月14日～９月５日
調 査 面 積　　1,600㎡
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者　　伊藤　誠(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　学芸主事)
　　新海　和広(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　文化財主事)
　　小松田　博嗣(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　調査・研究員)
　　巴　亜子(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　調査・研究員)
総務担当者　　平成18年度　渡辺　憲(秋田県埋蔵文化財センター総務課　課長)
　　柴田　卓也(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主任)
　　佐々木　和幸(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)
　　平成19年度　佐藤　康(秋田県埋蔵文化財センター総務課　課長)
　　千田　喜博(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査)
　　佐々木　和幸(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)
　　（担当者・職名は調査時のものである）
調査協力機関　国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所　大館市教育委員会

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

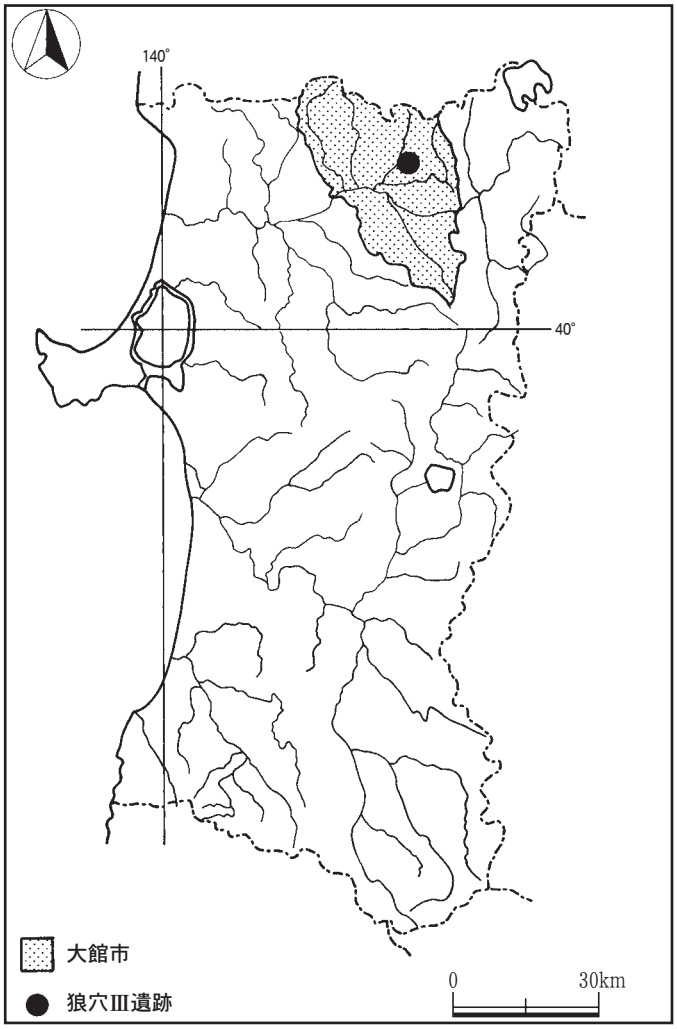
狼穴Ⅲ遺跡が所在する大館市は、秋田県の北端に位置する(第１図)。市域は、北を青森県平川市、東を鹿角市・小坂町、南と西を北秋田市に接しており、その面積は913.30㎢で秋田県内では第４位の広さである。

大館市の地形は、大館盆地を囲む山地、盆地に分布する段丘や残丘、山麓沿いに分布する扇状地、盆地内を流れる川沿いの沖積低地からなっている(第２図)。大館盆地は断層により形成された陥没盆地で、盆地の東縁や南西縁ではこれを裏付ける断層崖が現在でも確認できる。盆地をとりまく山地は、北西側に白神山地、東側に高森山地、南西側には摩当山地がある。市街地に近い所では、盆地の東側に鳳凰山(520m)、秋葉山(329m)、獅子ヶ森(224m)があり、西側には大山(378m)を中心とする花岡地区の山地が南北にのびている。

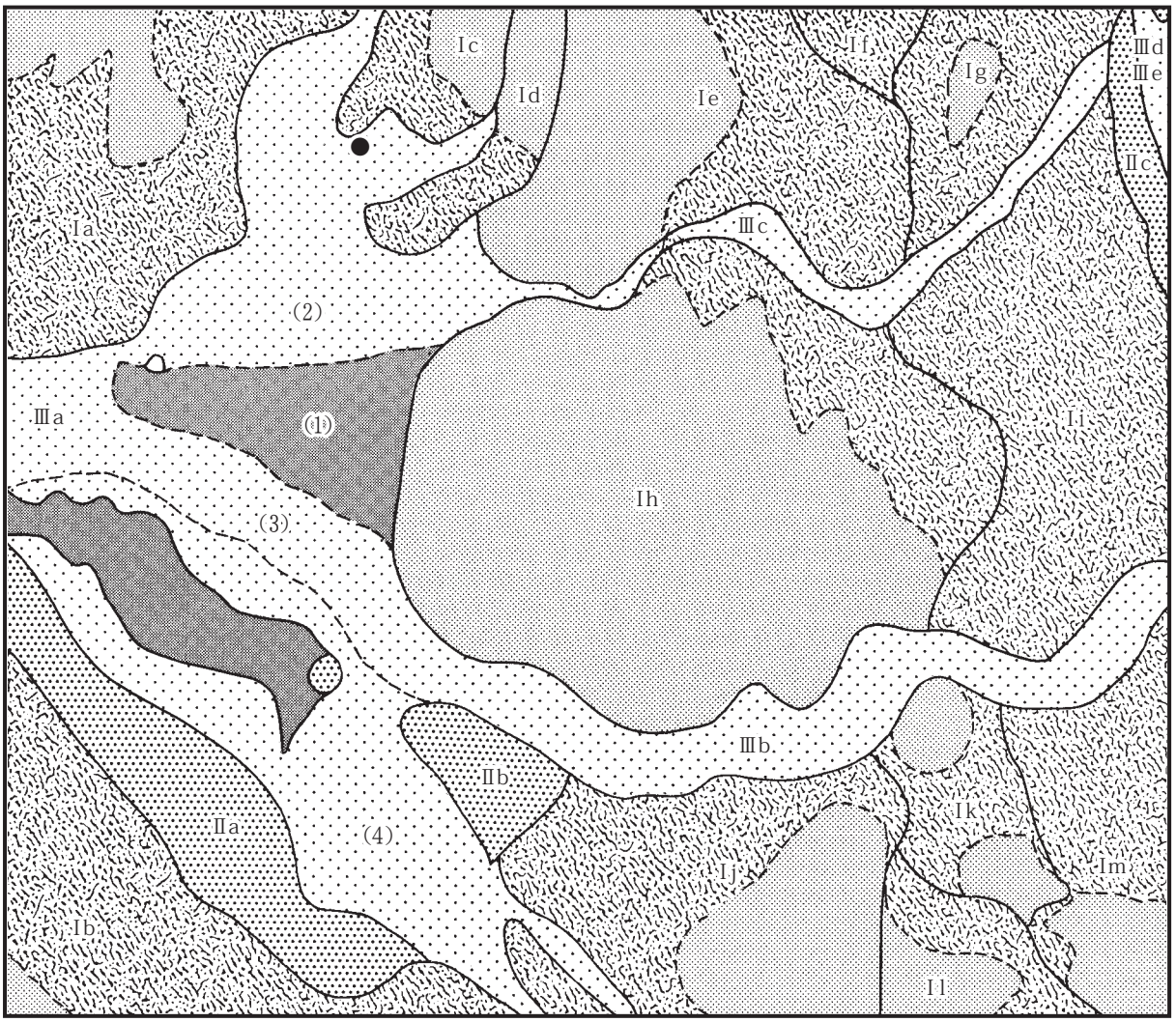
盆地内を流れる主要河川は、米代川、長木川、下内川である。米代川は県北第一の主要河川で、岩手県八幡平市(旧二戸郡安代町)の中岳の源流から鹿角市を経て大館市に入り、最終的には日本海に注ぐ。長木川、下内川はこの支流で、長木川は市内茂内屋敷北方の大川目沢に源を発し、盆地中央部を西流して、市内山田渡の西で米代川に合流する。下内川は矢立峠に近い市内陣馬北部の下内沢に源を発して、長走・白沢・釈迦内・沼館と南流して長木川に合流する。なお、下内川沿いの谷底平野は矢立峠付近まで続いており、古来より津軽との重要な交通路として利用されてきた。

狼穴Ⅲ遺跡は大館市街地北部の釈迦内地区に所在し、ＪＲ奥羽本線の大館駅から北北東へ約３㎞に位置する(第３図)。

遺跡周辺の地形は火砕流台地と呼ばれる火山起源の地形である。この台地は城ヶ森の橋桁集落付近が最高地点で、そこから南西方向に向かって標高を減じて日景町の乱川対岸付近までのびる。途中には芝谷地湿原や釈迦内鉱山のあった萩長森の残丘がみられる。また、西を流れる下内川と東を流れる乱川によって挟まれた位置にあり、台地下の水田面とは約10mの高低差がある。



第１図　遺跡位置



大山山地　（Ⅰａ）・比内山地　（Ⅰｂ）・城ヶ森山地　（Ⅰｃ）・高森山地　（Ⅰｄ）
高倉山山地　（Ⅰｅ）・羽保屋山山地（Ⅰｆ）・高地山山地　（Ⅰｇ）・中央山地　（Ⅰｈ）
松森山地　（Ⅰｉ）・合窪山山地　（Ⅰｊ）・三哲山山地　（Ⅰｋ）・合津山地　（Ⅰｌ）
尾去沢山地　（Ⅰｍ）
―山地

比内丘陵地（Ⅱａ）・味噌内丘陵地（Ⅱｂ）・小坂丘陵地（Ⅱｃ）
―丘陵地

大館盆地　（Ⅲａ）―大館段丘地（１）・長木川，下内川低地（２）
米代川低地（３）・犀川，引欠川低地（４）
―台地

十二所先行低地（Ⅲｂ）・長木川峡谷低地（Ⅲｃ）・元山段丘地（Ⅲｄ）・小坂川谷低地（Ⅲｅ）
―低地

●狼穴Ⅲ遺跡

第２図　地形区分

第２節　歴史的環境

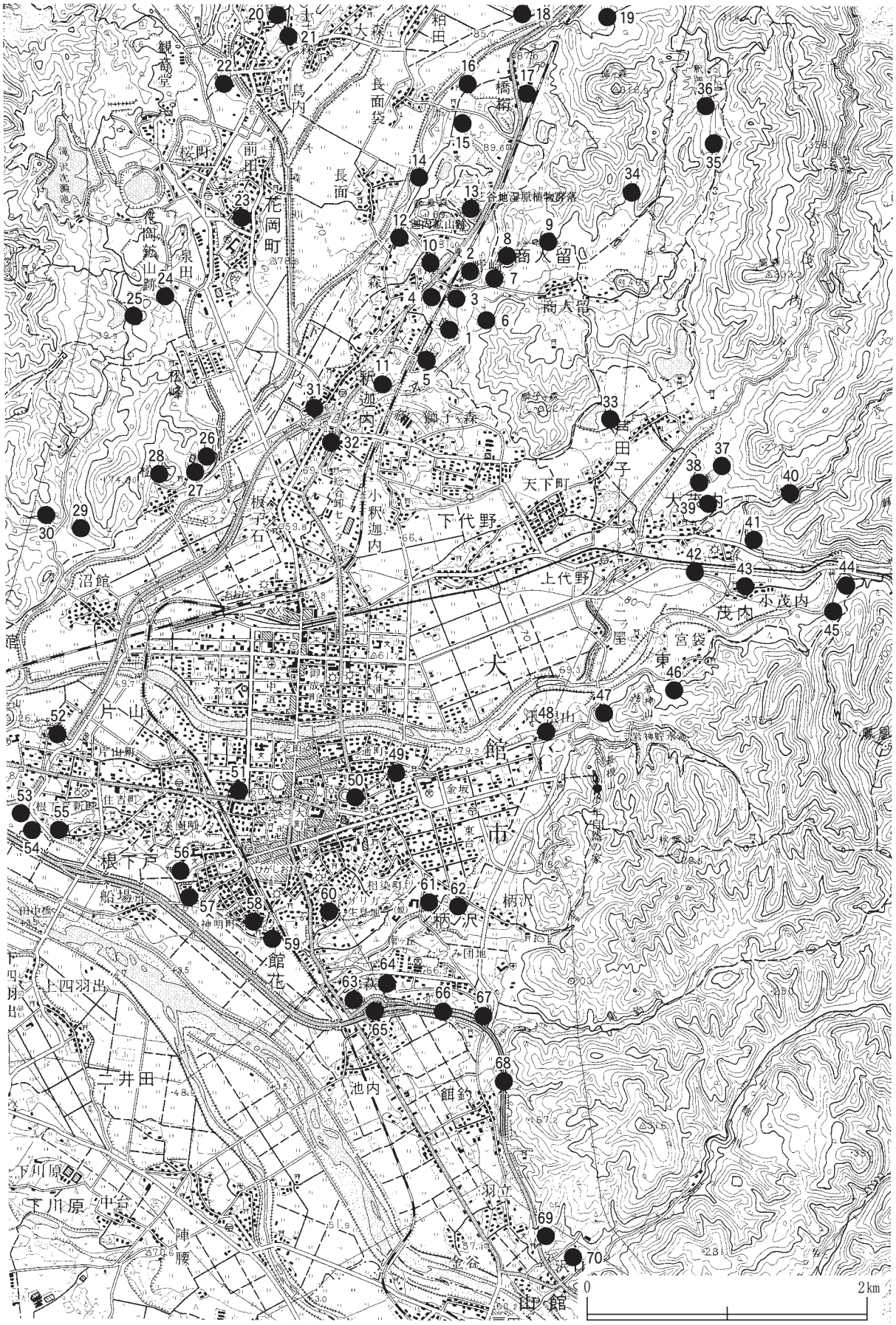
大館市ではこれまでに、旧石器時代から中・近世までの遺跡が157か所確認されている。第３図には、大館市街地北部に位置する東西約８㎞、南北約11.8㎞の地域の遺跡分布を図示した。この範囲の遺跡の多くは、盆地内に分布する台地上部に位置しており、沖積地にはあまりみられない。

大館市内で確認されている最も古い遺跡は、旧石器時代に属する松木高館平遺跡(27)で、大型の石刃が出土している。縄文時代の遺跡は、早期中葉以降の遺跡が見つかっている。軽井沢の五輪台集落付近にある鳶ヶ長根Ⅳ遺跡からは、貝殻文の土器が比較的まとまって出土しており、根下戸道下遺跡では早期中葉の竪穴住居跡も確認されている。前期の遺跡では集落の調査例が多く、中でも上野にある池内遺跡(65)は、前期中葉～末葉にかけての円筒下層式期の大集落で、大量の土器・石器の外に豊富な種類の動植物依存体が出土している。中期の遺跡は、多数見つかっているが集落の様相を把握できるような規模の大きい調査例は少ない。旧比内町の本道端遺跡では、縄文時代の中期の終わり頃の集落が見つかっており、複式炉を伴う住居が検出されている。中期の中頃から波及してくる南東北の大木式文化が、この地域にも影響を及ぼしていることが窺える。後期の遺跡では、中山の寒沢遺跡で７軒、軽井沢の萩峠遺跡で10軒の竪穴住居が見つかっており、集落が小規模化する傾向にあることが分かる。このほか茂内新町の塚ノ下遺跡(42)からは、目に天然アスファルトを埋め込んだ土偶が、萩ノ台Ⅱ遺跡(63)からは、十腰内Ⅰ・Ⅱ式に伴って翡翠の大珠が３点出土している。晩期になると、集落のみならず住居跡の検出数も少ない。旧田代町矢石館遺跡では、組石棺墓が５基調査されており、この時期の地域性を示す資料である。

弥生時代の遺跡では、諏訪台遺跡(39)で数軒の竪穴住居跡で構成される小集落が、二ツ森Ⅱ遺跡(10)では土坑墓が見つかっている。しかし、弥生時代の調査例は少なく具体的な様相は不明である。

大館市が史上に初めて登場するのは、『日本三代実録』に記載されている元慶二年(878年)に勃発した「元慶の乱」についての記事中である。元慶の乱は、秋田城主介良岑近の悪政に反発した雄物川以北の住民が蜂起した事件で、当時の秋田郡内の各ムラが独立を要求するまでに発展したが、最終的には政治的懐柔策により鎮定された。この独立を要求したムラの中に、当時の大館地方を示す「火内」の文字が記されている。元慶の乱の記事には、当時の各ムラの様子そのものを示す記載は少ないが、律令国家の体制には服属しながらも在地社会のまとまりを残し、対外的な問題には指導者の統率のもと行動がとれる集団が存在していたことが窺える。11世紀代にはそういった流れの中から、安倍・清原・藤原氏が台頭してくる。大館地方もそういった有力者の支配に組み込まれていくと考えられる。

大館市では多くの平安時代の遺跡が確認されており、これまで調査が行われた遺跡によって当時の様相が解明されてきた。時期は９世紀後半から10世紀代が多く、大館野遺跡(18)や扇田道下遺跡(61)は、10世紀代の大きな集落跡であることが分かっている。大館野遺跡では、多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡の他に道路跡に伴うと思われる溝、井戸、製鉄炉が見つかっており、計画的に集落を形成していたことが分かる。また本遺跡の周辺には、同じく平安時代の遺跡である狼穴遺跡(２)、狼穴Ⅱ遺跡(３)、狼穴Ⅳ遺跡(４)、釈迦内中台Ⅰ遺跡(５)、釈迦内中台Ⅱ遺跡(11)、坂下Ⅱ遺跡(７)、野崎遺跡(８)があり、いずれも乱川に面した台地の縁に位置している。



第３図　狼穴Ⅲ遺跡と周辺遺跡

第１表　狼穴Ⅲ遺跡と周辺遺跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	狼穴Ⅲ	縄文・平安	36	釈迦池	縄文・弥生
2	狼穴	縄文・平安	37	大茂内	縄文
3	狼穴Ⅱ	縄文・平安	38	諏訪台Ｄ	縄文
4	狼穴Ⅳ	縄文・平安	39	諏訪台	縄文・弥生・平安
5	釈迦内中台Ⅰ	縄文・弥生・平安	40	小茂内沢	縄文
6	坂下Ⅰ	不明	41	蛇沢口	縄文・古代
7	坂下Ⅱ	縄文・平安	42	塚ノ下	縄文・平安
8	野崎	縄文・平安	43	茂内	縄文
9	谷地中	縄文	44	鬼ヶ城	中世
10	二ツ森Ⅱ	縄文・弥生	45	玉林寺跡	縄文・中世
11	釈迦内中台Ⅱ	平安	46	宮袋	縄文
12	二ツ森	縄文・古代	47	岩神	縄文
13	芝谷地湿原	天然記念物	48	青嵐亭跡	庭園
14	福館Ⅱ	古代	49	金坂	古代・中世
15	福館橋桁野	縄文・古代	50	大館城	中世
16	福館	中世	51	土飛山館	平安・古代
17	橋桁	縄文	52	片山館コ	続縄文・中世
18	大館野	平安・中世	53	根下戸Ⅲ	縄文
19	白沢古館	古代・中世	54	根下戸Ⅱ	縄文
20	根井下	縄文	55	根下戸Ⅰ	縄文
21	十三森	縄文・古代・中世	56	稲荷中岱	古代・中世
22	七ッ館	縄文・古代・中世	57	太平山	縄文
23	花岡城・神山	古代・中世	58	小館町	縄文
24	松峰	古代・中世	59	小館花館	古代・中世
25	大山板碑	中世	60	ザリガニ生息地	天然記念物
26	高館	中世	61	扇田道下	縄文・平安
27	松木高館平	旧石器	62	扇田道上	古代
28	松木	縄文	63	萩ノ台Ⅱ	縄文
29	鍛冶屋敷	縄文・古代	64	萩ノ台Ⅰ	縄文
30	下堤沢	古代	65	池内	縄文・平安
31	釈迦内古館	中世	66	上野	縄文・平安
32	釈迦内館	中世	67	餌釣館	縄文・平安
33	芦田子上岱	縄文・古代	68	餌釣	縄文・平安・中世
34	田ノ沢	縄文	69	山館	平安・中世
35	田ノ沢山	縄文	70	山館上ノ山	縄文・平安

《参考文献》
秋田県　『土地分類基本調査大館』　1986(昭和61)年
秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(県北版)』　1991(平成3)年
大館市教育委員会　『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』　1990(平成２)年
大館市史編さん委員会　『大館市史第１巻』　1979(昭和54)年
大館市史編さん委員会　『大館の歴史』　1992(平成４)年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

狼穴Ⅲ遺跡は、下内川と乱川に挟まれた釈迦内台地に所在する。釈迦内台地は北東から南西へ緩く傾斜し、小さな沢により複雑に開析されて幾つもの舌状台地が形成されており、本遺跡もそういった舌状台地の上に立地する。今回の調査範囲は舌状台地のほぼ南東端に位置し、これは予想される狼穴Ⅲ遺跡の範囲の南東部にあたる。調査範囲の地形は台地上部の平坦な地形だが、調査区南東部に隣接する位置には、残丘に相当する小丘陵がある。

今回の調査区は２か所に分かれており、北側を調査区１、南側を調査区２として調査した(第４図)。調査区１は、北東側に張り出す小舌状台地に相当する範囲である。調査区２は小丘陵の北西麓に位置する。いずれの調査区でも平安時代の竪穴住居跡が密に分布しており、両調査区をつなぐ平坦面にも同様な遺構が展開することが想定される。このことから、本遺跡地内の利用が最も頻繁であった平安時代には、台地上部の平坦面を居住域として広く利用していたことが想像される。

第２節　調査の方法

表土の除去はバックホーにより、残存状態が良好な所ではⅡ層上面まで、削平されている所ではⅤ層・Ⅵ層までの深さでⅠ層を除去した。遺構精査、Ⅳ層の粗掘りは移植・スコップ等を使用して人力で作業を行った。排土運搬は、人力またはベルトコンベアーを用いて排土を投棄した。排土置き場は調査区に隣接する斜面を利用した。

計画的な調査と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。設定方法は、調査区に設置されていた一般国道７号大館西道路建設の道路中心杭から国家座標値を割り出し、調査区内中央部の(Ｘ＝34503.000　Ｙ＝－21873.000)をグリッド原点ＭＡ50として、この杭から国家座標第Ｘ系座標北を求め、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。この東西南北に沿って４×４mのグリッドを設定し、グリッド原点ＭＡ50を起点に、東西方向には東から西へ４mごとに「ＬＦ・ＬＧ・・・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・・・ＭＳ・ＭＴ」という２文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ４mごとに「39・40・・・48・49・50・・・69・70」という２桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は４m間隔の東西基線と南北基線の交点全てに打設し、前記のグリッド名称を南北隅の杭に記入した。

調査の記録は、平面図・断面図及び写真で記録化した。平面図・断面図の縮尺は１／20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には１／10で作図した。写真撮影は、35㎜のモノクロ、リバーサル、デジタルカメラを使用した。

遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺構内出土のものは、適宜出土地点の位置を記録した。

第３節　調査の経過

調査は、平成18年６月14日～９月５日まで実施した。以下に、各週ごとの調査経過を記述する。

【第１週】　６月14日～６月16日

初日は機材の整理や環境整備、表土除去を行った。調査区１では約半分の表土除去を終え、竪穴住居跡と土坑を検出した。調査区２ではベルトコンベアーの設置を終え、確認調査のトレンチ内清掃と調査区境界部分の掘り下げを行った。

【第２週】　６月19日～６月23日

調査区１は概ね表土除去を終え、ほぼ全面地山面まで掘り下げた。その結果、調査区北側に竪穴住居跡や土坑が密集し、南側には焼土遺構や柱穴が分布する状況を把握した。土坑から精査を開始し、図化作業も一部行った。調査区２では、遺物を回収しつつ遺構検出作業を行った。並行して、確認調査時のトレンチを清掃して、遺構の検出状況と分布数の把握に努めた。

【第３週】　６月26日～６月30日

調査区１では、遺構精査・図化作業、台地末端部の遺構検出作業を行った。遺構精査は、土坑・柱穴を中心に行った。検出作業の結果、台地の肩よりもやや斜面下部で数基の土坑を検出した。調査区２では、遺構検出作業を行い、竪穴住居跡４軒の確認写真を撮影した。

【第４週】　７月３日～７月７日

調査区１では台地末端部に展開する土坑群の精査・図化作業を中心に行った。また、平坦部における柱穴群の精査は概ね終了した。調査区２では継続して遺構検出作業を行い、竪穴住居跡の確認状況写真を撮影した。週半ばから竪穴住居跡の精査を開始した。

【第５週】　７月10日～７月14日

調査区１では、台地末端部に展開する土坑群と平坦部に分布する柱穴群の図化作業を中心として、一部竪穴住居跡の精査も行った。調査区２では、竪穴住居跡の精査を中心に作業を行い、７軒中５軒の堆積土を除去した。水曜日には、一部表土の残存していた範囲の表土除去作業及び遺構検出作業も行った。

【第６週】　７月18日～７月21日

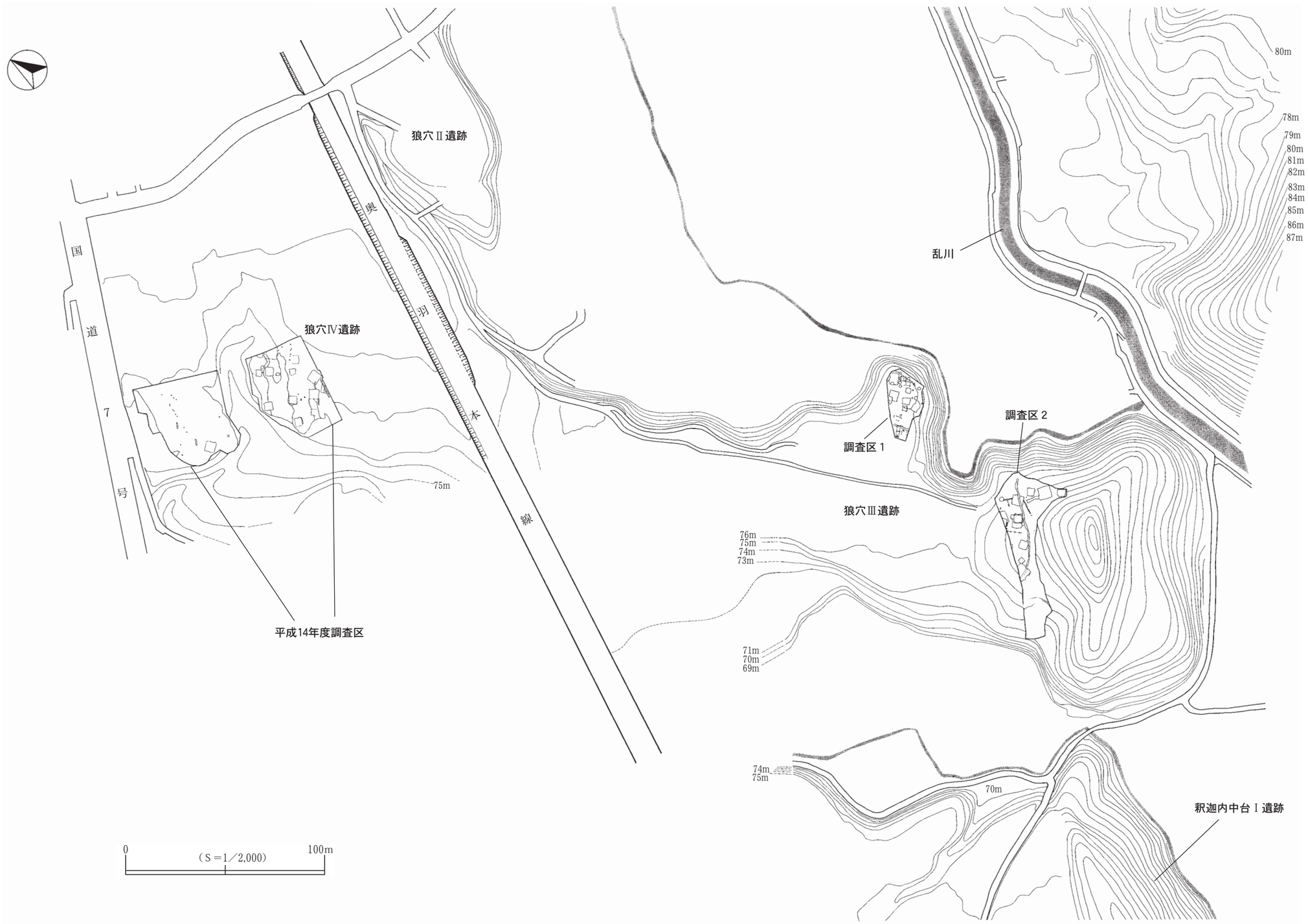
調査区１では遺構の図化作業を継続して行い、土坑についてはほぼ終了した。竪穴住居跡についても約半数の精査が完了し、切り合いの旧段階に属するものの精査を残すのみとなってきた。調査区２では、竪穴住居跡の精査と、先週表土除去を行った範囲の遺構検出作業を行った。遺構検出作業により、調査区東端で新たに３軒の竪穴住居跡を検出した。

【第７週】　７月24日～７月28日

調査区１では竪穴住居跡と焼土遺構の精査を行った。遺構精査も進み、主な作業は遺構図化に切り替わってきた。調査区２では、竪穴住居跡の精査や図化作業、調査区南端部の捨て場の掘り下げを行った。

【第８週】　７月31日～８月４日

調査区１での遺構精査及び図化作業が、週の半ばまでに全て終了した。調査区２では、竪穴住居跡と溝跡の精査、調査区南端部の捨て場の掘り下げを行った。



第４図　調査範囲と狼穴Ⅳ遺跡

【第９週】　８月７日～８月10日

週の前半は、空撮の準備を中心に作業を行った。９日に予定通り空撮を実施し、その後遺構精査を継続して行った。

【第10週】　８月22日～８月25日

調査区２の遺構精査や図化作業、縄文時代の遺構確認のためのⅣ層の掘り下げを行った。遺構精査は、床面やカマド周辺部の精査を中心に行った。Ⅳ層の掘り下げは、竪穴住居跡の周辺１mを残して、遺構の分布していない範囲を中心に行った。

【第11週】　８月28日～９月２日

調査区２の遺構精査や図化作業、Ⅳ層の掘り下げを継続して行った。遺構精査は、床面精査やカマド周辺部の最終的な精査を中心に行った。Ⅳ層の掘り下げは、竪穴住居跡周辺部を残し８割方完了した。なお、週の後半には遺跡見学会に向けての準備を行い、９月２日には予定通り、野崎遺跡・坂下Ⅱ遺跡との合同見学会を実施した。

【第12週】　９月４日～９月５日

調査区２の遺構精査や、図化作業を継続して行った。遺構精査は、最終確認の床面精査やカマド周辺部の精査を中心に、図面の整理と図面上の不足分の確認を併せて行った。ヤードでは撤収準備を行った。

第４節　整理作業の経過と方法

遺構関連の整理作業では、遺構調査段階で作製した原図をもとに、平面図・断面図の組み合わせで製図、レイアウトを行った。原則、遺構図は１／40縮尺で、カマドや焼土遺構は１／20縮尺で図示したが、版面に収まらないものについては、例外的に別縮尺で図示している。また、遺構内出土遺物については、出土遺構との関連性を重視する観点から極力図示したが、形態・要素の不明なものについては割愛した。

遺物関連の作業では、以下の点に注意して作業を進めた。

遺物の分類に当たっては、各遺物全点観察を行い、種別に漏れが生じないように注意した。このため今回の報告では、本遺跡の遺物相は最低限確保されていると思われる。

土器については、可能な限り推定口径を復元して実測を行った。本来の形態とは異質な表現で報告する危険性が高いのは否めないが、形態復元を優先させている。そのため、実物は復元されていないものがあり、写真と挿図では状態が一致しないものがある。また、土器破片の分類では、胎土・焼成・原体・調整の種類等からできるだけ同一個体を抜き出し、別個体と思われる資料を報告書掲載資料として抽出した。これを原則とするが、特異な資料については複数図示したものもある。

石器については出土量が少ないので、剥片を含め出土品の主要なものを全て図示した。

第５章の自然科学的分析の編集に当たっては、執筆者の主意や表現に関わる点での校正は行わず、誤字・脱字や挿図・表・図版番号等の統一にとどめた。ただし、報告書紙数の制限のため、挿図・表・図版については、一部サイズを縮小したものがある。

第５節　遺物の分類

１　土器・陶磁器類

Ⅰ群　縄文時代早期

早期中葉の貝殻文系土器が出土している。貝殻腹縁圧痕文を施すものは破片数も少なく、条痕文を施すものが多い。貝殻背圧痕を施すものがあることや、胎土に繊維を含むことを併せると、同市の根下戸道下遺跡出土の早期土器群に近いとみられ、貝殻腹縁圧痕文主体から条痕文主体へと転換する時期の資料と考えられる。

１類　貝殻腹縁圧痕文を施すもの

２類　貝殻条痕文や貝殻背圧痕文を施すもの

３類　基本的に無文で浅い貝殻条痕文様の擦痕が認められる

Ⅱ群　縄文時代前期

出土量が少なく、胴部破片のみであるため細別時期を特定することは困難である。いずれも胎土に繊維を含む。

１類　結束羽状縄文を施すもの

２類　撚糸文を施すもの

Ⅲ群　縄文時代中・後期

全体形を窺える資料は皆無だが、特徴からみて１類は中期の円筒上層ｄ式以降、２類は後期前葉期とみられ、胎土が類似することから３・４類は２類に伴う可能性が高い。

１類　貼付文を施すもの

２類　沈線文を施すもの

３類　地文のみのもの

４類　無文だが胎土からみて本段階に属すると思われるもの

Ⅳ群　弥生時代

出土量は極めて少なく、図示できたのは１点のみである。後期に属するとみられる。

Ⅴ群　平安時代

ほぼ10世紀代に属する土器群で、10世紀第１四半期でも十和田ａ火山灰降下後の時期と考えられる。焼成種別では土師器と須恵器が出土している。基本的に器種分類にとどめているが、出土量の比較的多い土師器甕・坏については細分類できる。なお、径が10㎝を下回る酸化焔焼成の容器は、小型土器として土製品と同列で扱った。

土師器

甕：整形技法と頸部形状で以下の４類に大別できる。なお、口径が16㎝未満のものを比較的小型、16㎝以上のものを比較的中・大型として区分している。

Ａ類　ロクロナデまたはロクロナデ様のほぼ平行な横ナデをとどめるもの

Ｂ類　非ロクロ整形で頸部に段状のくびれをもつもの

Ｃ類　非ロクロ整形で頸部のくびれが段にならないもの

Ｄ類　非ロクロ整形で頸部にくびれをもたないもの

坏：整形技法と内面黒色処理で以下の ２類に大別できる。なお、外面にも黒色処理を施したものや、内面口縁部直下に、沈線様の凹みをもつものが少量存在する。

Ａ類　内面にミガキと黒色処理を施さないもの(いわゆる赤焼)

Ｂ類　内面にミガキと黒色処理を施すもの

鍋：甕に比べて立ち上がりの傾斜角が開くもので、破片資料のみである。

広口壺：内外面にミガキを施すものを １点のみ確認した。

須恵器

壺：破片資料が少量出土している。

甕：タタキ目が認められる大型のものが出土している。

Ⅵ群　中世以降

基本的に中世の陶磁器類は出土していない。近世以降の陶磁器片が散見される。器種は、埦・皿・壺が確認できる。

２　土製品・石器・石製品

いずれも出土量が少ないので器種分類にとどめている。土製品で確認できるのは、平安時代では小型土器や用途不明の皿状のものである。石器は基本的に縄文時代に属するもので､剥片石器では石鏃･石箆・スクレーパー等が、礫石器では敲石が認められる。石製品で確認できたのは、平安時代の砥石と円盤状石製品である。

３　鉄製品

基本的に器種分類のみである。確認できた器種は、鈴・刀子・鏃・銛・穂摘具・鉤状製品等で、明確に器種分類ができない棒状のものが目立ち、これらの多くは欠損している。住居内部から多く出土する傾向にあり、ＳＩ21ではほぼ完形のものが多く認められることから、明らかに意図的に配置したと思われる。

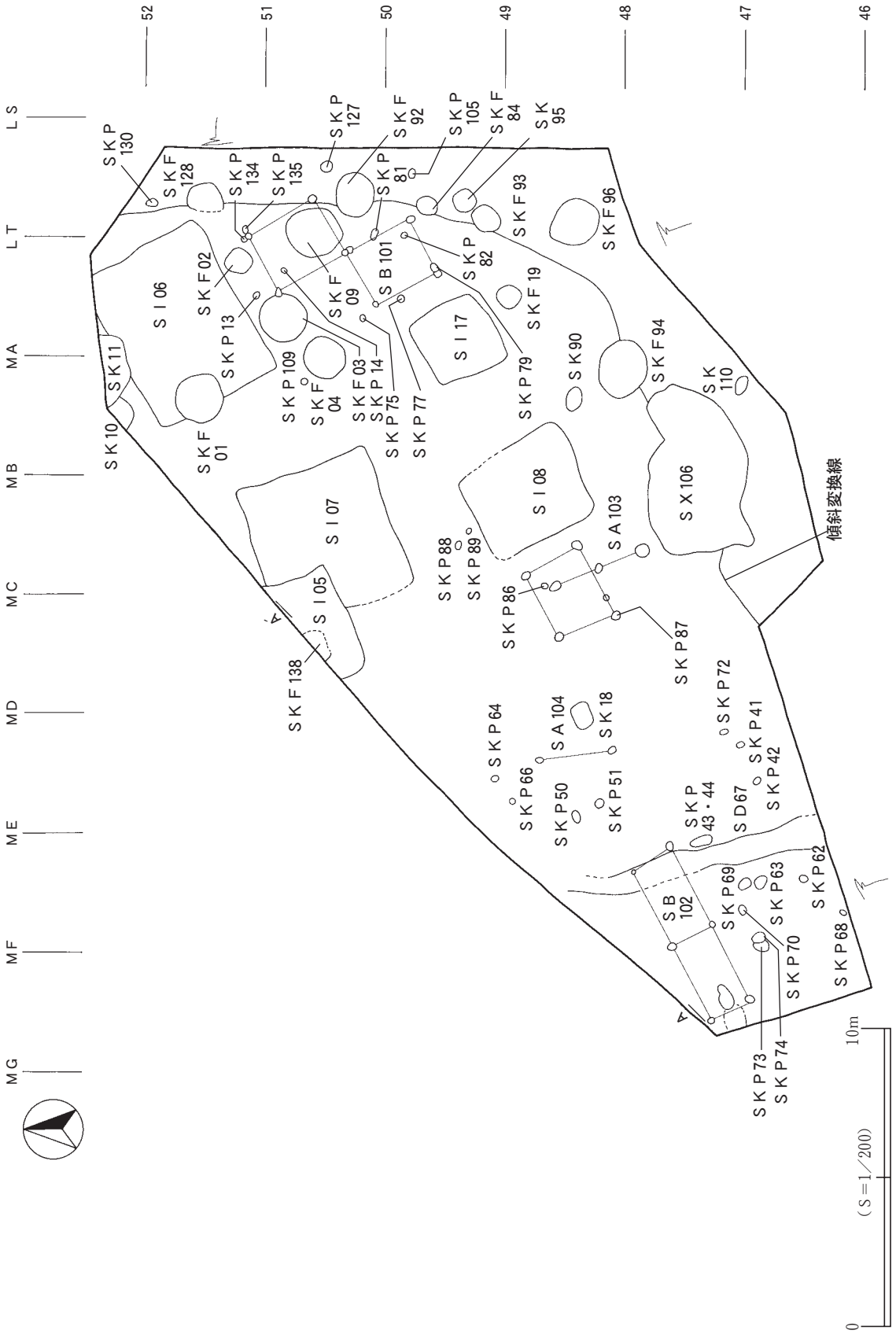
４　銅製品

近世のキセルと銭貨を１点ずつ確認した。

５　製鉄関連遺物

確認できたのは、炉底塊の破片と鉄床石である。

《参考文献》
秋田県教育員会　『大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－根下戸道下遺跡－』
秋田県文化財調査報告書第297集　2000(平成12)年



第５図　調査区１遺構配置

第４章　調査の記録

第１節　調査区１の記録

１　基本層序

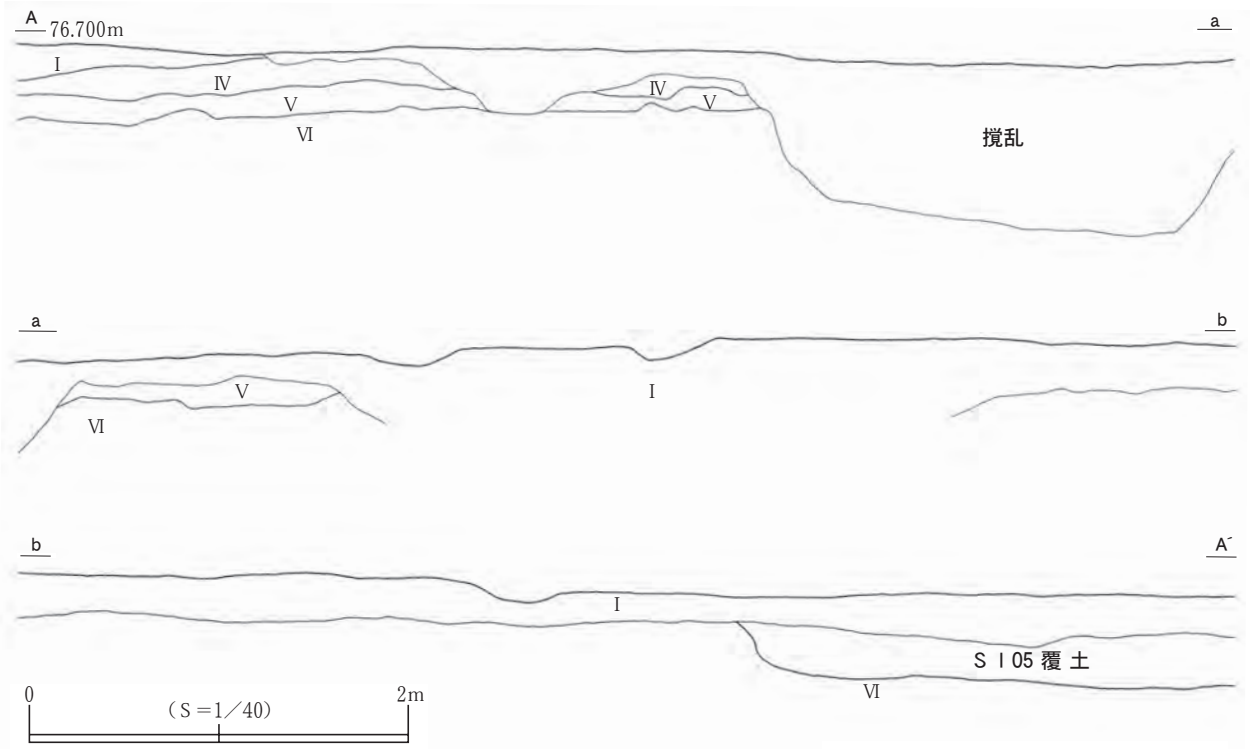
本調査区の基本層序は、調査区境界を利用してＭＣ50～ＭＦ47に至るＡ－Ａ′の１か所で確認した（第５・６図）。調査区２の基本層序から推測して、調査区内の基本層序も本来は、第Ⅰ～第Ⅵ層まで存在したと想定されるが、本調査区では耕作による削平・撹乱が深く、ほとんどの場所で調査区２の第Ⅱ・第Ⅲ層に相当する土層が確認できなかった。また、調査区西部では第Ⅵ層を掘り込む撹乱が随所にみられ、遺構の一部が失われている。これに対して、調査区北東部から南部にかけての台地上部平坦面下の斜面部では、第Ⅱ層が比較的厚く残る場所もある。

第Ⅰ層　黒色土（10YR2／1）：現表土で、耕作土や植物根の撹乱層が主体である。

第Ⅳ層　黒色土（10YR1.7／1）：十和田ａ直下の腐植土層。実質的な遺構確認面になる。丘陵部ではやや明るみが増して、黒褐色土になる。

第Ⅴ層　黒褐色土（7.5YR3／1）：腐植土層と地山層の漸位層。場所により黒色が強い。主に縄文時代の遺構確認面である。

第Ⅵ層　黄褐色土（10YR5／6）：地山層の最上面で、場所により土や粘土を含む。最終的な遺構検出面で、以下は基本的に無遺物層である。



第６図　調査区１基本土層

２　縄文時代の検出遺構と遺物

(1)フラスコ状土坑

ＳＫＦ02（第７図、図版３）

遺　構　ＬＴ51グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の北東縁で、緩やかに北東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫＦ03・04・09・92・128がある。

堆積土は９層に分けた。２・４・５・６・８層は、Ⅵ層に由来する黄褐色・褐色基調の土で、埋め戻しに伴う土とみられる。このことから、本遺構は最終的に人為的に埋め戻したと考えられる。最下層の９層は黒色で、底面に堆積している。埋め戻し前に流入した土とみられる。

平面形は開口部、底面共に不整な円形で、規模は開口部径約1.0m、底面径約1.8m、検出面からの深さ約1.5mである。断面形はフラスコ状で、壁の立ち上がりは屈曲が少ない。

本遺構は開口部が極端に狭いフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。廃絶後は一気に埋め立てており、本遺構廃絶後も周辺を利用したと想定される。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ03（第７・９・10図、図版３）

遺　構　ＬＴ50・51グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の北東縁に近く、緩やかに北東側へ傾斜する。ＳＩ06付属掘立柱建物跡の柱穴が本遺構を切っており、周辺にはＳＫＦ02・04・09がある。

堆積土は８層に分けた。１～８層まで黒色基調の土で、レンズ状堆積であることから、自然堆積により埋没したと考えられる。

平面形は開口部、底面共に不整な円形で、規模は開口部径約1.6m、底面径約1.75m、検出面からの深さ約1.1mである。断面形はフラスコ状で、壁の立ち上がりは屈曲が少ない。

本遺構は開口部と底面の差が比較的少ないフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。壁面の崩落もみられるが、堆積土中に崩落土由来の土は顕著でない。廃絶後は自然堆積により埋没していることから、本遺構廃絶後は周辺の土地利用が低調になったと想定される。

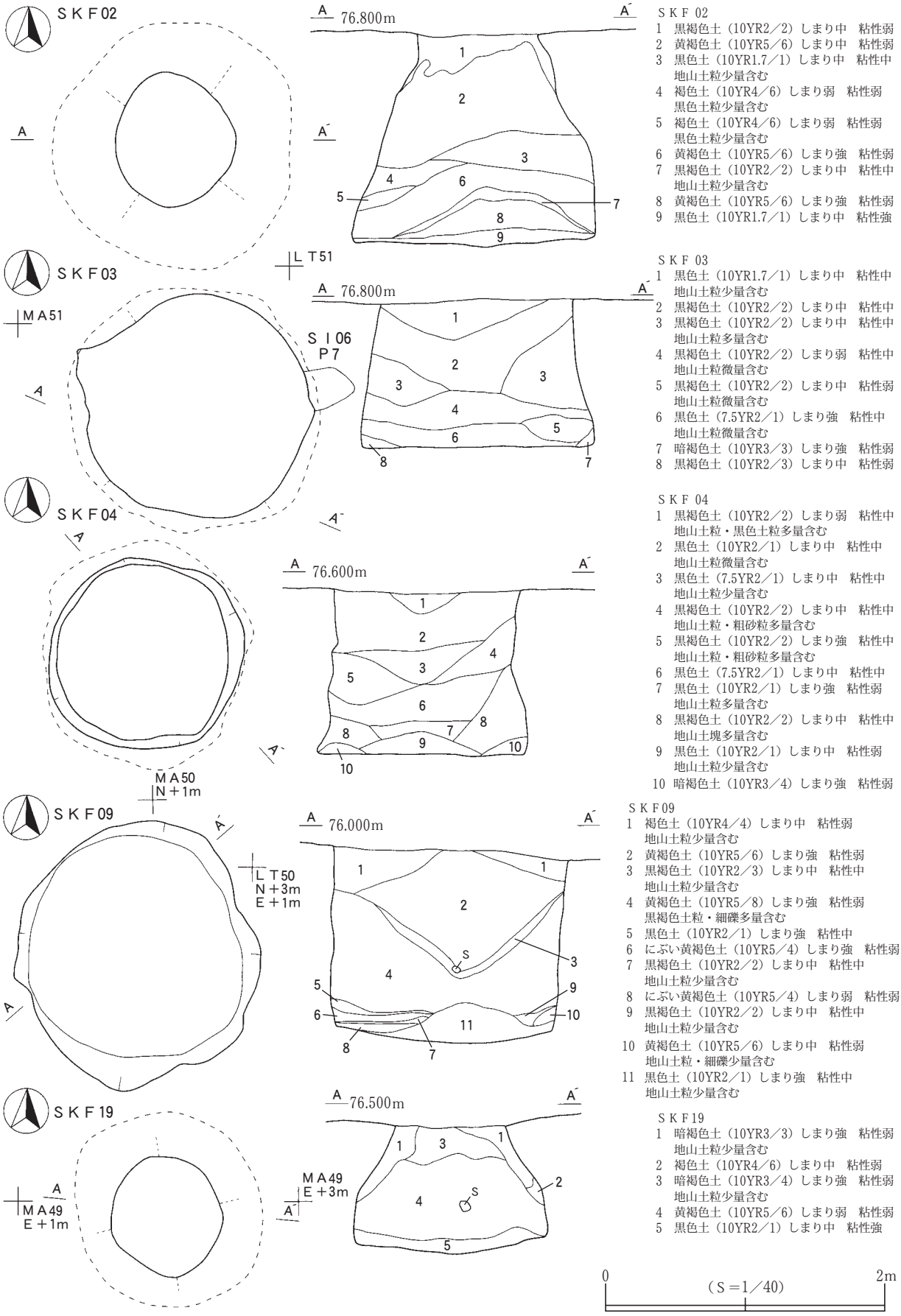
遺　物（第９・10図）　遺構内から縄文土器と石器が出土した。９図３が５層から出土していることから、本遺構の所属時期はⅢ群２類以降と考えられる。

９図１・２はどちらも胎土に繊維を含む土器で、どちらも斜縄文のみ認められる。おそらく同一個体と考えられる。９図３は強く内湾する器形の土器で、口縁部付近の破片とみられる。横位と斜位の沈線が認められる。10図１は剥片石器で、一側縁と上端部に加工を施している。上端部の加工具合からみて石匙未製品の可能性がある。

ＳＫＦ04（第７・９図、図版３）

遺　構　ＬＴ・ＭＡ50グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の北東縁に近く、緩やかに北東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫＦ02・03・09がある。

堆積土は10層に分けた。１～10層まで黒色基調の土で、レンズ状堆積であることから、自然堆積により埋没したと考えられる。４・５・７・８層は地山土粒・塊を多く含んでおり、壁面からの断続的



ＳＫＦ 02
1　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性弱
2　黄褐色土（10YR5／6）しまり中　粘性弱
3　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
4　褐色土（10YR4／6）しまり弱　粘性弱
　黒色土粒少量含む
5　褐色土（10YR4／6）しまり弱　粘性弱
　黒色土粒少量含む
6　黄褐色土（10YR5／6）しまり強　粘性弱
7　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
8　黄褐色土（10YR5／6）しまり強　粘性弱
9　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性強

ＳＫＦ 03
1　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
2　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
3　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
　地山土粒多量含む
4　黒褐色土（10YR2／2）しまり弱　粘性中
　地山土粒微量含む
5　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性弱
　地山土粒微量含む
6　黒色土（7.5YR2／1）しまり強　粘性中
　地山土粒微量含む
7　暗褐色土（10YR3／3）しまり強　粘性弱
8　黒褐色土（10YR2／3）しまり中　粘性弱

ＳＫＦ 04
1　黒褐色土（10YR2／2）しまり弱　粘性中
　地山土粒・黒色土粒多量含む
2　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
　地山土粒微量含む
3　黒色土（7.5YR2／1）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
4　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
　地山土粒・粗砂粒多量含む
5　黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性中
　地山土粒・粗砂粒多量含む
6　黒色土（7.5YR2／1）しまり中　粘性中
7　黒色土（10YR2／1）しまり強　粘性弱
　地山土粒多量含む
8　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
　地山土塊多量含む
9　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性弱
　地山土粒少量含む
10　暗褐色土（10YR3／4）しまり強　粘性弱

ＳＫＦ09
1　褐色土（10YR4／4）しまり中　粘性弱
　地山土粒少量含む
2　黄褐色土（10YR5／6）しまり強　粘性弱
3　黒褐色土（10YR2／3）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
4　黄褐色土（10YR5／8）しまり強　粘性弱
　黒褐色土粒・細礫多量含む
5　黒色土（10YR2／1）しまり強　粘性中
6　にぶい黄褐色土（10YR5／4）しまり強　粘性弱
7　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
8　にぶい黄褐色土（10YR5／4）しまり弱　粘性弱
9　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
10　黄褐色土（10YR5／6）しまり中　粘性弱
　地山土粒・細礫少量含む
11　黒色土（10YR2／1）しまり強　粘性中
　地山土粒少量含む

ＳＫＦ19
1　暗褐色土（10YR3／3）しまり強　粘性弱
　地山土粒少量含む
2　褐色土（10YR4／6）しまり中　粘性弱
3　暗褐色土（10YR3／4）しまり強　粘性弱
　地山土粒少量含む
4　黄褐色土（10YR5／6）しまり弱　粘性弱
5　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性強

第７図　ＳＫＦ 02・03・04・09・19

な崩落土を含んでいる。

平面形は開口部、底面共に不整な円形である。規模は開口部径約1.4m、底面径約1.6m、検出面からの深さ約1.15mである。断面形は崩落により本来の形状を失っているが、基本的にはフラスコ状である。壁は確認面より約0.55m下で傾斜が変わり、下位ほど外側に向かって膨らむ。

本遺構は開口部と底面の差が比較的少ないフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。壁面が崩落しており、本来はより開口部径が狭かったとみられる。廃絶後は自然堆積により埋没していることから、本遺構廃絶後は周辺の土地利用が低調になったと想定される。

遺　物（第９図）　遺構内から縄文土器が出土した。３層から９図６・７が出土していることから、本遺構の所属時期はⅢ群４類以降と考えられる。

９図５は口縁部破片で、口端とその直下に隆帯を横位に巡らせて狭い口縁部文様帯をつくり、部分的に口縁部文様帯を縦に区画する隆帯を施す。これ以下は地文のみ認められる。９図６も口縁部破片だが、確認できる範囲は無文である。波状口縁で、波頂部の口唇に３個の刺突文を施す。９図７は底部資料で、胎土から９図６が同一個体になる可能性が高い。底面及び確認できる範囲は無文である。

ＳＫＦ09（第７・10図、図版３）

遺　構　ＬＳ・ＬＴ50グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の北東縁に当たり、緩やかに北東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫＦ02・03・04・92・128がある。

堆積土は11層に分けた。本遺構を大きく埋め尽くすのは２・４層で、いずれもⅥ層由来の土である。４層の堆積状態からみて、オーバーハングする壁面上部が何らかの理由で全面崩れ、その窪地を整地するために２層を投棄している。11層が地山土粒を含む黒色土であり、初期の流入土とみられることから、廃絶後に壁面上部が崩落して、その残穴を人為的に埋め戻したと考えられる。

平面形は開口部、底面共に不整な円形である。規模は開口部径約1.75m、底面径約1.6m、検出面からの深さ約1.3mである。残存する断面形はフラスコ状にはならず、周壁はほぼ直線的に垂直に立ち上がる。

本遺構は開口部と底面の差が比較的少ないフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。壁面が崩落しているが、本来はより開口部径が狭かったとみられる。廃絶後は一定期間放置され、最終的に人為的に埋め戻している。本遺構廃絶後も周辺を利用したと想定される。

遺　物（第10図）遺構内から石器が出土した。10図２は剥片石器で、上端が折れている。一側縁と末端部に加工を施している。

ＳＫＦ19（第７・10図、図版４）

遺　構　ＬＴ48・49グリッドの第Ⅵ層中位で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の北東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ95、ＳＫＦ93・94・96がある。

堆積土は５層に分けた。本遺構の大部分を埋め尽くす４層はⅥ層由来の土であり、人為的な埋め戻しによる埋没過程を示す。１・３層は、この隙間に入り込んだ周囲からの流入土である。

平面形は開口部、底面共に円形である。規模は開口部径約0.8m、底面径約1.4m、検出面からの深

さ約0.9mである。断面形はフラスコ状で、確認面より約0.45m下で傾斜が変わり、下位ほど外側に向かって膨らむ。

本遺構は開口部が極端に狭いフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。廃絶後は一気に埋め立てており、本遺構廃絶後も周辺を利用したと想定される。

遺　物（第10図）遺構内から石器が出土した。10図３は石匙である。下端部が欠損しているが、両側縁に加工を施している。10図４は凹石である。亜円礫を用いており、両面とやや三角形状に突出する３か所の角に敲打の痕跡が認められる。

ＳＫＦ84（第８・９図、図版４）

遺　構　ＬＳ49グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面と斜面部の境界線上に当たり、本遺構の東半分は急斜面に位置する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ95、ＳＫＦ92・93がある。

堆積土は３層に分けた。１～３層まで黒色基調の土だが、堆積状況からみて人為的に埋め戻したと考えられる。

平面形は開口部、底面共に不整な楕円形である。規模は開口部が長径約0.7m、短径約0.55m、底面は長径約1.35m、短径が約1.1mで、検出面からの深さは斜面上部で約1.3mである。断面形はフラスコ状で、確認面より約0.45m下で傾斜が変わって膨らむ。底面は鍋底状になる。

本遺構は開口部が極端に狭いフラスコ状土坑で、内部の規模が小さく、底面形状も不規則であることから、掘削途中で放棄し埋め立てた可能性が高い。

遺　物（第９図）　遺構内から縄文土器が出土した。９図８は胴部破片で、外面に地文の斜縄文のみ認められる。

ＳＫＦ92（第８図、図版４）

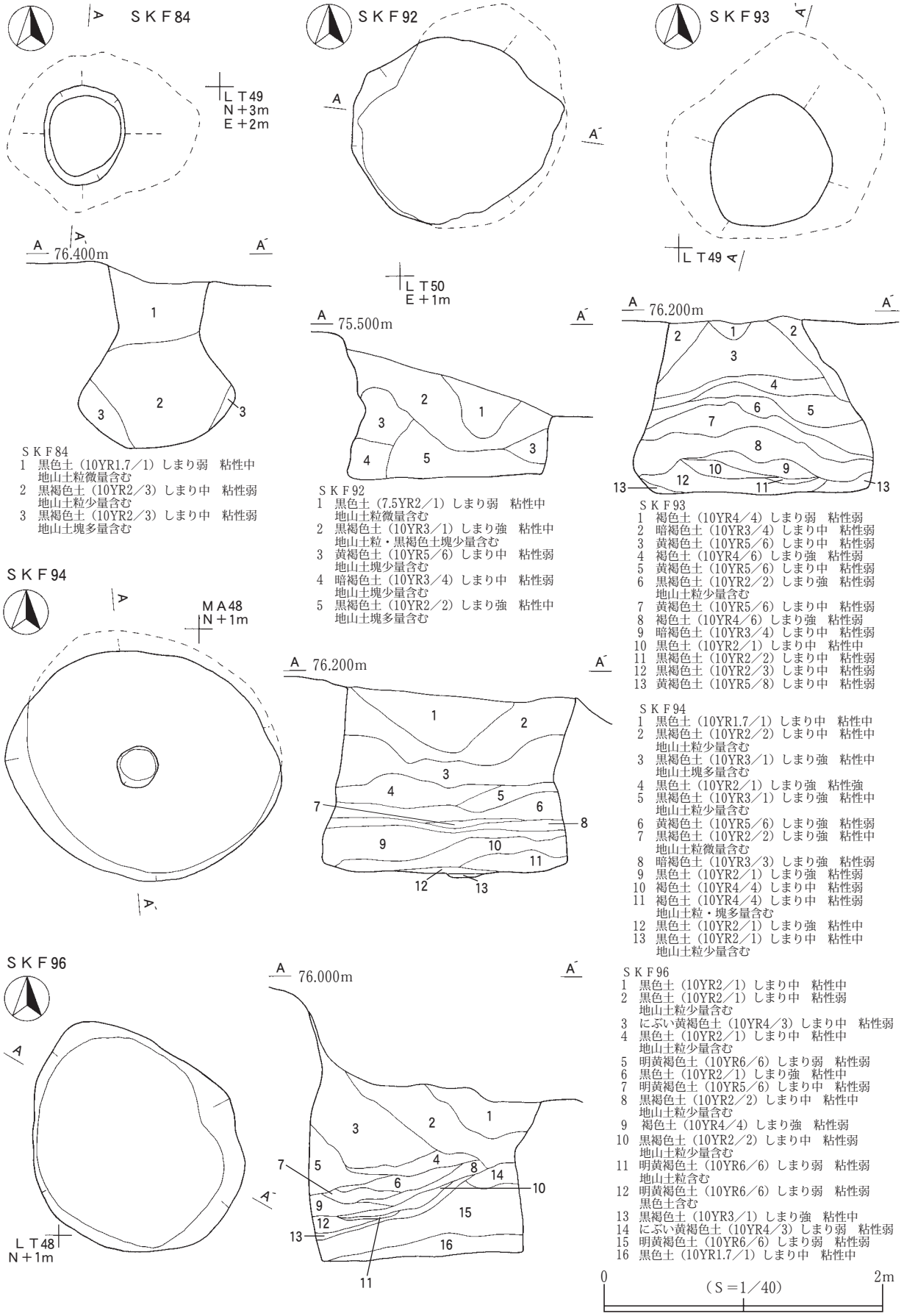
遺　構　ＬＳ50グリッドの第Ⅵ層中位で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面と斜面部の境界線上に当たり、本遺構の東半分は急斜面に位置する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫＦ09・84がある。

堆積土は５層に分けた。全体に黒色基調の土が主体だが、３層をオーバーハングする壁上場の倒壊土とみれば、２・４・５層は人為的な造成土と考えられる。５層と３層に間層がないことから、埋め立て時に意図的に壁の上場を崩したことも想定される。なお、１層は軟質な堆積土で、周囲の状況から後世の掘り込みの痕跡とみられる。

平面形は開口部、底面共に不整な楕円形である。規模は開口部が長径約1.55m、短径約1.25m、底面が長径約1.7m、短径約1.25mで、検出面からの深さは斜面上部で約1.0m、斜面下部で約0.45mである。断面形は崩落が著しいが、基本的にはフラスコ状になる。

本遺構は開口部と底面の差が比較的少ないフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。壁面の崩落もみられるが、堆積土中に崩落土由来の土は顕著でない。廃絶後は一気に埋め立てており、本遺構廃絶後も周辺を利用したと想定される。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。



ＳＫＦ84
1　黒色土（10YR1.7／1）しまり弱　粘性中
　　地山土粒微量含む
2　黒褐色土（10YR2／3）しまり中　粘性弱
　　地山土粒少量含む
3　黒褐色土（10YR2／3）しまり中　粘性弱
　　地山土塊多量含む

ＳＫＦ92
1　黒色土（7.5YR2／1）しまり弱　粘性中
　　地山土粒微量含む
2　黒褐色土（10YR3／1）しまり強　粘性中
　　地山土粒・黒褐色土塊少量含む
3　黄褐色土（10YR5／6）しまり中　粘性弱
　　地山土塊少量含む
4　暗褐色土（10YR3／4）しまり中　粘性弱
　　地山土塊少量含む
5　黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性中
　　地山土塊多量含む

ＳＫＦ93
1　褐色土（10YR4／4）しまり弱　粘性弱
2　暗褐色土（10YR3／4）しまり中　粘性弱
3　黄褐色土（10YR5／6）しまり中　粘性弱
4　褐色土（10YR4／6）しまり強　粘性弱
5　黄褐色土（10YR5／6）しまり中　粘性弱
6　黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性弱
　　地山土粒少量含む
7　黄褐色土（10YR5／6）しまり中　粘性弱
8　褐色土（10YR4／6）しまり強　粘性弱
9　暗褐色土（10YR3／4）しまり中　粘性弱
10　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
11　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性弱
12　黒褐色土（10YR2／3）しまり中　粘性弱
13　黄褐色土（10YR5／8）しまり中　粘性弱

ＳＫＦ94
1　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中
2　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
　　地山土粒少量含む
3　黒褐色土（10YR3／1）しまり強　粘性中
　　地山土塊多量含む
4　黒色土（10YR2／1）しまり強　粘性強
5　黒褐色土（10YR3／1）しまり強　粘性中
　　地山土粒少量含む
6　黄褐色土（10YR5／6）しまり強　粘性弱
7　黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性中
　　地山土粒微量含む
8　暗褐色土（10YR3／3）しまり強　粘性弱
9　黒色土（10YR2／1）しまり強　粘性弱
10　褐色土（10YR4／4）しまり中　粘性弱
11　褐色土（10YR4／4）しまり中　粘性弱
　　地山土粒・塊多量含む
12　黒色土（10YR2／1）しまり強　粘性中
13　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
　　地山土粒少量含む

ＳＫＦ96
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
2　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性弱
　　地山土粒少量含む
3　にぶい黄褐色土（10YR4／3）しまり中　粘性弱
4　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
　　地山土粒少量含む
5　明黄褐色土（10YR6／6）しまり弱　粘性弱
6　黒色土（10YR2／1）しまり強　粘性中
7　明黄褐色土（10YR5／6）しまり中　粘性弱
8　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
　　地山土粒少量含む
9　褐色土（10YR4／4）しまり強　粘性弱
10　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性弱
　　地山土粒少量含む
11　明黄褐色土（10YR6／6）しまり弱　粘性弱
　　地山土粒含む
12　明黄褐色土（10YR6／6）しまり弱　粘性弱
　　黒色土含む
13　黒褐色土（10YR3／1）しまり強　粘性中
14　にぶい黄褐色土（10YR4／3）しまり弱　粘性弱
15　明黄褐色土（10YR6／6）しまり弱　粘性弱
16　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中

第８図　ＳＫＦ 84・92・93・94・96

ＳＫＦ93（第８図、図版４）

遺　構　ＬＳ49グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面と斜面部の境界線上に当たり、本遺構の東半分は急斜面に位置する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ95、ＳＫＦ19・84・96がある。

堆積土は13層に分けた。全体として黄褐色や褐色の明るい土と、黒色の暗い土が互層を成しており、各層が順に薄く堆積する状況からみて、自然堆積により埋没したと考えられる。

平面形は開口部がほぼ円形で、底面は不整な楕円形である。規模は開口部が径約0.9m、底面が長径約1.6m、短径約1.4mで、検出面からの深さは斜面上部で約1.2mである。断面形はフラスコ状で、壁面の屈曲は少ない。

本遺構は開口部が極端に狭いフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。廃絶後は自然堆積により埋没していることから、本遺構廃絶後は周辺の土地利用が低調になったと想定される。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

ＳＫＦ94（第８図、図版５）

遺　構　ＬＴ・ＭＡ47・48グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面と斜面部の境界線上に当たり、本遺構の南半分は急斜面に位置する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ90、ＳＫＦ19・96、ＳＸ106がある。

堆積土は13層に分けた。堆積状況は、黒色基調の流入土とⅥ層由来の崩落土が薄く互層を成すレンズ状堆積であり、自然堆積により埋没したと考えられる。

平面形は開口部、底面共に楕円形である。規模は開口部が長径約2.0m、短径が約1.6m、底面が長径約1.9m、短径約1.7mで、検出面からの深さは約1.3mである。断面形は基本的にはフラスコ状で、確認面より約0.6m下で傾斜が変わり、下位ほど外側に向かって膨らむ。底面は基本的に平坦だが、中央部に底面からの深さが約0.03mのピットがある。

本遺構は開口部と底面の差が比較的少ないフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。廃絶後は自然堆積により埋没していることから、本遺構廃絶後は周辺の土地利用が低調になったと想定される。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

ＳＫＦ96（第８・９図、図版５）

遺　構　ＬＳ・ＬＴ48グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面東縁下の急斜面部であり、南東に傾斜している。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ95、ＳＫＦ19・93・94がある。

堆積土は16層に分けた。15・16層が底面に比較的厚く堆積し、その上部に４～14層の黒色基調の流入土とⅥ層由来の崩落土が薄く互層を成す状態から、15・16層が初期の人為堆積土、４～11層が自然堆積土、１～３層が人為堆積土と考えられる。一気に埋め戻さないのは、本遺構立地点が斜面部に当たり、土地利用の上で他遺構の障害にならないことによると考えられる。

平面形は開口部、底面共に楕円形である。規模は開口部が長径約1.8m、短径が約1.5m、底面が長

径約1.5m、短径約1.2mで、検出面からの深さは斜面上部で約1.9m、斜面下部で約1.1mである。断面形は壁面下位がわずかに膨らむフラスコ状である。

本遺構は開口部と底面の差が比較的少ないフラスコ状土坑で､貯蔵穴として利用したと考えられる。廃絶後は人為堆積→自然堆積→人為堆積により埋没しており、台地先端部に分布する土坑の中でも、比較的古手の土坑と想定される。

遺　物(第９図)　堆積土上部から土師器が出土した。２層から出土したもので、偶然本遺構上部にとどまったものであり、本遺構の所属時期を示すものではない。

９図９は小型土器で、胴部が直立気味に立ち上がって、口縁部が弱く外反する。外面胴下部には縦位ケズリ、内面には横位ヘラナデ調整が認められる。

ＳＫＦ128(第９図、図版５)

遺　構　ＬＳ51グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面と斜面部の境界線上に当たり、本遺構の東半分は急斜面に位置する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫＦ02・03・04・09・92がある。

堆積土は４層に分けた。１・２層は開口部の崩落土と流入土との混合土である。３層は混じりの少ない地山土であり、人為的な埋め戻しによると考えられる。４層は地山土粒を微量に含む黒色土で、初期に流入した自然堆積土とみられる。

平面形は開口部が崩落により不整な楕円形になっており、底面は楕円形である。規模は開口部が長径約1.7m、短径約1.15m、底面が長径約1.7m、短径約1.5mで、検出面からの深さは中心部で約1.0mである。断面形はフラスコ状で、確認面より斜面上位では約0.5m下、斜面下位では約0.1m下から外側に向かって膨らんでいる。

本遺構は開口部が狭いフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。廃絶後は一気に埋め立てており、本遺構廃絶後も周辺を利用したと想定される。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ138(第９図)

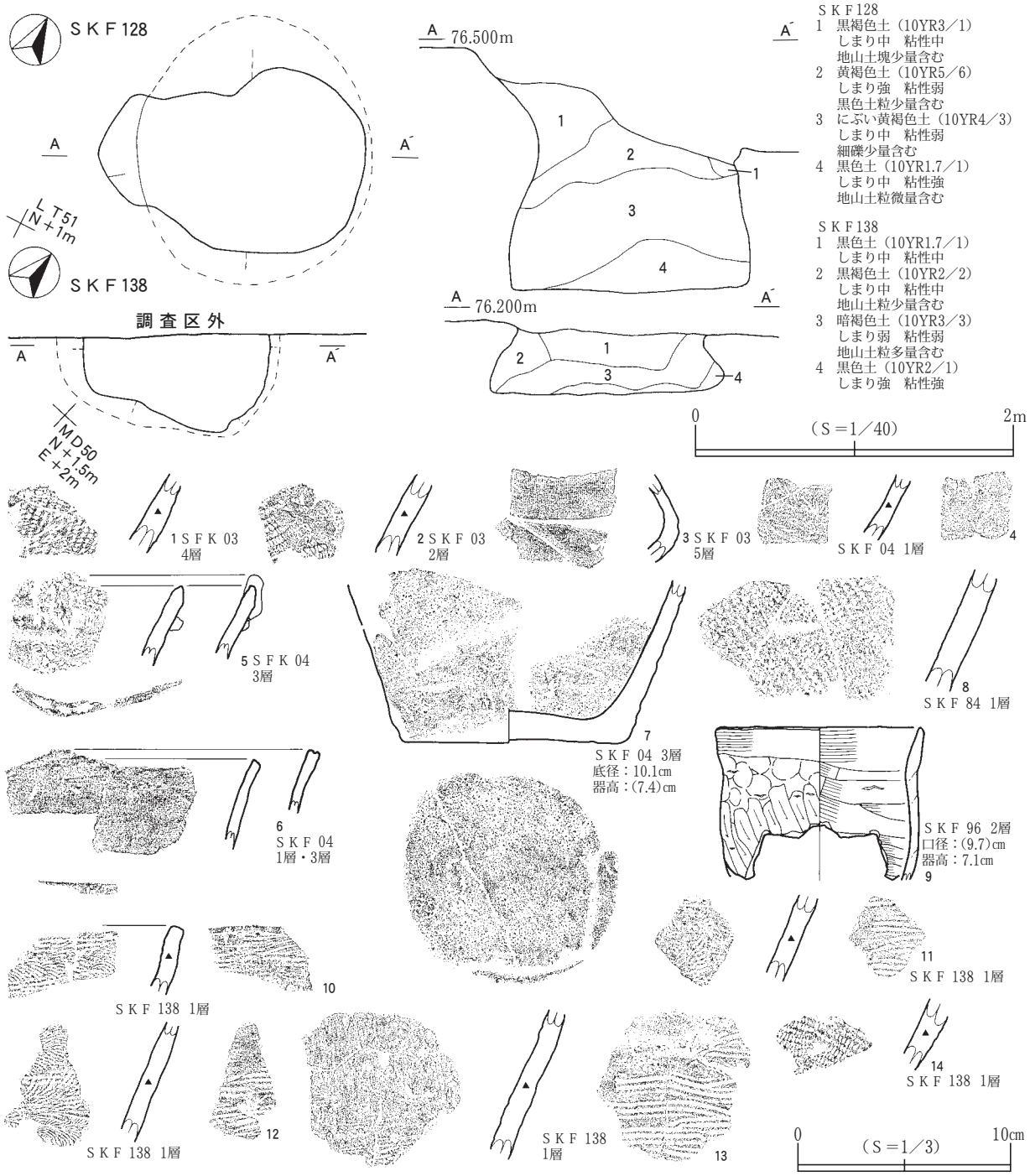
遺　構　ＭＣ50グリッドのＳＩ05貼床下部で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面上で、ほぼ平坦な地形である。平安時代の住居であるＳＩ05が本遺構の上部を削平しており、また本遺構の中央が調査区境界線に当たることから、遺構の全体像は不明である。

堆積土は４層に分けた。２・３層は地山土粒の混入率が高い人為堆積土であり、本遺構は人為的に埋め戻したと考えられる。

平面形は遺構半分が調査区外に延びるため不明である。確認できた範囲の規模は、開口部径約1.2m、底面径約1.4m、検出面からの深さは約0.4mである。残存する範囲の断面形はフラスコ状で、現況で確認面より約0.1m下から外側に向かって膨らむ。

本遺構は開口部が狭いフラスコ状土坑で、貯蔵穴として利用したと考えられる。廃絶後は一気に埋め立てており、本遺構廃絶後も周辺を利用したと想定される。

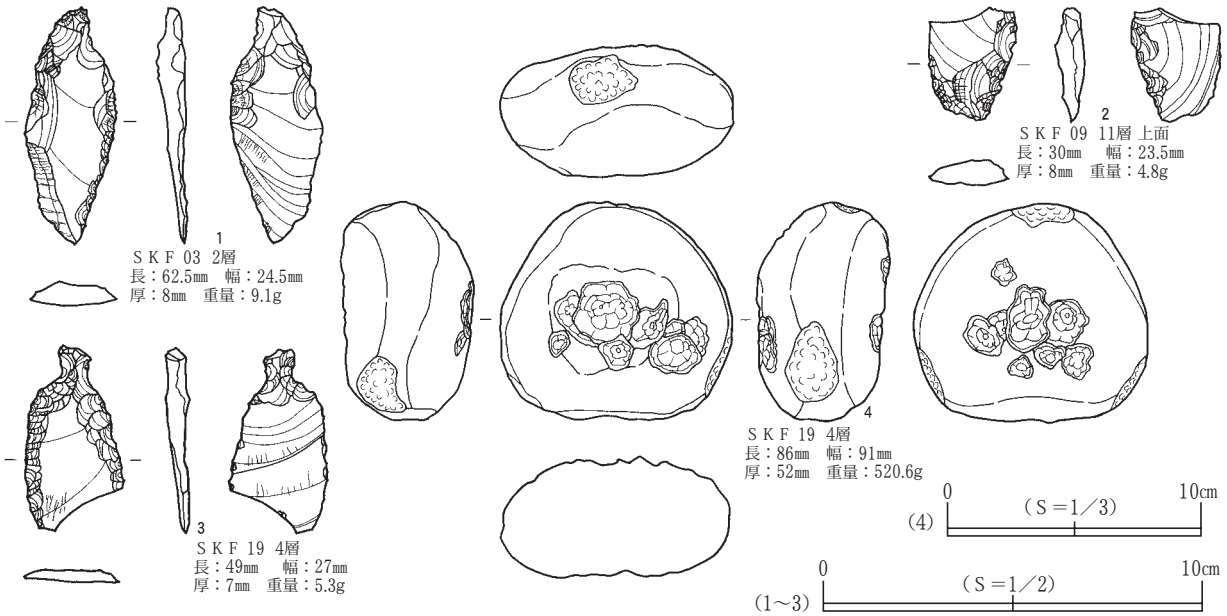
遺　物(第９図)　遺構内から縄文土器が出土した。１層から９図14が出土していることから、本遺構



第９図　ＳＫＦ 128・138 ＳＫＦ出土遺物１

の所属時期はⅡ群１類以降と考えられる。ただ、本遺構内と隣接するＳＩ07からは、比較的多くＩ群土器が出土しており、この地点にＩ群期の遺構が存在した可能性が高い。

９図10～13はＩ群２類で、いずれも内面に横位の条痕文を施しており、同一個体の可能性が高い。10～12の外面には貝殻背圧痕文または短条痕文を施している。これに対し、13は疎らにその痕跡が認められるのみで、全面ケズリによる調整を施している。10が口縁部破片であることから、口縁部付近に貝殻背圧痕文による文様帯をもち、胴部が無文になるとみられる。９図14は胎土に繊維を含み、外面に斜縄文のみが確認できる。



第 10 図　ＳＫＦ出土遺物２

（２）遺構外出土遺物

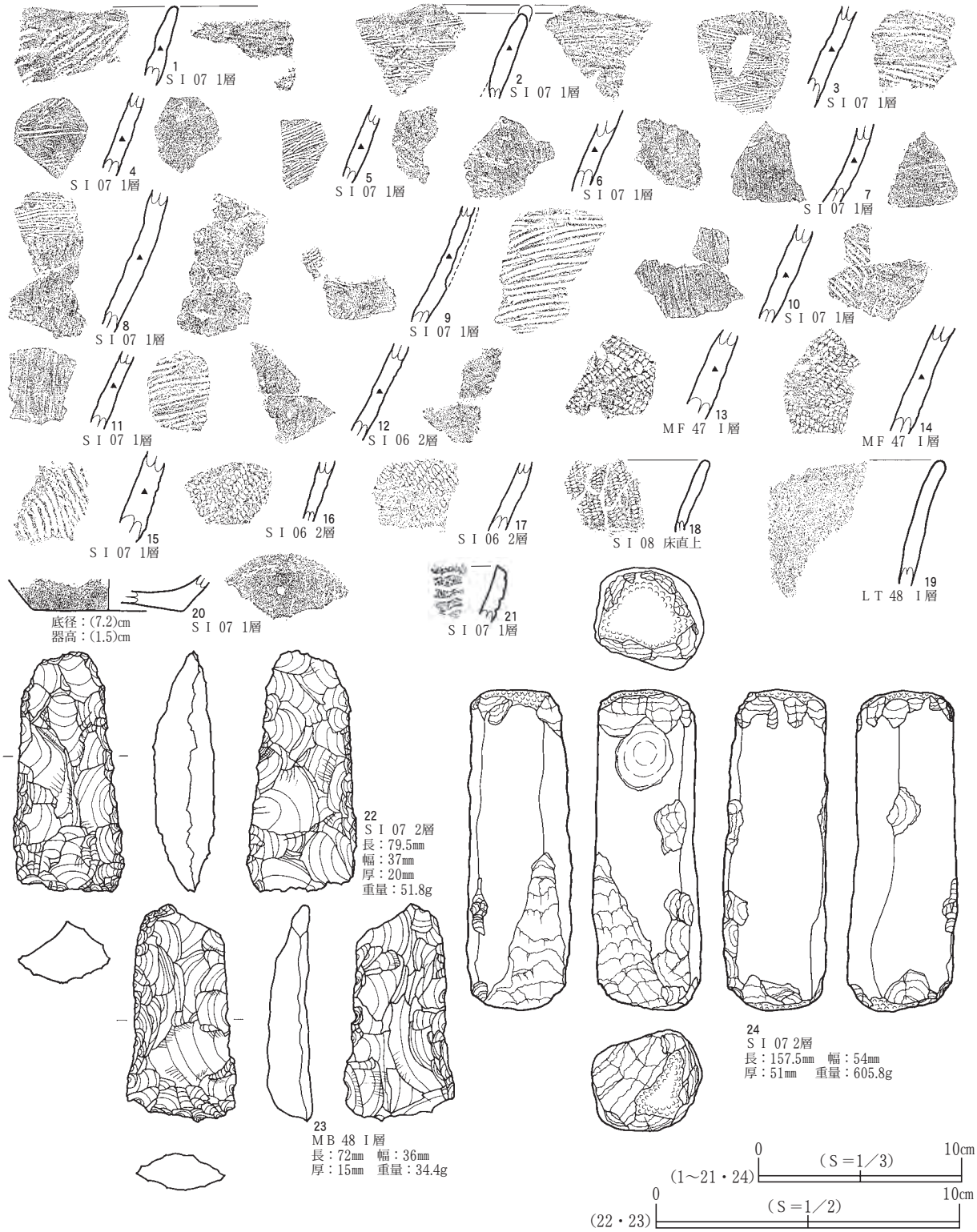
遺構外から出土した遺物で縄文時代に属するのは、土器と石器である。出土量は少なく、主要なものは全て図示した。なお、ここでは遺構外から出土したもの以外に、平安時代の遺構から出土しているものも、基本的には縄文時代の廃棄地点からは動いているという観点から、全て遺構外出土としてまとめて扱った。

11図１～20は縄文土器である。1～12がⅠ群土器で、1が１類、2 ～ 12が２類である。１は口縁部破片で、縦位に連続刺突する貝殻腹縁圧痕文により文様を施す。内面には薄く条痕文が認められる。２～5・８・９は、外面に条痕文を施すものである。２は口縁部破片で、低平な波状口縁である。外面には口縁部に概ね平行するように条痕文を施す。内面にも同様な条痕文が認められる。３～５・８・９は胴部破片で、３・９は内面に比較的深く幅のある条痕文を施す。６・７・10～12は外面に擦痕のみが認められる無文の資料である。10・11は、内面に比較的深く幅のある条痕文が認められることから、３・９と同一固体になる可能性がある。

13～15はⅡ群土器である。13・14は、どちらも結束羽状縄文を施す胴部破片である。15は縦位の撚糸文が認められる。16～18はⅢ群２類で、斜縄文のみ認められる。19・20はⅢ群４類で、いずれも無文部のみの破片である。19は口縁部、20は底部資料である。

11図21はⅣ群土器である。口縁部に沈線による横位展開の文様帯をもつ。

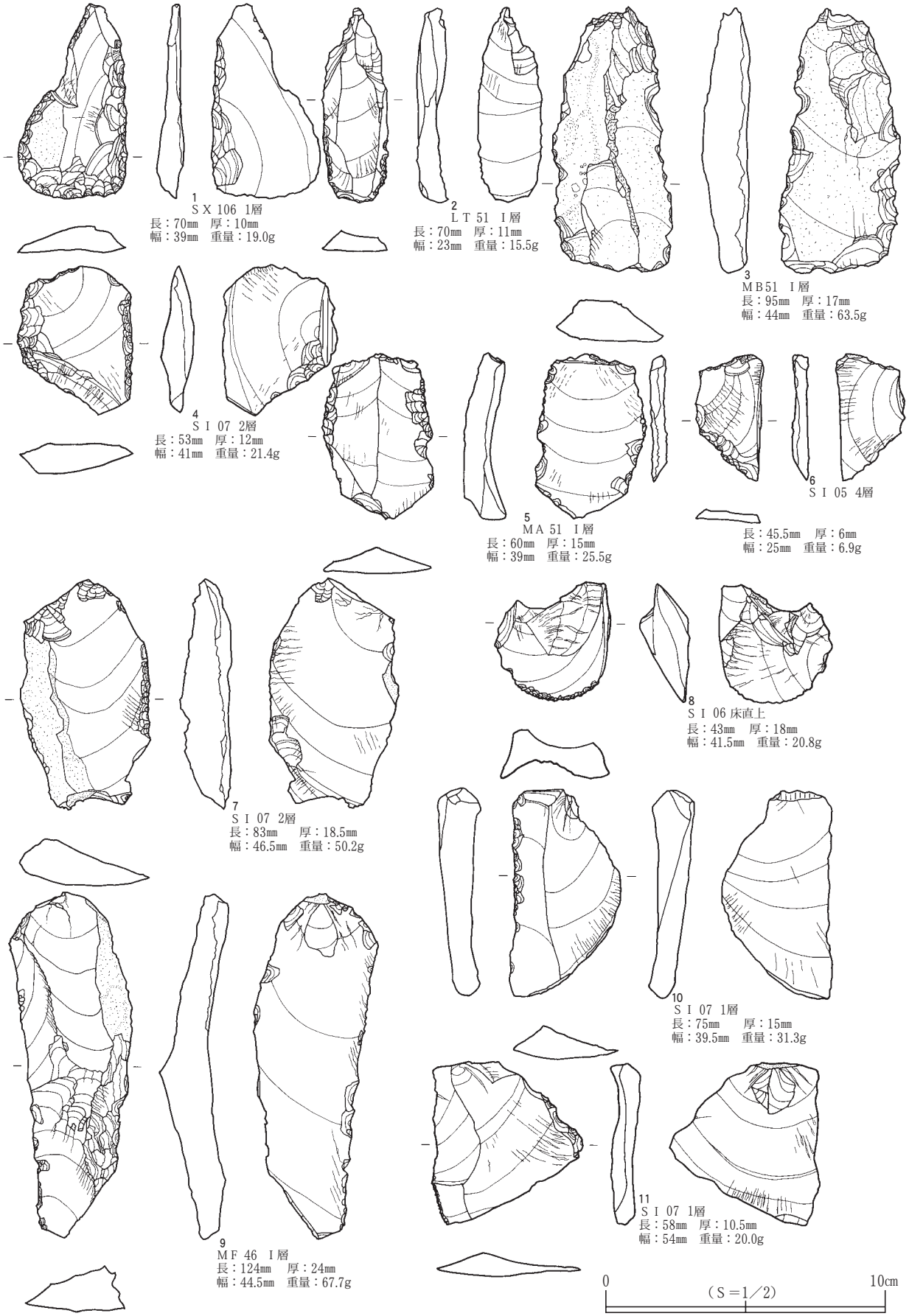
11図22・23、12図１～11は剥片石器または剥片である。11図22・23は石箆で、どちらも両面調整である。12図 1～10は２次加工のある剥片である。１は側縁ほぼ全面に加工を施しているが、右側縁は打点部の調整剥離が主体であり、末端部や左側縁を利用する道具とみられる。２は末端部にわずかに加工を施している。３は剥片状の自然礫とみられる。上端に剥離が認められるが、加工を施さずに利用した痕跡とみられる。４は両側縁に加工を施しており、下端部を欠損することから破損品と考えられる。５～７は剥片側縁に、８は末端に加工を施している。不定形だが加工の範囲が広く、この状態で利用したものとみられる。これに対し、9・10は二次剥離の部分が疎らで、剥片の状態で利



第 11 図　調査区 1 遺構外出土遺物（縄文時代）1

用したか、投棄時の欠損とみられる。11は幅広の剥片である。

11図24は敲石である。角柱状の礫を用いており、上下両端に敲打痕が認められる。側面には、1か所円錐状の凹みがある。



第 12 図　調査区 1 遺構外出土遺物（縄文時代）2

３　平安時代の検出遺構と遺物

(1)竪穴住居跡

ＳＩ05（第13図、図版６）

遺　構　ＭＢ50・51、ＭＣ50グリッドの第Ⅵ層上面で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほぼ平坦な地形である。本住居跡の約北半分は調査区外にかかっているため、住居の全体像は不明である。ＳＩ07、ＳＫＦ138と重複し、これらより本住居跡の方が新しい。周辺にはＳＩ06・08、ＳＡ103・104、ＳＫ01・10・11・18がある。

堆積土は７層に分けた。１層は本住居跡を掘り込んでおり、耕作による撹乱かまたは柱穴とも考えられる。２～５層は黒色基調の流入土で、レンズ状堆積であることから、本住居跡は自然堆積により埋没したとみられる。６層は壁溝内堆積土、７層は貼床で、地山土粒を多量に含む。

平面形は北半分が調査区外に延びるため不明だが、おそらく正方形になると想定される。南東壁に直交する主軸方位はＮ－20°－Ｗで、南東壁を正方形の一辺とみた場合の面積は約14㎡である。各壁の長さは、全長を確認できた南東壁が約3.8m、部分的に確認できた北東壁は2.25m以上、南西壁は0.9m以上である。各壁の検出面からの深さは、北東壁約0.4m、南東壁約0.2m、南西壁約0.4mで、立ち上がりは、北東壁と南西壁が緩やかで南東壁はほぼ垂直である。

床面は、基本的に掘形底面を平坦に整地して利用しているが、ＳＩ07と重複する範囲は、貼床を施している。壁溝は北東壁でのみ確認した。幅0.2～0.4m、床面からの深さは0.1m前後である。床面で１個のピットを確認した。Ｐ１は住居東隅にあり、壁溝と連結する。住居南隅に対応するピットはなく、単純に柱穴と判断できない。本住居跡に伴うカマドは確認できなかった。

本住居跡は柱穴構造やカマド配置が不明確な住居である。廃絶後は自然堆積により埋没していることから、本調査区内の平安時代住居の中では、所属時期が比較的新しいと考えられる。

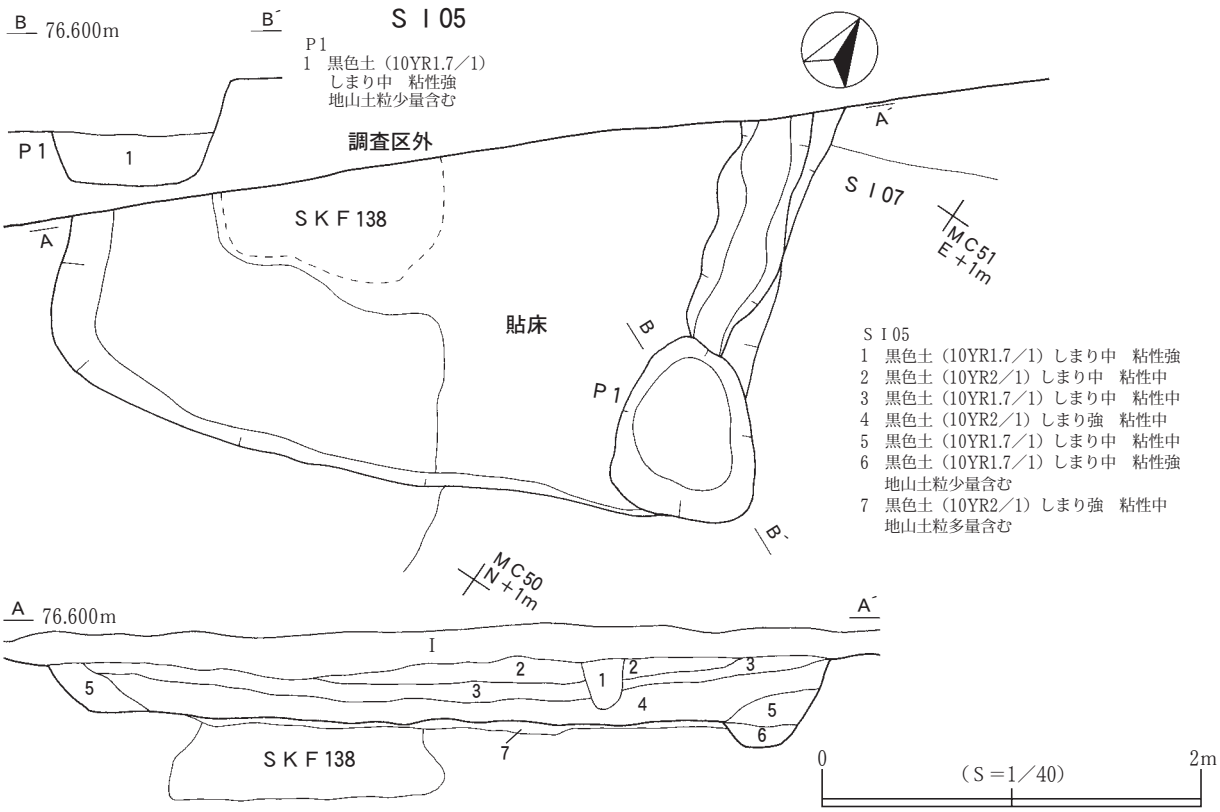
遺　物　住居跡内から縄文土器、石器、土師器甕が出土した。縄文土器や石器は第２節２で扱った。また、土師器甕は小破片のため図示しなかった。

ＳＩ06（第14～16図、図版７・28・29）

遺　構　ＬＳ50・51、ＬＴ・ＭＡ50～52グリッドの第Ⅵ層上面で、地山土粒を含む黒色土や黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の北東縁に近く、わずかに北東側へ傾斜する。なお、本住居跡の東端は急傾斜面との境界線に位置する。ＳＢ101、ＳＫ01・11と重複し、これらより本住居跡の方が古い。周辺にはＳＩ05・07・17、ＳＫ10がある。

堆積土は６層に分けた。１層は耕作土で、基本層位の第Ⅰ層に相当する。２・３層はどちらも黒褐色土で、２層は混入物を含まず、３層は地山土粒を多量に含む。３層はカマド周辺の堆積土であり、カマド廃棄の埋め戻しに関連する可能性がある。上部の堆積土が耕作により失われているため、堆積過程を窺う材料に乏しいが、２層の土質からみて、本住居跡は自然堆積により埋没したと考えられる。４～６層は壁溝内堆積土である。

平面形は北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗである。主軸とこれに直交するラインで測る面積は約27㎡である。各壁の長さは、南東壁約5.9m、南西壁約4.4mである。北東壁と北西壁の確認できた長さは、それぞれ約4.0m、約4.9mである。各壁の



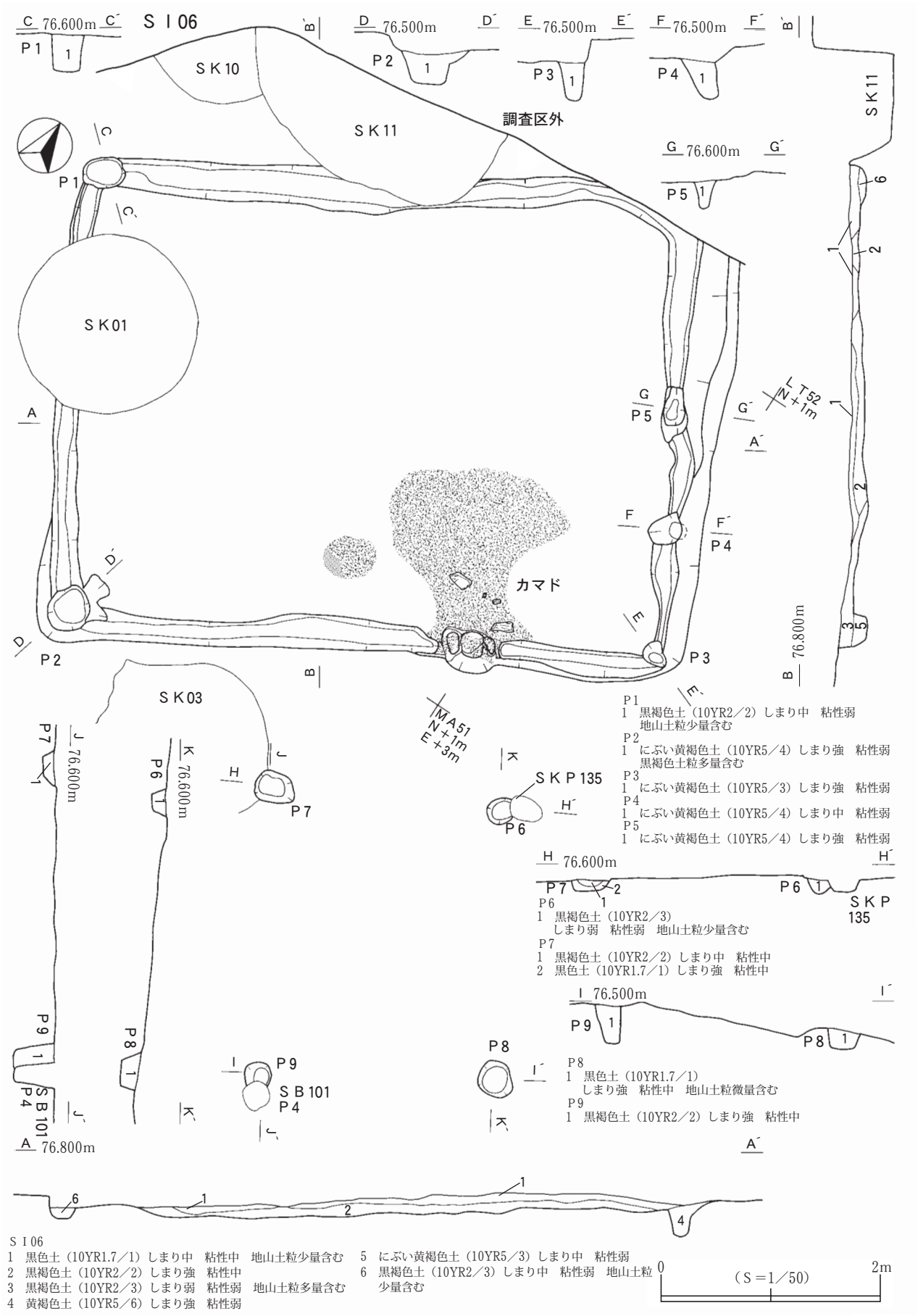
第 13 図　S I 05

検出面からの深さは、北東壁約0.1m、南東壁約0.1m、南西壁約0.1m、北西壁約0.1mである。壁の立ち上がりは、北東壁がやや緩やかである以外は、ほぼ垂直に立ち上がる。なお、北東壁近くの住居外部斜面で小さな地割れ痕を確認した。

床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。床面はほぼ平坦だが、南西・南東側でやや高くなる。カマド南西脇の床面で、一部粘土を貼った範囲を確認した。壁溝は、カマド以外の全周で確認した。幅0.2 ～ 0.3m、床面からの深さは0.2 ～ 0.3mである。

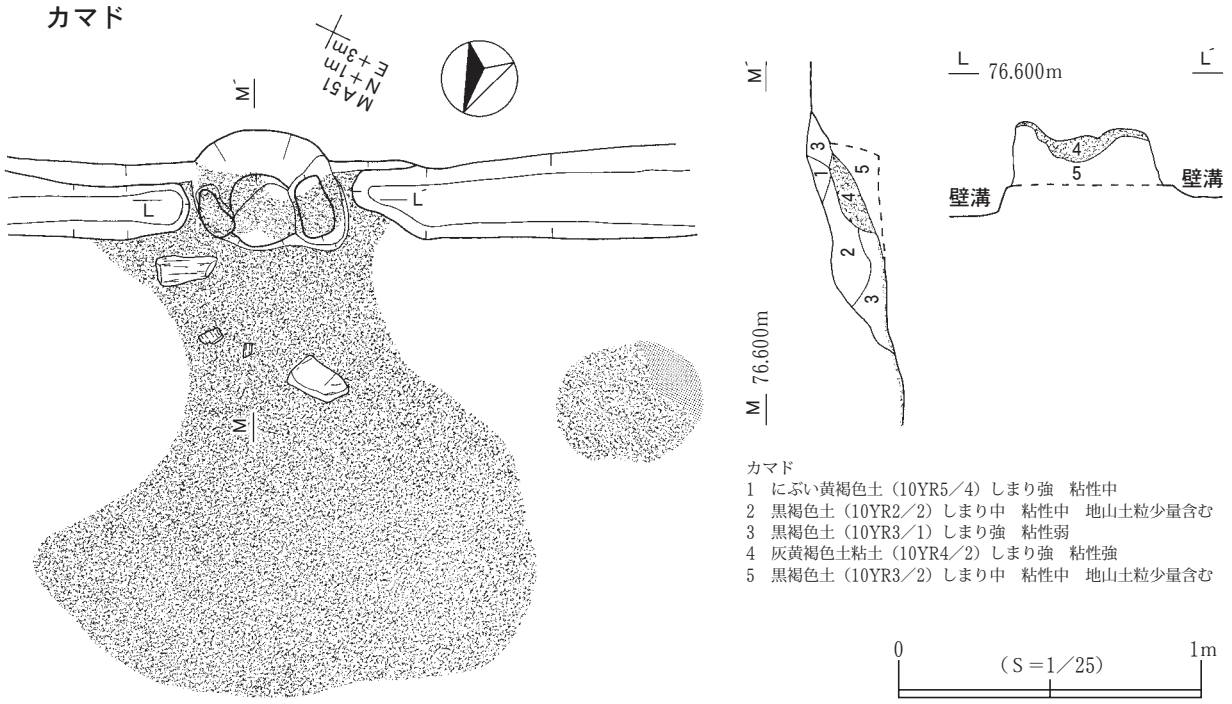
壁溝内と竪穴掘り込み外部で、計９個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅の主柱穴である。Ｐ４・５は北東壁沿いの壁溝内部にあり、壁板保持(壁板を固定する意として、以下この用語を用いる)の補助柱穴とみられる。北東壁が急斜面に接する位置にあることに関係すると考えられる。Ｐ６～９は竪穴掘り込みの南東側にあり、配置からみて本住居跡に付属する掘立柱建物跡を構成するとみられる。この掘立柱建物跡の主軸方位は、Ｐ７とＰ９の中心を結んだラインを主軸線とした場合、Ｎ－31°－Ｗとなる。長方形状の配置で、各柱穴間の距離を柱穴中心間で測ると、Ｐ６－８間約2.5m、Ｐ７－９間約2.6m、Ｐ６－７間約2.1m、Ｐ８－９間約2.1mとなる。各柱穴の堆積土観察から、廃絶時に柱を抜き取ったと考えられる。

カマドは南東壁の中央から北東よりの位置で、地山土粒を含む黒褐色土とにぶい黄褐色土の広がりで確認した。堆積土は５層に分けられる。１～３層は流入土と構築土崩落の互層であり、４層がカマド構築土の残存部である。確認できたのは、煙道基部掘り込みと袖の一部で、火床面も残存していなかった。煙道から袖まで約0.4m、袖の最大幅約0.5mである。煙道は、付け根部分にあたるスロープ状の掘り込みのみ確認できた。確認した長さは、住居上場から外部へ約0.1mである。 袖は灰黄褐色

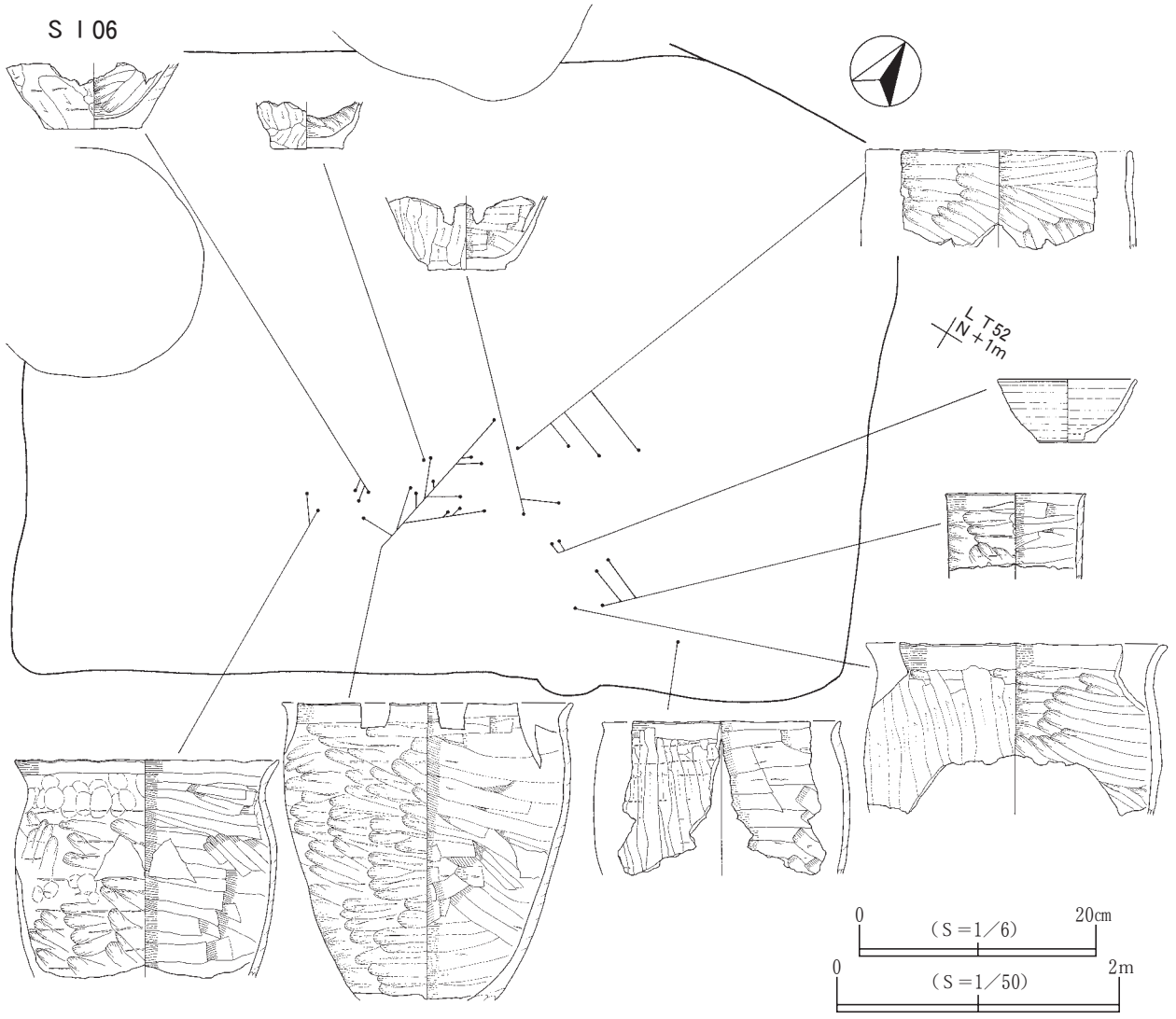

S I 06
SK10
SK11
調査区外
SK01
カマド
SK03
SKP135
SB101
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
76.600m
76.500m
76.800m
LT52 N+1m
MA51 N+1m E+3m
P1
1 黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性弱
地山土粒少量含む
P2
1 にぶい黄褐色土（10YR5／4）しまり強　粘性弱
黒褐色土粒多量含む
P3
1 にぶい黄褐色土（10YR5／3）しまり強　粘性弱
P4
1 にぶい黄褐色土（10YR5／4）しまり中　粘性弱
P5
1 にぶい黄褐色土（10YR5／4）しまり強　粘性弱
P6
1 黒褐色土（10YR2／3）
しまり弱　粘性弱　地山土粒少量含む
P7
1 黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
2 黒色土（10YR1.7／1）しまり強　粘性中
P8
1 黒色土（10YR1.7／1）
しまり強　粘性中　地山土粒微量含む
P9
1 黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性中
S I 06
1 黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
2 黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性中
3 黒褐色土（10YR2／3）しまり弱　粘性弱　地山土粒多量含む
4 黄褐色土（10YR5／6）しまり強　粘性弱
5 にぶい黄褐色土（10YR5／3）しまり中　粘性弱
6 黒褐色土（10YR2／3）しまり中　粘性弱　地山土粒少量含む
0
2m
（S＝1／50）

第 14 図　S I 06

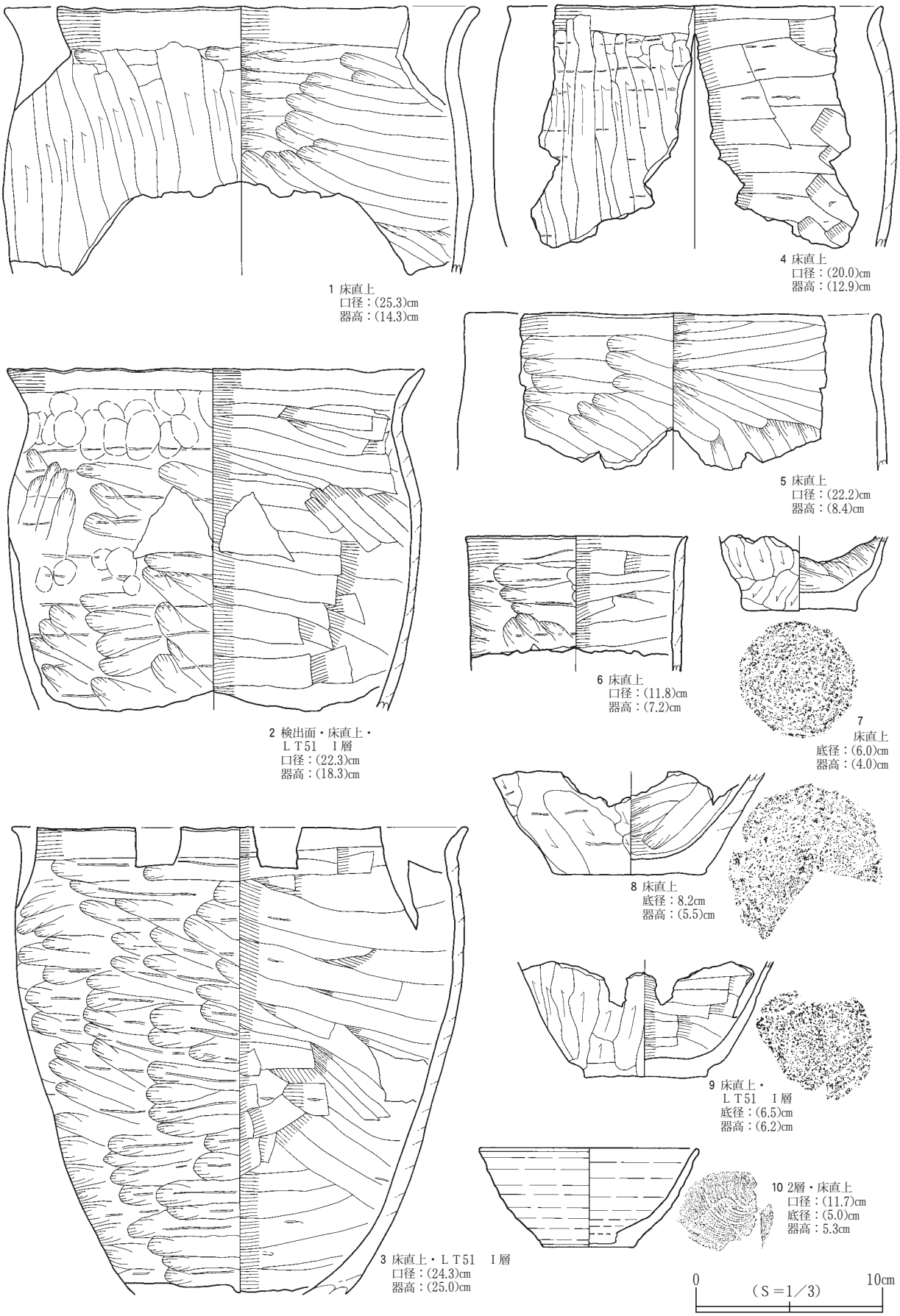
カマド



ＳＩ06



第 15 図　ＳＩ06 カマド・遺物出土状況



第 16 図　ＳＩ 06 出土遺物

の粘土で造っており、残存範囲では確認できなかったが、周辺部に散在する礫の状況から、礫を芯材として利用していたと想定される。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は自然堆積により埋没しており、本住居跡立地点の土地利用が低調になったことが窺える。

遺　物(第16図)　住居跡内から土師器甕・坏が出土した。土師器甕はＣ・Ｄ類が主体で、Ｃ類でも頸部の屈曲が少ないものが目立つ。底部は砂底のみである。

出土位置は、ほとんどの土器がカマドの周囲から出土している(第15図)。残存状態の良好な16図３は、本住居で煮沸具として利用していたものを投棄した可能性が高いが、それ以外の多くの破片は扁平な小破片になっており、カマド部材として転用したものを含むとみられる。

16図１～５は比較的大型の土師器甕である。１・２は胴上部が内傾して頸部でくびれ、口縁部が比較的長く外反する。これに対して、３は胴上部から頸部にかけて直立気味に立ち上がり、口縁部が弱く外反する。外面調整では、１が縦位ケズリ、２・３が縦・横位ユビナデ、内面調整では１がユビナデ、２・３が横位ヘラナデである。４は胴上部が張り出して、口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、口端がわずかに外反する。５も胴上部から直立する器形で、口端は外反しない。４は外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ、５は内外面共に横位ユビナデ調整である。

16図６は比較的小型の土師器甕である。胴部からわずかに外傾して、口縁部は直線的に立ち上がる。外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。16図７～９は土師器甕の底部で、全て砂底である。16図10は坏Ａ類で、約1／4が残存する資料である。底部から直線的に外傾して、口端がわずかに外反する。底面には回転糸切痕をとどめ、内外面ともロクロ目の凹凸が深い。なお、廃棄時のものとみられる敲打痕が認められる。意図的な打ち欠きと考えられる。

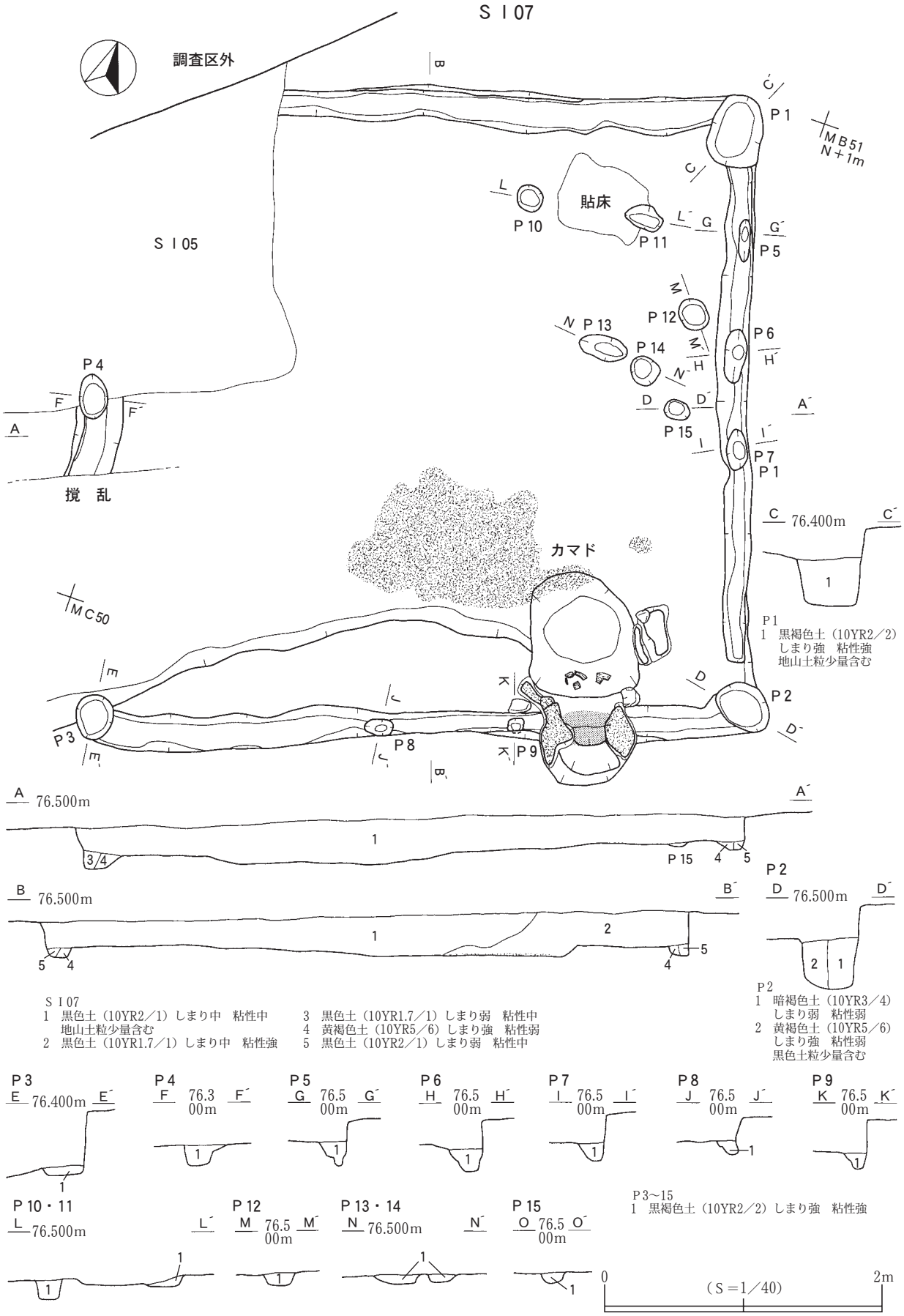
ＳＩ07（第17～19図、図版８）

遺　構　ＭＡ50、ＭＢ49～51、ＭＣ50グリッドの第Ⅵ層上面で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほぼ平坦な地形である。ＳＩ05と重複し、本住居跡の方が古い。周辺には、ＳＩ06・08・17、ＳＡ103・104、ＳＫ01・10・11がある。

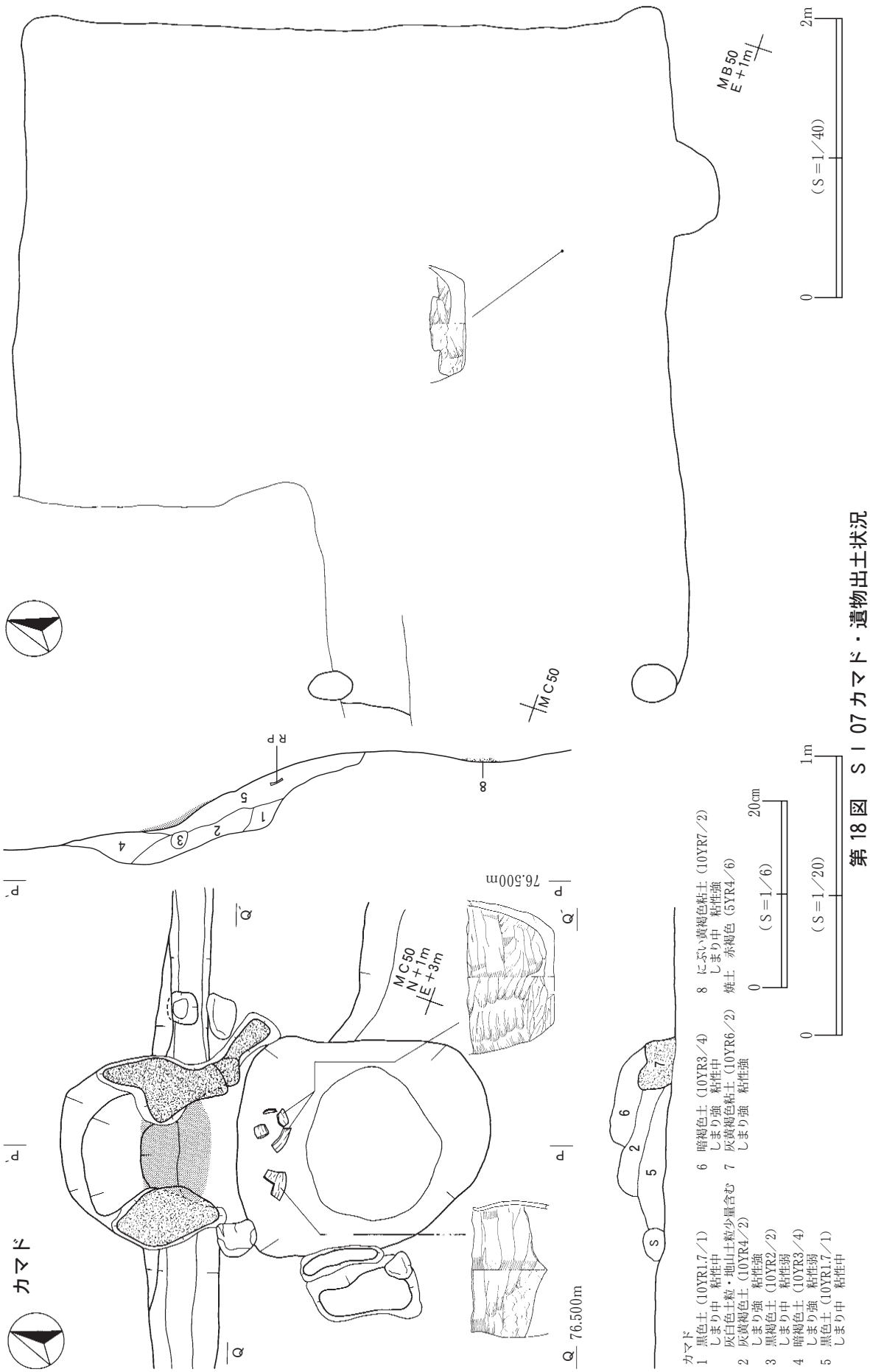
堆積土は５層に分けた。竪穴掘り込みの大部分を埋め尽くすのは１・２層であり、ＳＩ05と重複する状況から考えて、人為的な埋め戻しの土である。３～５層は壁溝内堆積土で、４層は裏込め、３・５層は壁板の腐植土であることから、廃絶時に壁板を残していたとみられる。

平面形は北東－南西方向にわずかに長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－18°－Ｗである。主軸とこれに直交するラインで測る面積は約23㎡である。各壁の長さは、全長が分かる北東壁約4.6m、南東壁約5.0mで、ＳＩ05や撹乱により部分的に破壊を受ける北西壁では約3.5m、南西壁では約2.6mのみ確認した。各壁の検出面からの深さは、北東壁約0.2m、南東壁約0.2m、南西壁約0.2m、北西壁約0.2mである。立ち上がりは基本的に垂直である。

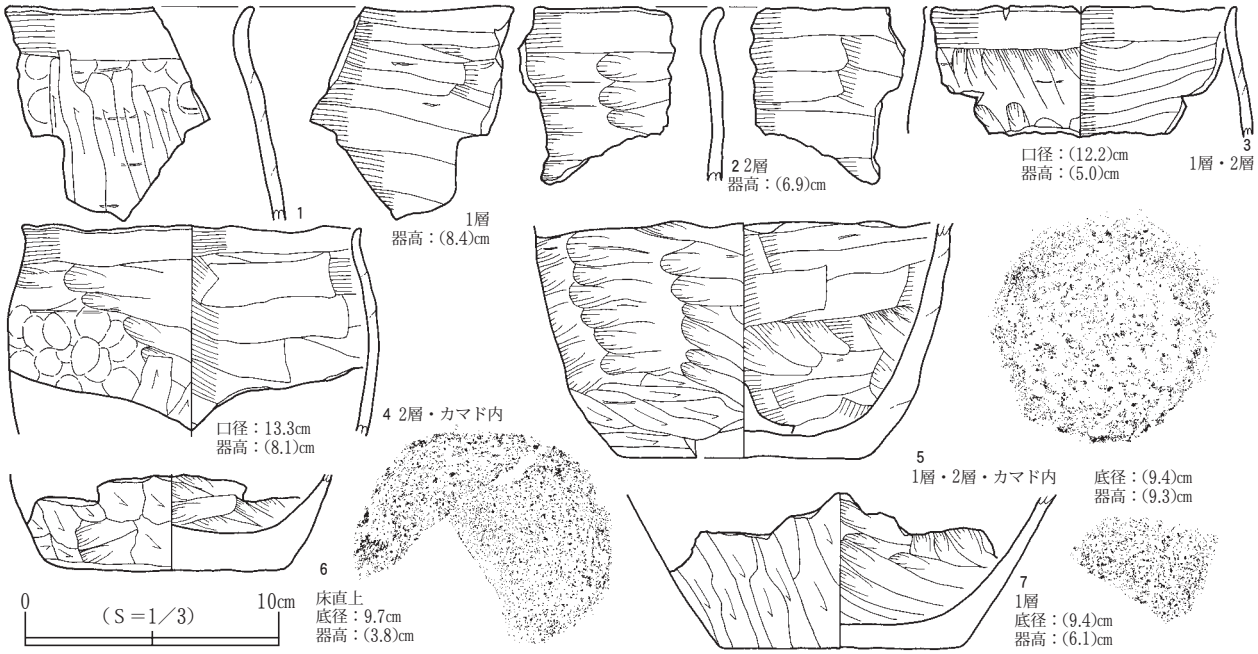
床面は掘形底面の地山面を平坦に整えて利用しているが、カマド脇の南東壁沿いはテラス状に0.1～0.15mほど高くなっている。南東壁の中央部を挟んでカマドと相対する位置関係であることから、出入り口に関わる構造と考えられる。なお、住居北隅付近で小規模な貼床を確認した。壁溝はほぼ全周で確認した。幅0.1～0.3m、床面からの深さは0.1m前後である。


ＳＩ07
調査区外
ＳＩ05
貼床
カマド
撹　乱
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
MB51
N+1m
MC50
76.400m
76.500m
ＳＩ07
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
地山土粒少量含む
2　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性強
3　黒色土（10YR1.7／1）しまり弱　粘性中
4　黄褐色土（10YR5／6）しまり強　粘性弱
5　黒色土（10YR2／1）しまり弱　粘性中
P1
1　黒褐色土（10YR2／2）
しまり強　粘性強
地山土粒少量含む
P2
1　暗褐色土（10YR3／4）
しまり弱　粘性弱
2　黄褐色土（10YR5／6）
しまり強　粘性弱
黒色土粒少量含む
P3～15
1　黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性強
P10・11
P12
P13・14
P15
0
2m
（S＝1／40）

第17図　ＳＩ07



第18図　ＳＩ07カマド・遺物出土状況



第 19 図　ＳＩ 07 出土遺物

床面及び壁溝内で15個のピットを確認した。Ｐ１・２・３は住居隅の主柱穴で、住居西隅はＳＩ05が切っているため確認できなかった。Ｐ４～９は壁溝内に位置しており、壁板保持の補助柱穴と考えられる。Ｐ10～15は住居北隅に集中する。配置に規則性を見い出し難いが、P10・11は北西壁に平行して２個並んでおり、貼床を挟むような配置であることから、あるいは出入り口の下部構造になるかもしれない。

カマドは南東壁の中央からやや北東よりの位置で、黒色土・灰黄褐色土の広がりで確認した。堆積土は８層に分層した。１・４～６層は流入土、２・３層が構築土の崩落、７層が残存する構築土、８層は前庭部底面に貼った粘土である。確認できたのは、煙道、袖、カマド基底部の掘り込みである。煙道から掘り込みまで約1.5m、袖の最大幅約1.2mである。煙道は地山面をスロープ状に掘り込んでおり、住居上場から約0.25m外に延びる。袖は、粘性の強い灰黄褐色や黒色土の混合土で構築している。なお、火床面は確認できなかった。カマド破棄時に掘削したと考えられる。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め戻しており、ＳＩ05の構築に合わせて廃絶し埋め立てたと考えられる。

遺　物(第19図)　住居跡内から土師器甕が出土した。破片が多く全体形を窺える資料は無い。出土地点は、カマド周辺と住居北隅に集中がみられる。カマド出土のものでは、19図４・５のように支脚の残存状況を示すものがある(第18図)。住居北隅から出土したものは、ほとんどが小破片で、図示できなかった。おそらく埋め戻しの土にまぎれたものと思われる。

19図１・２は土師器甕の口縁部破片である。１は胴上部が内傾して口縁部が直立気味に立ち上がり、口端がわずかに外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。２は胴上部が直立して頸部でわずかにくびれ、口縁部が短く外反する。外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。19図３・４は比較的小型の土師器甕で、頸部まで内湾して、口縁部が直立気味に立ち上がる器形である。４は破片下部にケズリが認められるが、３・４いずれも胴上部外面がユビナデ調整である。内面調整

はどちらも横位ヘラナデである。

19図５～７は土師器甕の底部で、全て砂底である。いずれも底部外面にケズリ調整を施して、直線的な立ち上がりを作っている。

ＳＩ08（第20図、図版９）

遺　構　ＭＡ・ＭＢ48・49、ＭＣ48グリッドの第Ⅵ層上面で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほぼ平坦な地形である。重複する遺構はなく、撹乱により北東壁の一部と北西隅が壊されている。周辺にはＳＩ05・07・17、ＳＡ103、ＳＫ90、ＳＸ106がある。

堆積土は３層に分けた。１・２層はどちらも黒色土であるが、１層は地山土粒を少量含んでいる。２層は混入物を含まない。３層は黒褐色土で地山土粒を少量含んでいる。堆積状況は明確でないが、部分的にレンズ状堆積を示すことから、自然堆積により埋没したと想定される。

平面形は北西－南東方向に長い長方形で、南東壁に直交する主軸方位はＮ－26°－Ｗである。各壁の長さは、北東壁約3.8m、南東壁約3.6mである。北西壁と南西壁は西隅が撹乱によって壊されているが、壁の延長線で予測して、南西壁約3.8m、北西壁約3.1mとなる。各壁の検出面からの深さは、北東壁約0.1m、北西壁約0.14m、南東壁約0.1m、南西壁約0.2mである。いずれの壁も上部が削平を受けており、本来の立ち上がりは不明である。

床面は掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。壁溝は確認できなかった。床面及び竪穴掘り込み外部で11個のピットを確認した。Ｐ１～７は住居内部に分布する。いずれも開口部径が0.2m前後で、床面からの深さは、Ｐ２・３・６が0.2m前後と比較的深く、Ｐ１・４・５・７が0.1m未満で比較的浅い。配置に規則性を見い出し難いが、Ｐ４・５は南東壁に平行して２個並ぶことから、出入り口に関わる下部構造の可能性がある。Ｐ８～11は竪穴掘り込み外部に位置しており、本住居跡に付属するとみられる、１間×１間の掘立柱建物跡を構成する。Ｐ10－11の中心を結んだラインを主軸線とした場合、主軸方位はＮ－62°－Ｅとなる。各柱穴間の距離を柱穴中心間で測ると、Ｐ８－９間約2.4m、Ｐ10－11間約2.7m、Ｐ８－11間約2.0m、Ｐ９－10間約2.1mとなる。検出面からの深さはＰ８・９が0.15～0.18mで比較的浅く、Ｐ10・11が0.3～0.4mで比較的深い。なお、Ｐ10・11のラインを竪穴掘り込み内部に延長すると、Ｐ３・６がほぼ等間隔に並ぶ。

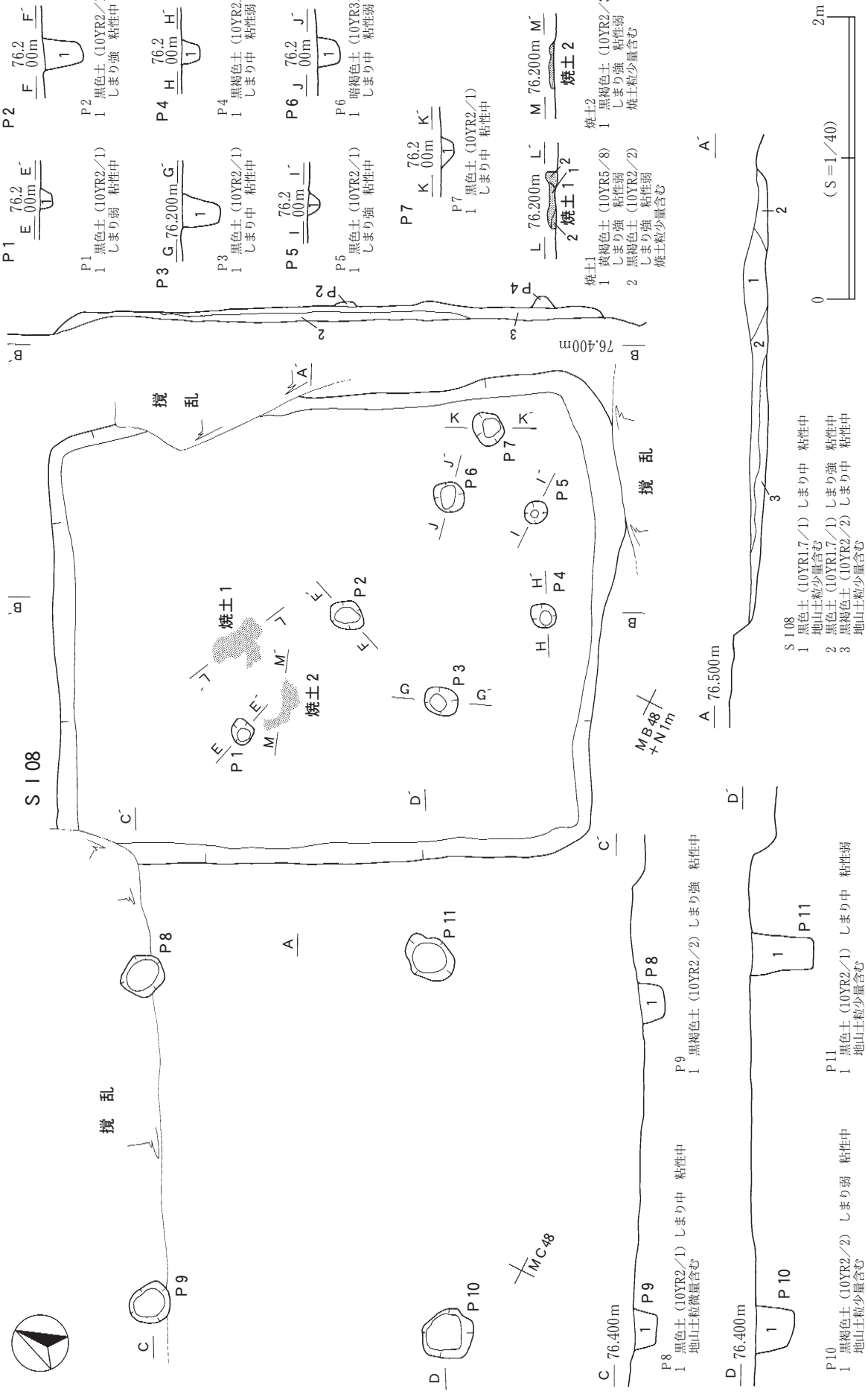
本住居跡に伴うカマドは確認されなかったが、住居跡中心よりやや北西側の位置に２か所の焼土分布を確認した。どちらも弱い痕跡だが、確実に被熱範囲であり何らかの炉が存在したものと考えられる。

本住居跡は明確な柱構造やカマド配置が不明確な住居である。他の住居跡とは異質な要素であり、掘立柱建物を伴うことや炉の痕跡が認められることから推測して、何らかの作業場だった可能性がある。廃絶後は自然堆積により埋没しており、本住居跡立地点の利用が低調になったことが窺える。

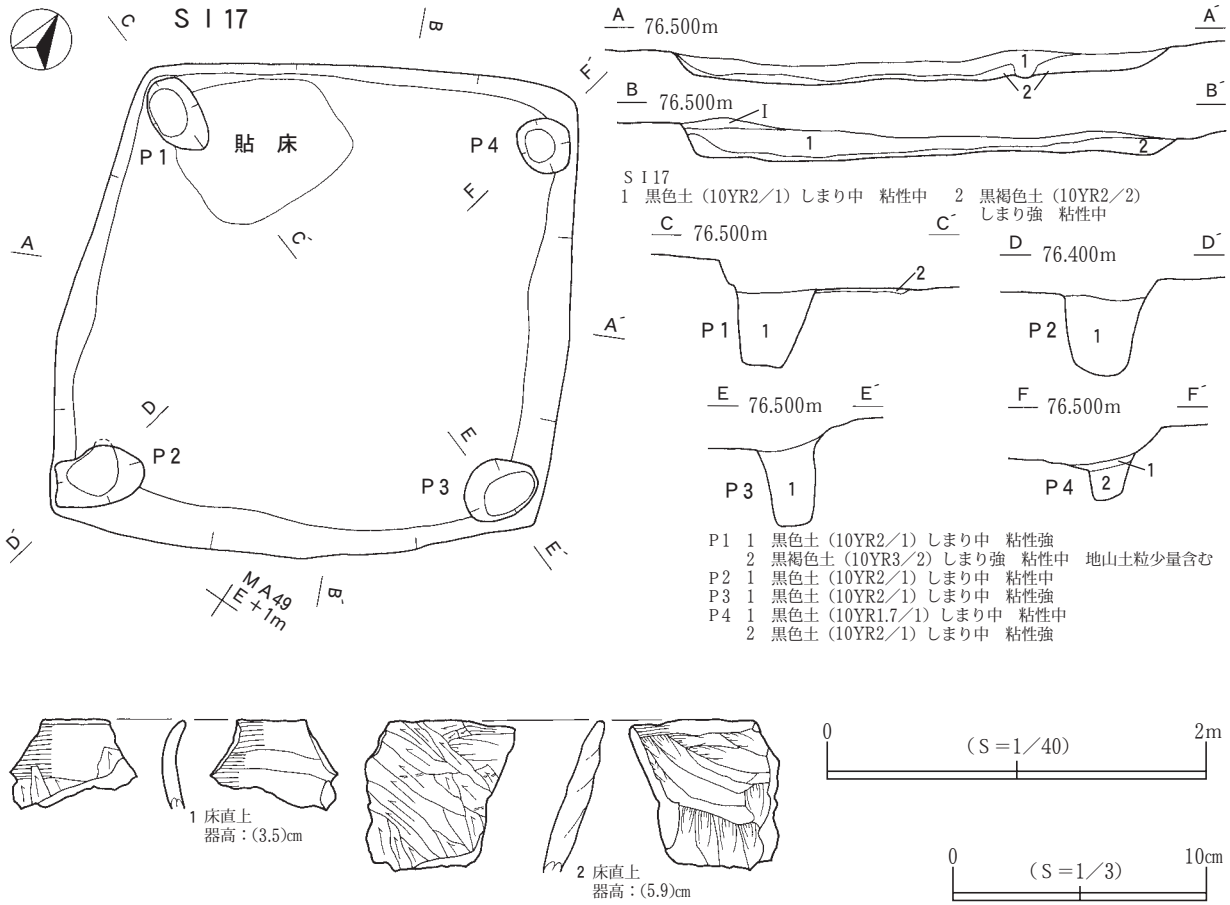
遺　物　住居跡内から土師器甕の破片が出土したが、小破片のため図示しなかった。

ＳＩ17（第21図、図版10）

遺　構　ＬＴ・ＭＡ48・49グリッドの第Ⅵ層上面で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほぼ平坦な地形である。重複する遺構はなく、周辺にはＳＩ05・06・


S I 08
撹乱
焼土1
焼土2
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
76.400m
76.500m
76.200m
76.2 00m
MB48 +N1m
MC48
(S＝1／40)
0
2m
P1 1 黒色土（10YR2／1） しまり弱 粘性中
P2 1 黒色土（10YR2／1） しまり強 粘性中
P3 1 黒色土（10YR2／1） しまり中 粘性中
P4 1 黒褐色土（10YR2／3） しまり中 粘性弱
P5 1 黒色土（10YR2／1） しまり強 粘性中
P6 1 暗褐色土（10YR3／3） しまり中 粘性弱
P7 1 黒色土（10YR2／1） しまり中 粘性中
焼土1 1 黄褐色土（10YR5／8） しまり強 粘性弱 2 黒褐色土（10YR2／2） しまり強 粘性弱 焼土粒少量含む
焼土2 1 黒褐色土（10YR2／3） しまり強 粘性弱 焼土粒少量含む
S I 08 1 黒色土（10YR1.7／1） しまり中 粘性中 地山土粒少量含む 2 黒色土（10YR1.7／1） しまり強 粘性中 3 黒褐色土（10YR2／2） しまり中 粘性中 地山土粒少量含む
P8 1 黒色土（10YR2／1） しまり中 粘性中 地山土粒微量含む
P9 1 黒褐色土（10YR2／2） しまり強 粘性中
P10 1 黒褐色土（10YR2／2） しまり弱 粘性中 地山土粒少量含む
P11 1 黒色土（10YR2／1） しまり中 粘性弱 地山土粒少量含む

第 20 図　S I 08



第21図　ＳＩ17

07・08、ＳＢ101がある。

堆積土は２層に分けた。上部が削平されているため堆積状況は不明だが、どちらも黒色基調の土で混入物が極めて少ないことから、本住居跡は自然堆積により埋没したと想定される。

平面形は南東壁がやや長い台形で、南東壁に直交する主軸方位はＮ－32°－Ｗである。主軸とこれに直交するラインで測る面積は約７㎡である。各壁の長さは、北東壁約2.3m、南東壁約2.6m、南西壁約2.5m、北西壁約2.3mである。各壁の検出面からの深さは、北東壁約0.1m、南東壁約0.1m、南西壁約0.1m、北西壁約0.2mである。上部が削平されているため、立ち上がりは不明である。

床面は、基本的に掘形底面の地山面を利用しているが、西隅の一部に貼床を施している。壁溝は確認できなかった。床面で４個のピットを確認した。Ｐ１～4は住居隅に配置する主柱穴である。いずれも堆積土が乱れており、廃絶時に柱を抜き取ったとみられる。

本住居跡に伴うカマドは確認されなかった。

本住居跡は四隅に主柱を配置する住居で、カマドを伴わない。極めて小規模であり、住居であったか疑わしい部分がある。廃絶後は自然堆積により埋没したと想定され、周辺の同時期遺構群の中でも比較的新しい段階のものと考えられる。なお、本住居跡北東側に位置するＳＢ101は、軸方位や配置からみて、本住居跡に伴う可能性が高い。

遺　物(第21図)　住居跡内から土師器甕・鍋の破片が出土した。21図１は土師器甕の口縁部破片で、口縁部が外反する。21図２は土師器鍋の口縁部破片で、口縁部まで直線的に外傾する器形である。外面は口端までケズリを施している。内面は縦位ユビナデ調整である。

（２）掘立柱建物跡

ＳＢ101（第22図、図版11）

遺　構　ＬＳ・ＬＴ49・50グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の北東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜する。Ｐ２をＳＫＰ79が掘り込んでおり、Ｐ４がＳＩ06Ｐ９を掘り込んでいる。近接する位置にＳＩ17がある。

本遺構は、４個の柱穴で構成される１間×１間の建物跡である。Ｐ１・２の中心を結んだラインを主軸線とした場合、主軸方位はＮ－27°－Ｗとなる。柱間はＰ１－２間約2.4m、Ｐ３－４間約2.3m、Ｐ１－４間約2.0m、Ｐ２－３間約2.0mになる。堆積土の観察から、廃絶時に柱を抜き取ったと考えられる。

本遺構は１間×１間の掘立柱建物で、軸方位や配置からみてＳＩ17の付属施設になる可能性がある。配置からみてＳＩ17に付属する可能性が高いが、軸方位がわずかにずれることから今回は分離して捉えた。ただし、規模や構造はＳＩ17に極めて近似する。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＢ102（第23図、図版11）

遺　構　ＭＥ47、ＭＦ46・47グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほぼ平坦な地形である。ＳＤ67、ＳＫＰ49と重複し、堆積土観察から、ＳＫＰ49より本遺構の方が新しいことが判明している。ＳＤ67との関係は、ＳＤ67堆積土の多くが撹乱により失われているため検証できなかった。周辺にはＳＡ104、ＳＫ18がある。

本遺構は、６個の柱穴で構成される１間×２間の建物跡である。Ｐ１－６の中心を結んだラインを主軸線とした場合、主軸方位はＮ－62°－Ｅとなる。桁行きの柱間は、Ｐ５－２間約2.8m、Ｐ２－４間約2.8m、Ｐ６－１間約2.8m、Ｐ１－３間約3.0mで、梁間の柱間は、Ｐ５－６間約1.5m、Ｐ１－２間約1.5m、Ｐ３－４間約1.5mとなる。堆積土の観察から、廃絶時に柱を抜き取ったと考えられる。

Ｐ５－６間で焼土を確認した。被熱範囲は長径約0.9m、短径約0.4mの不整な楕円形である。調査区境界部にかかる位置には浅い掘り込みがあることから、焼土は本来この掘り込みの、鍋底状底面に位置していたとみられる。なお、この掘り込みまでを一施設とみた場合、建物がより南西側へ延びると想定される。

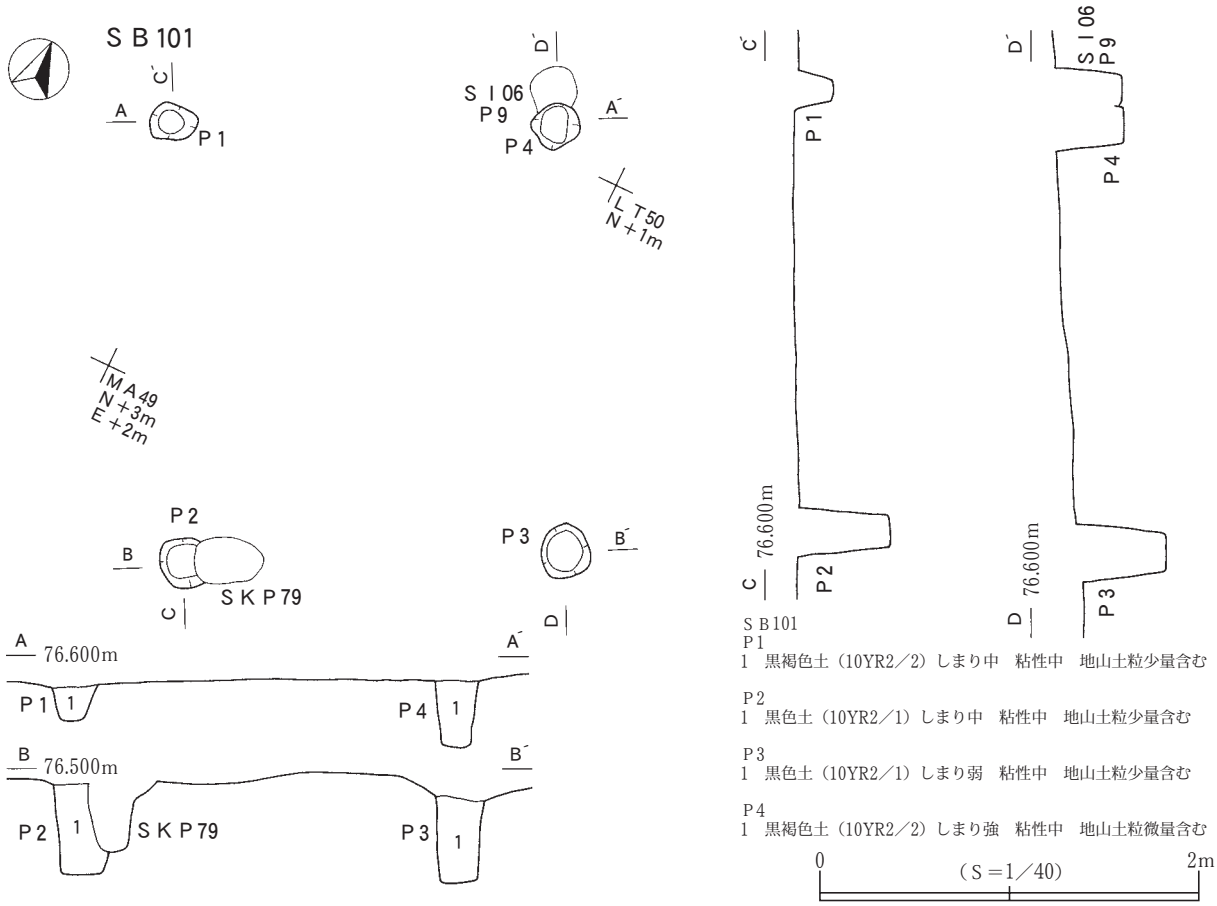
本遺構は１間×２間の側柱式の建物で、内部に焼土遺構を伴うことから、鍛冶作業場であった可能性が高い。また焼土の配置からみて、南西側調査区外へ建物が延びることがほぼ確実で、より規模の大きい建物と想定される。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

（３）柱列

ＳＡ103（第24図、図版11）

遺　構　ＭＢ47・48グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面である。重複する遺構はなく、周辺にはＳＩ08、ＳＢ102、ＳＡ104、ＳＫ18、ＳＸ106がある。



第22図　ＳＢ101

本遺構は柱穴３個で構成される。Ｐ１～3の中心を結んだラインを主軸線とした場合、主軸方位はＮ－23°－Ｗとなる。各柱穴間の距離を柱穴中心間で測ると、Ｐ１－２間約1.6m、Ｐ２－３間約1.6mである。各柱穴の堆積土の観察から、本遺構は廃絶時に柱を抜き取ったと考えられる。

本遺構は柱３本で構成される板塀だったと想定される。ＳＩ08に付属するとみられる掘立柱建物と重複する位置関係にあるが、新旧は不明である。しかし軸方位や配置からみて、本遺構もＳＩ08に伴う可能性が高い。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

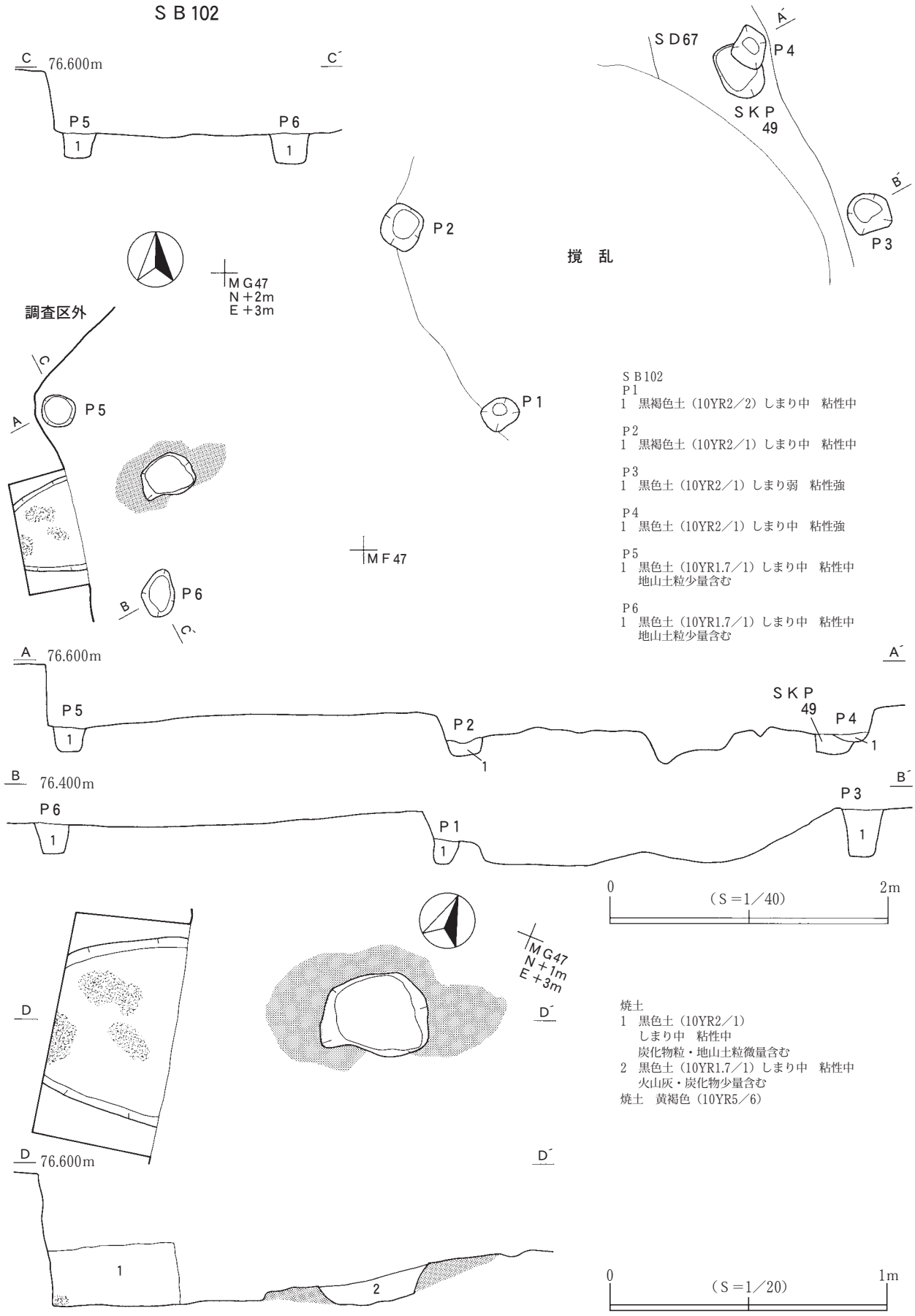
ＳＡ104（第24図、図版11）

遺　構　ＭＤ48グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面である。重複する遺構はなく、周辺にはＳＢ102、ＳＤ67、ＳＫ18がある。

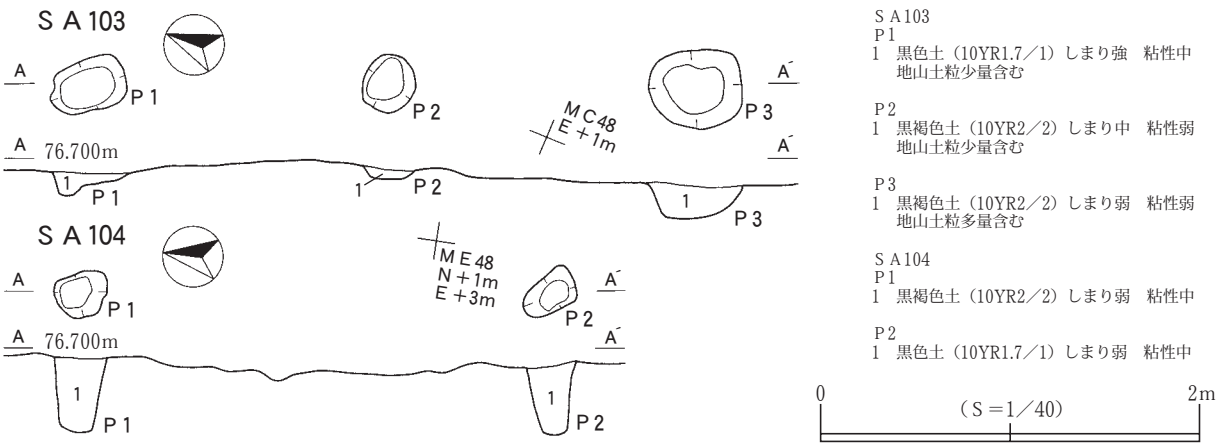
本遺構は柱穴２個で構成される。２個のみで柱列と言い切るのには不安もあるが、周囲に分布するＳＫＰに比べて本遺構の柱穴は深いため、セットになると判断した。柱穴の中心を結んだ主軸方位はＮ－９°－Ｗで、Ｐ１－２間は約2.5mである。

本遺構は柱２本以上で構成される板塀だったと想定される。北東側へ延びる小舌状台地先端部の住居分布域と、ＳＢ102のほぼ中間に位置することから、両者を区画する施設と考えられる。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。


ＳＢ102
C 76.600m
C´
P5
P6
1
1
ＳＤ67
A´
P4
ＳＫＰ
49
B´
P3
P2
P1
撹　乱
ＭＧ47
Ｎ＋2m
Ｅ＋3m
調査区外
C
A
P5
P6
B
C´
ＭＦ47
ＳＢ102
Ｐ1
1　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
Ｐ2
1　黒褐色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
Ｐ3
1　黒色土（10YR2／1）しまり弱　粘性強
Ｐ4
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性強
Ｐ5
1　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中
地山土粒少量含む
Ｐ6
1　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中
地山土粒少量含む
A 76.600m
A´
P5
P2
ＳＫＰ
49
P4
B 76.400m
B´
P6
P1
P3
0
（Ｓ＝1／40）
2m
ＭＧ47
Ｎ＋1m
Ｅ＋3m
D
D´
焼土
1　黒色土（10YR2／1）
しまり中　粘性中
炭化物粒・地山土粒微量含む
2　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中
火山灰・炭化物少量含む
焼土　黄褐色（10YR5／6）
D 76.600m
D´
1
2
0
（Ｓ＝1／20）
1m

第23図　ＳＢ102



第24図　ＳＡ 103・104

（4）土坑

ＳＫ01（第25図、図版11）

遺　構　ＭＡ51グリッドのＳＩ06上面及び第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほぼ平坦な地形である。ＳＩ06と重複し、本遺構の方が新しい。周辺にはＳＩ05・07、ＳＫ10・11がある。

堆積土は５層に分けた。レンズ状堆積であり、本遺構は自然堆積により埋没したと考えられる。平面形は円形で、径約1.6m、検出面からの深さは約0.4mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

本遺構は径約1.6mの円形の土坑で、用途は不明だが、ＳＩ06を掘り込んでおり、遺構群の配置や調査区１の土地利用が概ね平安時代に限られることからみて、ＳＩ05・08・17と同時期に存在した可能性が高い。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫ10（第25図）

遺　構　ＭＡ52グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の北縁に近く、北側の急斜面にほぼ接している。ＳＫ11と重複し、本遺構の方が古い。周辺にはＳＩ05・06・07、ＳＫ01がある。

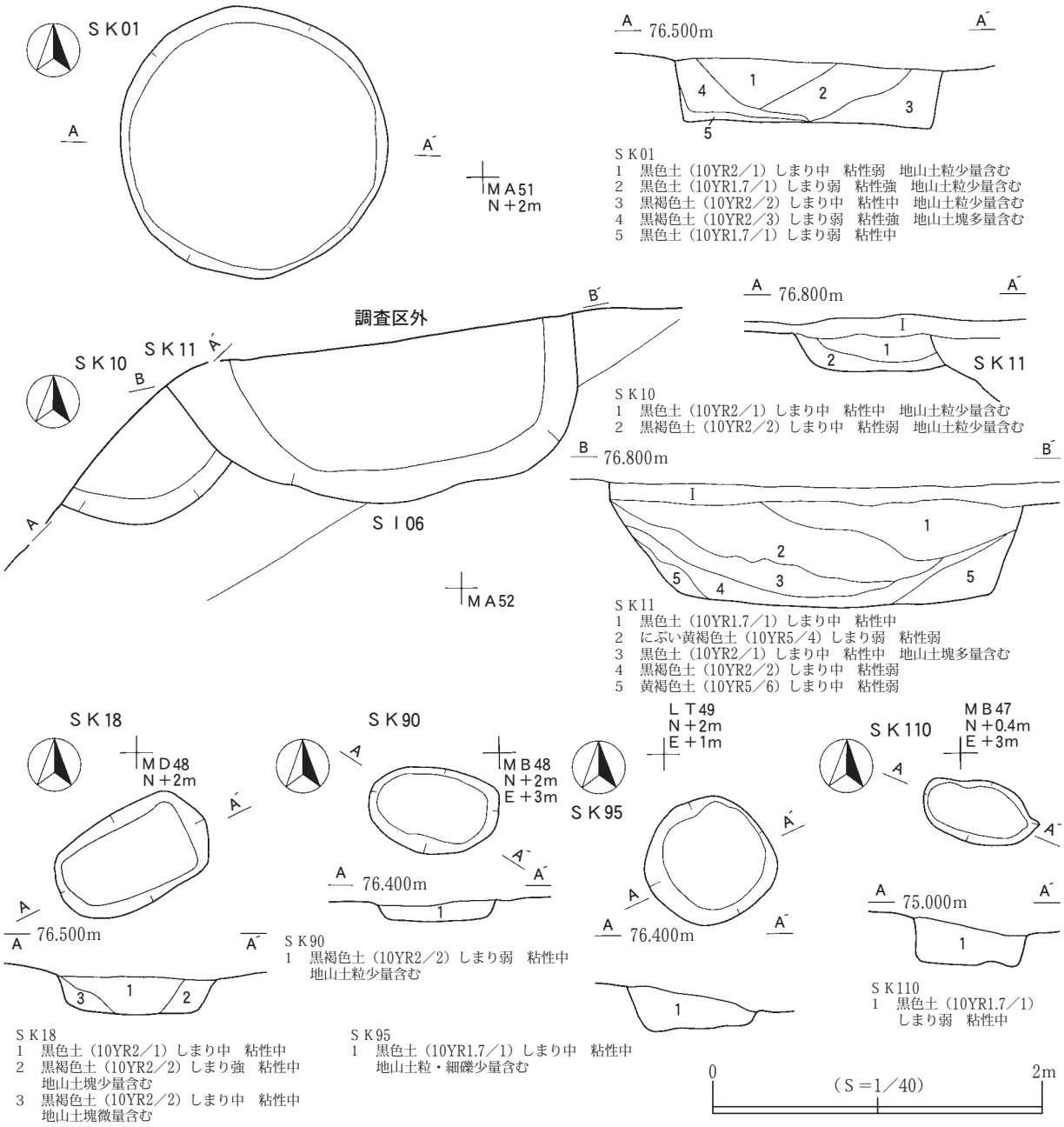
堆積土は２層に分けた。レンズ状堆積にもみえるが、確認範囲が狭いため堆積過程の詳細は不明である。遺構の半分が調査区外に延びており、また北東部をＳＫ11が切っているため、平面形及び平面規模は不明である。検出面からの深さは約0.2mで、周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構の用途は不明である。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫ11（第25図）

遺　構　ＬＴ・ＭＡ52グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の北縁に



第25図　ＳＫ01・10・11・18・90・95・110

近く、北側の急斜面にほぼ接している。ＳＩ06、ＳＫ10と重複し、どちらの遺構よりも新しい。周辺にはＳＩ05・07、ＳＫ01がある。

堆積土は５層に分けた。基本的にはレンズ状堆積であり、自然堆積による埋没と想定されるが、2層はⅥ層由来の土であり、人為的に土を投棄した可能性もある。遺構の約半分が調査区外に延びているため、平面形及び平面規模は不明である。確認できた範囲の最大径は約2.5mで、検出面からの深さは約0.6mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構の明確な用途は不明だが、規模はＳＫ01に近い。またＳＩ06を掘り込んでおり、遺構群の配置や調査区１の土地利用が概ね平安時代に限られることからみて、ＳＩ05・08・17と同時期に存在した可能性が高い。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫ18（第25図、図版12）

遺　構　ＭＣ・ＭＤ48グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほぼ平坦な地形である。重複する遺構はなく、周辺にはＳＢ102、ＳＡ103・104がある。

堆積土は３層に分けた。基本的にレンズ状堆積であり、本遺構は自然堆積により埋没したと考えられる。平面形は隅丸方形で、規模は長軸約1.0m、短軸約0.6m、検出面からの深さ約0.23mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は長軸約1.0m、短軸約0.6mの土坑である。明確な用途は不明だが、ＳＢ102の主軸を東北東に延長したライン上に本遺構が位置している。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫ90（第25図）

遺　構　ＭＡ48グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面だが、やや南に傾斜している。重複する遺構はなく、周辺にはＳＩ08、ＳＫＦ94がある。

堆積土は地山土粒を含む黒褐色土のみで、流入土とみられる。平面形は楕円形で、規模は長径約0.8m、短径約0.5m、検出面からの深さ約0.1mである。周壁はやや緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は長径約0.8m、短径約0.5mの土坑で、用途は不明だが柱穴だった可能性もある。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫ95（第25図、図版12）

遺　構　ＬＳ49グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面東縁下の緩い斜面部で、東側へ傾斜している。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫＦ84・93がある。堆積土は１層のみで、周囲からの流入土とみられる。

平面形は円形で、規模は径約0.75m、検出面からの深さは平均で約0.2mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は径約0.75mの円形の土坑で、用途は不明である。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫ110（第25図）

遺　構　ＭＡ46・47グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、台地上部平坦面南東縁下の緩い斜面部で、南東側へ傾斜している。重複する遺構はなく、周辺にはＳＸ106がある。堆積土は１層のみで、周囲からの流入土とみられる。

平面形は不整楕円形で、規模は長径約0.7m、短径約0.4m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁はやや垂直に立ち上がり、底面には起伏がある。

本遺構は、長径約0.7m、短径約0.4mの楕円形の土坑で、用途は不明である。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

（５）溝跡

ＳＤ67（第26図、図版12）

遺　構　ＭＤ46、ＭＥ46～48グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、北東側へ延びる小舌状台地の付け根にあたり、ほぼ平坦な地形である。また、本遺構の北側は撹乱により破壊されているが、おそらく調査区外部へ連続するとみられる。ＳＢ102Ｐ４やＳＫＰ49と重複しているが、上部堆積土が撹乱による破壊を受けているため、新旧関係は不明である。

堆積土は１層のみ確認した。地山土粒を少量含む黒色土で、自然流入土と考えられる。確認した範囲での規模は、全長約8.4m、最大幅約1.1mで、最深部が約0.2mである。

本遺構は全長約8.4m以上の溝である。小舌状台地の付け根部分を切るような配置であり、予想される集落主体部と、調査区１の位置する小舌状台地を区画する施設だったと考えられる。おそらくＳＩ05・08・17に伴うと考えられる。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

（６）性格不明遺構

ＳＸ106（第27図、図版12）

遺　構　ＭＡ・ＭＢ47グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。確認当初は、竪穴住居跡もしくは製鉄関連遺構と想定して精査したが、底面で確認できたのは柱穴のみで、掘形の形状が不規則であることから、性格不明遺構として扱った。本遺構の立地点は台地上部平坦面から南へ下る斜面部に当たり、緩やかに南側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＩ08、ＳＢ102、ＳＡ103、ＳＫ90・110、ＳＫＦ94がある。

堆積土は２層に分けた。どちらも混入物の少ない黒色基調の土であることから、自然堆積によって埋没したと考えられる。なお、上部には基本層位のⅡ層が残存していた。

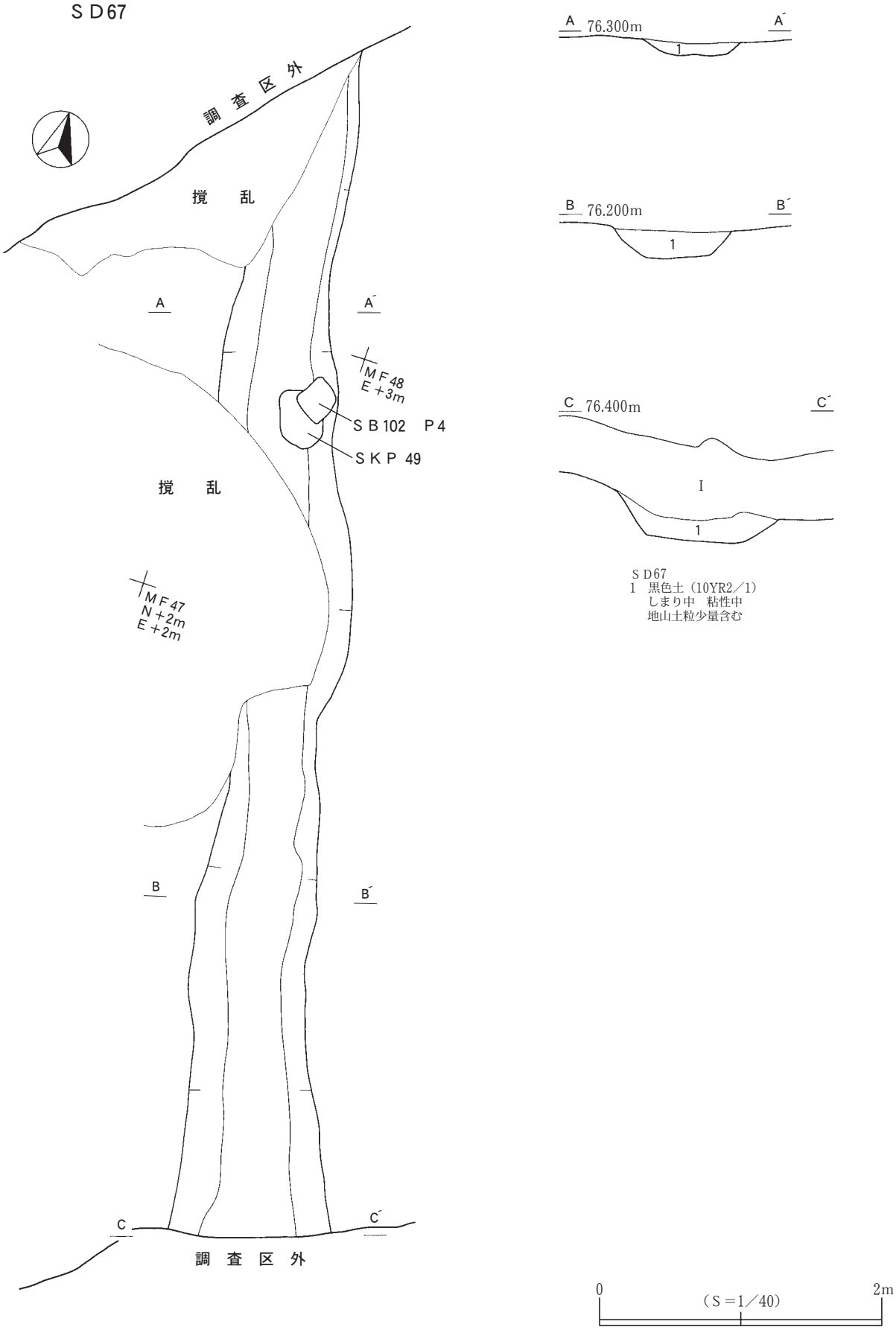
本遺構は一つの大きな平場と、この北東部に付く２つの小さな平場で構成される。大きな平場の平面形は台形で、斜面平行方向で約4.0m、斜面直交方向で約3.3mの規模である。検出面からの深さは、斜面上位の北壁で約0.5mである。周壁は全体を巡らず、南側が斜面に向かって開口している。底面はⅥ層地山面で、ほぼ平坦である。底面で９個のピットを確認した。Ｐ１～３は西壁沿いにほぼ一直線に並び、これに対応するようにＰ６～８が東壁際に並ぶことから、本遺構には上屋がかかっていた可能性がある。これらに対し、Ｐ４・５・９は配置が不規則である。

以上の大きな平場の東壁にある２つの小さな平場は、階段のようになっており、台地上部平坦面から本遺構への通路跡とみられる。

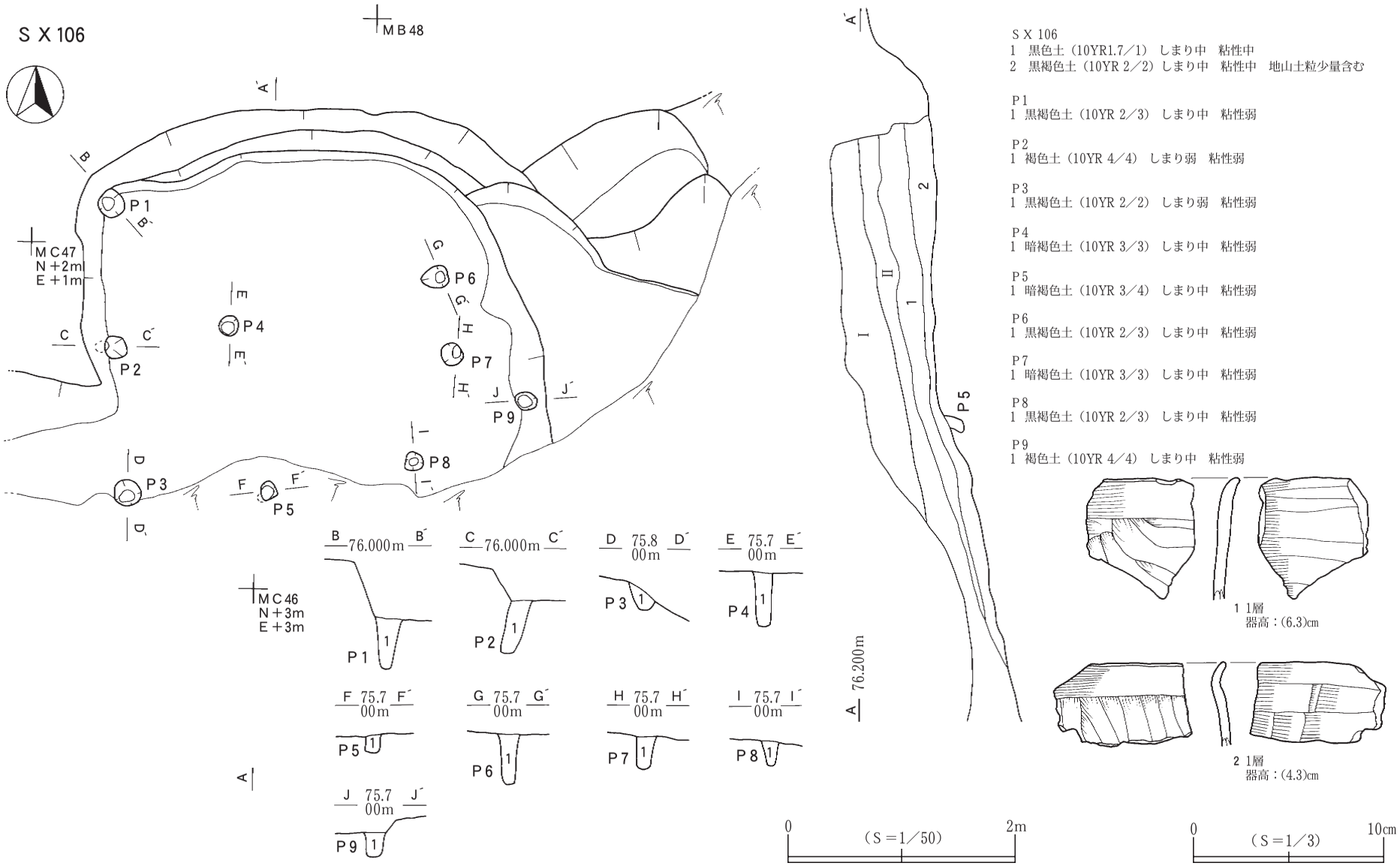
本遺構は4.0m×3.3mの平場部分を主体とし、これに出入り口が付属する施設である。平場には上屋がかかっていた可能性が高く、何らかの作業場だったと想定される。

遺　物（第27図）　遺構内から、石器や土師器甕の破片が出土した。いずれも流れ込みであり、本遺構に伴うものではない。なお石器は、第２節２で扱った。

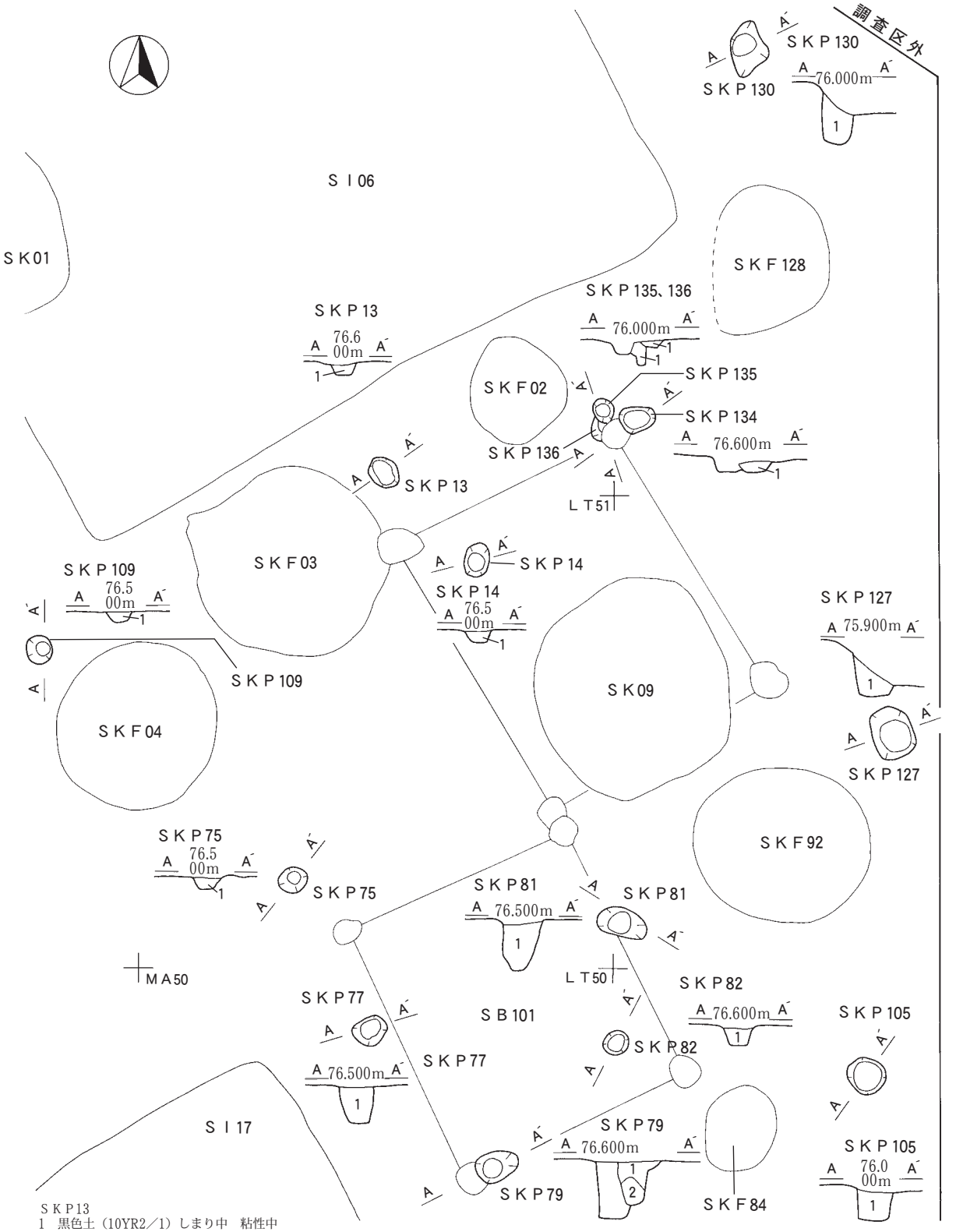
27図１・２は土師器甕の口縁部破片で、１は口縁部まで直線的に外傾する器形で、２は頸部でくびれて口縁部が外反する。


ＳＤ67
調査区外
撹　乱
A
A´
MF48
E＋3m
ＳＢ102　Ｐ4
ＳＫＰ 49
撹　乱
MF47
N＋2m
E＋2m
B
B´
C
C´
調　査　区　外
A 76.300m A´
1
B 76.200m B´
1
C 76.400m C´
I
1
ＳＤ67
1　黒色土（10YR2／1）
しまり中　粘性中
地山土粒少量含む
0
（Ｓ＝1／40）
2m

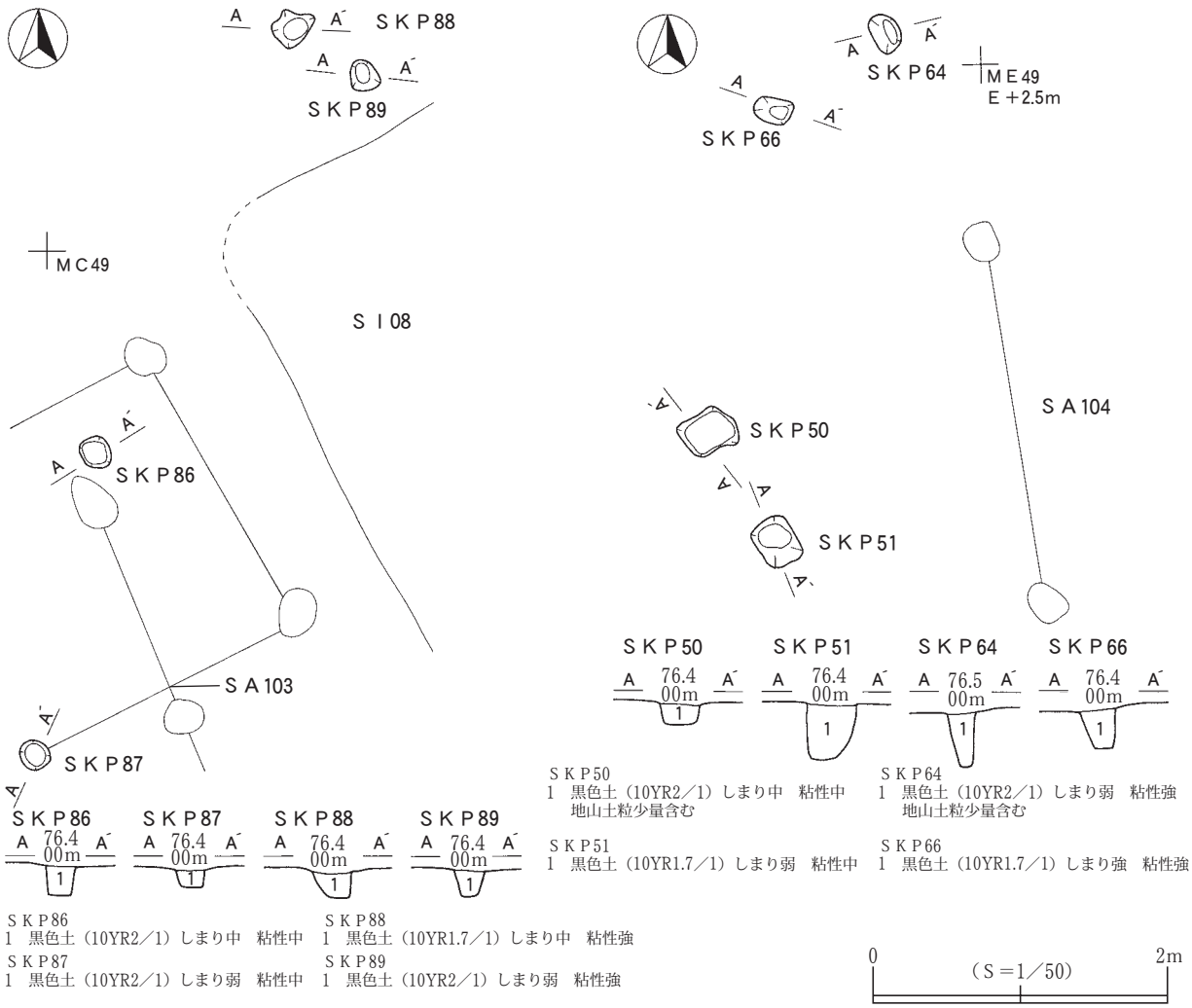
第26図　ＳＤ 67


S X 106
MB48
MC47
N＋2m
E＋1m
MC46
N＋3m
E＋3m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
76.000m
76.000m
75.8 00m
75.7 00m
76.200m
S X 106
1　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中
2　黒褐色土（10YR 2／2）しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
P1
1　黒褐色土（10YR 2／3）しまり中　粘性弱
P2
1　褐色土（10YR 4／4）しまり弱　粘性弱
P3
1　黒褐色土（10YR 2／2）しまり弱　粘性弱
P4
1　暗褐色土（10YR 3／3）しまり中　粘性弱
P5
1　暗褐色土（10YR 3／4）しまり中　粘性弱
P6
1　黒褐色土（10YR 2／3）しまり中　粘性弱
P7
1　暗褐色土（10YR 3／3）しまり中　粘性弱
P8
1　黒褐色土（10YR 2／3）しまり中　粘性弱
P9
1　褐色土（10YR 4／4）しまり中　粘性弱
1 1層
器高：(6.3)cm
2 1層
器高：(4.3)cm
0
(S＝1／50)
2m
0
(S＝1／3)
10cm

第 27 図　S X 106



第 28 図　調査区１ＳＫＰ配置１



第 29 図　調査区１ＳＫＰ配置２

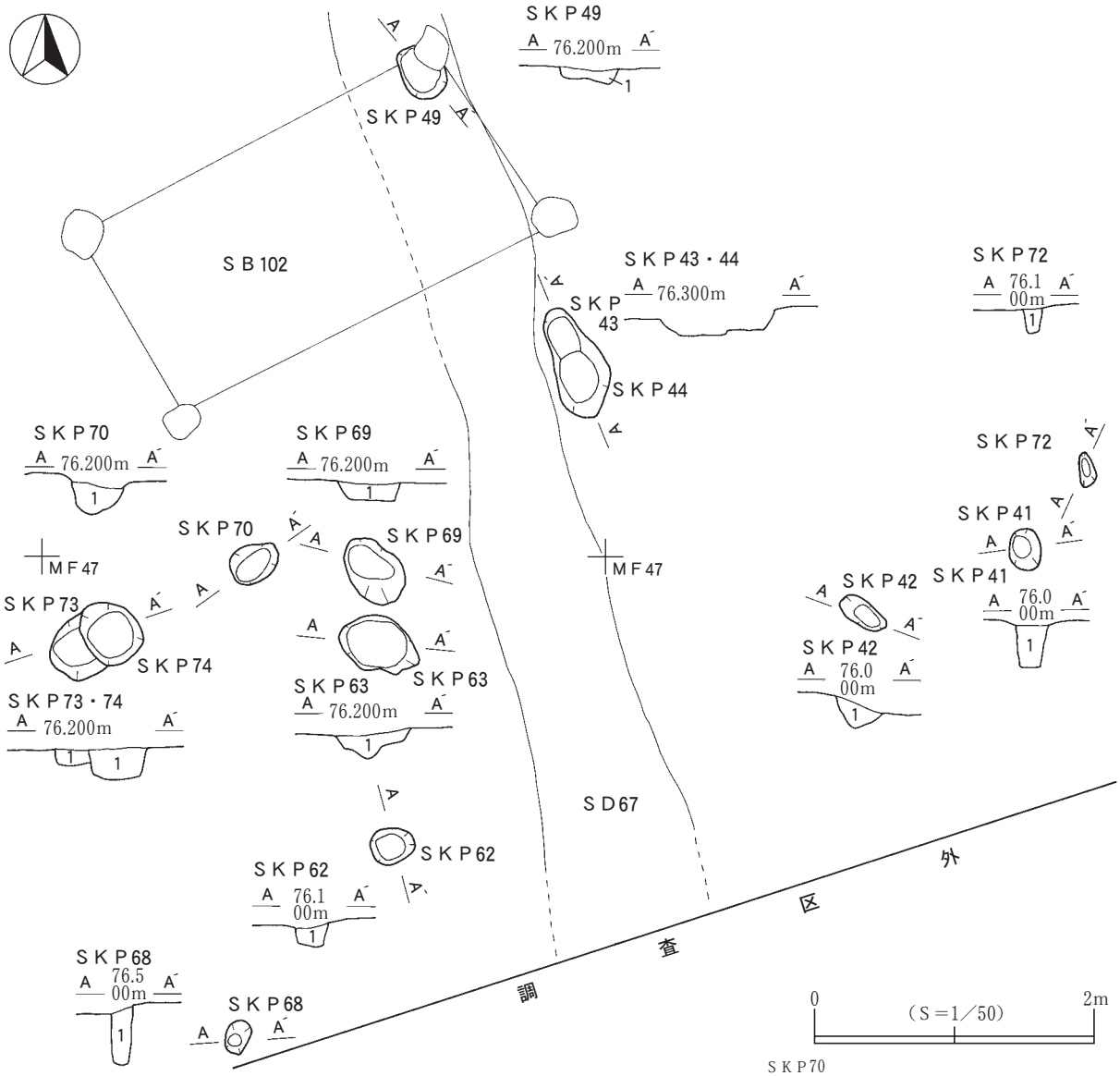
（7）柱穴様ピット

柱穴様ピットのまとまりをＬＳ49～ＭＡ50の範囲、ＳＩ08付近、ＳＡ104付近、ＳＤ67付近の 4つの範囲に分けて記述する（第28～30図）。

ＬＳ49～ＭＡ50の範囲では合計14個の柱穴様ピットを確認した（第28図）。堆積土は基本的に単層で、柱痕は確認できなかった。平面形は円形もしくは楕円形で、開口部径0.2～0.4m、確認面からの深さは0.1～0.5mである。比較的深いピットがまとまるのが、平坦面中央部から崖にむけて傾斜する変換線付近である。なお、ＳＫＰ77・82・105の 3個で柱列を想定したが、軸方位の合う建物が想定できず、ＳＫＰ82が比較的浅いため、ＳＫＰとして扱った。この範囲にはＳＩ06・17、ＳＢ101が存在しており、それらに伴うものと考えられる。

ＳＩ08付近では、4個のピットを確認した（第29図）。堆積土は基本的に単層で、柱痕は確認できなかった。平面形は円形もしくは楕円形で、開口部径が0.2 ～ 0.3m、確認面からの深さは0.1 ～ 0.2mである。 4個のピットには、相互に関連するような配置の規則性が全く見い出せない。ＳＩ08に付属するとみるのが最も妥当である。

ＳＡ104付近では、4個のピットを確認した（第29図）。堆積土は基本的に単層で、柱痕は確認できなかった。平面形は円形や楕円形もしくは隅丸方形で、開口部径が0.15～0.4m、 確認面からの深



ＳＫＰ41
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ42
1　黒褐色土（10YR2／3）しまり中　粘性弱
ＳＫＰ49
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
ＳＫＰ62
1　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性強

ＳＫＰ63
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
ＳＫＰ68
1　暗褐色土（10YR3／3）しまり弱　粘性中
　地山土粒少量含む
ＳＫＰ69
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む

ＳＫＰ70
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む
ＳＫＰ72
1　黒褐色土（10YR2／2）しまり弱　粘性中
ＳＫＰ73
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性強
　地山土粒多量含む
ＳＫＰ74
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性強
　地山土粒微量含む

第 30 図　調査区１ＳＫＰ配置３

さは0.15～0.4mである。ＳＡ104の軸にのるものはないが、ＳＫＰ51はＳＢ102の北側桁行きの延長線上にある。また、深さが似通ったＳＫＰ64・66を結んだラインは、他の遺構の軸方位に概ね一致することから、あるいは調査区外に連続する遺構の一端となる可能性もある。

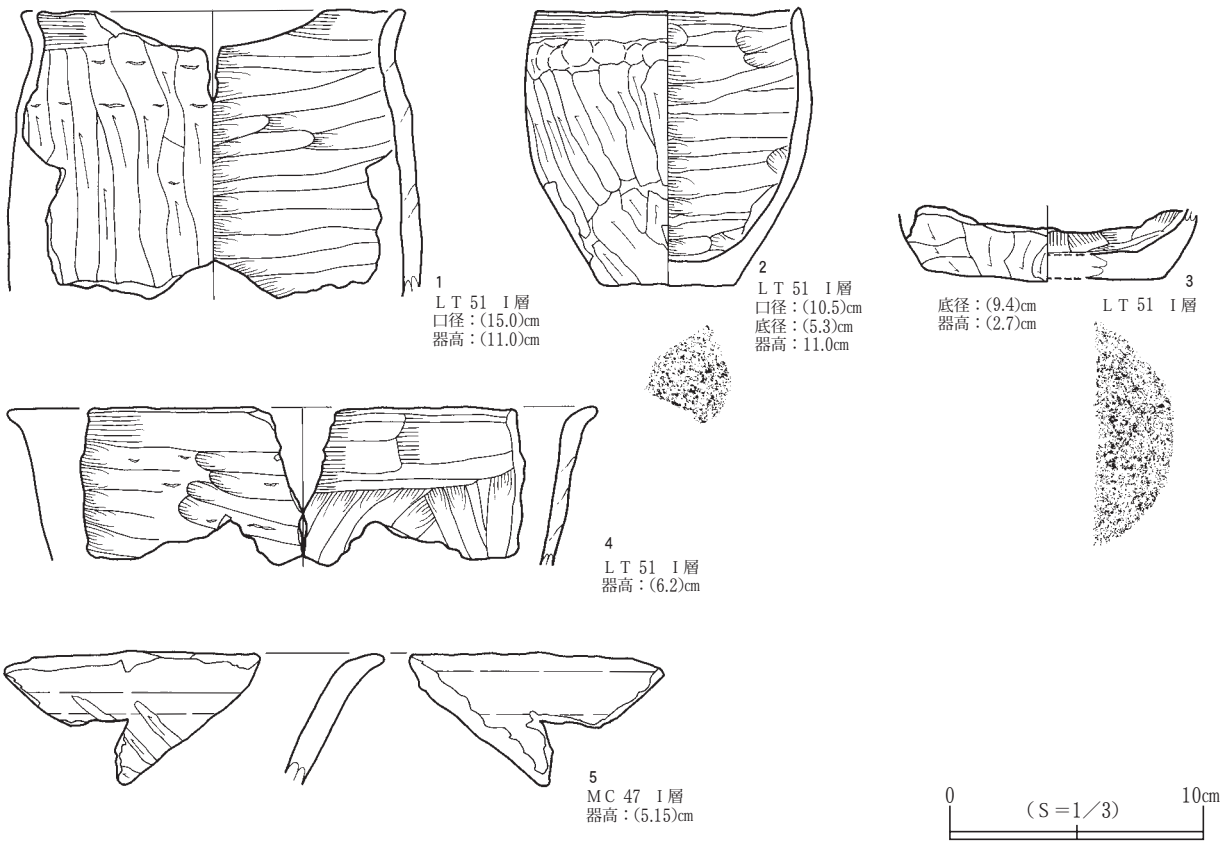
ＳＤ67付近では、11個の柱穴様ピットを確認した(第30図)。堆積土は基本的に単層で、柱痕は確認できなかった。平面形は楕円形が多く、開口部径0.15～0.6m、確認面からの深さは0.1 ～ 0.4mである。比較的規模の大きいＳＫＰ43・44やＳＫＰ73・74を結ぶと、ＳＢ102に平行する。またＳＫＰ62・70を結んだラインが、ＳＢ102Ｐ１・２の延長線にあたることが指摘できるが、明確な構造物を想定できない。

（8）遺構外出土遺物

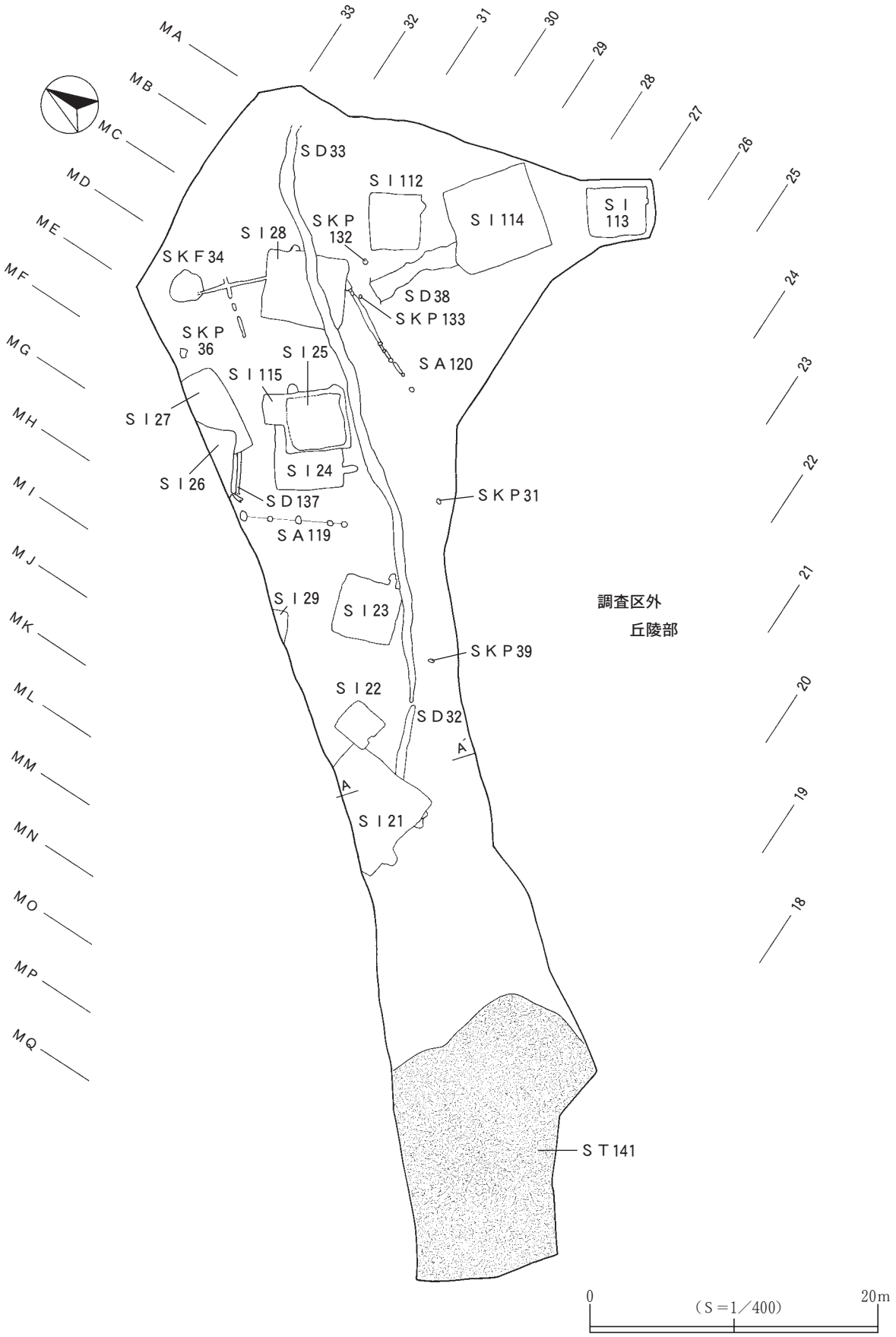
遺構外から出土した遺物は極めて少なく、図示したものでほとんどである。おそらく調査区内平坦面全面にⅠ層が分布することが示すように、耕作による削平が影響していると考えられ、大部分が失われているとみられる。

31図１・２は比較的小型の土師器甕である。１は胴部中位が張り出して胴上部が内傾し、頸部で弱くくびれて口縁部が直立気味に立ち上がる。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。外面口縁部付近はケズリが浅いため、輪積痕が残る。２は全体像を窺える資料である。１よりもさらに小さく、底面は砂底で、底部から外傾して立ち上がり、胴部中位が張り出して口縁部にかけて内湾する。器壁はほぼ一定だが、やや底部厚が他より厚い。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。外面のケズリは口縁部まで及ばず、口縁部横ナデの下部には、指の押さえが残っている。31図３は土師器甕の底部で、砂底である。底部からやや内湾気味に立ち上がる器形で、外面底部付近は入念にケズリ調整を施している。内面はヘラナデ調整である。

31図４・５は土師器鍋の口縁部破片である。どちらも口端がわずかに外反する器形で、調整は４が内外面共にユビナデ、５が内外面共にロクロ目様の横位ナデを施している。４に比べ５の方が器壁が厚い。４は口縁部がやや肥厚する器形で、外面調整が粗雑なため輪積痕が残る。５の外面には、線刻のような凹みが認められる。ケズリ調整の末端部に当たる可能性もあるが、破片のため詳細は不明である。なお、表面調整は平滑で輪積痕は目立たない。



第 31 図　調査区１遺構外出土遺物（平安時代）



第 32 図　調査区２遺構配置

第２節　調査区２の記録

１　基本層序

調査区２では、ＭＨ24～ＭＪ25に至るＡ－Ａ′ラインの１か所で基本層序を確認した(第32･33図)。調査区内の基本層序は第Ⅰ～第Ⅵ層で、第Ⅲ層はＡ－Ａ′断面では確認できなかったが、調査区南側の埋没沢の断面で確認した。調査区１と異なり、調査区２では平安時代遺構の検出・確認層位である第Ⅳ層が、比較的良好に残存していた。これは、本調査区が調査区南東側に隣接する小丘陵の裾野に位置するため、長く放置された結果と考えられる。調査区１に比べて耕作による撹乱層は少なく、土地利用があまり活発でなかったことが窺える。

各層の詳細を以下に示す。

第Ⅰ層　黒色土(10YR2／1)：現表土である。一部耕作による撹乱も認められるが、Ⅱ層上部が木根(特に笹竹)により軟質化した土が主体である。

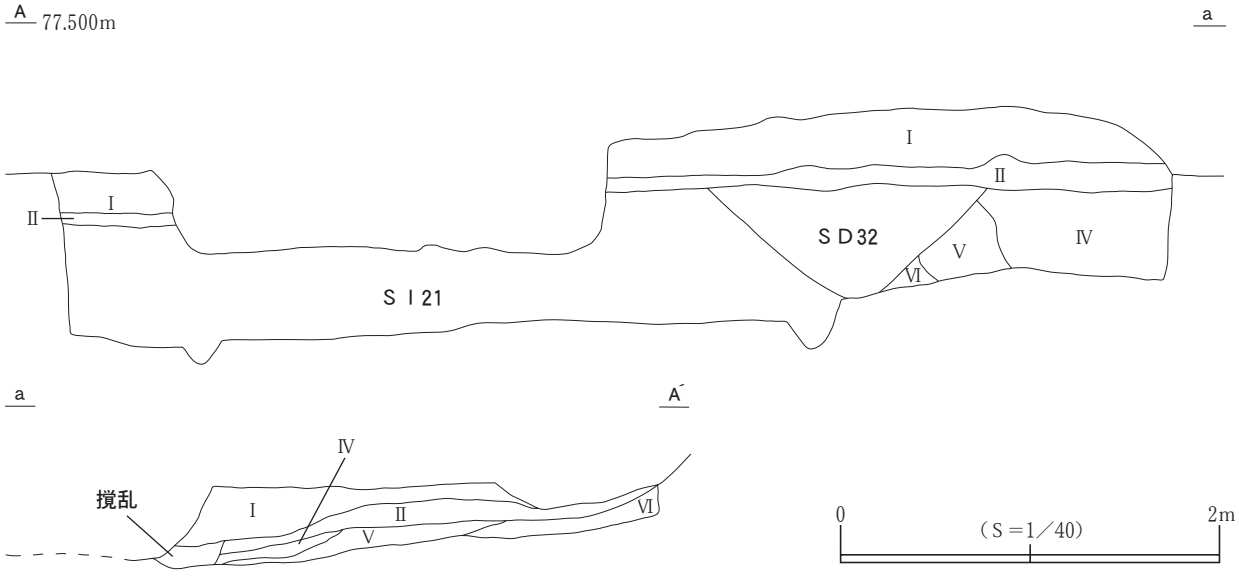
第Ⅱ層　黒褐色土(10YR2／2)：十和田ａ上部の腐植土層。場所により火山灰が混じる。なお、Ⅱ層下部で確認できた遺構も存在する。

第Ⅲ層　にぶい黄橙色砂(10YR7／3～7／4)：十和田ａ火山灰層。調査区内平坦面では分布が斑状だが、調査区南端の埋没沢上部の傾斜地では比較的厚く堆積していた。

第Ⅳ層　黒色土(10YR1.7／1)：十和田ａ直下の腐植土層。平安時代遺構の実質的な確認面になる。

第Ⅴ層　黒褐色土(7.5YR3／1)：腐植土層と地山層の漸位層。

第Ⅵ層　黄褐色土(10YR5／6)：地山層。最終的な遺構検出面で、以下は基本的に無遺物層である。



第 33 図　調査区２基本土層

２　縄文時代の検出遺構と遺物

(1)フラスコ状土坑

ＳＫＦ34（第34図、図版５）

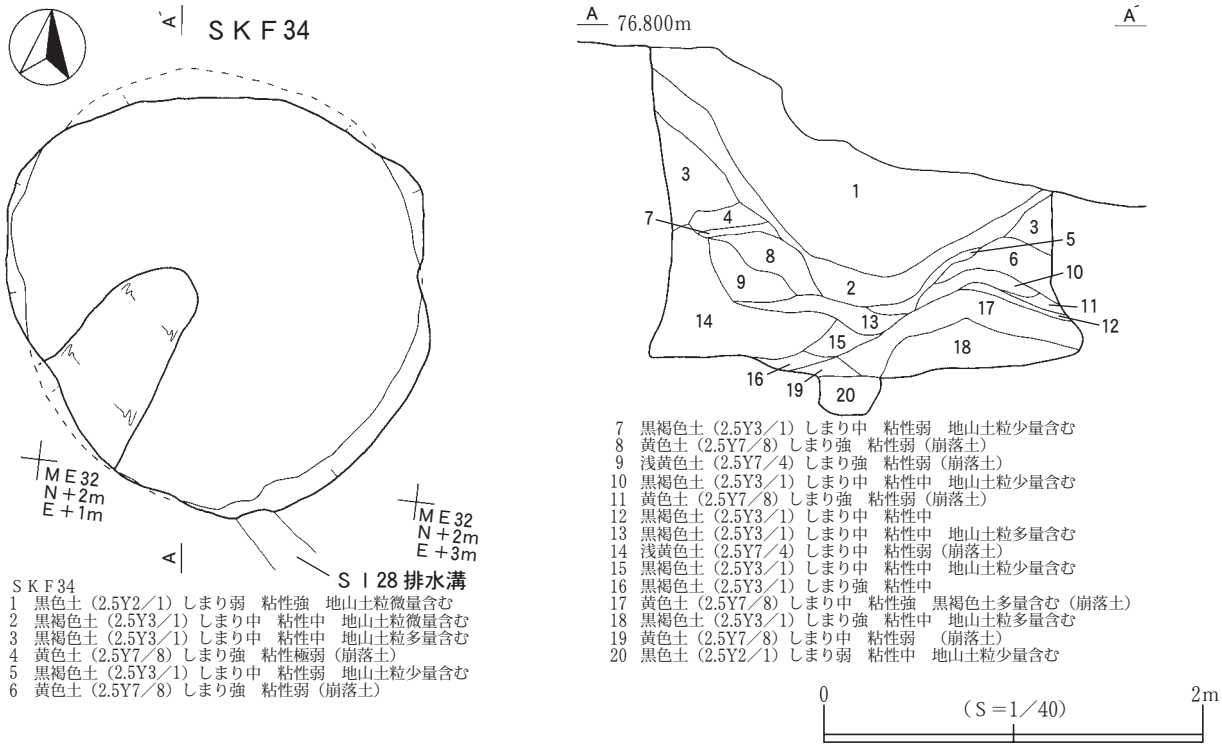
遺　構　ＭＤ32・33グリッドで、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。確認面は第Ｖ層下部からⅥ層上面である。本遺構の立地点は台地上部平坦面の北縁に位置し、北側へ傾斜している。ＳＩ28に付属する排水溝が本遺構の上部を切っている。

堆積土は20層に分けた。３層以下は、黒色基調の流入土と浅黄色・黄色基調の崩落土が交互に堆積している。これらの土が擂鉢状に堆積した後、１・２層が上部を埋め尽くしており、このことから、本遺構は自然堆積により埋没したと考えられる。20層はしまりの緩い堆積層で、木根等の撹乱層とみられる。

平面形は、開口部、底面共に不整な円形で、規模は、開口部径約2.4m、底面径約2.2mである。検出面からの深さは斜面上部の南東壁で約1.7m、斜面下部の北西壁で約0.9mである。断面形は、底面付近がフラスコ状に外へ張り出すが、上部は垂直になる。その変換点は、確認面から測って斜面上部で約1.0m、斜面下部で約0.5mである。堆積土からみて、オーバーハングしていた壁中位が崩落した可能性がある。底面は基本的に平坦だが、一部溝状に窪む。形状が不規則であるため、木根による撹乱と判断した。

本遺構は、開口部径約2.4m、底面径が約2.2m、検出面からの深さが斜面上部で約1.7m、斜面下部で約0.9mのフラスコ状土坑である。形状から貯蔵穴と考えられる。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。



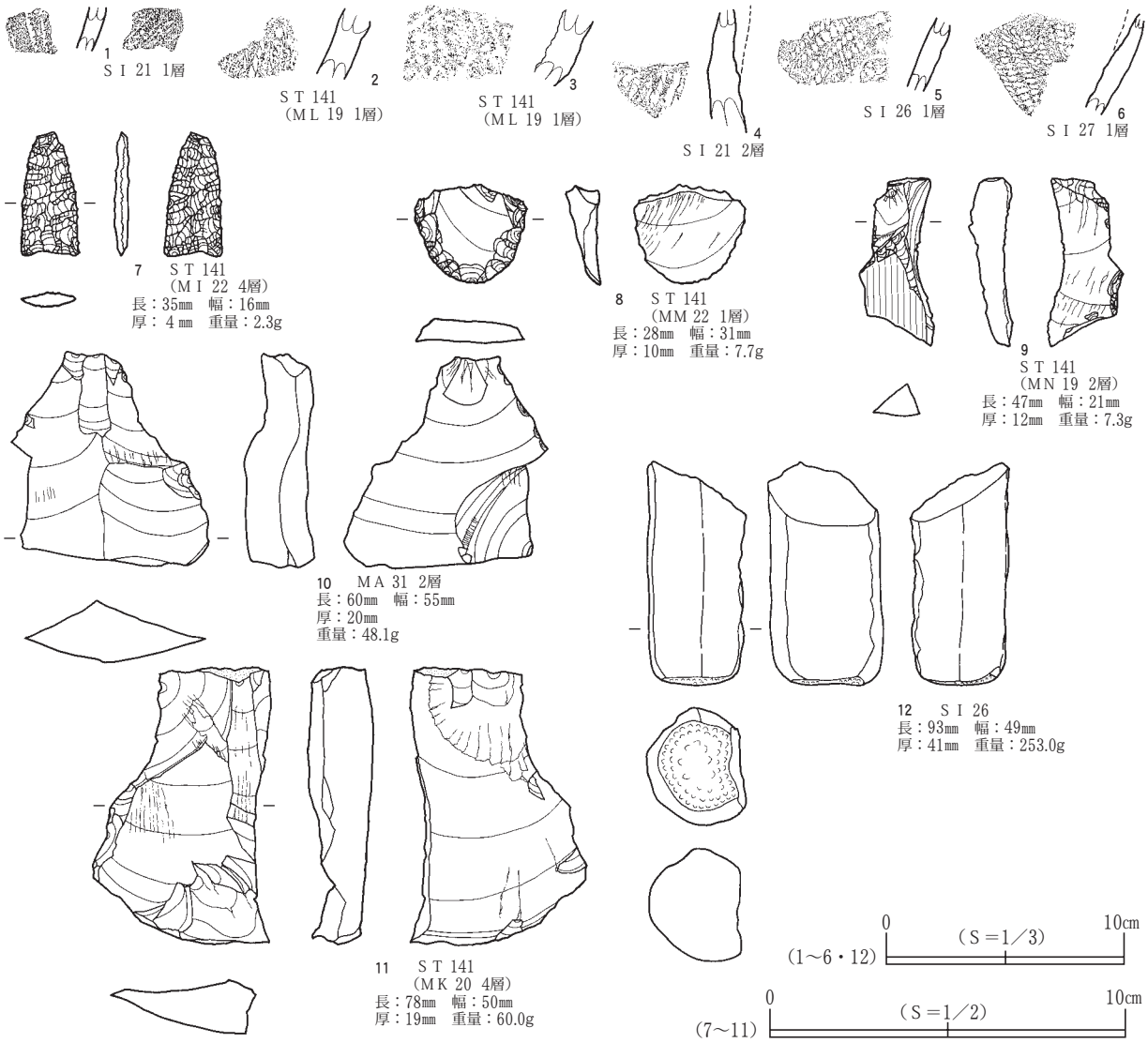
第34図　ＳＫＦ34

（２）遺構外出土遺物

遺構外または平安時代の遺構内から、縄文土器、石器が少量出土した。調査区全体でみても出土量はごくわずかであり、どちらも10点前後である。比較的調査区南部からの出土が多い。

35図1 ～ 6は縄文土器である。１はⅠ群１類の胴部小破片で、外面には縦位の貝殻腹縁圧痕文が、内面には浅い条痕が認められる。２・３はⅡ群２類の胴部小破片で、２は表面の摩滅が著しいが、３は地文の撚糸文が確認できる。４～６はⅢ群で、地文のみが認められる。４は縦走の撚糸文を施す。５・６は同一個体の可能性が高いもので、ＬＲ原体により地文を施している。

35図７～11は石器または剥片である。７は凹基の石鏃で、ほぼ完形である。幅に対して最長部が比較的長い形状である。８は上部が折れており、石匙等の一部だった可能性がある。残存する側縁部には全周調整剥離を施しており、断面形や刃部角度からみて切削具として機能したものと考えられる。９は不規則な形状の剥片の一部に、わずかに２次加工を施したものである。10・11は剥片で、明確な２次加工の痕跡は認められない。10は打点から末端にかけて徐々に厚みを増し、11は末端にヒンジフラクチャーが認められる。35図12は敲石で、欠損品である。



第 35 図　調査区２遺構外出土遺物（縄文時代）

３　平安時代の検出遺構と遺物

(1)竪穴住居跡

ＳＩ21（第36～41図、図版13・14・28～30）

遺　構　ＭＩ24～26、ＭＪ・ＭＫ24・25グリッドの第Ⅳ層上面で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、緩やかに南西へ傾斜している。ＳＩ22、ＳＤ32と重複し、いずれよりも本住居跡が古い。北東側にＳＩ23が、南側にはＳＴ141がある。

堆積土は４層に分けた。１・２層はどちらも黒色土で、１層は火山灰を含み、２層は炭化物を多量に含んでいる。４層は壁溝の裏込め土である。本住居跡は焼失家屋で、床面には炭化材が散在することから、床直上の３層は家屋の焼失に伴う焼失木材や、不完全燃焼材に由来する腐植土との混合土とみられる。１・２層は共に混入物を含んでいるが、１層は混入物が少なく、２層は多い。このことから周堤を崩して埋め戻したか、他の住居を構築する際に排出した土で埋め戻したと考えられ、人為堆積と想定される。

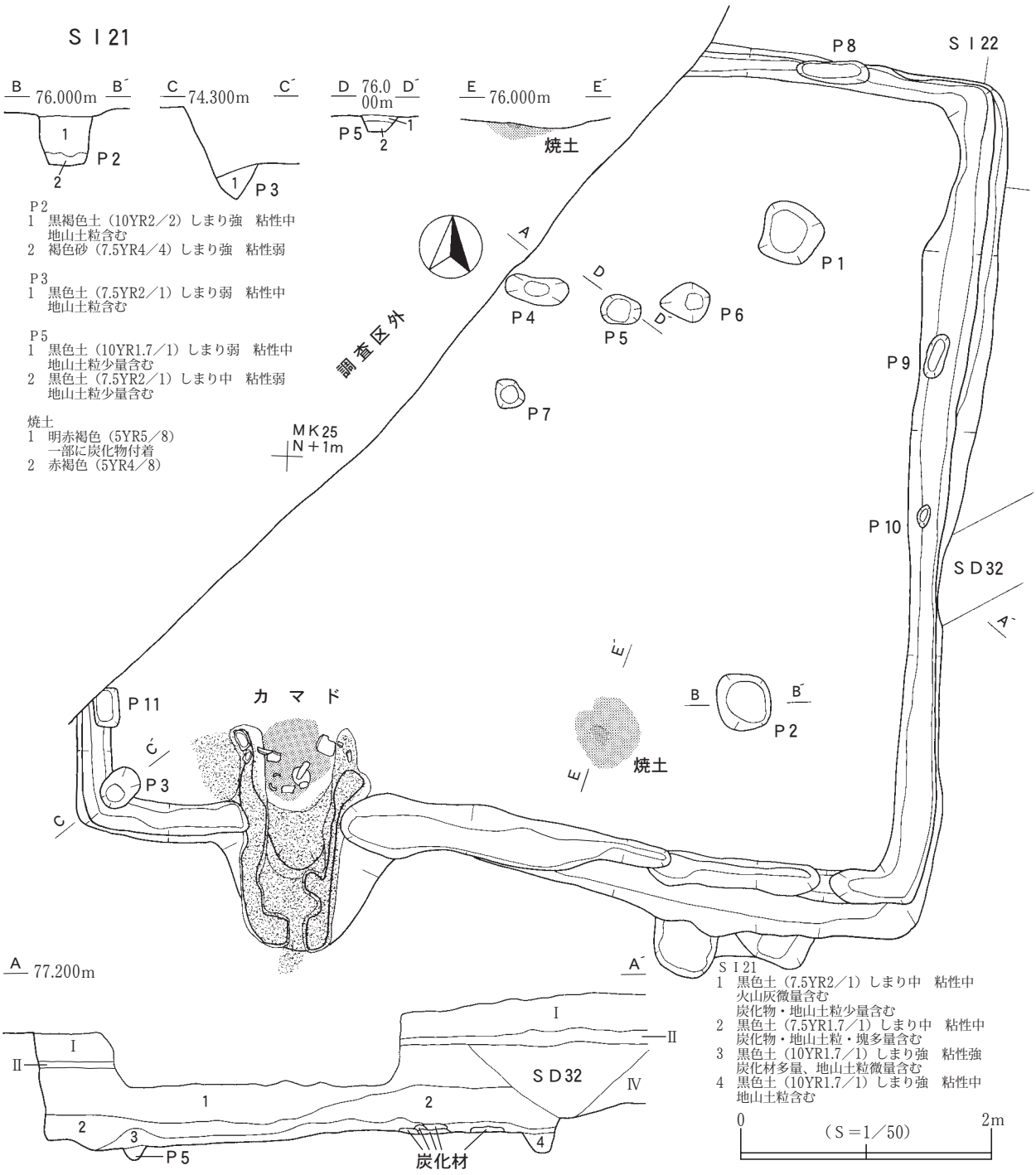
平面形は、住居跡の一部が調査区外へ延びているため正確には不明だが、完掘している範囲からみて、ほぼ正方形と想定される。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－４°－Ｅで、主軸とこれに直交するラインで測る面積は約46㎡である。各壁の長さは、南壁約6.8m、東壁約7.0m、部分的に確認した北壁は2.4m以上、同じく西壁は0.9m以上である。検出面からの深さは約0.6ｍで、ほぼ垂直に立ち上がる。

住居跡の南壁の中央よりやや東寄りで、階段状の張り出しを確認した。規模は住居壁平行方向で約1.3m、住居壁直交方向で約0.4mである。底面は凹凸があり、住居上場に取り付く２個のピットと併せて階段状になることから、出入り口の痕跡と考えられる。

床面は、基本的に掘形底面の地山面を平坦に整えて利用しているが、南壁沿いでは部分的に貼床が認められた。なお、南東部の貼床下部で焼土を確認した。被熱範囲は径約0.5mの不整な円形で、地山に約0.1ｍの深さまで被熱が及んでいる。表面に炭化物が付着していた。壁溝は調査した範囲ではカマドを除く全周で確認した。南壁の張り出しが付く箇所では、部分的に途切れる。幅0.18～0.4m、床面からの深さは約0.2mである。

床面及び壁溝内部で11個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居四隅より内側に位置する主柱穴である。共に壁から1.5～1.8m離れて位置し、規模は径約0.5mで他のものに比べて大きい。Ｐ３・８～11は壁溝内に位置する柱穴で、壁板保持の補助柱穴とみられる。Ｐ４～７は住居中央からやや北よりのＰ１西部にまとまって位置する。明確な用途は不明である。

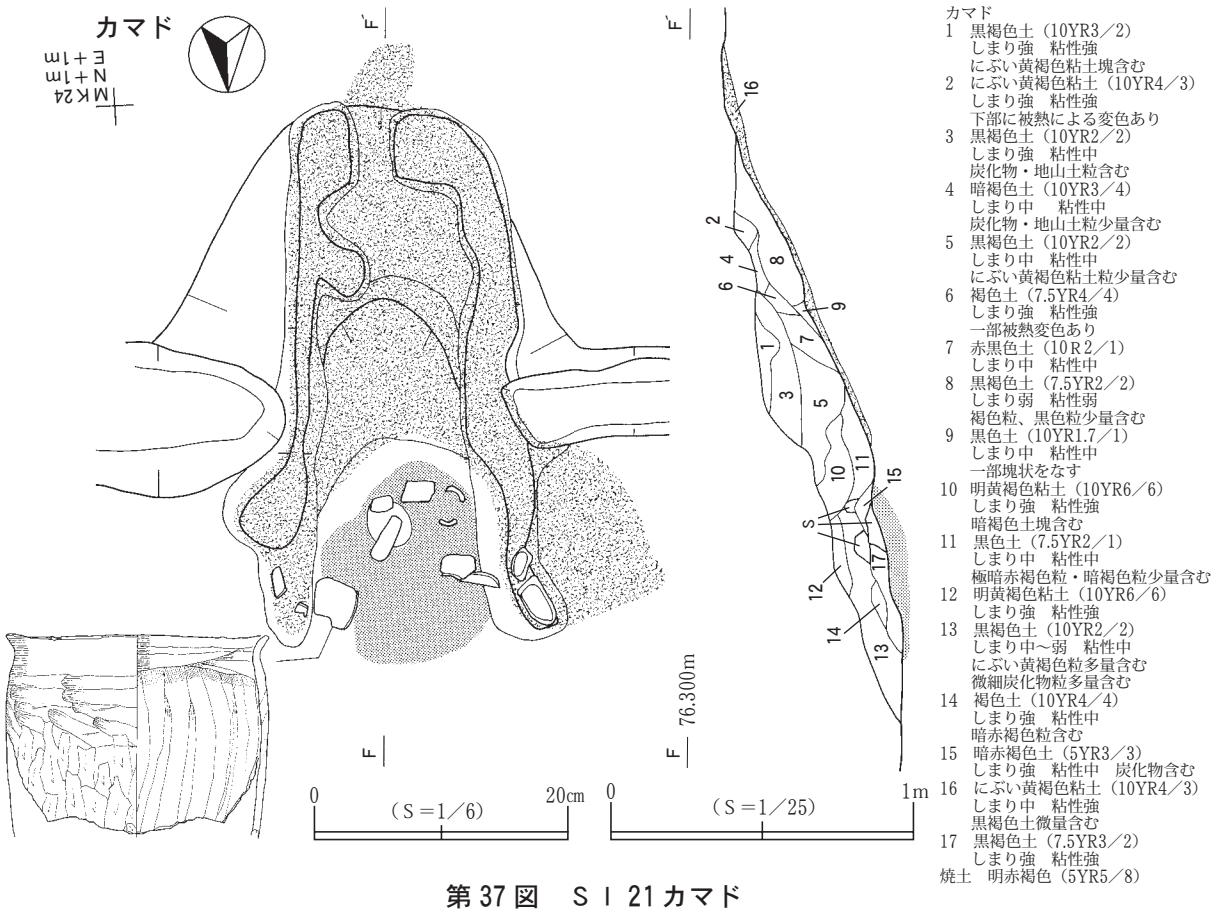
カマドは南壁の中央からやや西寄りの位置で、黒褐色土と明黄褐色粘土の広がりで確認した。堆積土は17層に分けた。4・6～15・17層は流入土もしくは崩落した構築土である。２層は煙道天井部構築土の倒壊土である。16層はカマド掘形底面に貼った粘土である。１・３・５層は住居の埋め立て整地に伴う人為堆積層と考えられる。煙道から火床面までの長さ約1.7m、袖の最大幅約1.2mで、主軸方位は住居主軸方位とほぼ同じである。残存していた施設は、煙道、袖、燃焼部、支脚である。煙道は地山をスロープ状に掘り込み、その上ににぶい黄褐色粘土を貼っている。住居壁の外側へ約1.0m延びる。袖はにぶい黄褐色粘土で造っており、芯材には礫を用いている。支脚は火床面中心からやや南西寄りの位置で確認した。器高約15㎝の小型土師器甕を逆位に設置していた。火床面は地山



第36図　ＳＩ21

面を利用している。被熱範囲は不規則な形状で、最大長約0.6mである。

本住居跡は焼失家屋である。床面上には、家屋の焼失に伴う炭化材と焼土が散在していた。炭化材は東壁と南壁沿いに集中しており、板状のものが多い。木目の方向で区別すると壁に直交するものと平行するものに分かれる。前者は南壁南東隅付近で、壁溝にささって直立する板材があることから、これらは壁材であり、短い板材を縦に並べたと推測される。後者は、床材もしくは壁板を押さえる横材となる可能性がある。これらの炭化材から幾つかのサンプルを分析したところ、壁材とみられる炭化物はスギやヒノキなどの針葉樹が多いことが分かった(第５章参照)。Ｐ１付近の炭化材ではクリが検出されており、柱材がクリであったことも想定されるが、柱痕が明確でないため断言は出来ない。



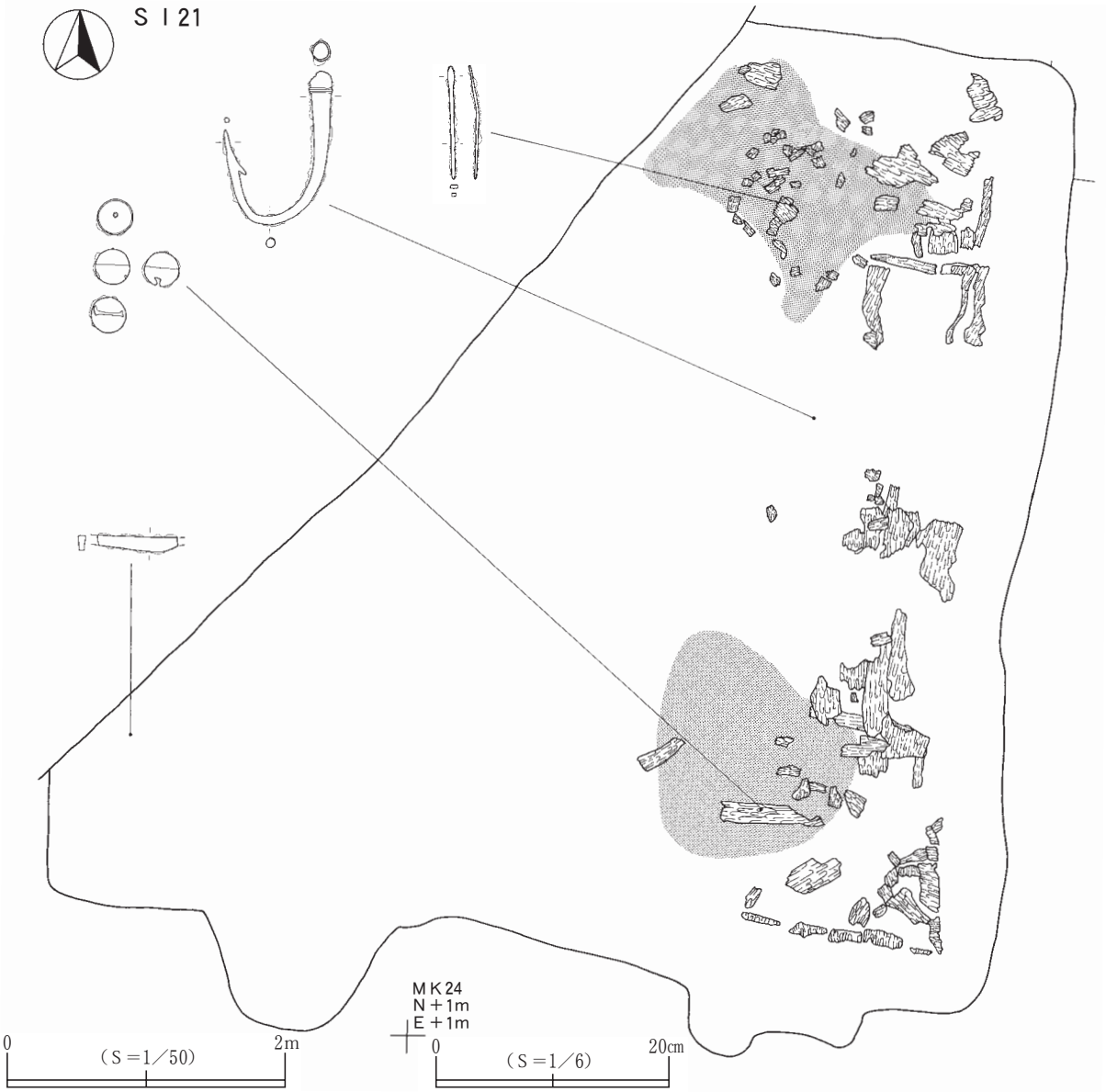
第37図　ＳＩ21カマド

また、焼土の上部からツバキ属の炭化材が出土している。ツバキ属には油分が多いことから燃料として用いた可能性がある。

本住居跡は南壁にカマドを設置する住居で、４本の主柱をもつと想定される。壁から離れた位置に主柱穴を配置する住居は、今回調査した中では本住居のみだが、これは本住居が比較的大型であるためと考えられる。廃絶後は人為的に埋め戻しており、ＳＤ32が住居内堆積土を切っていることからみて、集落内施設の配置換えに伴って廃絶したことが窺える。このことから、本集落跡の中でも比較的古段階の住居とみられる。

遺　物(第39～41図)　１・２層及び床面直上から土師器甕・坏・鍋、須恵器、鉄製品が出土した。土師器甕の口縁部分類ではＣ類が多いが、一部Ａ・Ｂ類も認められ、Ｃ類でも口縁部が長く外反するものが目立つ。遺物の出土位置は、土師器甕がカマド周辺に集中するのに対し、鉄製品は住居四隅に散在する傾向にある(第38図)。

39図１～７は比較的大型の土師器甕である。２はロクロ整形で、外面にはロクロ目をとどめ、内面は縦位ユビナデによる再調整を施す。頸部でくびれて口縁部が外反し、口縁部側面には垂直の面を形成する。口唇はつまみ出し状になる。１・３～５は頸部で強くくびれて口縁部が外反する器形である。１は口縁部と底部破片から復元実測したものだが、胴上部が張り出して底部にかけてすぼまる器形とみられる。外面は縦位ケズリ調整で、底部付近には複数回のケズリが認められる。内面はヘラナデ調整で、胴上半部は横位に胴下半部は斜位に施す。なお、内面はヘラナデが浅いため、輪積痕が明瞭に残る。４は器形や調整が１とほぼ同じである。３・５は胴部の湾曲が少なく、底部から直立気味に立ち上がる器形と考えられる。５は外面の胴下部に縦位ケズリを施すが、胴上部は縦・横位のユビナデを

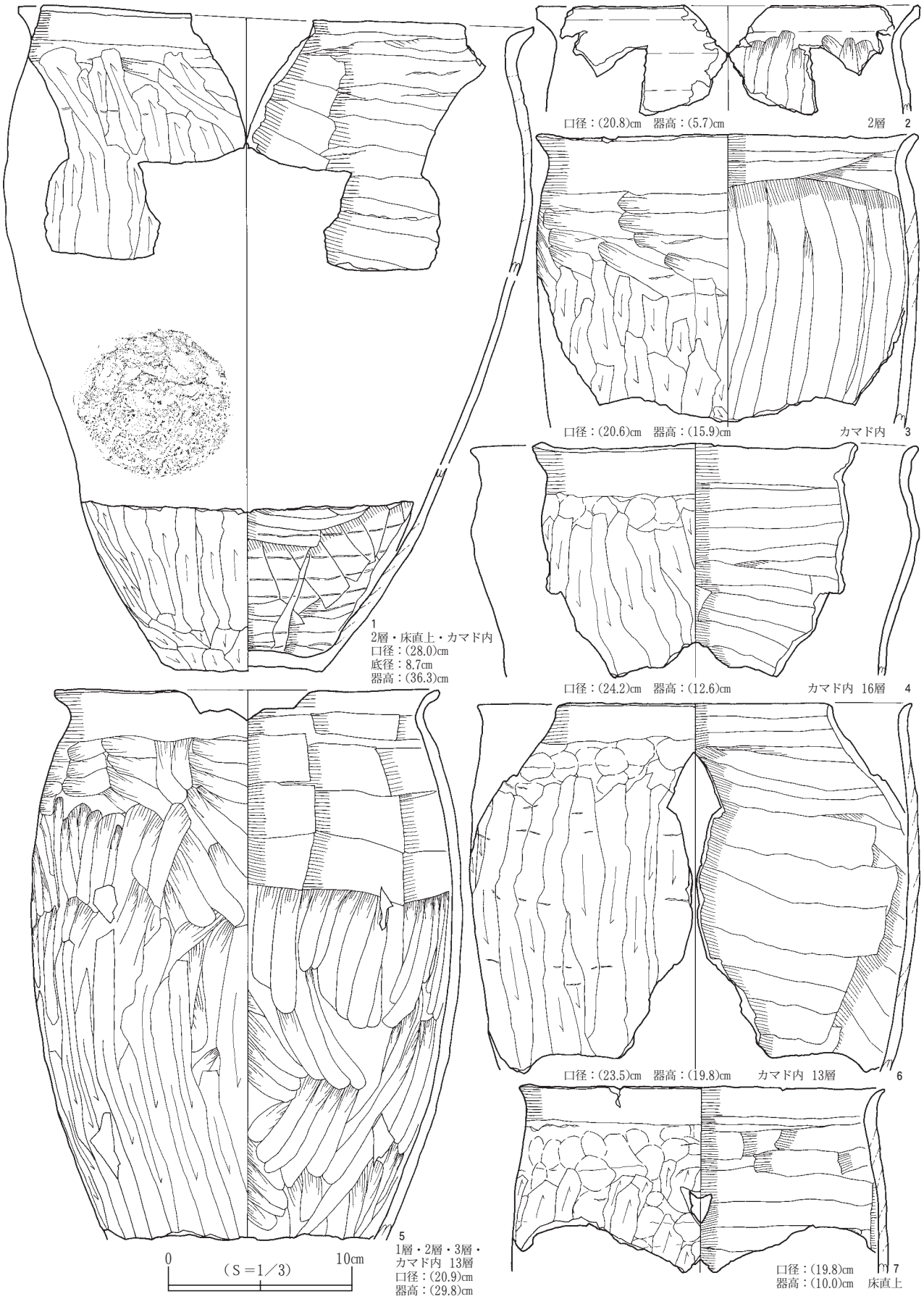


第 38 図　ＳＩ 21 炭化材・遺物出土状況

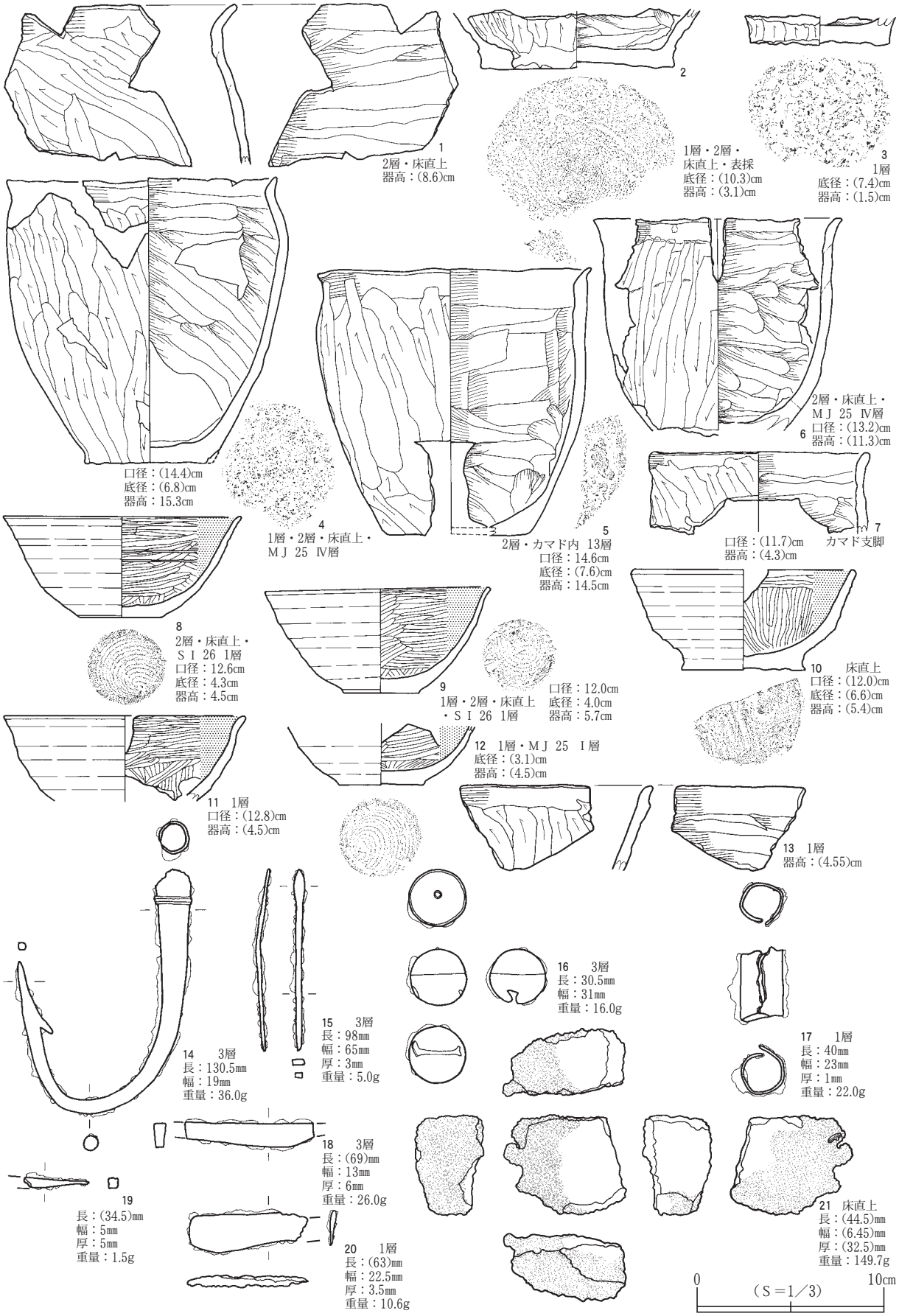
とどめる。内面は縦位ユビナデ後、胴上半部に幅の広い横位ヘラナデ再調整を施す。３も外面調整では５と同じだが、内面は縦位ヘラナデ調整で仕上げる。６・７は頸部から口縁部にかけてのくびれが弱く、口縁部がわずかに外反する器形である。６は外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。外面頸部付近には指の押さえを残しており、ケズリ後も輪積痕を所々にとどめている。７も６と同様な調整である。

40図１は、頸部でくびれて口縁部が外反する土師器甕の口縁部破片である。外面斜位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。40図２・３は土師器甕の底部破片で、いずれも砂底である。どちらも底部がやや突出する形状である。

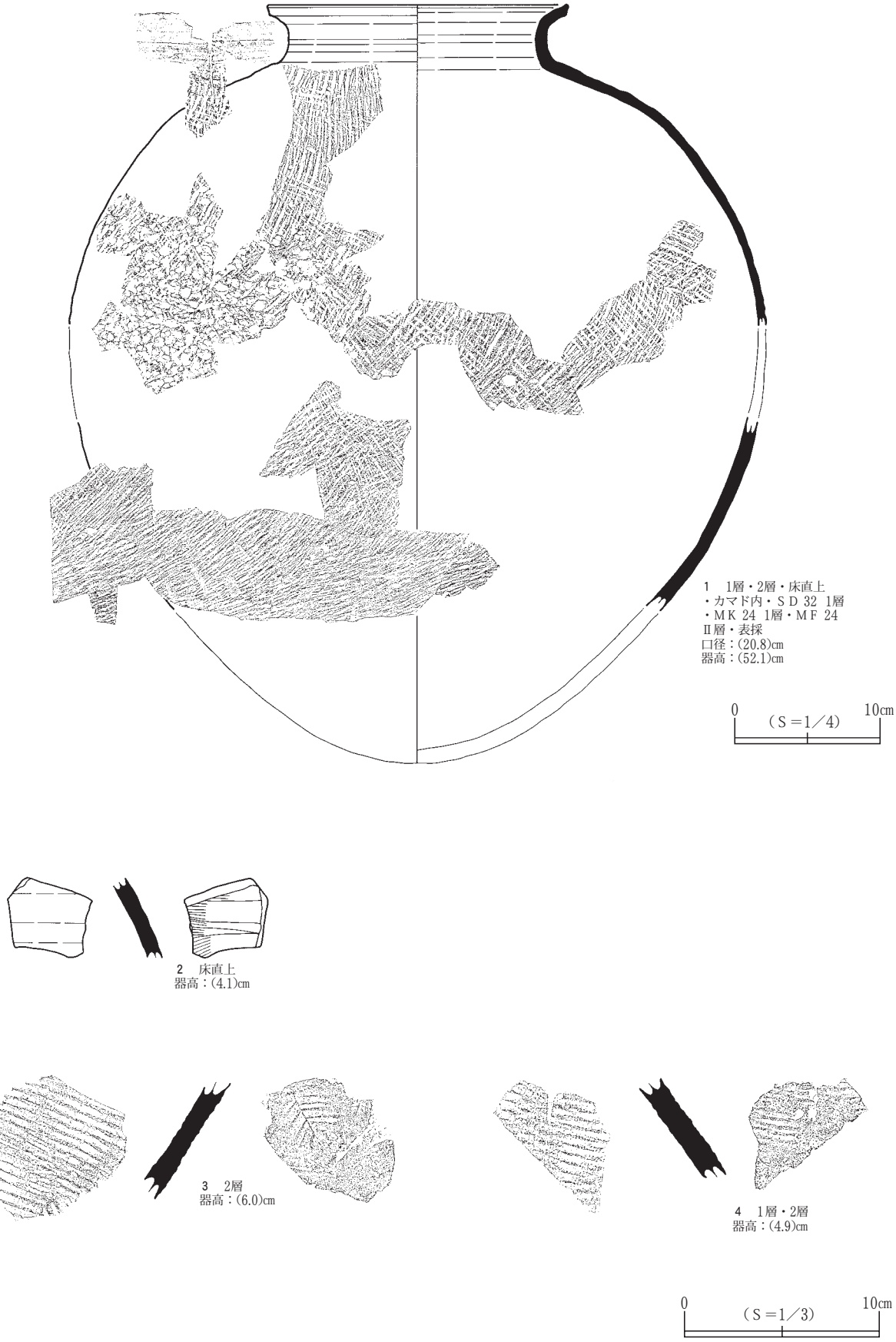
40図４～７は比較的小型の土師器甕である。４・５は口縁部から底部までが残存する資料である。４は底部から直線的に外傾して胴上部が張り出し、頸部でくびれて口縁部が短く外反する。外面縦位ケズリ、内面斜位ユビナデ調整である。５も底部から直線的に外傾して、胴上部がわずかに膨らみ、口縁部が直立気味に立ち上がる。胴上部の張り出しは４に比べて弱い。外面縦位ケズリ、内面横位へ



第 39 図 S Ⅰ 21 出土遺物 1



第 40 図　ＳＩ 21 出土遺物２



第41図　ＳＩ 21出土遺物３

ラナデ調整である。６は胴下部がやや張り出して頸部まで直線的に外傾し、口縁部が弱く外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。７は、口縁部が直立気味に立ち上がる。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。

40図８～12は土師器坏で、全てＢ類である。８～10は全体形が窺える資料で、８・９が回転糸切痕を、10が静止糸切痕をとどめる。８は胴下部がやや膨らんで胴上部にかけて外傾し、口縁部が弱く外反する。９はわずかに突出する底部から直線的に外傾して、口縁部で外反する。10は底部外縁が張り出して胴下部で屈曲し、口縁部に向けて直線的に外傾する。内面は、８・９が底面に放射状の、胴部以上は横位の、10は口縁部付近まで放射状の、口縁部のみ横位のミガキを施している。なお、８は内面口縁部下に２条の沈線様の凹みが巡る。11は口縁部破片である。胴部が曲線的に立ち上がり、口縁部で屈曲外反する。比較的厚みがあり、内面には底面に放射状の、胴部以上には横位のミガキを施す。12は回転糸切痕をとどめる底部資料である。40図13は土師器鍋の口縁部破片で、外面の縦位ケズリにより、口縁部が段状になる。内面は横位ヘラナデ調整である。

40図14～20は鉄製品である。14は鉤状の道具で、漁撈具とみられる。柄の装着部には二重の低い突帯が巡り、先端には返しがつく。15は鏃とみられる。茎は断面長方形で、先端部はやや幅が広がり薄くなる。16は鈴である。下部には「Ｉ」字状の切り込みがあり、上部には棒状のものが付着していた脱落痕が認められる。Ｘ線写真で確認したところ、内部には鳴り子が融着していることが分かった。17は管状のもので、長方形状の鉄板を湾曲させて断面円形状にしており、何らかの留め具と考えられる。内径からみて、14の鉤状の道具と柄を連結する部品の可能性がある。18・19は比較的厚みのある棒状のもので、18は刀子とも見てとれるが、詳細は不明である。20は下部が凹刃状になることから、穂摘具とみられる。40図21は炉底塊の小割滓である。底面と側面の一部に外皮を残す。

41図１～４は須恵器で、２は壺の肩部破片とみられる。１・３・４は甕で、１は推定復元した。尖底気味の底部から外傾し、胴上部から肩へ向けて内湾して頸部が直立し、口縁部が短く外反する。口縁部側面には面を形成する。口縁部から頸部にはロクロ目様の横位ナデが認められる。胴部はタタキ調整である。頸部割れ口は意図的に打ち欠いている。３・４は胴部破片で、タタキ目が認められる。

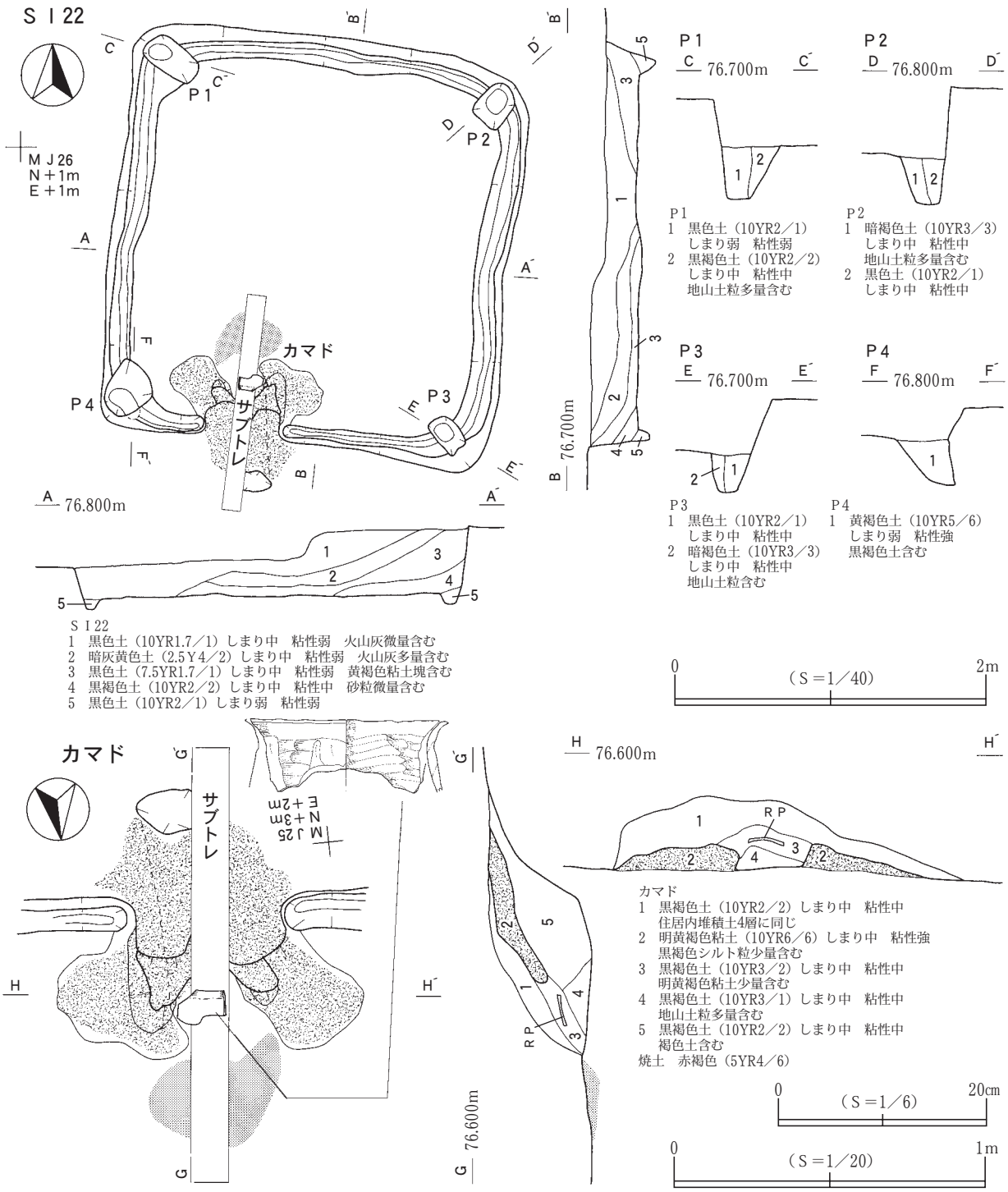
ＳＩ22（第42・43図、図版15）

遺　構　ＭＨ・ＭＩ25・26グリッドの第Ⅱ層下部～第Ⅳ層上面で、火山灰を微量に含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面中央部で、ほぼ平坦な地形である。ＳＩ21と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺にはＳＩ23、ＳＤ32・33がある。

堆積土は５層に分けた。１～４層は南東側から北西側に向かって緩やかに傾斜して堆積している。基本的にはレンズ状堆積であり、自然堆積と考えられる。２・３層は黄褐色粘土塊や火山灰を多量に混入することから、周堤に由来すると考えられる。５層は壁溝の裏込め土である。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－６°－Ｅで、主軸とこれに直交するラインで測る面積は、約７㎡である。各壁の長さは北壁約2.5m、西壁約2.6m、南壁約2.5m、東壁約2.5mである。各壁の検出面からの深さは南壁約0.3m、東壁約0.4m、北壁と西壁はトレンチで検出面が下がっているため北壁約0.2m、西壁約0.2mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

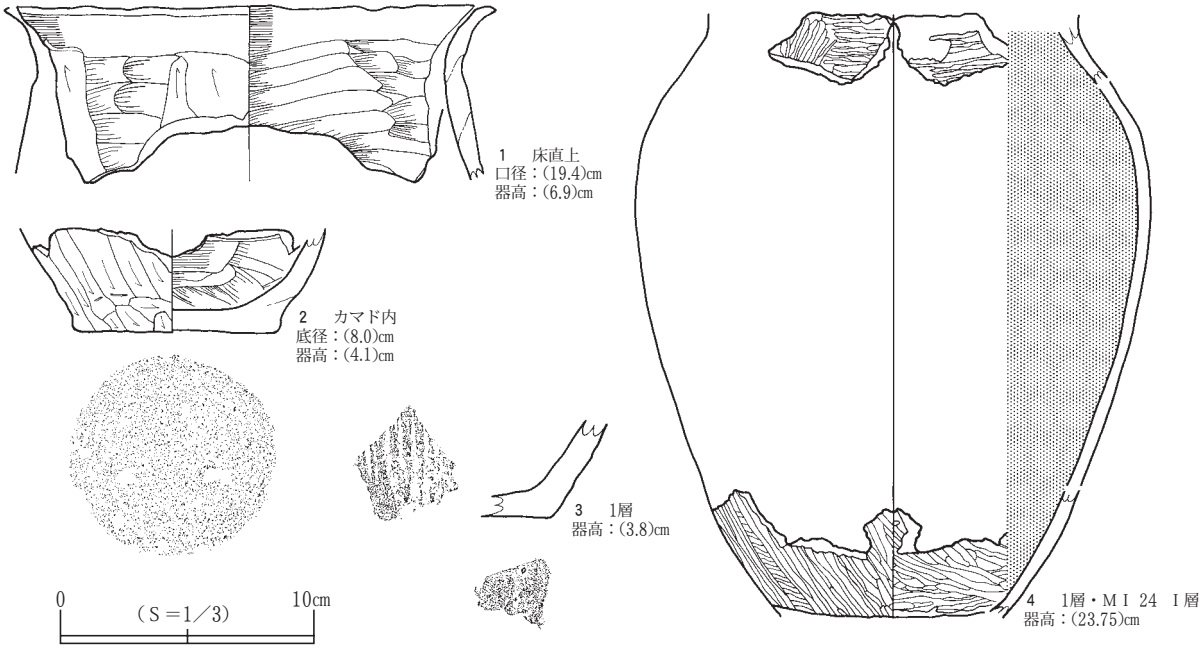
床面は、掘形底面の地山上面を平坦に整えて床面としている。壁溝はカマドの付く部分で途切れる



第42図　ＳＩ22・カマド

が、それ以外は全周で確認した。幅0.1 ～ 0.2m、床面からの深さは0.07 ～ 0.1mである。壁溝内部で４個のピットを確認した。いずれも住居跡四隅に位置する主柱穴である。平面形は方形で、床面からの深さは、Ｐ１が約0.4m、Ｐ２が約0.3m、Ｐ３が約0.3m、Ｐ４が約0.3mである。Ｐ４はＳＩ21と重複しており、本来の形状が部分的に失われている。Ｐ１・２では柱痕を確認できた。

カマドは南壁の中心からやや西寄りの位置で、明黄褐色粘土の広がりで確認した。堆積土は５層に分けた。１・３～５層は流入土で、１層は住居内堆積土４層に相当する。２層はカマド残存部の構築土である。煙道から火床面まで約1.2m、袖の最大幅で約1.0mで、主軸方位は住居主軸方位にほぼ



第 43 図　ＳＩ 22 出土遺物

一致する。残存していたのは煙道、袖、火床面である。煙道はスロープ状の掘り込みで、住居上場から外に約0.3m延びる。焚き口から70°前後の傾斜で立ち上がり、先端部には径約0.2mの煙出しの穴がある。袖は明黄褐色粘土を用いており、芯材は認められなかった。火床面は、地山面をそのまま利用している。不整な形状の被熱範囲で、最長約0.45mである。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は自然堆積で埋まっており、本住居跡廃絶後は土地利用が低調になったことが窺える。なお本住居跡の規模は、今回調査した中で一番小さい。

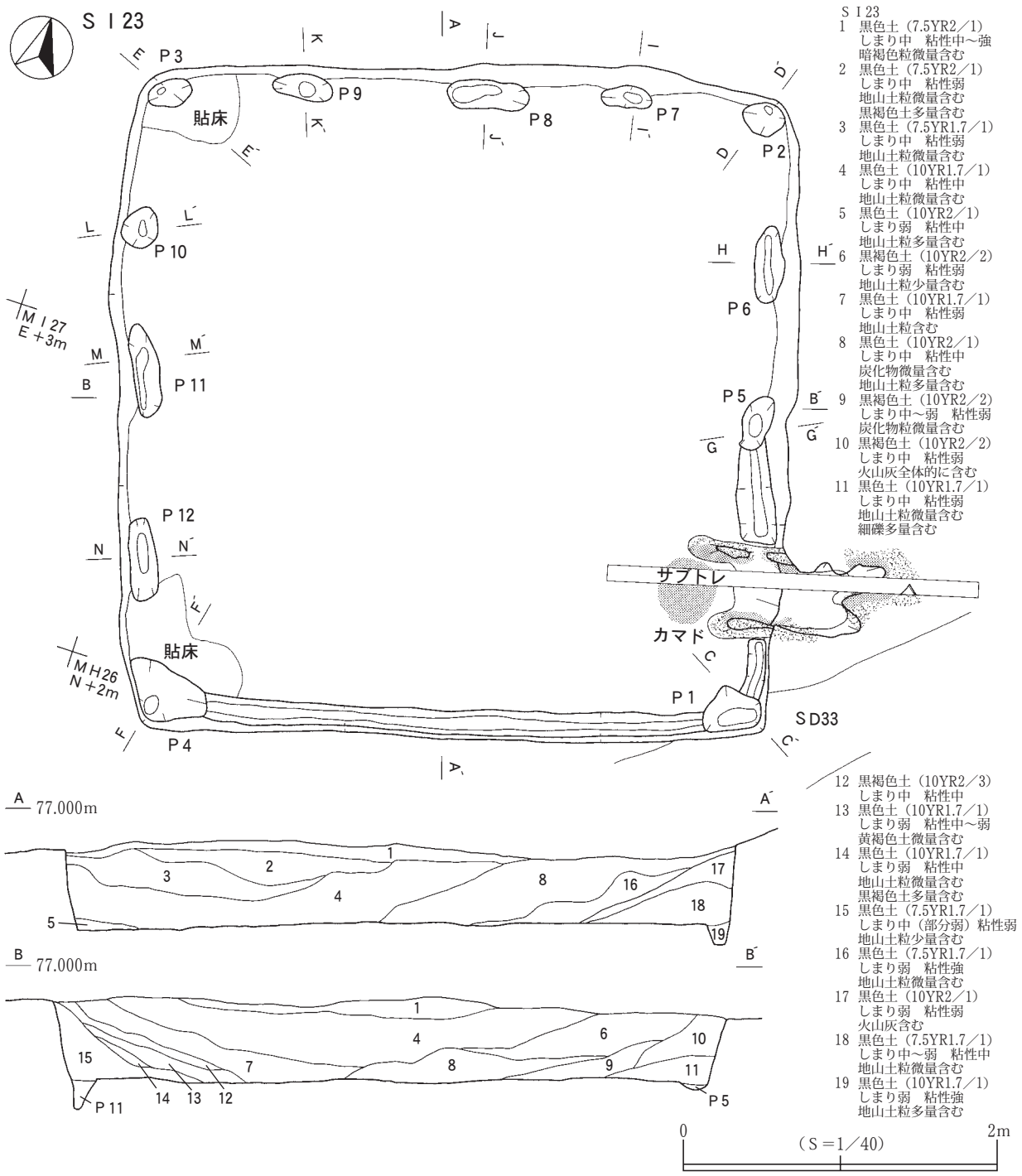
遺　物（第43図）　住居跡内から土師器甕や、広口壺が出土した。住居規模が小さく堆積土が少ないため、出土遺物も少ない。

43図１は比較的大型の土師器甕の口縁部資料である。胴上部が内傾して、口縁部が外反する器形で、外面には疎らに縦位ケズリが、内面には横位ユビナデによる調整が認められる。43図２・３は土師器甕の底部である。３はタタキ整形の痕跡が認められる。２の底面はケズリによる再調整を施している。43図４は頸部と底部付近の破片から復元実測したもので、広口壺になるとみられる。酸化焔焼成の土器で、内外面にミガキと黒色処理を施している。

ＳＩ23（第44～46図、図版16）

遺　構　ＭＦ～ＭＨ26・27グリッドの第Ⅱ層下位～第Ⅳ層上面で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほぼ平坦な地形である。ＳＤ33と重複し、本住居跡の方が古い。周辺にはＳＩ22・29、ＳＡ119がある。

堆積土は19層に分けた。１～18層は流入土で、19層は壁溝の裏込め土である。基本的にレンズ状堆積であることから、自然堆積により埋没したと考えられる。しかし、地山土粒や火山灰の含有量には微量な差異が認められ、周堤もしくは周堤下部の旧表土など、由来する土の違いを反映すると考えられる。

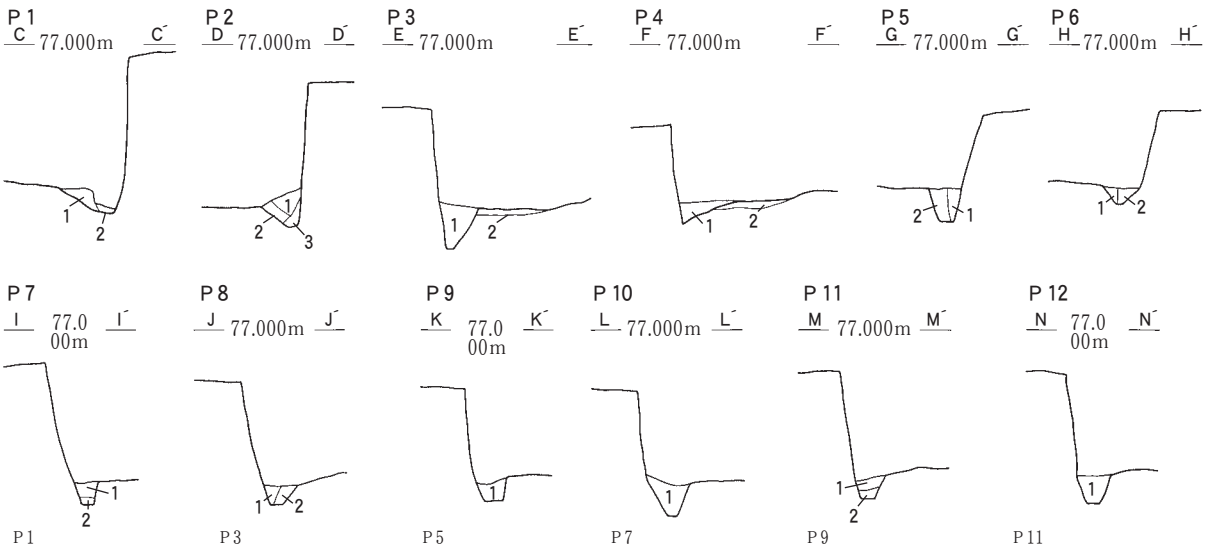


第44図　ＳＩ23

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－16°－Ｗである。主軸とこれに直交するラインで測る面積は、約19㎡である。各壁の長さは北東壁約4.0m、北西壁約4.1m、南東壁約4.2m、南西壁約4.3mである。各壁の検出面からの深さは、南東壁約0.5m、南西壁約0.5m、北東壁約0.4m、北西壁約0.5mで、立ち上がりはいずれの壁もほぼ垂直である。

床面は掘形底面の地山上面を平坦に整えているが、南西隅と北西隅は黒褐色土を用いた貼床を施す。壁溝は南東壁と北東壁の一部に巡る。幅0.1～0.2m、床面からの深さは0.15m前後である。

床面及び壁溝内部で12個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居の四隅に配置する主柱穴である。Ｐ



P1
1　黒色土（10YR2／1）
　しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
2　明黄褐色土（10YR6／8）
　しまり強　粘性中
　地山土粒多量含む

P2
1　黒色土（7.5YR2／1）
　しまり弱　粘性中
　地山土粒・塊微量含む
2　黒褐色土（7.5YR3／1）
　しまり中　粘性弱
　地山土粒少量含む
3　黄褐色砂（10YR5／6）
　しまり中　粘性弱
　黒褐色土少量含む

P3
1　黒色土（10YR1.7／1）
　しまり弱　粘性強
　地山土粒微量含む
2　黒褐色土（10YR2／2）
　しまり中　粘性中
　地山土粒多量含む

P4
1　黒色土（10YR2／1）
　しまり弱　粘性弱
　地山土粒微量含む
2　黒褐色土（10YR2／3）
　しまり強　粘性中
　地山土粒多量含む

P5
1　黒色土（10YR1.7／1）
　しまり弱　粘性中
　地山土粒微量含む
2　黒褐色土（10YR3／2）
　しまり強　粘性中
　地山土粒多量含む

P6
1　黒色土（10YR1.7／1）
　しまり弱　粘性中
　地山土粒少量含む
2　暗褐色土（10YR3／3）
　しまり強　粘性中

P7
1　黒褐色土（5YR2／1）
　しまり弱　粘性強
　地山土粒少量含む
2　黒色土（7.5YR2／1）
　しまり中　粘性弱
　地山土粒多量含む

P8
1　黒色土（7.5YR2／1）
　しまり弱　粘性弱
　地山土粒少量含む
2　黒褐色土（10YR2／2）
　しまり中～弱　粘性中
　地山土粒含む

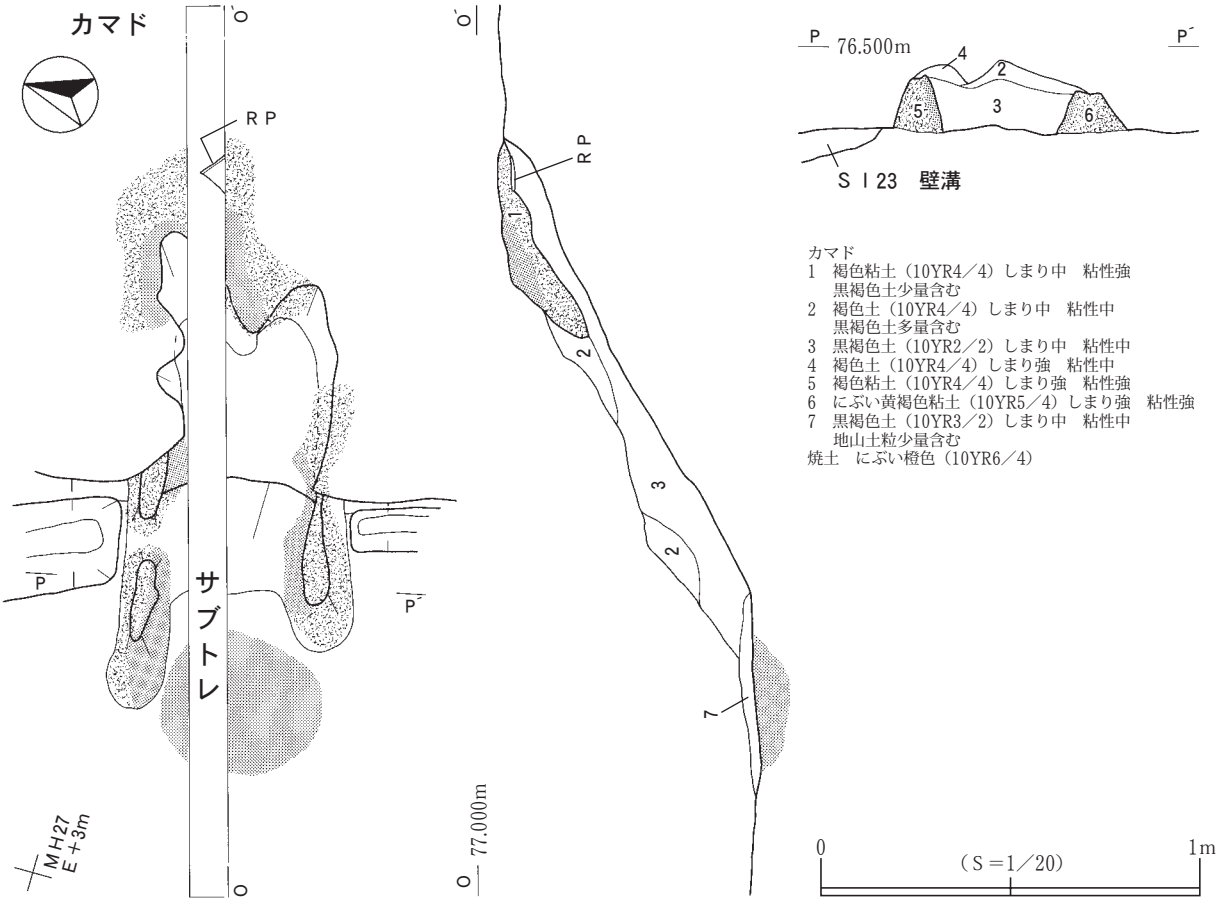
P9
1　黒褐色土（10YR3／2）
　しまり弱　粘性強
　地山土粒少量含む

P10
1　黒色土（7.5YR2／1）
　しまり弱　粘性中
　地山土粒多量、暗褐色土少量含む

P11
1　黒色土（10YR2／1）
　しまり中　粘性中
　地山土粒微量含む
2　黒褐色土（10YR2／2）
　しまり中　粘性中
　地山土粒多量含む

P12
1　黒褐色土（10YR2／2）
　しまり弱　粘性中
　地山土粒多量含む

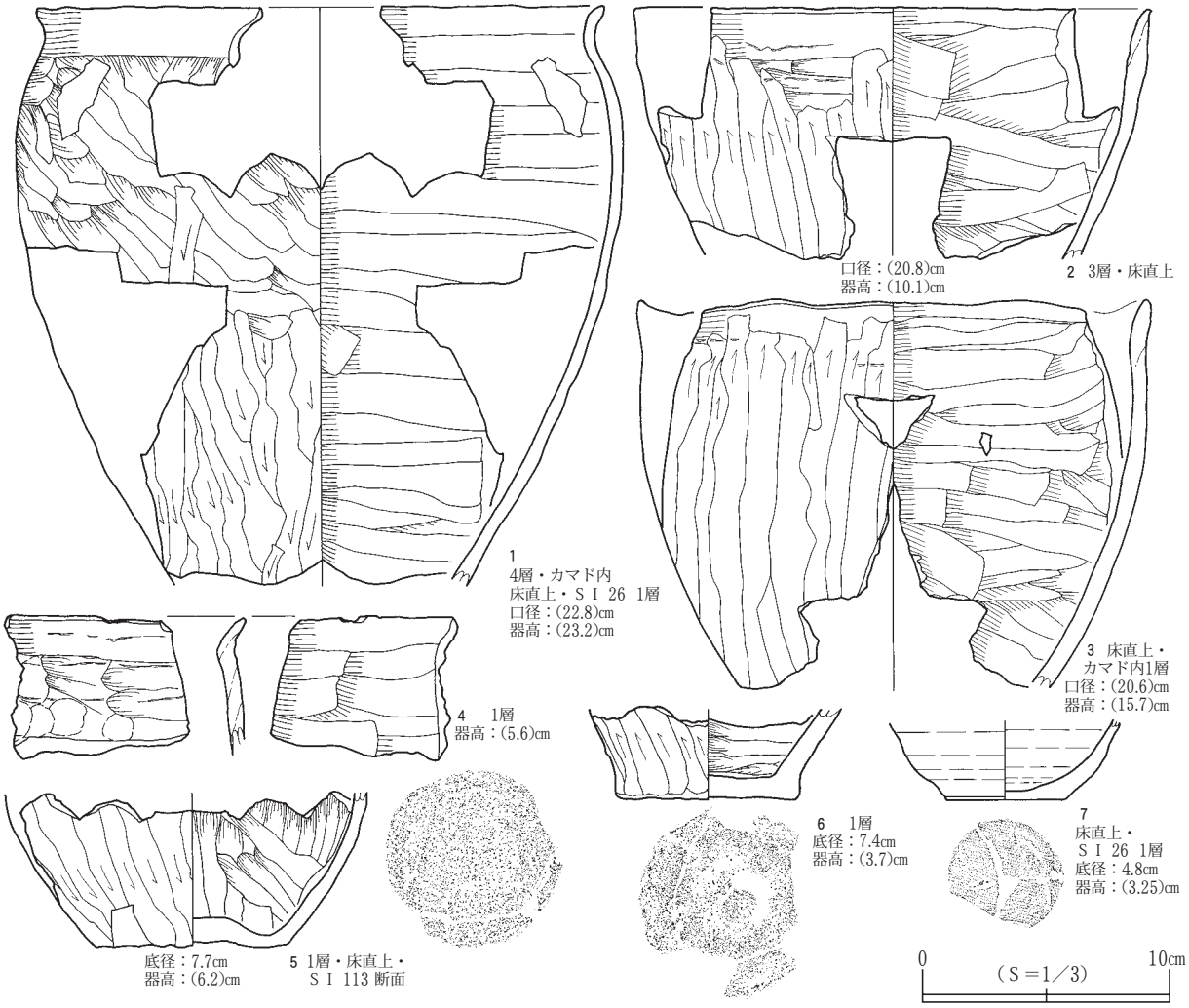
0　（S＝1／40）　2m



カマド
1　褐色粘土（10YR4／4）しまり中　粘性強
　黒褐色土少量含む
2　褐色土（10YR4／4）しまり中　粘性中
　黒褐色土多量含む
3　黒褐色土（10YR2／2）しまり中　粘性中
4　褐色土（10YR4／4）しまり強　粘性中
5　褐色粘土（10YR4／4）しまり強　粘性強
6　にぶい黄褐色粘土（10YR5／4）しまり強　粘性強
7　黒褐色土（10YR3／2）しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
焼土　にぶい橙色（10YR6／4）

0　（S＝1／20）　1m

第45図　ＳＩ23ピット・カマド



第 46 図　ＳＩ 23 出土遺物

３・４の周囲には貼床を施している。Ｐ５～12は北東壁、北西壁、南西壁の壁沿いに配置する柱穴で、壁板保持に関わる材を据えたとみられる。平面形は、Ｐ５～８・11が不整楕円形、Ｐ９・12が楕円形、Ｐ10が円形である。深さは0.1～0.2mである。柱穴は北東壁に２個、北西壁に３個、南西壁に３個あり、柱穴の中心間の距離は約1.0mを平均とする。

カマドは、北東壁の中央からやや南東寄りの位置で、褐色粘土を含む黒褐色土の広がりで確認した。堆積土は７層に分けた。２～４・7層は流入土、１層は煙道天井部構築土の倒壊土、５・６層はカマド残存部の構築土である。確認できたのは、煙道、袖、火床面で、煙道から火床面まで約1.7m、袖の最大幅約0.7mである。煙道は地山をスロープ状に掘り込んで、粘土により覆いをかけた半地下式と想定される。煙道は住居上場から外に約1.0m延びる。袖はにぶい黄褐色や褐色の粘土で造っており、煙道部まで同様な粘土を用いて構築していたとみられる。火床面は、長径約0.4m、短径約0.3mの楕円形の被熱範囲で、地山面をそのまま利用している。

本住居跡は四隅に主柱をもち、北東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は自然堆積により埋没している。

遺　物（第46図）住居跡内から土師器甕・坏が出土した。土師器甕は、Ｃ類でも頸部の屈曲が強いものとＤ類が主体で、大き目の破片はカマド付近から出土している。

46図１～３は復元実測した資料で、比較的大型の土師器甕である。１は胴上部が張り出し、頸部でくびれて口縁部が外反する器形で、口縁部がやや肥厚する。外面胴下部にはケズリを施すが、胴上部には斜位のユビナデをとどめる。内面は横位ヘラナデ調整である。２・３は胴下部から直線的に外傾して、口縁部に最大径を有する器形である。どちらも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。３は口縁部がやや直立気味になる。46図４は口縁部破片で、胴上部が内傾して口縁部が短く外反する。外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。46図５・６は土師器甕の底部で、どちらも砂底である。６は底部外縁がわずかに張り出す形状で、５は直線的に立ち上がる。５は底部中央部が山形に器壁が厚くなる。

46図７は土師器坏Ａ類の底部資料で、回転糸切痕をとどめる。

ＳＩ24

本住居跡は、ＭＥ28～30、ＭＦ28・29グリッドの第Ⅳ層上位で、地山土粒や炭化物を少量含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、調査区外南東部から続く丘陵部の山麓緩斜面に当たり、わずかに北西側へ傾斜する。ＳＩ25・115と重複し、本住居跡の方が古い。周辺にはＳＩ26・27、ＳＤ33・137、ＳＡ119がある。

床面精査の結果、１回の建て替え拡張を行ったことが判明している。新しい順にＡ・Ｂのアルファベットを付けて表記した。

ＳＩ24Ａ（第47～50図、図版17・28・29）

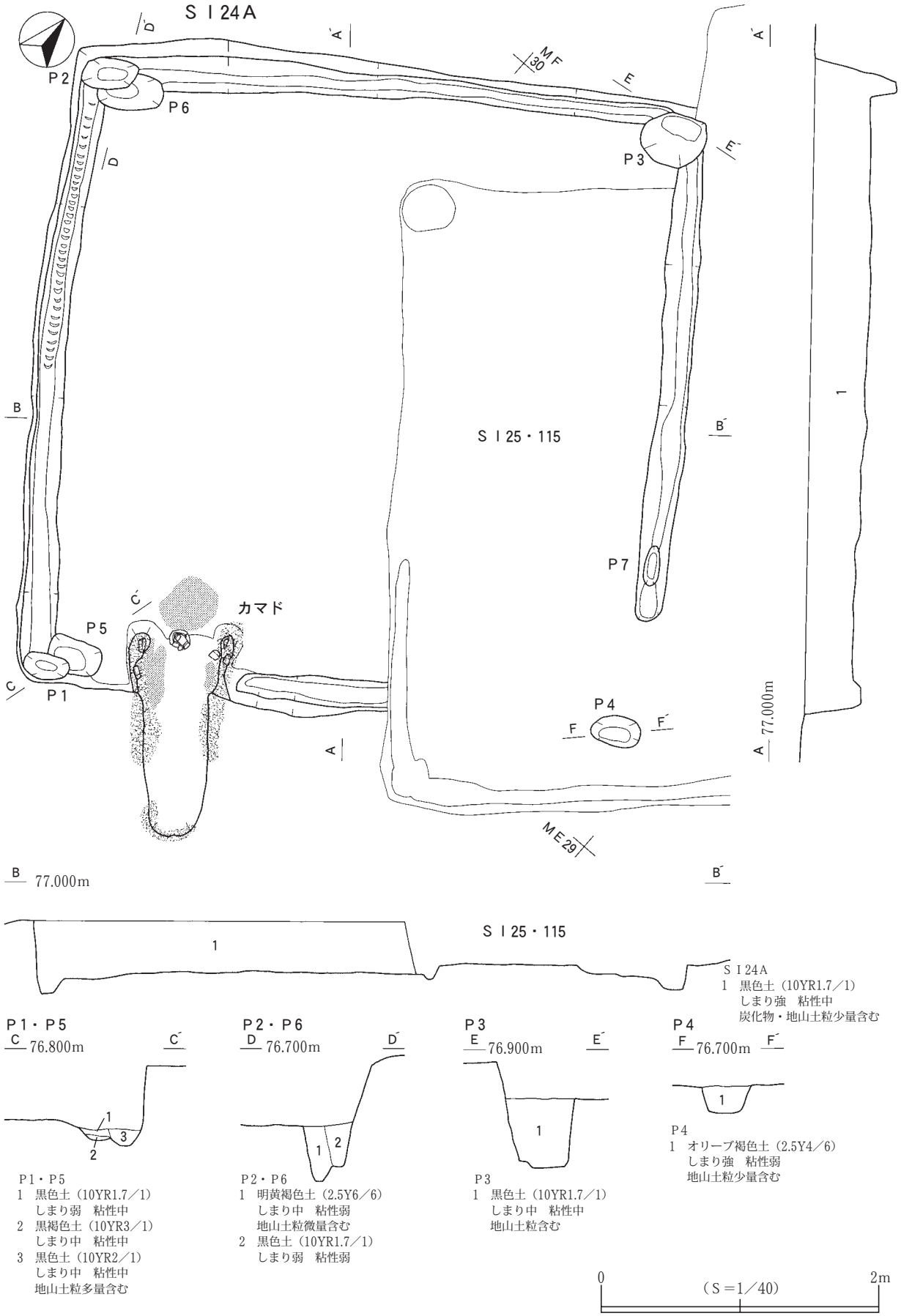
遺　構　ＳＩ24Ｂより一回り大きく拡張した、新段階の住居である。堆積土は１層のみで、地山土粒と炭化物を含むしまりの強い黒色土で、ＳＩ115構築時の埋め立て造成に伴う人為堆積土である。

ＳＩ25・115が本住居跡を切るため、正確な平面形は不明だが、南東壁と北東壁の延長線から、ほぼ正方形と想定される。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗで、主軸とこれに直交するラインで測る面積は約34㎡である。Ｐ４を東隅とみた場合の各壁の長さは、北西壁約4.6m、南西壁4.6m、南東壁約4.5m、北東壁約4.7mである。検出面からの深さは、北西壁約0.4m、南西壁約0.4m、南東壁約0.35mで、立ち上がりは、北西壁、南西壁、南東壁のいずれもほぼ垂直である。北東壁はＳＩ25・115と重複しているため、検出面からの深さ及び立ち上がりは不明である。

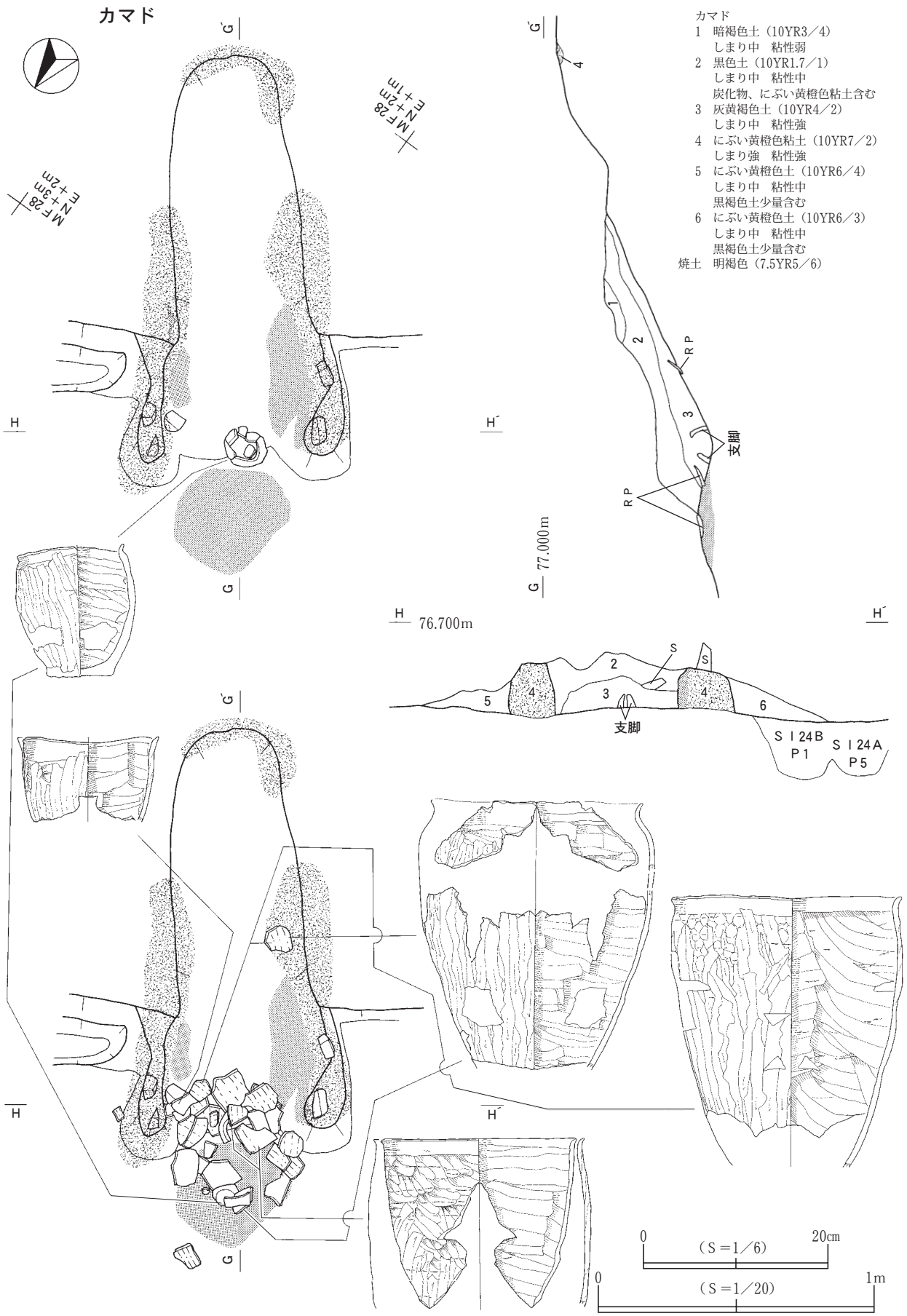
床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。壁溝は、ＳＩ25・115が切る南東壁の一部と北東壁の一部以外は全周で確認した。幅0.2～0.3m、床面からの深さは0.1～0.2mである。なお、南西壁中央付近から西隅の底面で工具痕を確認した。

床面及び壁溝内部で６個のピットを確認した。Ｐ１～４は四隅の主柱穴で、Ｐ１にはＰ５が、Ｐ２にはＰ６が連結している。Ｐ５は浅いが、Ｐ６は比較的深く、建て替えたことも想定される。

カマドは、南東壁の中央から南西寄りの位置で炭化物とにぶい黄橙色粘土を含む黒色土の広がりで確認した。堆積土は６層に分けた。１・２層は住居の埋め立て整地に伴う人為堆積土である。３層は煙道部天井構築土の倒壊土で、５・６層は崩れた構築土に整地に伴う黒色土が混入した土である。４層はカマド構築土の残存部である。煙道から火床面まで約1.9m、袖の最大幅約0.8mである。煙道、袖、火床面、支脚が残存していた。煙道は住居上場から約1.0m外に延びる。地山をスロープ状に掘り


S I 24A
P2
P6
P3
S I 25・115
P7
カマド
P5
P1
P4
77.000m
77.000m
S I 25・115
S I 24A
1　黒色土（10YR1.7／1）
しまり強　粘性中
炭化物・地山土粒少量含む
P1・P5
76.800m
P2・P6
76.700m
P3
76.900m
P4
76.700m
P1・P5
1　黒色土（10YR1.7／1）
しまり弱　粘性中
2　黒褐色土（10YR3／1）
しまり中　粘性中
3　黒色土（10YR2／1）
しまり中　粘性中
地山土粒多量含む
P2・P6
1　明黄褐色土（2.5Y6／6）
しまり中　粘性弱
地山土粒微量含む
2　黒色土（10YR1.7／1）
しまり弱　粘性弱
P3
1　黒色土（10YR1.7／1）
しまり中　粘性中
地山土粒含む
P4
1　オリーブ褐色土（2.5Y4／6）
しまり強　粘性弱
地山土粒少量含む
0
2m
（S＝1／40）

第47図　S I 24 A



第48図　ＳＩ24Ａカマド・遺物出土状況

込んでおり、その立ち上がりには部分的に粘土が認められることから、粘土で覆いをかけた半地下式と想定される。袖はにぶい黄橙色粘土で造っており、芯材に礫を用いている。火床面は、長径約0.4m、短径約0.3mの不整な楕円形の被熱範囲で、地山面をそのまま利用している。支脚は両袖の中間からやや南西寄りの位置に、小型の土師器甕を逆位に設置している。支脚上部には土器片が散在していた。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め戻しており、ＳＩ115の構築に合わせて廃絶し埋め立てたと考えられる。

遺　物（第49・50図）　住居跡内から土師器甕・坏、須恵器壺が出土した。土師器甕の分類ではＢ・Ｃ類が出土している。比較的大型のものはカマド周辺からまとまって出土しており、カマド構築材として転用した可能性がある。

49図１～３は、比較的大型の土師器甕である。３は胴上部が張り出して頸部で強くくびれ、口縁部が外反する器形である。これに対して１・２は頸部のくびれが無く、口縁部の外反はわずかで、直立気味に立ち上がる。２は胴上部に最大径を有するが、１は胴部中位が張り出す器形である。１～３はいずれも外面縦位ケズリ、内面横・斜位ヘラナデ調整であるが、１は外面のケズリが胴上半部には及ばず、ユビナデをとどめる。

49図４・６は比較的小型の土師器甕である。４は支脚に用いていた土器で、底面はケズリによる再調整を施す。底部から内湾気味に立ち上がって胴上部が張り出し、頸部で段状にくびれて口縁部が短く外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。６は胴下部から直線的に外傾して、口縁部がわずかに外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。49図５は土師器甕の口縁部破片で、口縁部が外反し、口唇が先細りになる。

49図７～10は土師器甕の底部である。７は薦編圧痕をとどめ、８・９は砂底である。10はケズリによる再調整を施す。７～９は底部から直線的に外傾して立ち上がるが、10は底部外縁がわずかに張り出す。

50図１は土師器坏Ｂ類で、全体形が窺える資料である。底面に回転糸切痕をとどめ、やや突出する底部から胴下部にかけて張り出し、胴部がやや屈曲して口縁部が外反する。内面には底面に放射状の、胴部以上には横位のミガキを施す。50図２は須恵器壺の破片である。

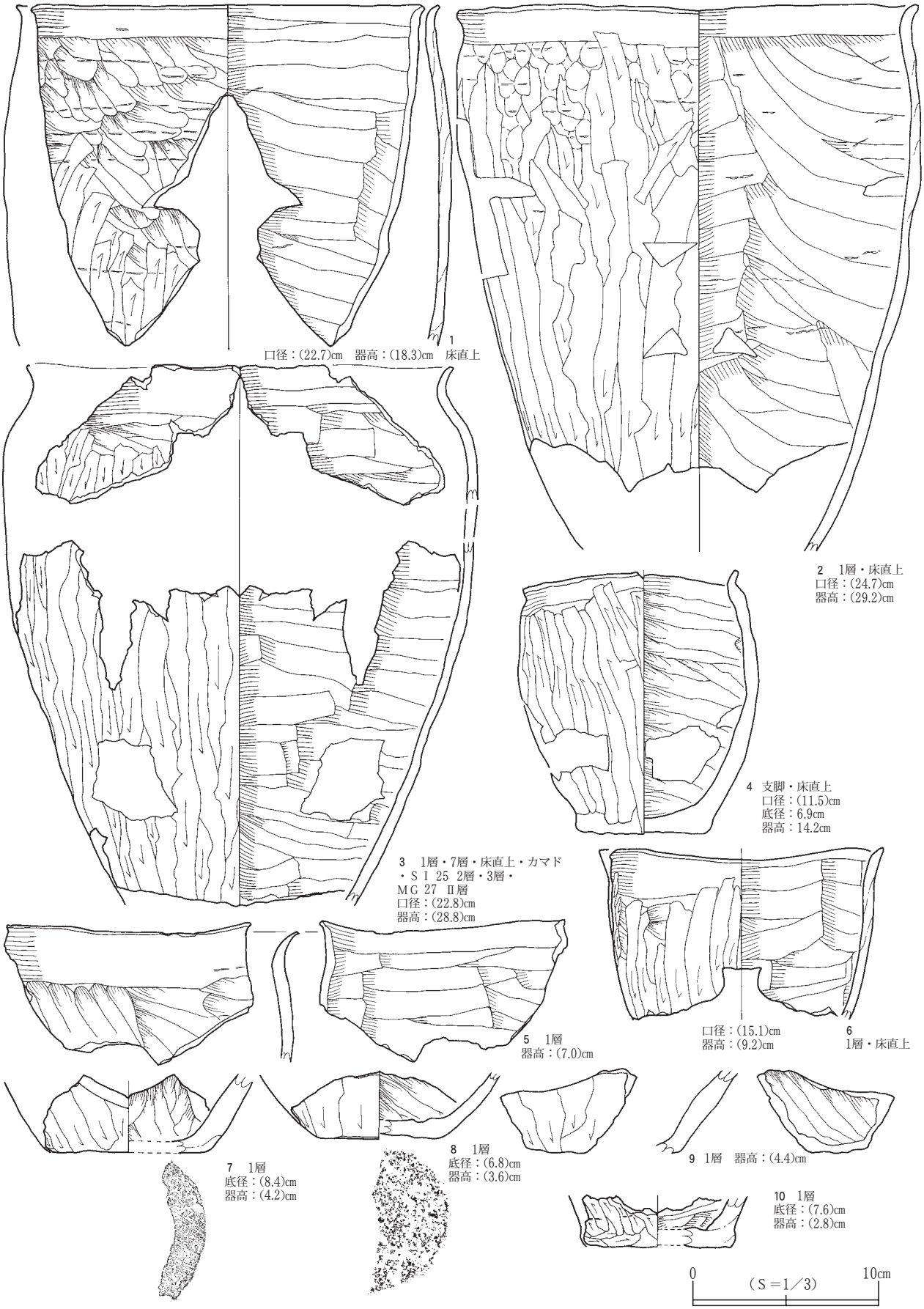
ＳＩ24Ｂ（第51図、図版17）

遺　構　ＳＩ24Ａへ拡張する前段階の、一回り小さい住居である。ＳＩ24Ａのプラン内に収まるため、本住居跡の壁及び堆積土は残っていない。また、床面施設も部分的に残存する程度で、確認できたのは壁溝、柱穴、焼土である。

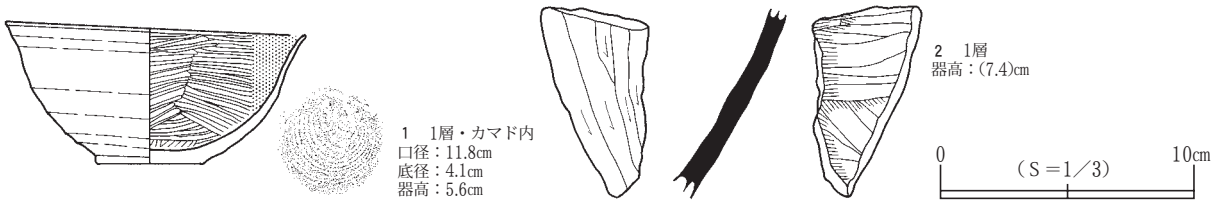
平面形は基本的に不明だが、Ｐ２・３を結ぶ対角線から想定されるプランは、ほぼ正方形である。南東壁に直交する主軸方位はＮ－36°－Ｗで、主軸とこれに直交するラインで測る面積は約16㎡である。壁溝とピット配置で想定される壁の長さは、南東壁約4.1m、南西壁約4.0mである。

床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。壁溝は南西壁と南東壁に巡るが、いずれも途中で途切れる。幅0.2～0.3m、床面からの深さは約0.1mである。壁溝の残存状態からみて、ＳＩ24Ａ構築時に、本住居跡の床面を掘り下げている可能性もある。

床面及び壁溝内部で５個のピットを確認した。Ｐ１～３は、住居隅に配置する主柱穴である。柱穴



第 49 図　ＳＩ 24 Ａ出土遺物１



第50図ＳＩ24Ａ出土遺物２

中心間の距離は、Ｐ１－２間約3.7m、Ｐ２－３間約3.8mでほぼ等しい。Ｐ４・５は、住居跡の中央部からやや南西寄りに２個並んで位置する。この用途は不明だが、近接する位置には焼土があり、関連するものとみられる。

カマドは明確には確認できなかったが、ＳＩ115南東壁外部にわずかに残る粘土範囲があり、本住居跡に伴うカマド煙道の先端部になる可能性がある。カマド以外に、床面中央部西寄りの位置で、焼土を１か所確認した。長径約0.6m、短径約0.2mの不整な楕円形の被熱範囲で、残存範囲が不規則であることから、ＳＩ24Ａ構築時に一部削平したとみられる。

本住居跡は隅に主柱を配置し、南東壁にカマドを設置する住居と考えられる。建て替えによって住居を構成する施設は多くが失われており、本来の構造には不明な部分も多いが、床面中央部西寄りに位置する焼土と、Ｐ４・５は鍛冶炉に関連する施設となることも想定される。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

ＳＩ25・115

本住居跡は、ＭＤ29、ＭＥ28～30グリッドの第Ⅳ層上面及びＳＩ24上面で、地山土粒を含む黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側に緩やかに傾斜する。ＳＩ24と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺にはＳＩ26・27・28、ＳＤ33・137、ＳＡ119がある。

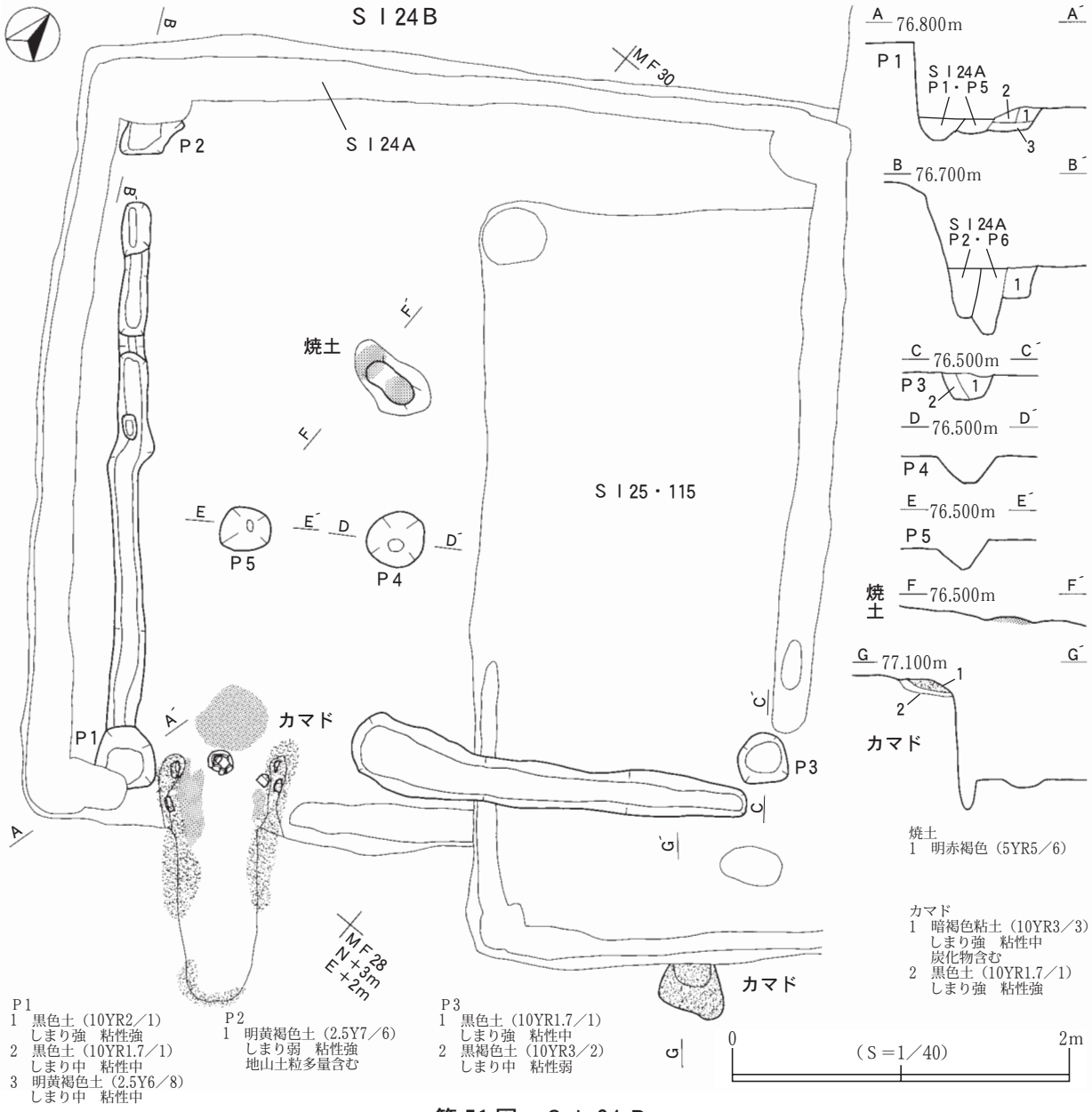
確認面での堆積土分布や、部分的な断面確認などから２軒の住居跡が重複することが判明した。建て替えて規模を縮小しており、ＳＩ25が新しく、ＳＩ115が古い。

ＳＩ25（第52・53図、図版18・19）

遺　構　建て替えてＳＩ115より規模を縮小した、新段階の住居である。堆積土は６層に分けた。１～４層はいずれも黒色基調の土で、色調の違いはわずかである。１・２層が地山土塊を少量含み、１層は炭化物も含んでいる。５層はオリーブ褐色土で、地山土粒・塊や黒褐色土を含んでいる。１～５層は流入土であり、概ねレンズ状堆積を示すことから、本住居跡は自然堆積で埋没したと考えられる。６層は壁溝内堆積土で、裏込め土の残存とみられる。

Ｐ１～４を四隅とみた場合、平面形は北西－南東方向にわずかに長い長方形である。南東壁に直交する主軸方位はＮ－50°－Ｅで、主軸とこれに直交するラインで測る面積は約14㎡である。各壁の長さは、北東壁約3.8m、南東壁約3.7m、南西壁約4.1m、北西壁約3.7mである。各壁の検出面からの深さは北東壁約0.4m、南西壁約0.3m、北西壁約0.4mで、斜面上位の南東壁は約0.4mである。壁の立ち上がりはいずれもほぼ垂直である。

床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。住居北隅では、ＳＩ115カマド上部に貼床を施している。壁溝は北東壁の一部と北西壁の一部を除いた全周で確認した。幅0.1～0.3m、床面



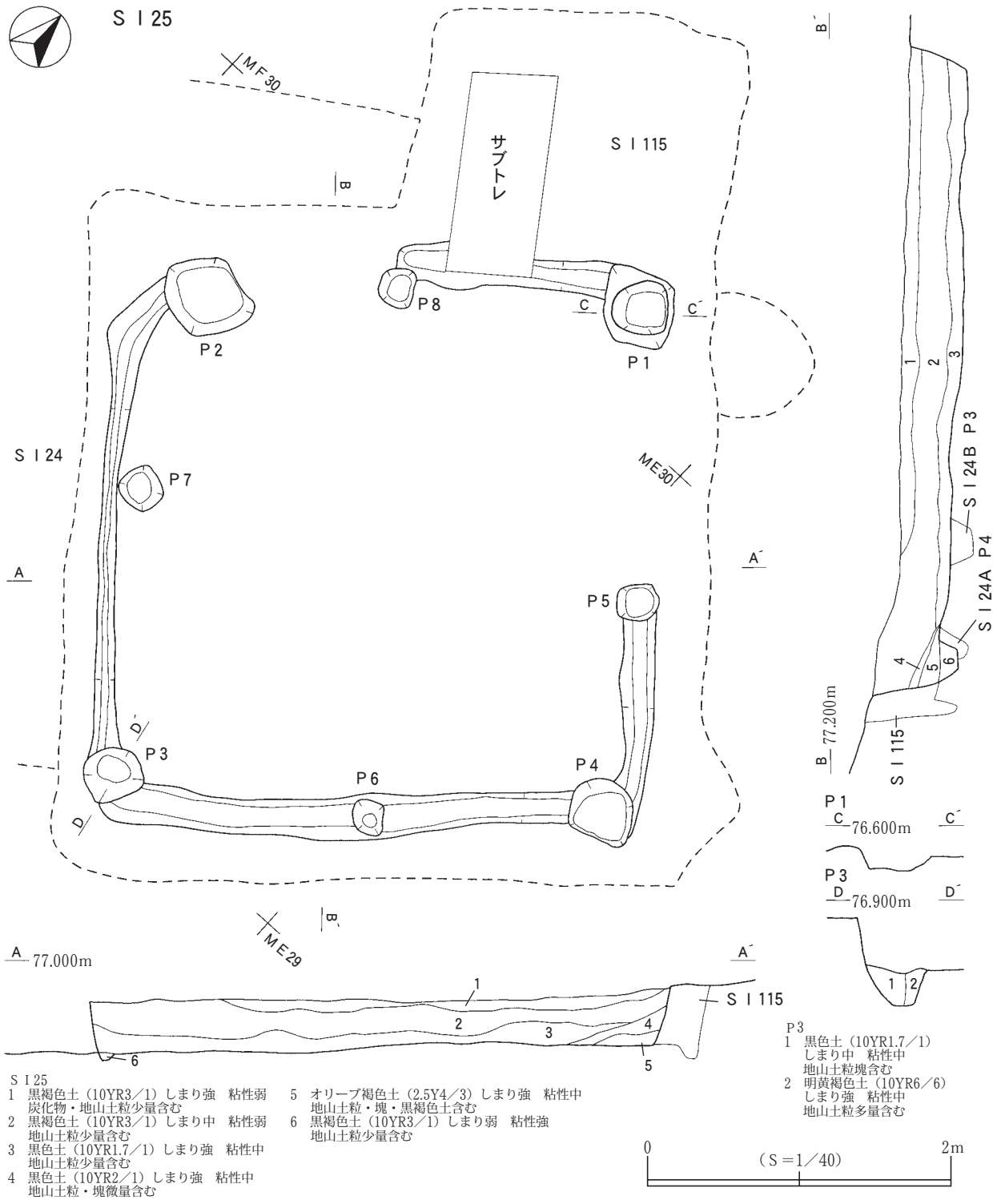
第51図　ＳＩ24Ｂ

からの深さは約0.1mである。床面及び壁溝内部で８個のピットを確認した。Ｐ１～４は四隅の主柱穴で、比較的開口部径が広い。Ｐ５～８は各壁の中央付近に位置しており、壁板保持に関わる柱を据えたと考えられる。

本住居跡に伴うカマドは確認できなかった。

本住居跡は四隅に主柱をもつ住居で、カマドの痕跡が明確でないことから、住居であるか疑わしい部分もある。合計４軒重なる中では最新段階で、自然堆積により埋没していることから、集落内でも最新段階の住居と考えられる。

遺　物（第53図）　住居跡内から土師器甕が出土した。遺物の出土量は少なく、図示したものでほとんどである。53図１は比較的小型の土師器甕で、底面は砂底である。全体に傾いており、底部から直立気味に外傾して立ち上がり、胴上部が張り出して頸部がくびれ、口縁部が短く外反する器形で、頸部には段差がある。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。53図２は土師器甕の口縁部破片で、

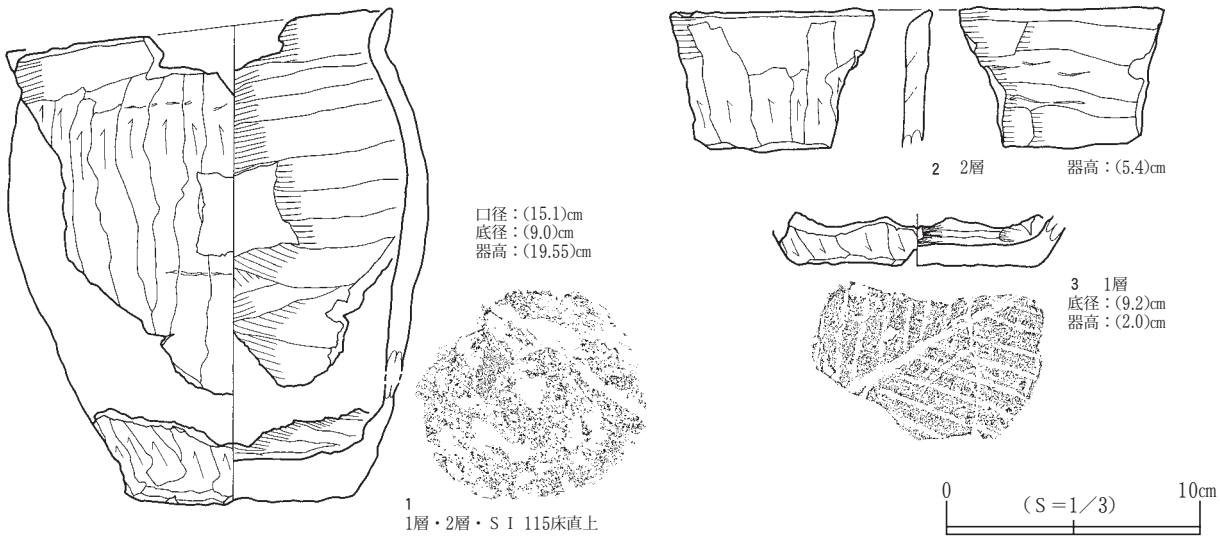


第52図　ＳＩ25

口縁部が直線的に外傾する器形である。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。53図３は土師器甕の底部破片で、木葉痕をとどめる。

ＳＩ115（第54・55図、図版18・19）

遺　構　ＳＩ25より一回り大きい古段階の住居である。ＳＩ25外部に残る堆積土を７層に分けた。１～４・６層は、いずれも黒色・黒褐色土で、色調の違いはわずかである。１層は地山土粒・塊を、２



第53図　ＳＩ25出土遺物

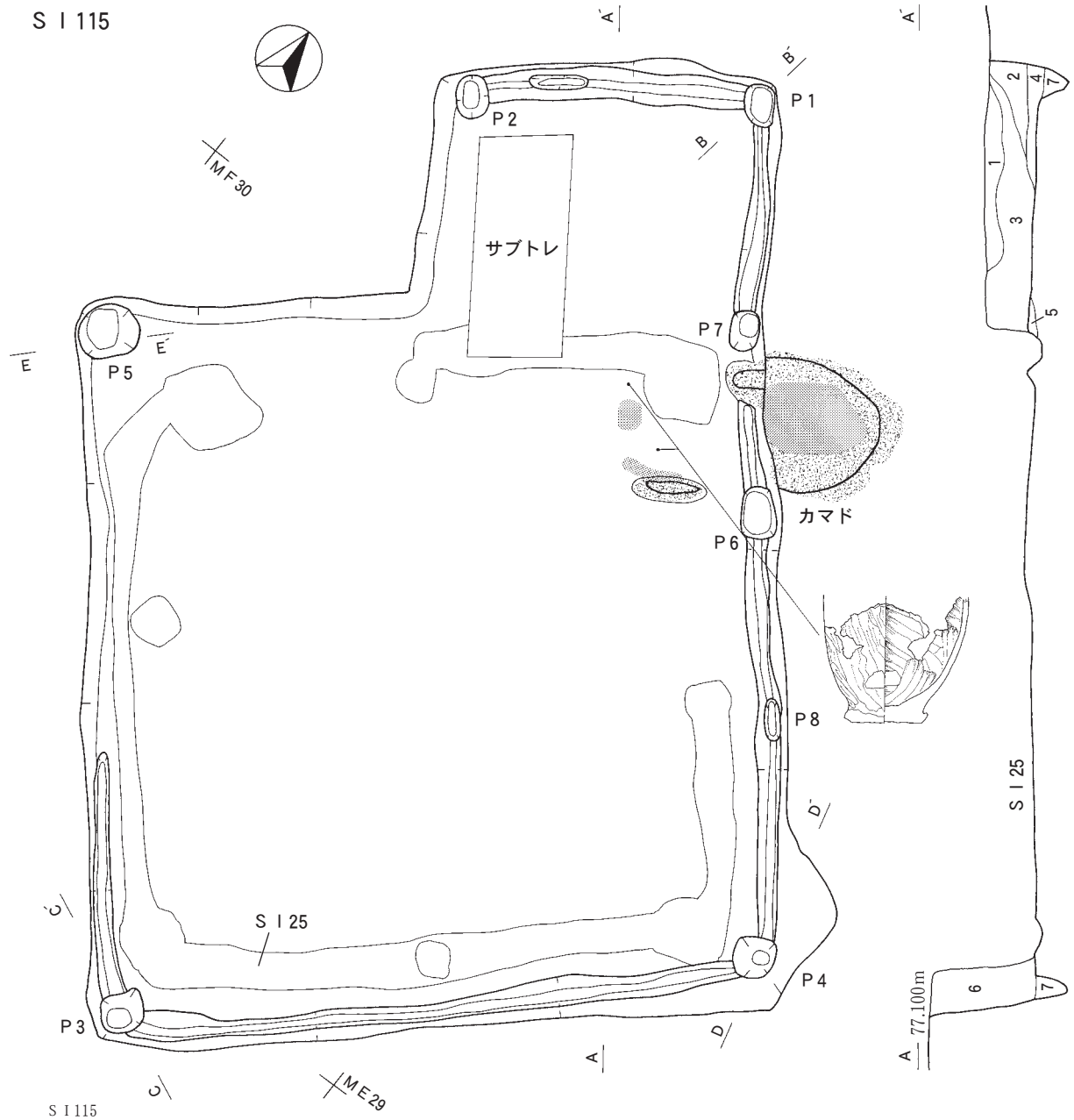
層は火山灰を、３層は炭化物を、４層は地山土粒を少量含む。全体的に混入物は少ないが、連続してＳＩ25を構築することからみて、これらは埋め立て造成に伴う人為堆積土と考えられる。５層はカマド前庭部の貼土で、７層は壁溝の裏込め土である。

本住居跡は北西壁に張り出しを伴うが、母屋部分の平面形はほぼ正方形である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－50°－Ｅで、主軸とこれに直交するラインで測る面積は約18㎡である。各壁の長さは北東壁約4.2m、南東壁約4.2m、南西壁約4.5m、北西壁約4.1mである。壁の検出面からの深さは北東壁約0.4m、南東壁約0.6mで、いずれの壁もほぼ垂直に立ち上がる。北西壁の中央より北側に張り出しが付く。規模は住居壁平行方向で約2.0m、住居壁直交方向で約1.4mで、北西壁では検出面からの深さが約0.3mである。おそらく出入り口に関わる施設とみられる。

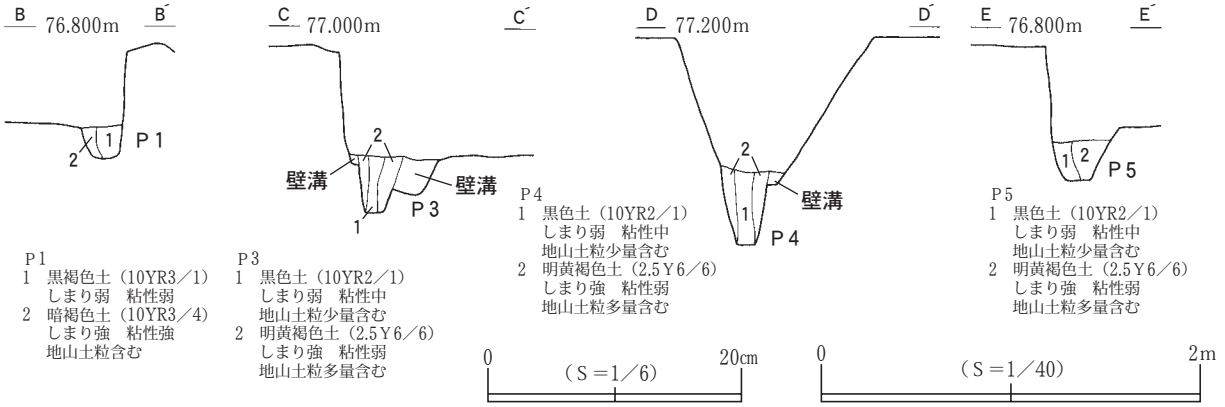
床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。壁溝は南西壁と北西壁の一部を除いて、ほぼ全周で確認した。張り出し内部まで連続した造りであり、幅0.1 ～ 0.2m、床面からの深さは0.15 ～ 0.2mである。

床面や壁溝内及び張り出しで、８個のピットを確認した。Ｐ３・４・５・７は四隅に配置する主柱穴である。Ｐ７は比較的規模が小さいが、カマド脇に位置し、カマドを挟んでＰ６と相対することが関係する可能性がある。Ｐ１・２は張り出し北隅と西隅に位置しており、張り出し北西壁の壁板保持に関わる柱穴とみられる。

カマドは、北東壁の中央から北寄りの位置で粘土や焼土の分布で確認した。上部構造に関わる構築土はＳＩ25構築段階にほとんど撤去しており、確認できたのはＳＩ25貼床下部にかろうじて残存していた、袖の基底部や火床面の一部と、ＳＩ25プラン外部に位置する煙道のみである。堆積土は５層に分けた。１・２層は粘土内部に溜まった流入土である。３層は煙道部天井構築土の倒壊土で、４・５層は煙道の掘形底面に貼った粘土である。２層上面で長さ22㎝、幅25㎝の礫を確認したが、構築材であるかは不明である。煙道から火床面の残存範囲までは約1.7m、袖の残存範囲での最大幅約0.9mである。煙道は、比較的幅の広いスロープ状掘り込みの底面に粘土を貼っており、この粘土上面は被熱により赤変している。住居上場から外へ約0.85m延びる。堆積土の状態からみて、粘土により覆いをかけた半地下式の構造と想定される。袖はにぶい黄褐色粘土で造っていたとみられるが、残存部が少なく詳細は不明



ＳＩ115
1　黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性中　地山土粒・塊含む
2　黒褐色土（10YR2／3）しまり中　粘性弱　火山灰含む
3　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中　炭化物微量含む
4　黒褐色土（10YR3／1）しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
5　明黄褐色土（10YR6／6）しまり強　粘性強
6　黒色土（10YR1.7／1）しまり弱　粘性中
7　黒色土（10YR1.7／1）しまり中　粘性中　地山土粒含む



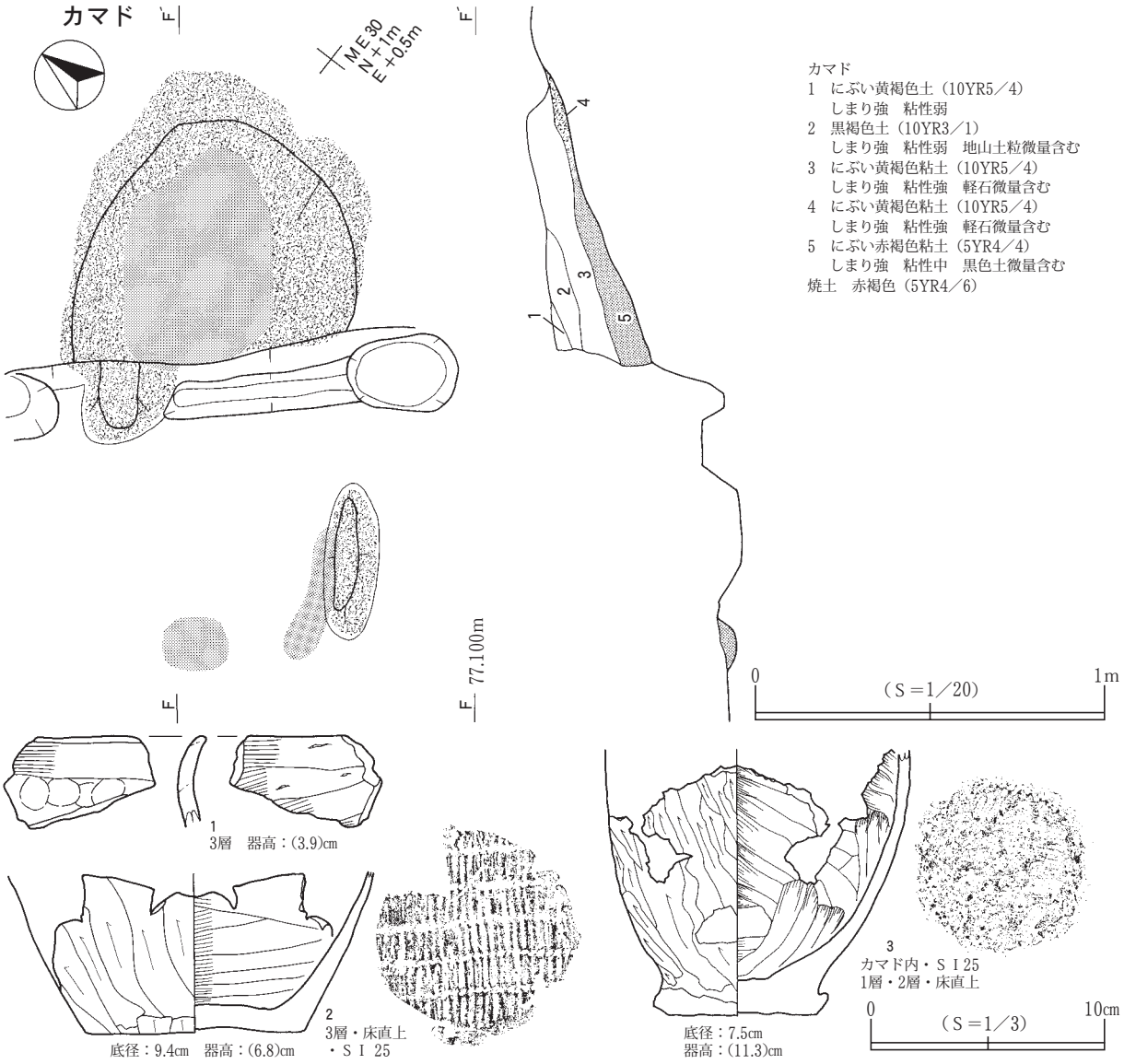
P1
1　黒褐色土（10YR3／1）
　しまり弱　粘性弱
2　暗褐色土（10YR3／4）
　しまり強　粘性強
　地山土粒含む

P3
1　黒色土（10YR2／1）
　しまり弱　粘性中
　地山土粒少量含む
2　明黄褐色土（2.5Y6／6）
　しまり強　粘性弱
　地山土粒多量含む

P4
1　黒色土（10YR2／1）
　しまり弱　粘性中
　地山土粒少量含む
2　明黄褐色土（2.5Y6／6）
　しまり強　粘性弱
　地山土粒多量含む

P5
1　黒色土（10YR2／1）
　しまり弱　粘性中
　地山土粒少量含む
2　明黄褐色土（2.5Y6／6）
　しまり強　粘性弱
　地山土粒多量含む

第54図　ＳＩ115



第 55 図　ＳＩ 115 カマド・出土遺物

である。火床面は、地山面をそのまま利用している。ＳＩ25構築時に上部を掘削しており、本来の焼土範囲は失われているため、残存する被熱範囲は不規則な形状である。なお、支脚は確認されなかったが、第55図３が支脚だった可能性がある。

本住居跡は四隅に主柱をもち、北東壁にカマドを設置する住居である。北西壁には、出入り口とみられる張り出しがつく。廃絶後は人為的に埋め戻しており、ＳＩ25構築に合わせて埋め立て造成したと考えられる。

遺　物（第55図）　土師器甕が出土している。住居の大部分をＳＩ25が掘り込むため、基本的に遺物の出土量は少ない。主な出土位置は、ＳＩ25貼床下部のカマド周辺である。

55図１は土師器甕の口縁部破片で、口縁部がわずかに外反する器形である。55図２は土師器甕の底部資料で、底面に薦編圧痕をとどめる。底部から直線的に外傾して立ち上がる形状である。55図３は比較的小型の土師器甕の底部資料で、底面は砂底である。底部外縁は、外面調整のケズリにより張り出す形状になる。

ＳＩ26（第56・57図、図版20）

遺　構　ＭＦ30・31、ＭＧ29・30グリッドの第Ⅳ層上位で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほぼ平坦な地形である。ＳＩ27、ＳＤ137と重複し、いずれよりも本住居跡の方が新しい。周辺にはＳＩ24・25・115・28、ＳＫＦ34、ＳＡ119がある。本住居跡は調査区境界に位置しており、大部分は調査区外に当たるため、確認できたのは南東壁と北東壁の一部とカマドの一部のみで、規模等は不明である。

堆積土は６層に分けた。１～５層は流入土である。１～５層は黒色・黒褐色土で、色調の違いはわずかである。１・５層は地山土粒を少量、３・４層は地山土粒を多量に含む。基本的にレンズ状堆積であり、自然堆積による埋没過程を示している。３・４層は、周堤に由来する堆積土の可能性がある。６層は壁溝の裏込め土である。

住居の大部分が調査区外に位置することから、平面形は不明である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－24°－Ｗである。各壁の長さは、確認できる範囲で北東壁2.7m以上、南東壁4.5m以上である。検出面からの深さは北東壁で約0.7mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。壁溝は確認できる範囲では全周巡る。幅0.2～0.3m、床面からの深さは調査区境界の断面で約0.1mである。床面及び壁溝内部で３個のピットを確認した。Ｐ１は東隅に位置する主柱穴とみられる。Ｐ２・３は南東壁に平行して２個並んでおり、南東壁中央部を境にカマドとは線対称の配置をとると想定されることから、出入り口に関わる下部構造と考えられる。なお、南東壁沿いの壁溝上場に径数㎝の小ピットが２個ある。壁板保持の補助的な部材を打ち込んだ痕跡と考えられる。

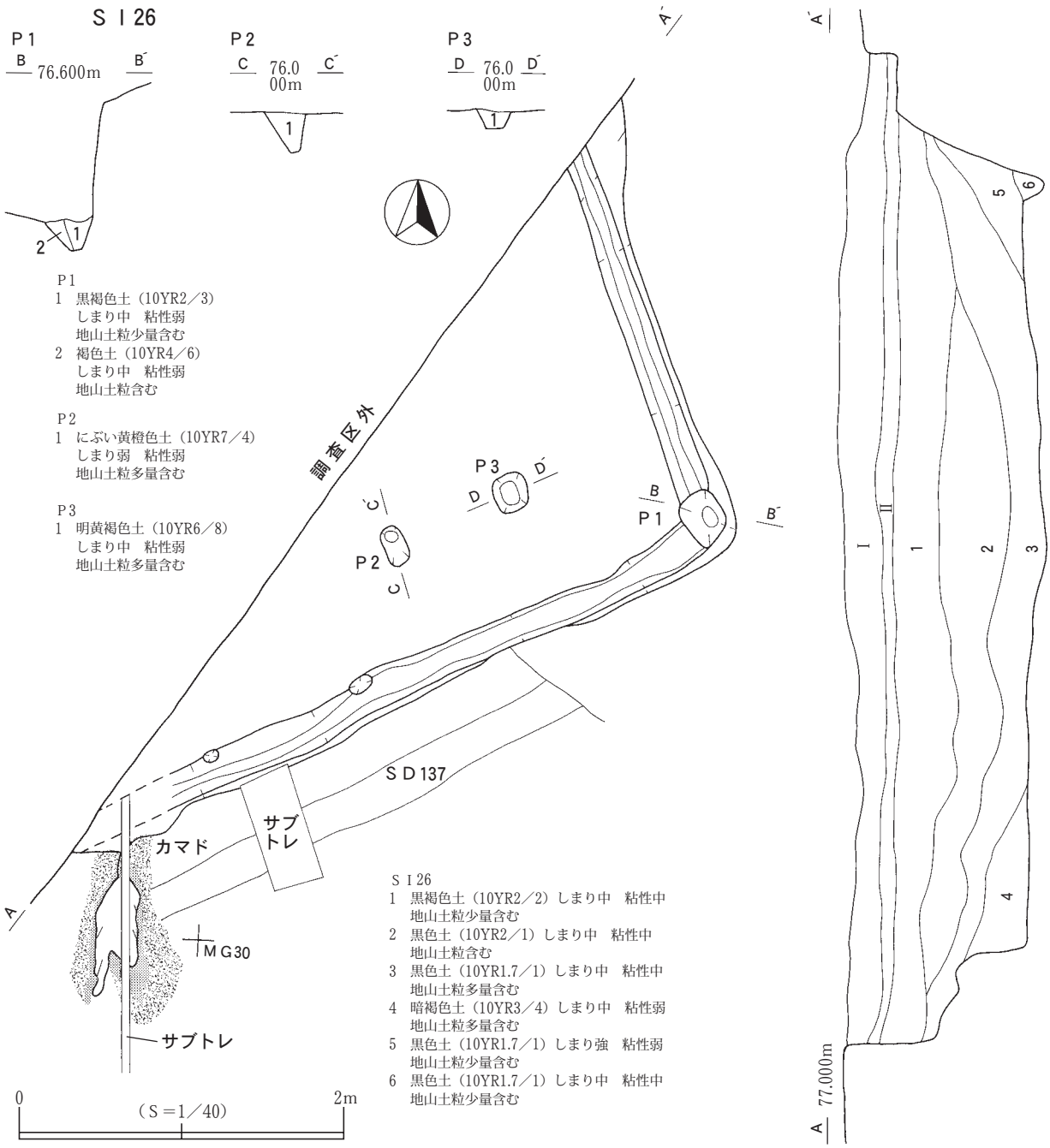
カマドは南東壁の調査区境界付近で、地山土粒と褐色粘土の広がりで確認した。堆積土は３層に分けた。２・３層は流入土とカマド構築土の倒壊土との混合層である。１層は煙道の上部構造の部分的な残存土である。カマド袖から火床面は調査区外に位置すると予測されるため、今回の調査では確認できなかった。煙道は長さ約0.9m、最大幅約0.7mで、スロープ状の掘り込み上場に褐色の粘土が残存していた。粘土内面は被熱により赤変している。この状況から、煙道は粘土により覆いをかける半地下式構造と想定される。

本住居跡は南東壁にカマドを設置する住居で、四隅に主柱をもつと想定される。住居全体規模は確認できないが、ＳＩ21との比較から、四隅よりも内側に主柱穴を配置する可能性もある。廃絶後は自然堆積により埋没しており、集落内でも比較的新しい段階の住居と考えられる。

遺　物（第57図）　住居跡内から土師器甕や砥石が出土しているが、調査できた範囲が狭く、出土遺物も少ない。比較的大型の破片は全て図示した。

57図１・２は比較的大型の土師器甕である。１は胴部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口端がわずかに外反して、口唇は先細りの形状になる。２は胴上部が直立気味に立ち上がり、口縁部が弱く外反する。どちらも外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。57図３は比較的小型の土師器甕で、胴上部が内傾して頸部でくびれ、口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。57図４は土師器甕の口縁部破片で、口縁部が外折する。57図５・６は土師器甕の底部で、どちらも砂底である。

57図７は砥石の破片で、亜角礫を利用している。



第56図　ＳＩ26

ＳＩ27（第58・59図、図版21）

遺　構　ＭＥ・ＭＦ30・31グリッドの第Ⅳ層上位で、地山土粒を少量含む黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の北東縁に近く、緩やかに北へ傾斜する。ＳＩ26と重複し本住居跡の方が古い。ＳＤ137とも重複するが、明確な新旧関係は不明である。周辺にはＳＩ24・25・115・28、ＳＫＦ34、ＳＡ119がある。本住居跡は調査区境界に位置しており、大部分は調査区外に当たるため、確認できたのは住居南東半分である。

堆積土は４層に分けた。一見するとレンズ状堆積であるが、大部分は１層が占めており、ＳＩ26との関係からみて人為堆積による埋没と考えられる。地山土粒を多量に含む４層は、周堤に由来する土が壁際に多く堆積する状況を示すとみられる。

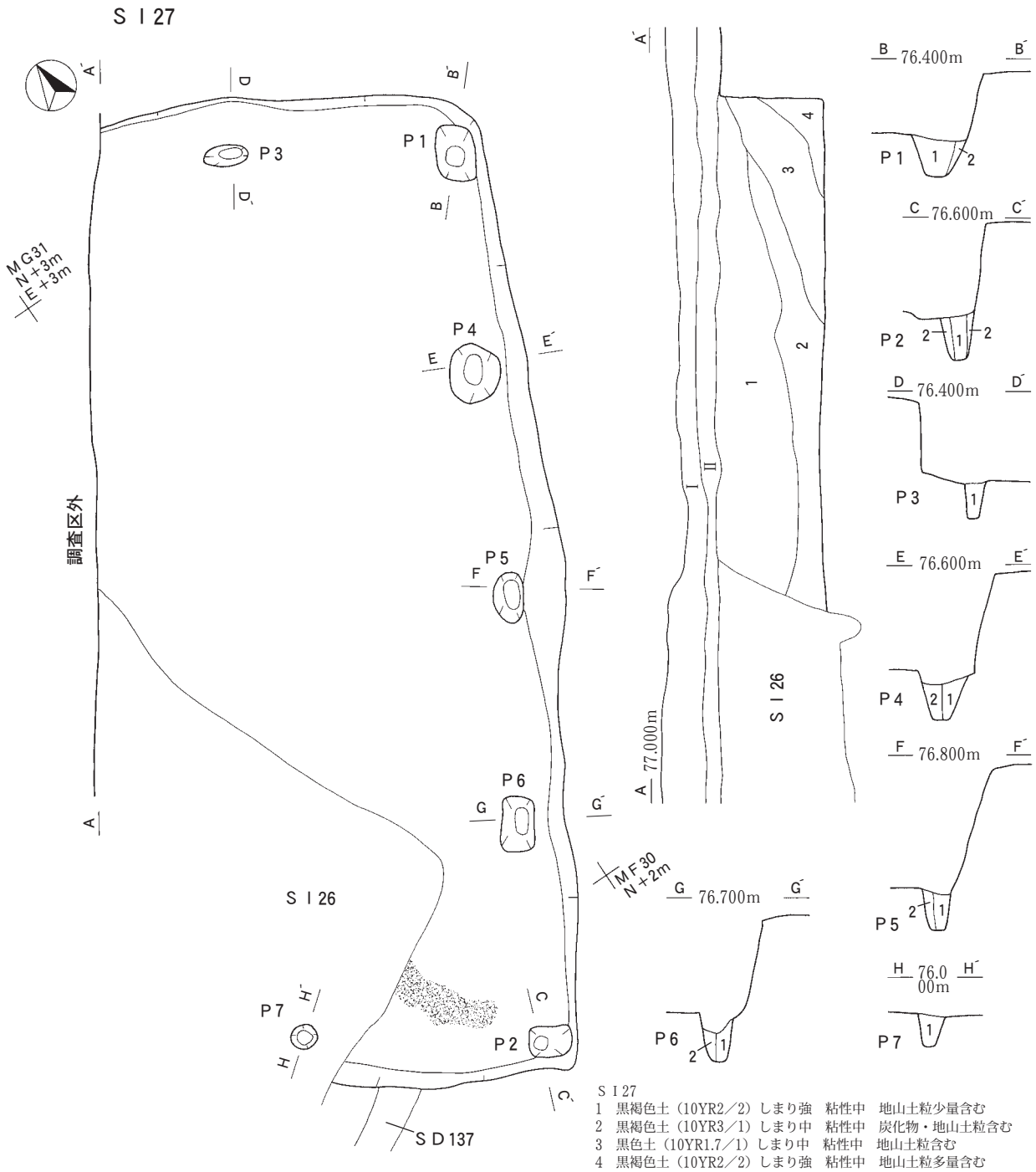
第 57 図　ＳＩ 26 カマド・出土遺物

住居跡の半分以上が調査区外に延びているため、正確な平面形は不明だが、南東壁を正方形の一辺と考えた場合、住居面積は約36㎡と想定される。南東壁に直交する主軸方位はＮ－26°－Ｅである。確認できた壁の長さは、南東壁約6.2m、南西壁1.5m以上、北東壁2.3m以上である。壁の検出面からの深さは、調査区境界の断面で約0.7mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。壁溝は確認できなかった。床面で７個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅に配置する主柱穴である。Ｐ３～６も壁沿いに、約1.4mの間隔で並んで配置しており、壁板保持に関わる柱穴と考えられる。

カマドは確認できなかったが、南東隅付近の床面で白色粘土を確認した。床面に薄く貼り付いており、貼床もしくはカマドに関わる残存部かは判然としない。

本住居跡は四隅に主柱を配置する住居で、カマドは確認できなかったが、 南東壁に設置しないのは明



P1
1　黒褐色土（10YR2／3）
　しまり弱　粘性弱
　地山土粒多量含む
2　にぶい黄褐色土（10YR4／3）
　しまり強　粘性弱
　地山土粒多量含む

P3
1　黒褐色土（10YR2／2）
　しまり弱　粘性弱
　地山土粒含む

P5
1　黒褐色土（10YR3／1）
　しまり中　粘性弱
　地山土粒含む
2　明黄褐色土（10YR6／6）
　しまり強　粘性弱
　地山土粒多量含む

P6
1　黒色土（10YR1.7／1）
　しまり弱　粘性中
　地山土粒少量含む
2　明黄褐色土（10YR5／6）
　しまり強　粘性弱
　地山土粒多量含む

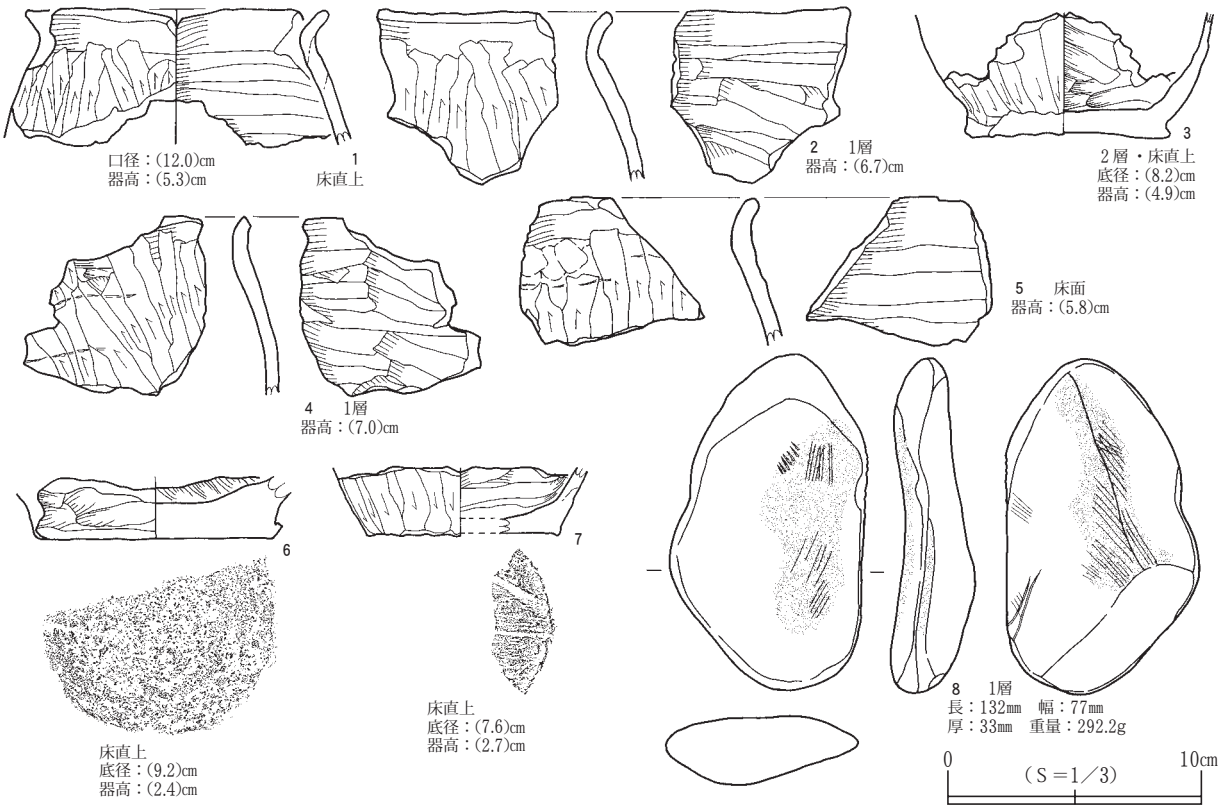
P7
1　明黄褐色土（10YR6／6）
　しまり中　粘性弱
　地山土粒多量含む

P2
1　黒色土（10YR1.7／1）
　しまり弱　粘性弱
　地山土粒少量含む
2　黄橙色土（10YR8／6）
　しまり中　粘性弱
　地山土粒多量含む

P4
1　黄褐色土（10YR5／6）
　しまり中　粘性弱
　黒褐色土、地山土粒多量含む
2　明黄褐色土（10YR6／6）
　しまり強　粘性弱
　地山土粒多量含む

0　（S＝1／40）　2m

第58図　ＳＩ27



第59図　ＳＩ27出土遺物

らかである。廃絶後は人為的に埋め戻しており、ＳＩ26構築時に埋め立て造成したと考えられる。

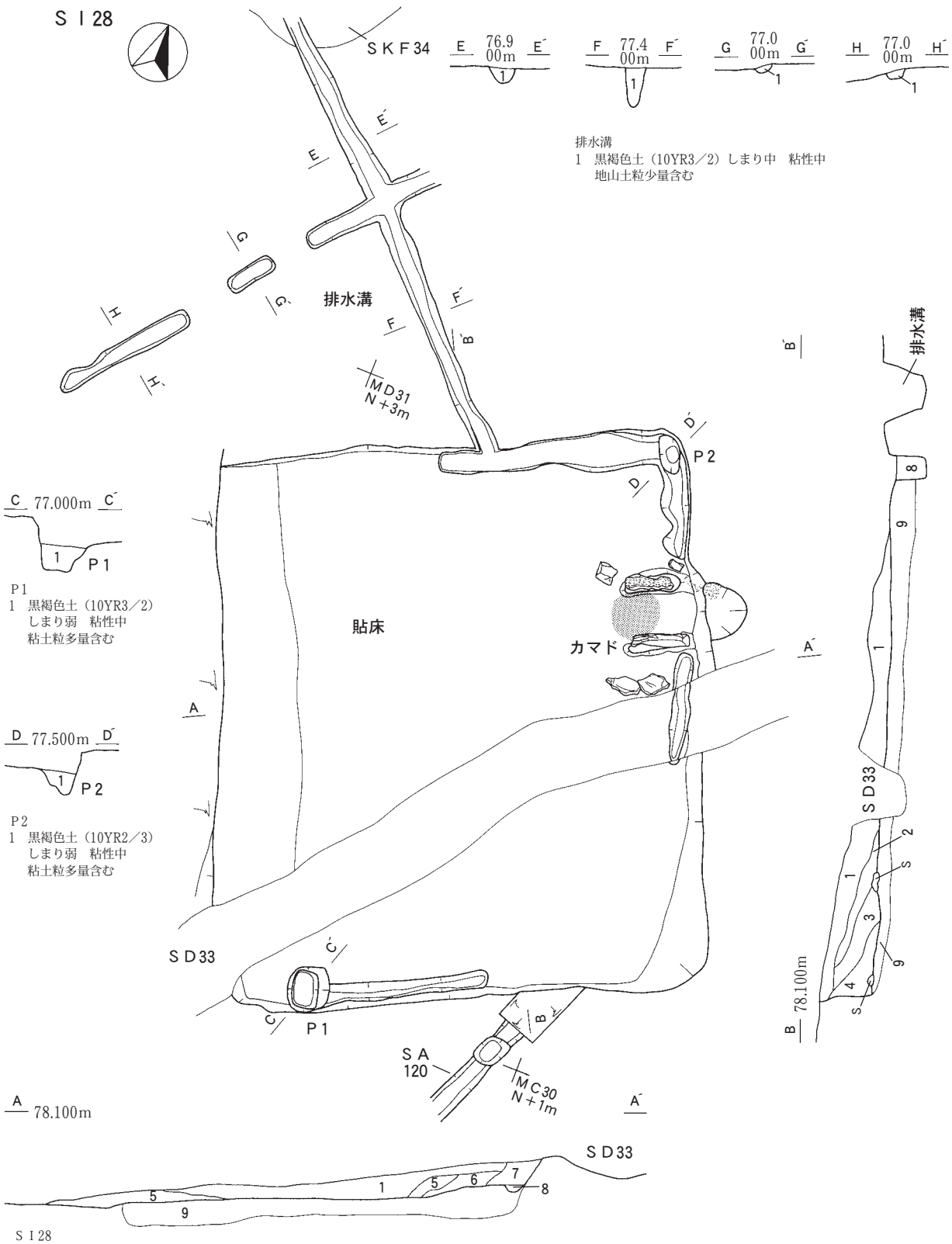
遺　物(第59図)　住居跡内から土師器甕、砥石が出土した。土師器甕は小破片が多い。59図１は比較的小型の土師器甕で、胴上部が内傾して頸部で強くくびれ、口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。59図２・４・５は土師器甕の口縁部破片で、いずれも胴上部が内傾する器形である。２・５は口縁部が外反するが、４は外反が弱く直立気味の形状になる。いずれも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。59図３・６・７は土師器甕の底部で、３はナデによる調整を、６は砂底で、７は木葉痕をとどめる。３・６は底部外縁が張り出す形状で、７は底部から直線的に外傾する。

59図８は砥石で、扁平な亜円礫の両面と一側縁を利用している。平坦面には擦痕が認められる。

ＳＩ28(第60～62図、図版22)

遺　構　ＭＢ～ＭＤ30・31グリッドで、地山土粒・塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。確認面は場所により違いがあるが、基本的に第Ⅳ層上位である。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の北東縁に近く、北西にやや傾斜している。ＳＤ33と重複しており、本住居跡の方が古い。また、本住居跡に付属する溝がＳＫＦ34を切っている。なお、本住居跡はＳＡ120とも重複すると考えられるが、重複部分が撹乱により壊されているため、新旧関係は不明である。周辺にはＳＩ24・25・26・27・112・115、ＳＤ38がある。

堆積土は９層に分けた。９層は貼床の土で、８層は壁溝内堆積土である。２～４層と５～７層はどちらも壁際に堆積しており、これ以外の大半を１層が埋め尽くしている。２～４層と５～７層はレンズ状堆積にもみえるが、集落の区画施設とみられるＳＤ33が本住居跡を掘り込む状況から、いずれも


ＳＩ28
ＳＫＦ34
E 76.9 00m E´
F 77.4 00m F´
G 77.0 00m G´
H 77.0 00m H´
排水溝
1　黒褐色土（10YR3／2）しまり中　粘性中
地山土粒少量含む
排水溝
ＭＤ31
Ｎ＋3m
P2
貼床
カマド
C 77.000m C´
P1
P1
1　黒褐色土（10YR3／2）
しまり弱　粘性中
粘土粒多量含む
D 77.500m D´
P2
P2
1　黒褐色土（10YR2／3）
しまり弱　粘性中
粘土粒多量含む
ＳＤ33
ＳＡ
120
ＭＣ30
Ｎ＋1m
A 78.100m
B 78.100m
ＳＤ33
ＳＩ28
1　黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性中　地山土粒・塊少量含む
2　黒褐色土（10YR2／2）しまり強　粘性中　粘土粒多量含む
3　暗褐色土（10YR3／3）しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
4　褐色土（10YR4／4）しまり中　粘性強　地山土粒・粘土粒少量含む
5　暗褐色土（10YR3／3）しまり強　粘性中　地山土粒少量含む
6　暗褐色土（10YR3／3）しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
7　暗褐色土（10YR3／3）しまり中　粘性中　炭化物・粘土粒少量含む
8　黒褐色土（10YR3／1）しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
9　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中　火山灰・地山土塊多量含む
0
（Ｓ＝1／60）
2m

第60図　ＳＩ28

人為的な埋め立て造成に伴う土と考えられる。４～７層は、斜面上位の壁際に偏って堆積することから、周堤に由来する可能性がある。

北西壁は崩落しているが、貼床の範囲で確認した住居平面形は、北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－65°－Ｅである。主軸とこれに直交するラインで測る面積は約27㎡である。各壁の長さは北西壁約4.7m、北東壁約5.5m、南東壁約4.7mである。南西壁は崩落しているが、北西壁と南東壁の間は約5.4mである。各壁の検出面からの深さは、北西壁約0.1m、北東壁約0.3m、南東壁約0.6mである。立ち上がりは、いずれの壁も緩やかである。

床面は、ほぼ全面に貼床を施しており、地山土塊を多量に含む黒色土を敷き詰めて平坦に整えている。斜面上位である南東隅では薄く、斜面下位の北西隅では厚く貼床を施しているが、これは南東隅が調査区外南東側に位置する丘陵部尾根線の延長線上に当たり、基盤岩が露頭していることに関連する。東隅の基盤岩の掘り下げが難しいため、地山面では斜面下位に当たる住居西側のⅣ層を完全に撤去し、砂質のⅥ層を多く含む土で床面を造ることを選んだと考えられる。

壁溝は、北東壁・北西壁・南東壁の一部で確認した。幅0.2～0.4m、床面からの深さは0.1～0.3mである。床面及び壁溝内で２個のピットを確認した。Ｐ１は不整円形で、径約0.45m、床面からの深さが約0.3mである。Ｐ２は不整楕円形で、長径約0.4m、短径約0.2m、床面からの深さが約0.2mである。東隅と西隅では明確でないが、Ｐ１・２は住居隅の主柱穴である。東隅は基盤岩上であり、床面に直に置いた可能性がある。なお、Ｐ２の底面では工具痕を確認した。

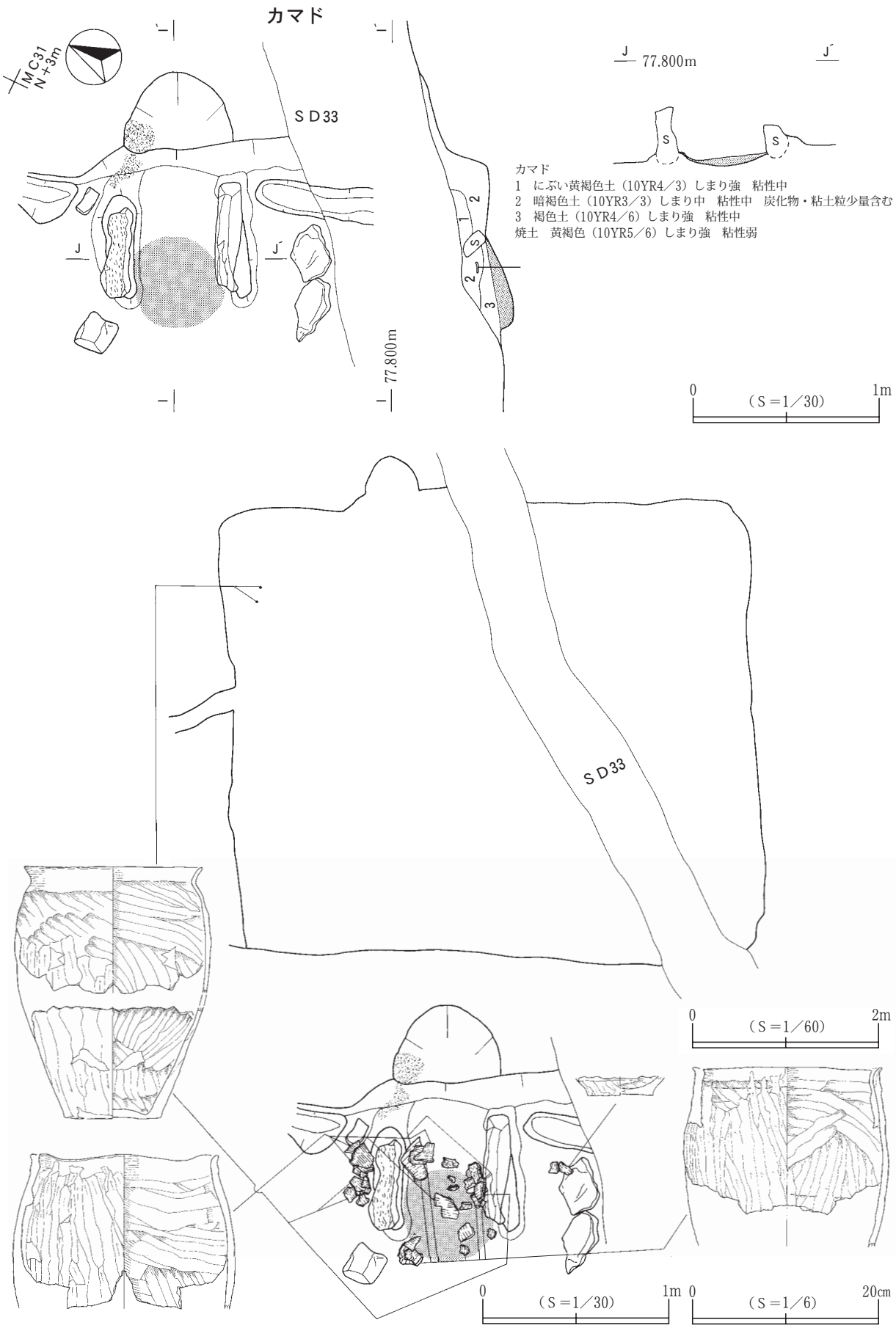
カマドは北東壁の中央からやや北西寄りの位置で、粘土粒と炭化物を含む暗褐色土の広がりで確認した。堆積土は３層に分けた。１・２層は流入土と倒壊した構築土の混合土で、３層は天井構築土の倒壊土とみられる。確認できたのは煙道、袖、火床面で、煙道から火床面まで約1.4m、袖の最大幅約0.9mである。煙道は地山をスロープ状に掘り込んでおり、部分的に粘土が残存する。住居上場から外へ約0.4m延びる。袖は、凝灰岩質の扁平な角礫を芯材として、粘土と暗褐色土の混合土を盛り付けている。火床面は、径約0.4mの不整な円形の被熱範囲で、地山上面を利用している。

本住居跡の北西壁からさらに北側へ延びる溝を確認した。溝が延びるのは、住居跡の北西側へ下る緩斜面である。十字形になっており、規模は南北方向に約4.4m、東西方向に約4.8mである。溝の幅は0.2～0.3m、検出面からの深さは0.1～0.4mで、住居跡に近い方が深くなっている。住居跡よりも斜面下位に延びるという立地条件からみて、排水溝として利用したと考えられる。なお、他の住居跡ではこのような施設の付属は認められないが、本住居跡が厚く貼床を施していることに関係する可能性がある。

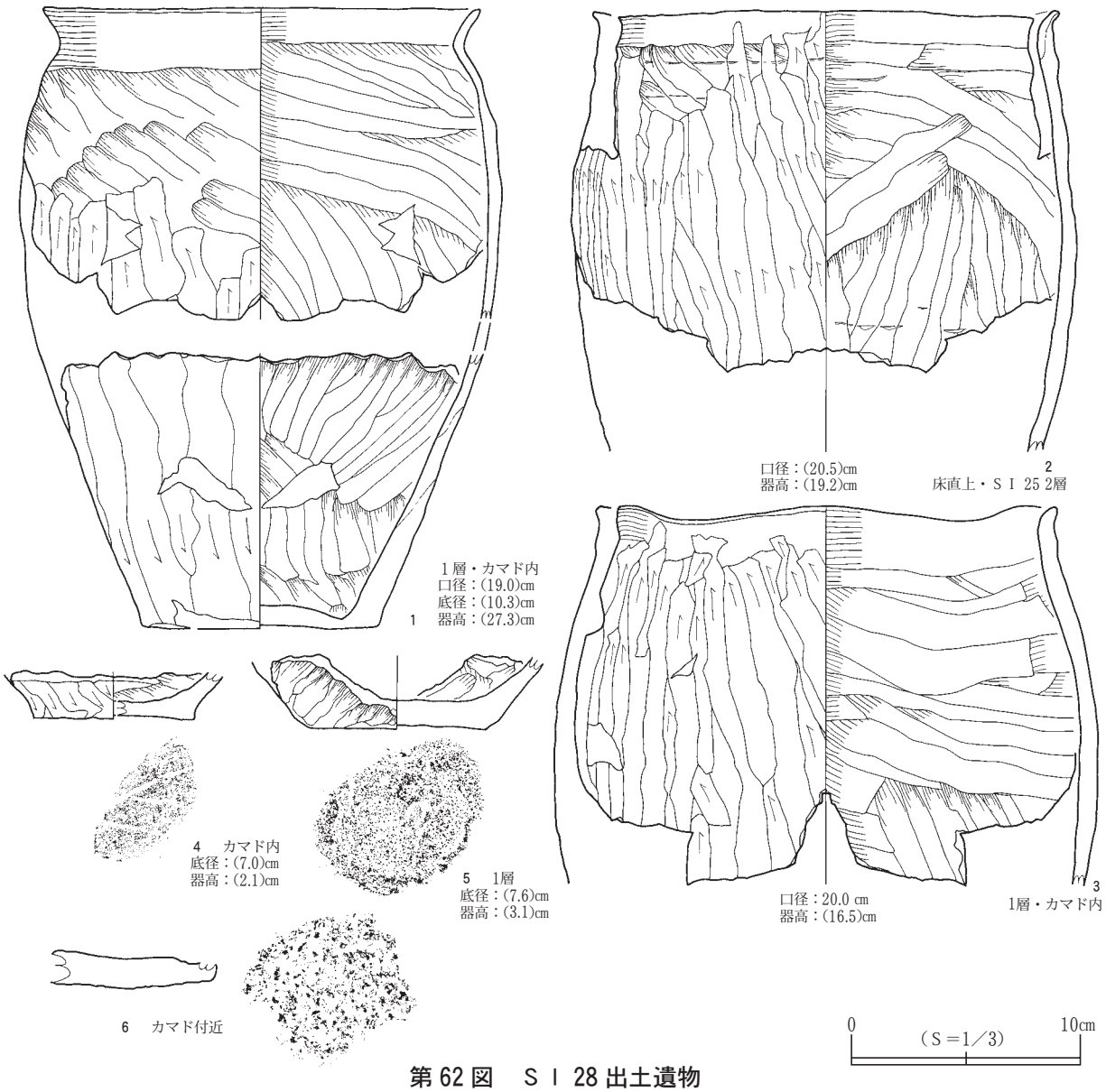
本住居跡は北東壁にカマドを設置する住居で、四隅に主柱を配置すると想定される。また、排水溝を伴うことは本住居跡の特筆される要素である。廃絶後は人為的に埋め戻したと考えられるが、本住居跡に近接する住居は無く、ＳＤ33が掘り込む状況から、本住居跡の立地点は宅地として継続利用されなかったことが窺える。

遺　物（第62図）　住居跡内から土師器甕が出土した。また、カマド袖付近で鉄床石が出土した。カマド内出土遺物は比較的大型の破片が多く、袖や火床面上に散在する状況から、カマド構築材に転用したものかカマド破棄時に一括廃棄したもののいずれかと考えられる（第61図）。

62図１～３は、比較的中・大型の土師器甕である。１は全体形状が分かる資料で、底面はナデによ



第61図　ＳＩ28カマド・遺物出土状況

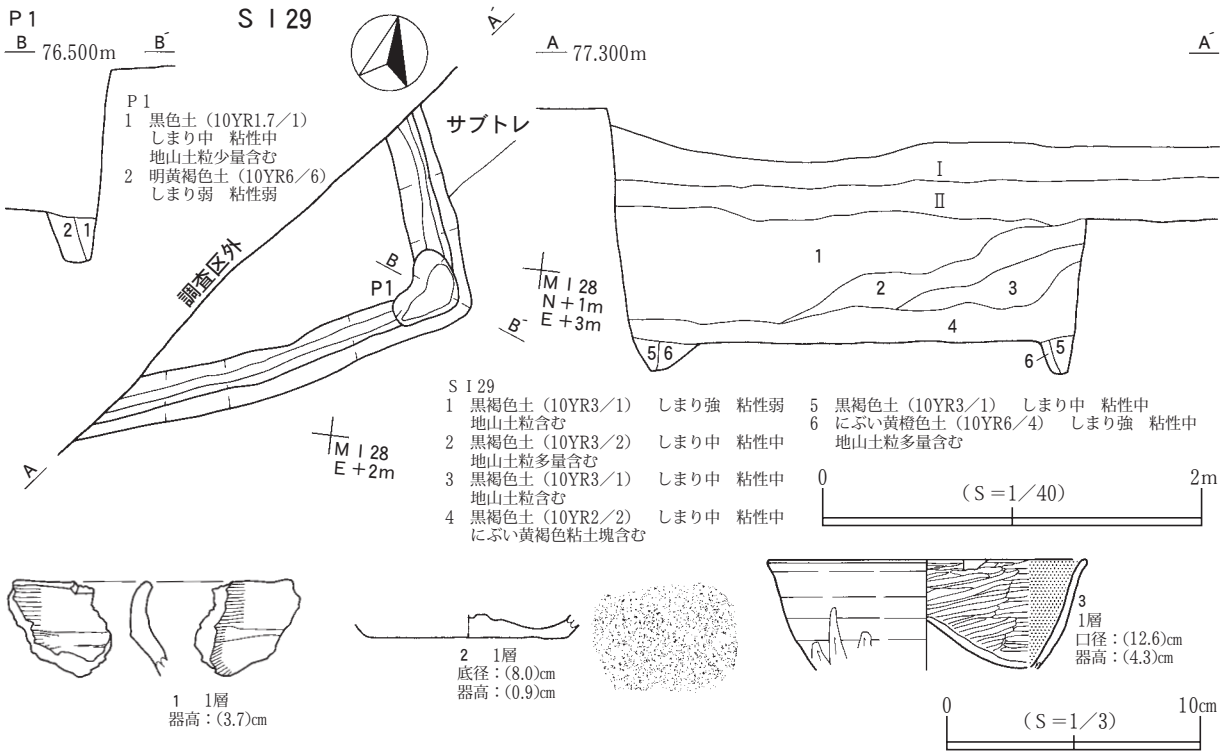


第 62 図　ＳＩ 28 出土遺物

り調整しており、比較的径の大きい底部から直線的に外傾して胴上部が張り出し、頸部で強くくびれて口縁部が外反する。２・３は頸部のくびれが少ない器形で、胴上部が張り出して口縁部にかけて内傾する。２は口端がやや外反する。１・３は外面縦位ケズリ、内面ヘラナデ調整、２は外面縦位ケズリ、内面ユビナデ調整である。１は外面胴上部にユビナデをとどめる。１・２に比べて３は器壁が厚い。62図４～６は土師器甕の底部である。４は木葉痕をとどめ、５・６は砂底である。４は底部がやや突出し、５は底部から直線的に外傾して立ち上がる。

ＳＩ29（第63図、図版23）

遺　構　ＭＨ27・28グリッドの第Ⅳ層上面に炭化物や焼土の広がりを確認し、トレンチを設定して掘り下げたところ住居跡の立ち上がりを確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほとんど傾斜がない。重複する遺構はなく、周辺にはＳＩ23、ＳＡ119がある。本住居跡は、住居東隅の一角のみを調査した。確認できたのは壁、壁溝、ピットのみである。これ以外の範囲は調査区外に



第 63 図　ＳＩ 29・出土遺物

当たっており、住居の全体像は不明である。

堆積土は 6 層に分けた。1 ～ 4 層はいずれも黒褐色土で、地山土粒を少量含む土と多量に含む土が交互に堆積している。 5 ・ 6 層は壁溝内堆積土で、5 層は壁板腐植土、6 層は裏込め土である。2・3 層が斜堆積していることから、自然堆積による埋没も想定されるが、調査範囲が狭いため詳細は不明である。

本住居跡の大部分が調査区外に延びているため、平面形、主軸方位、規模は不明である。各壁の長さは確認できた範囲で、北東壁1.2m以上、南東壁2.3m以上である。検出面からの深さは調査区境界の断面で約0.7mで、立ち上がりはほぼ垂直である。床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。壁溝は、幅0.1 ～ 0.2m、床面からの深さは調査区境界断面で約0.2mである。住居東隅で 1 個のピットを確認した。隅に配置する主柱穴とみられる。深さ約0.3mで、柱痕も確認された。

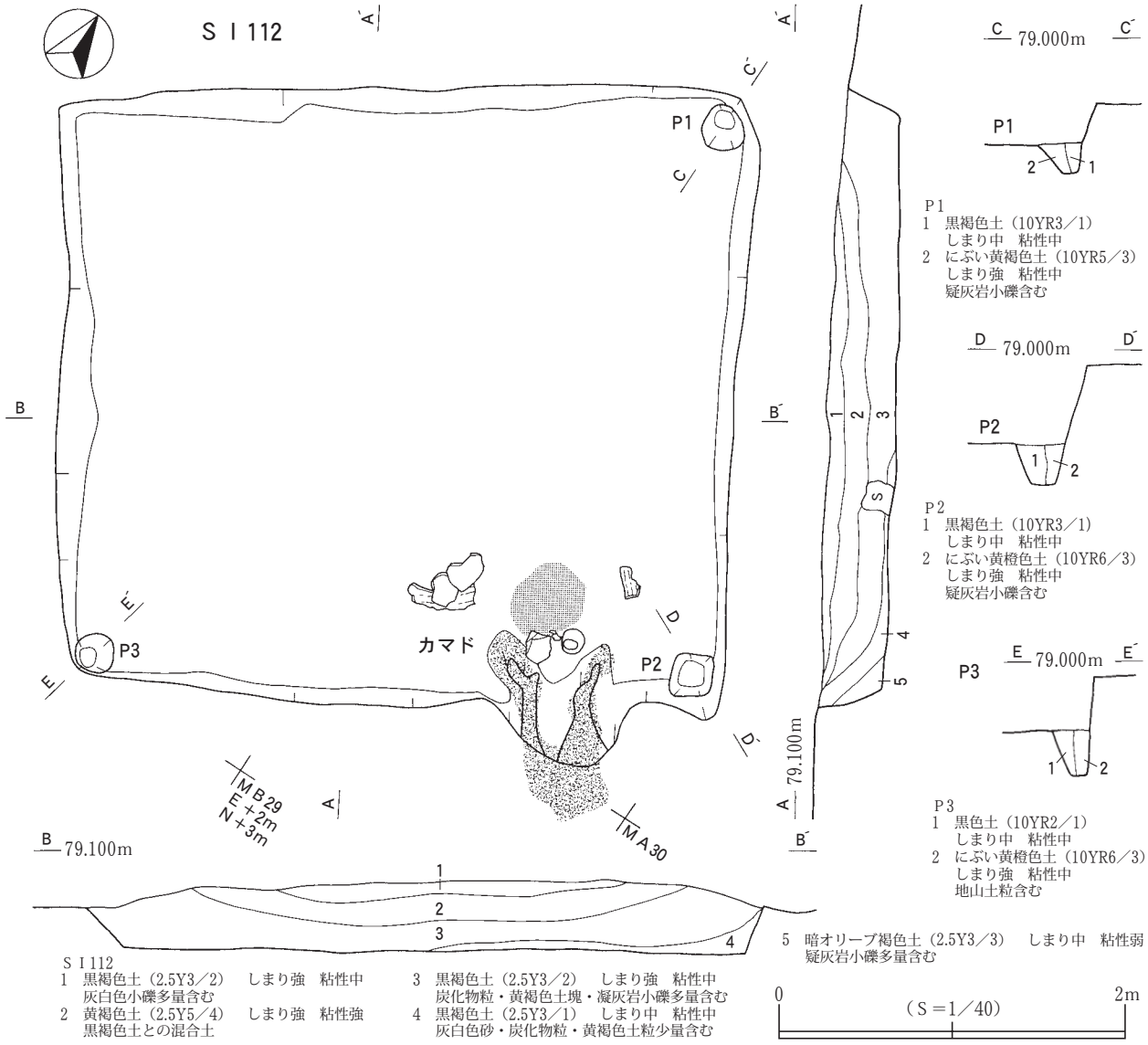
調査した範囲でカマドは確認できなかった。

遺　物(第63図)　住居跡内から土師器甕・坏が出土した。調査範囲が狭いため、遺物の出土量も少ない。63図 1 は土師器甕の口縁部破片で、頸部でくびれて口縁部が直立気味に立ち上がる。63図 2 は土師器甕の底部で、底面は砂底である。

63図 3 は土師器坏Ｂ類である。胴部でわずかに屈曲して口縁部が外反する。外面胴下部にはわずかにケズリが認められる。内面には横位のミガキを施す。

ＳＩ112（第64～66図、図版24・28）

遺　構　ＭＡ29・30、ＭＢ30グリッドの第Ⅳ層下位～崩落礫層上面で、黒褐色土と黄褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の北東縁で、調査区外丘陵部の山麓部に当たり、北東側へ傾斜している。重複する遺構はなく、周辺にはＳＩ28・114、ＳＤ33・38、ＳＡ120がある。



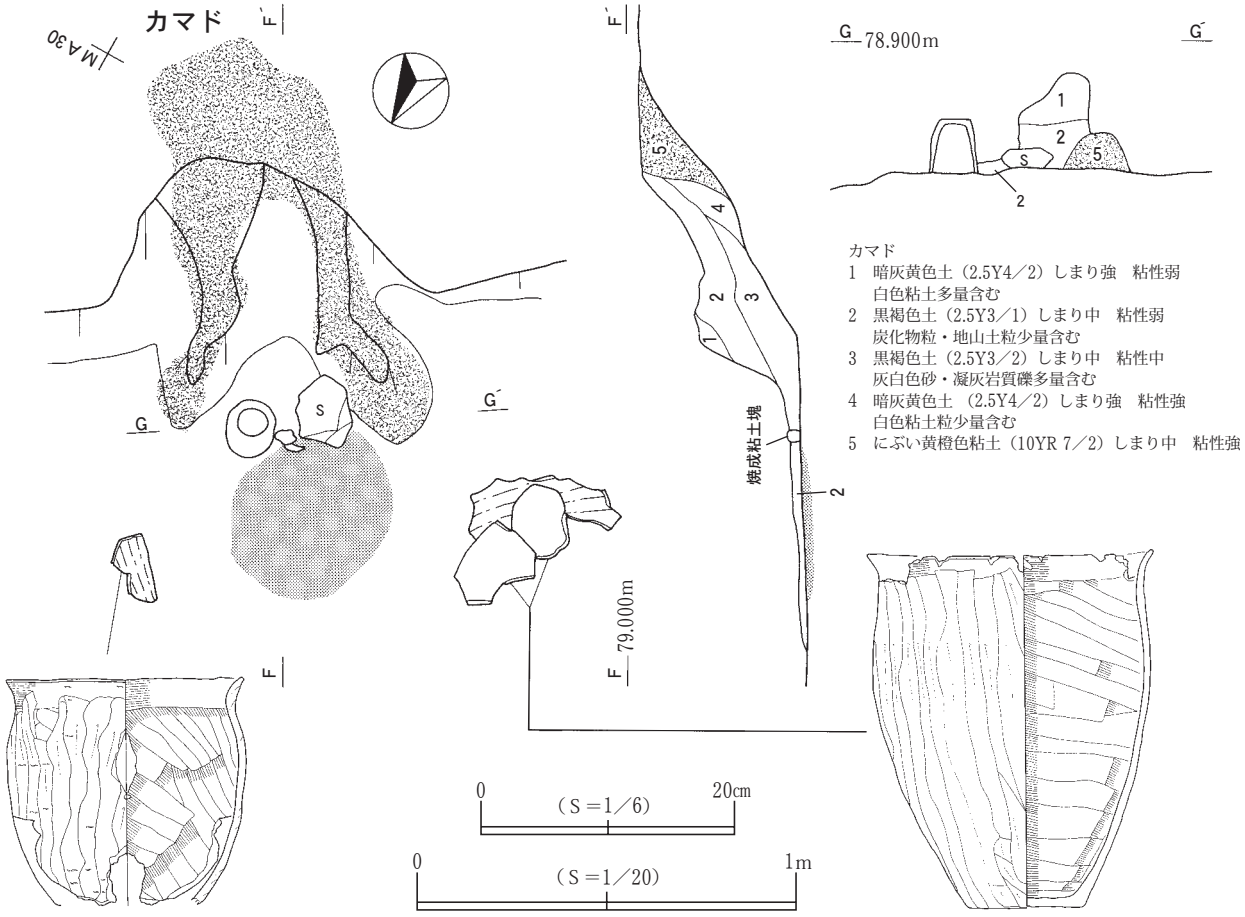
第64図　ＳＩ112

堆積土は５層に分けた。１～５層は流入土で、レンズ状堆積であり、自然堆積による埋没過程を示している。１・３・４層はいずれも黒褐色土で、色調の違いはわずかである。１・３層は小礫を多量に含み、４層は少量であるが炭化物粒を含んでいる。２層は黄褐色土と黒褐色土の混合土である。５層は凝灰岩の小礫を多量に含むことから、壁からの崩落土と考えられる。

平面形は北東－南西方向に長い長方形である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－33°－Ｗで、主軸とこれに直交するラインで測る面積は約14㎡である。各壁の長さは北東壁約3.6m、南東壁約3.7m、南西壁約3.3m、北西壁約4.0mである。各壁の検出面からの深さは、北東壁約0.3m、北西壁約0.3m、南西壁約0.3m、南東壁約0.4mで、立ち上がりは南西壁では緩やかだが、これ以外ではほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。壁溝は確認できなかった。床面で３個のピットを確認した。Ｐ１は北隅、Ｐ２は東隅、Ｐ３は南隅に位置しており、主柱穴と考えられる。西隅は、床面レベルで基盤岩が露頭しており、柱穴掘削が不可能だったとみられる。

カマドは、南東壁の中央から北東寄りの位置で、暗灰黄色土と黒褐色土の広がりで確認した。堆積



第65図　ＳＩ 112カマド・遺物出土状況

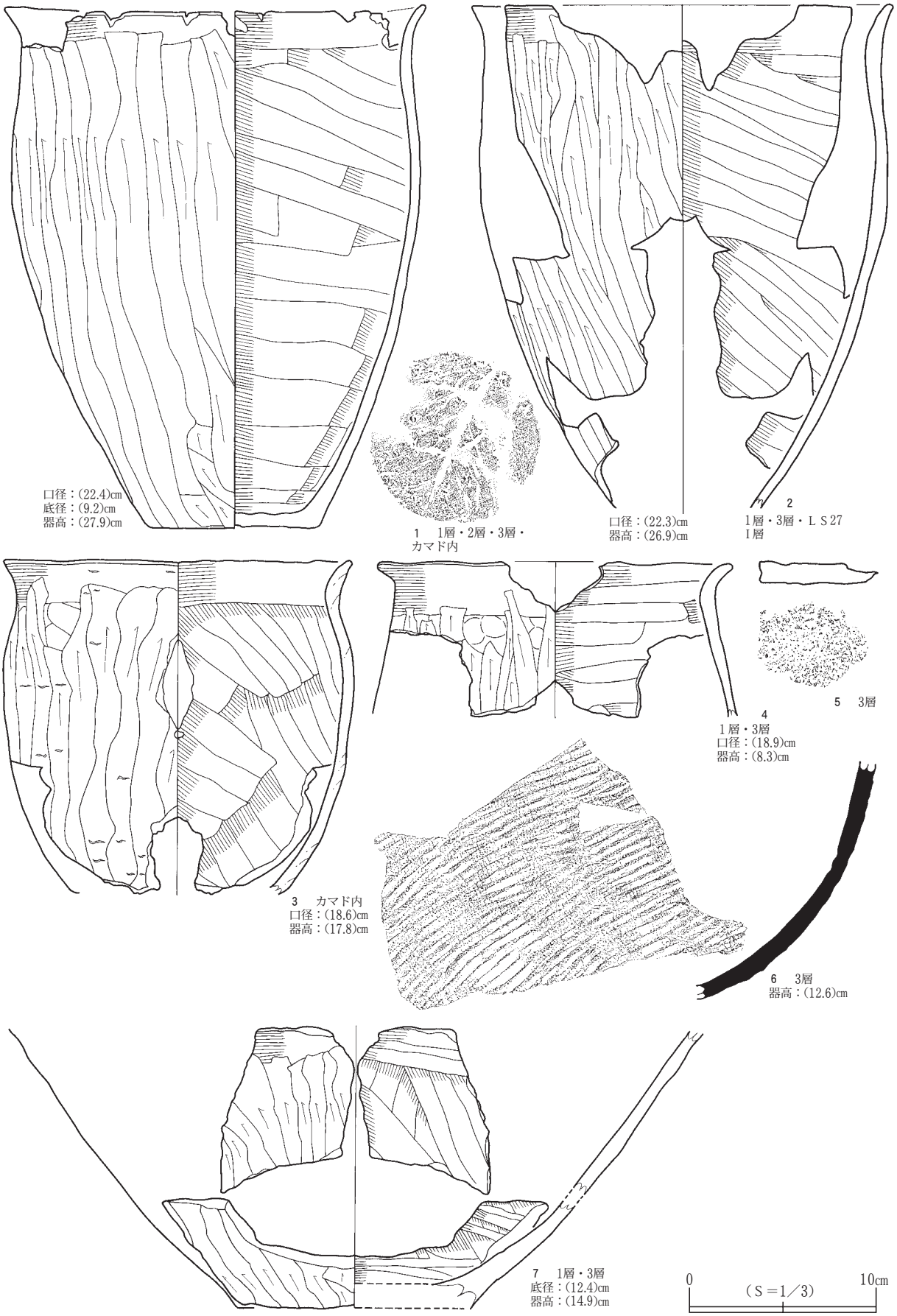
土は５層に分けた。１～４層は流入土と倒壊土の混合層である。確認できたのは煙道、袖、火床面、支脚で、煙道から火床面まで約1.5m、袖の最大幅約0.7mである。煙道は地山をスロープ状に掘り込んで、その掘形底面ににぶい黄橙色粘土を貼っている。その範囲は住居上場から外に約0.7m延びる。袖も煙道底面の粘土と同じ粘土を用いて構築している。火床面は、長径約0.5m、短径約0.4mの不整な楕円形の被熱範囲で、地山面をそのまま利用している。袖の間には器高14cmの甕を逆位に設置した支脚が残っていた。なお、この脇に並んで角礫も設置してあり、これも支脚として機能したとみられる。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は自然堆積により埋没しており、本住居跡廃絶以降にはこの地点の土地利用が低調になったことが窺える。

遺　物(第66図)　土師器甕・鍋、須恵器甕が出土した。比較的大型の破片はカマド周辺から出土している(第65図)が、住居跡内堆積土上層からも一定量出土している。

66図１～4は比較的中・大型の土師器甕である。１・２は、底部から直線的に外傾して胴上部が張り出し、頸部が直立して口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。１に比べ、２は口縁部の外反が弱く器壁が厚い。１は底面に木葉痕をとどめる。３は胴部が湾曲して頸部で弱くくびれ、口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面斜位ヘラナデ調整である。４は胴上部が内傾して口縁部が外反する器形で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

66図５は土師器甕の底部で、砂底である。66図７は土師器鍋の底部から口縁部付近までの破片で、底部付近でわずかに屈曲して、胴部にかけて直線的に外傾する。外面縦位ケズリ、内面縦位ヘラナデ



第 66 図　ＳＩ 112 出土遺物

調整である。66図６は須恵器甕の破片で、タタキ目が確認できる。

ＳＩ113（第67～69図、図版25）

遺　構　ＬＲ・ＬＳ26・27グリッドの第Ⅳ層中位で、灰白色砂や炭化物を含む黄灰色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の北東縁で、調査区外丘陵部の山麓緩斜面に当たることから、北側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺にはＳＩ112・114、ＳＤ38がある。

堆積土は13層に分けた。1～12層は周囲からの流入土で、斜面上位に当たる南西部から斜堆積していることから、自然堆積により埋没したと考える。１・３～７・９・10・12層は炭化物粒を、１・３～６・10・11層は灰白色砂を含む。１～４層は黄灰色土と暗灰黄色土が交互に堆積する。13層は貼床で、地山土粒を多量に含む黒色土を用いている。

平面形は北西－南東方向に長い長方形である。これは立地点の地形に合わせて北東－南西方向を短くしたと考えられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－35°－Ｗで、主軸とこれに直交するラインで測る面積は約14㎡である。各壁の長さは、北東壁約4.2m、南東壁約3.4m、南西壁約3.9m、北西壁約3.3mである。各壁の検出面からの深さは、北東壁約0.2m、南東壁約0.3m、北西壁約0.3mで、斜面上部の南西壁は約0.4mである。各壁はほぼ垂直に立ち上がる。

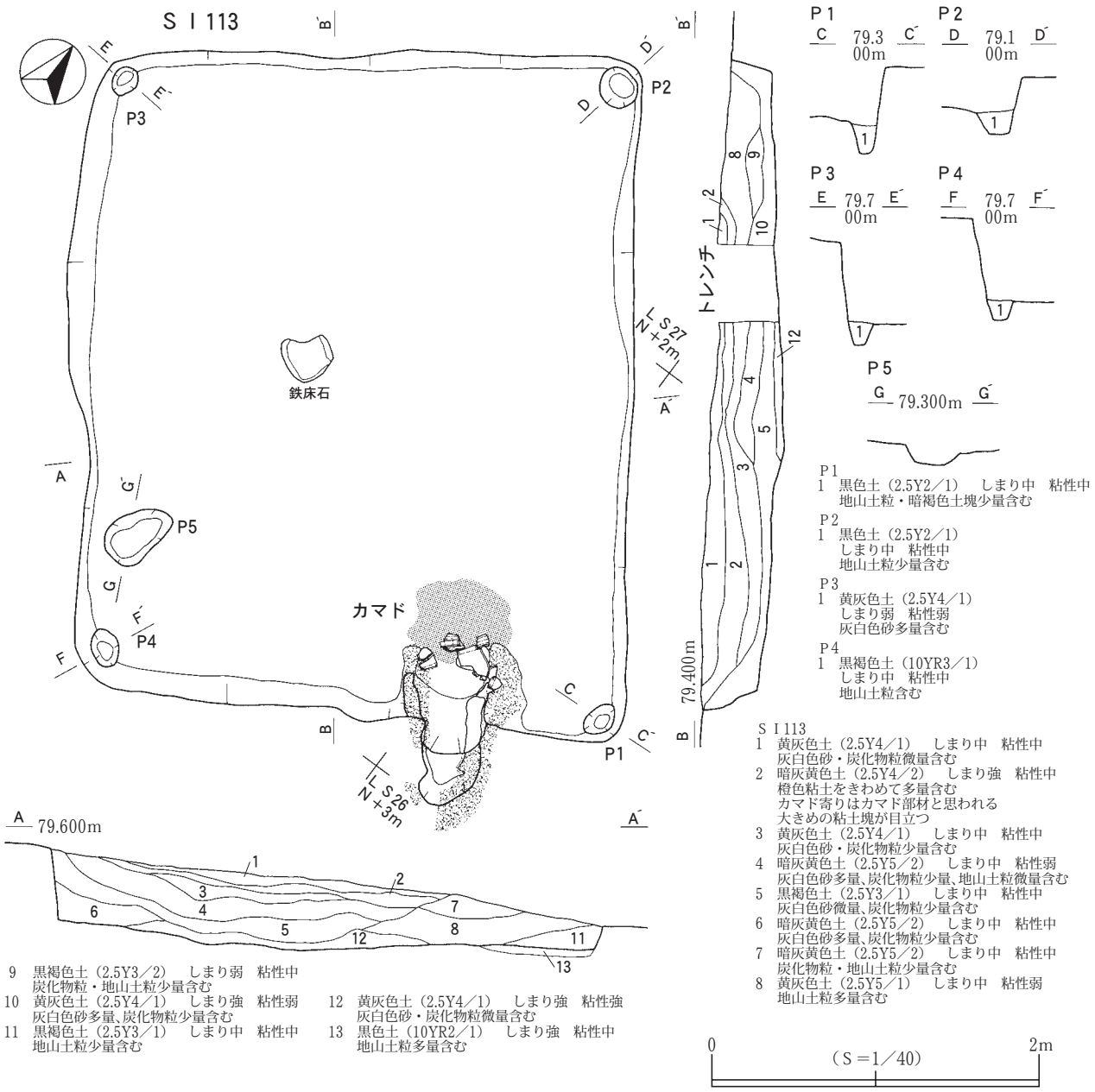
床面は、ほとんどの範囲で掘形底面の地山上面を利用しているが、斜面下位に当たる北東壁沿いでは、この床面レベルではまだⅣ層中位であるため、これを掘り抜いて貼床を施す。壁溝は確認できなかった。床面で５個のピットを確認した。Ｐ１～４は四隅に配置する主柱穴である。Ｐ５は南西壁沿いのＰ４付近に位置し、平面形は不整な円形で、深さも約0.1mと他のピットよりも浅いため、用途は不明である。

カマドは、南東壁の中央からやや北東寄りの位置で、黄灰色土の広がりで確認した。堆積土は５層に分けた。１～３層は流入土とカマド構築土の倒壊土との混合層である。４層はカマド構築土の残存部にあたり、５層はその基底面に貼った造成土である。残存していたのは、煙道、袖、火床面で、煙道から火床面まで約1.6m、袖の最大幅約0.8mである。煙道は、地山をスロープ状に掘り込んで、そのスロープの周りに粘土を貼っており、半地下式構造だったと想定される。その範囲は住居上場から外に約0.6m延びる。袖は灰黄色粘土を用いて造っている。袖の内部には大型の礫が散乱するが、袖や天井材の芯材として用いたものが倒壊した状態とみられ、出土土器片も同様な性格と考えられる。火床面は、最大長約0.6mの不整な形状の被熱範囲で、地山面をそのまま利用している。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は自然堆積により埋没しており、本住居跡廃絶以降この地点の土地利用が低調になったことが窺える。

遺　物（第69図）　住居跡内から土師器甕、鉄床石が出土した。土師器甕の大型破片はカマドから出土している。鉄床石は、住居中央から北西寄りの床面に設置してあった。

69図１・２は口縁部資料である。１は胴上部が内傾して頸部でくびれ、口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。２は胴下部から弱く湾曲しながら外傾し、口縁部が強く外反する。外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。69図３は胴上部から底部にかけての資料で、底面には木葉痕をとどめ、底部から直線的に外傾して胴部が直立気味に立ち上がる。胴上部にはロクロ目様の横ナデをとどめるが、胴下部には外面縦位ケズリ、内面縦位ユビナデで再調整を施す。



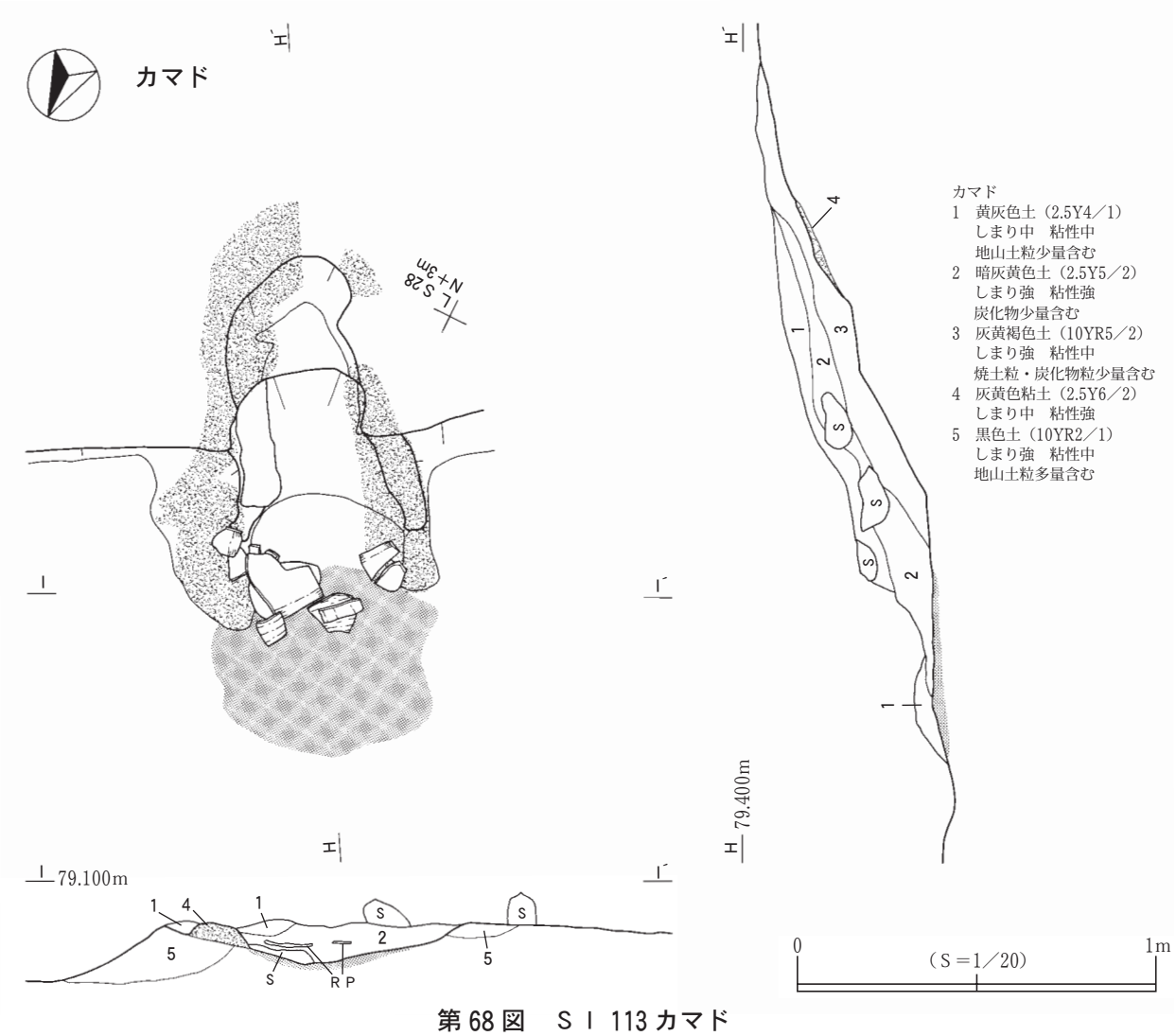
第67図　ＳＩ113

69図４・５は底部資料で、いずれも木葉痕をとどめる。４は直線的に外傾して立ち上がる形状で、５は底部外縁が張り出す。

69図６は鉄床石である。扁平な亜角礫を用いており、表裏の平坦面を利用している。仮に左側を表面とすると、表面には敲打による鱗状の剥離面が多数残っており、その範囲内には鉄錆が付着している。裏面には敲打の痕跡が明確でないが、わずかに鉄錆が付着する範囲がある。なお表裏面共に、平滑な磨耗面が広く残っており、特に裏面には、摩擦作業の痕跡とみられる筋状の傷が多数残る。このことから、砥石としても利用したとみられる。

ＳＩ114（第70図、図版26・29・30）

遺　構　ＬＳ28・29、ＬＴ27～29、ＭＡ28・29グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、小礫を含む黒色土と暗灰黄色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の北東縁で、調査区外丘



第68図　ＳＩ113カマド

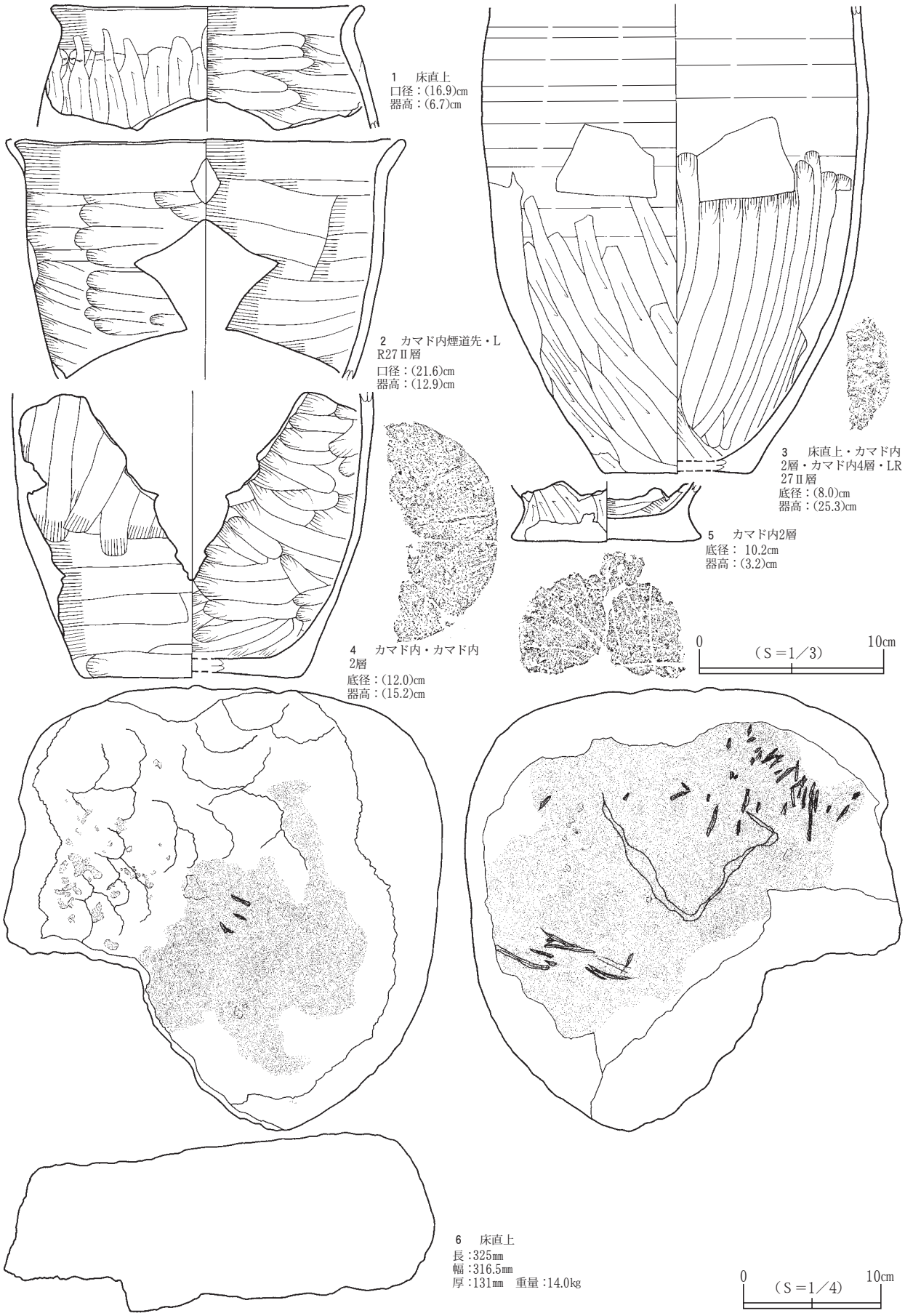
陵部の山麓緩斜面に当たり、北側へ傾斜する。ＳＤ38と重複するが、明確な新旧関係は不明である。周辺にはＳＩ112・113、ＳＡ120がある。

堆積土は７層に分けた。１～６層は流入土で、傾斜上位である南西壁側から順に斜堆積することから、本住居跡は自然堆積により埋没したと考えられる。２～４層は黒色土で地山土粒を多量に含み、２・４層は炭化物粒を含んでいる。５・６層は暗灰黄色土で、５層は小礫を、６層は地山土粒を多量に含む。７層は壁溝の裏込め土である。

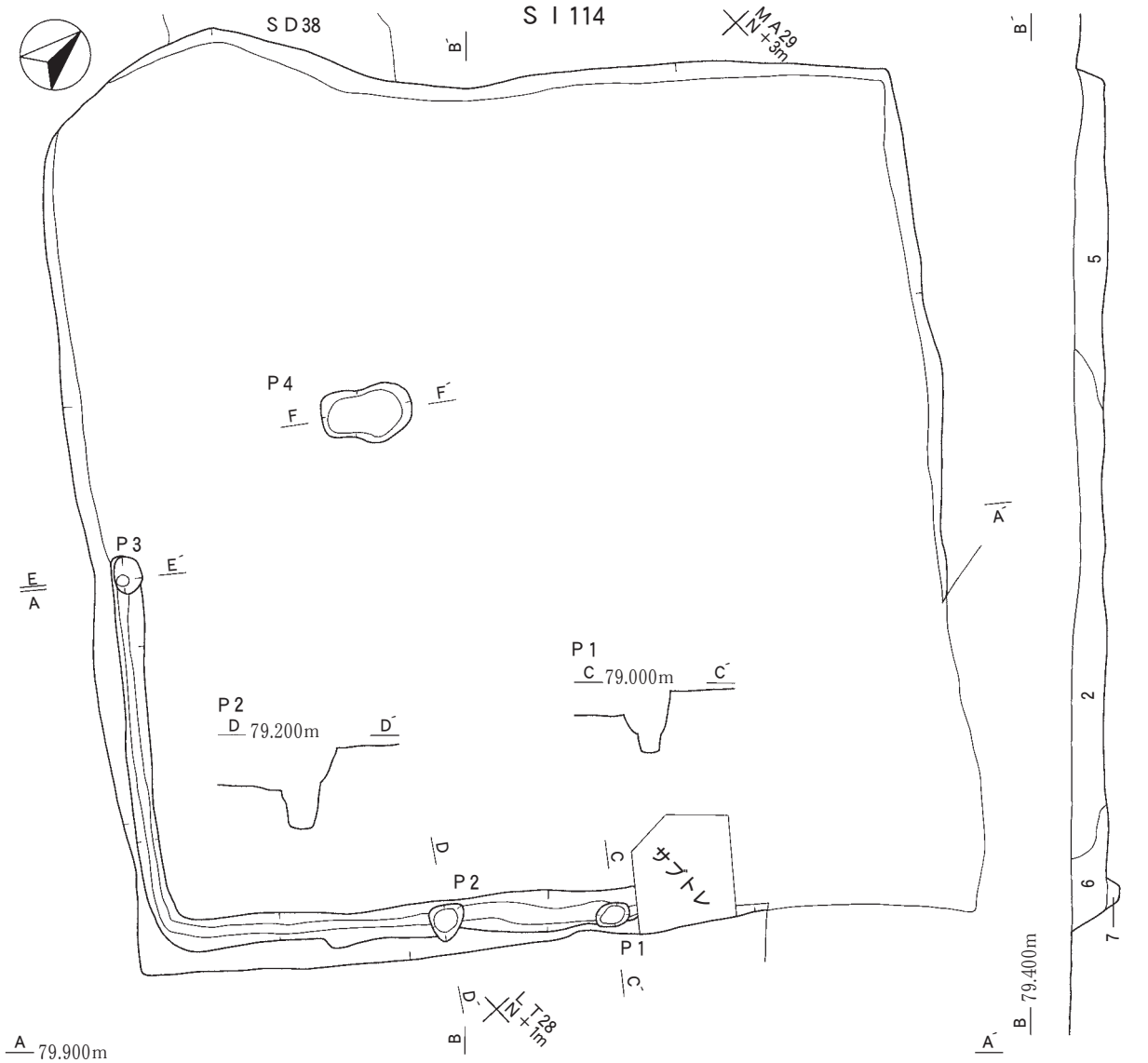
平面形は、住居東隅が崩落により壁が失われているが、北西壁南西部がやや張り出して、不整な台形になる。南東壁に直交する主軸方位はＮ－38°－Ｅで、主軸とこれに直交するラインで測る面積は約36㎡である。各壁の長さは北東壁約6.0m、南東壁約6.0m、南西壁約5.9m、北西壁約6.0mである。各壁の検出面からの深さは、北東壁約0.2m、南東壁約0.2m、北西壁約0.2mであるが、斜面上位の南西壁は約0.6mである。各壁ほぼ垂直に立ち上がる。

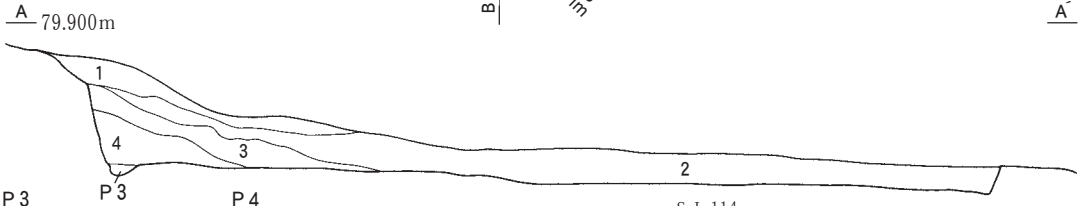
床面は、掘形底面の地山面を平坦に整えて利用している。東隅は斜面下位に当たり、床面レベルでもⅣ層が残るため､貼床を施している。壁溝は南西壁の一部と南東壁の一部で確認した。幅0.2～0.3m、床面からの深さは約0.1mである。

床面及び壁溝内で４個のピットを確認した。Ｐ１～3は南西壁の一部と南東壁の一部を巡る壁溝内



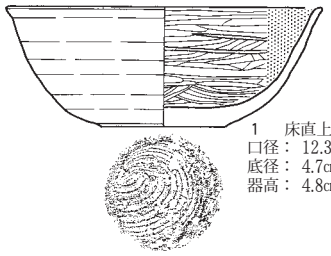
第69図　ＳＩ113出土遺物



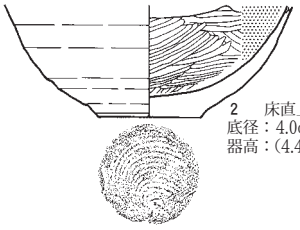


ＳＩ114
1　黒色土（10YR2／1）しまり中　粘性中　小礫少量含む
2　黒褐色土（2.5Y3／1）しまり強　粘性強　炭化物粒・地山土粒多量含む
3　黒褐色土（2.5Y3／2）しまり強　粘性強　地山土粒・暗褐色土塊多量含む
4　黒褐色土（2.5Y3／1）しまり中　粘性中　炭化物粒・地山土粒多量含む
5　暗灰黄色土（2.5Y4／2）しまり強　粘性強　小礫多量含む
6　暗灰黄色土（2.5Y4／2）しまり中　粘性弱　地山土粒多量含む
7　明黄褐色土（10YR6／8）しまり中　粘性中

P3
1　暗灰黄色土（2.5Y5／2）
　しまり弱　粘性弱
　崩落礫多量含む



1　床直上
口径：12.3cm
底径：4.7cm
器高：4.8cm



2　床直上
底径：4.0cm
器高：(4.4)cm

3　3層
長：(91)mm　幅：15mm
厚：7mm　重量：24.0g

0　(S＝1／50)　2m

0　(S＝1／3)　10cm

第70図　ＳＩ114・出土遺物

に位置しており、壁板保持に関わる柱穴とみられる。Ｐ４は床面中央部からやや西寄りの位置にあり、床面からの深さは約0.1mである。配置が不規則であり、柱穴ではないと考えられる。なお、本住居跡に伴うカマドは確認されなかった。

本住居跡はカマドをもたず、比較的大型の竪穴掘り込みをもつにも関わらず主柱構造が不明である。このことから、住居というよりは作業小屋のような機能を持っていたと推測する。廃絶後は自然堆積により埋没している。

遺　物（第70図）　堆積土中に混入する遺物はほぼ皆無で、意図的に配置したとみられる坏２点と鉄製品１点のみが出土した。

70図１・２は坏Ｂ類である。１はほぼ完形の資料で、底部がわずかに突出して、胴下部が丸みを帯て口縁部にむけて外傾して立ち上がり、口端がわずかに外反する。外面のロクロ目は凹凸が少なく、工具により平滑に仕上げたものとみられる。内面には底部付近に井桁状に、胴部から口縁部にかけては横位にミガキを施す。内面口縁部下には２条の沈線様の凹みが巡る。２は口縁部を欠損する資料で、比較的底径の小さい底部から胴下部が湾曲して立ち上がり、胴上部に向けて外傾する。内面には横位にミガキを施す。胴下部の器壁が厚く、胴上部にかけては極端に薄くなる。

70図３は鉄製品で、返しが付くことから銛と考えられる。

（２）柱列

ＳＡ119（第71図、図版27）

遺　構　ＭＦ28・29、ＭＧ29グリッドの第Ⅳ層中位で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面中央部だが、調査区外丘陵部から続く山麓緩斜面に当たるため、北西側にやや傾斜している。なお本遺構のＰ４は、上部が撹乱により削平されている。重複する遺構はなく、周辺にはＳＩ23・24・25・26・27・29・115、ＳＤ33・137がある。

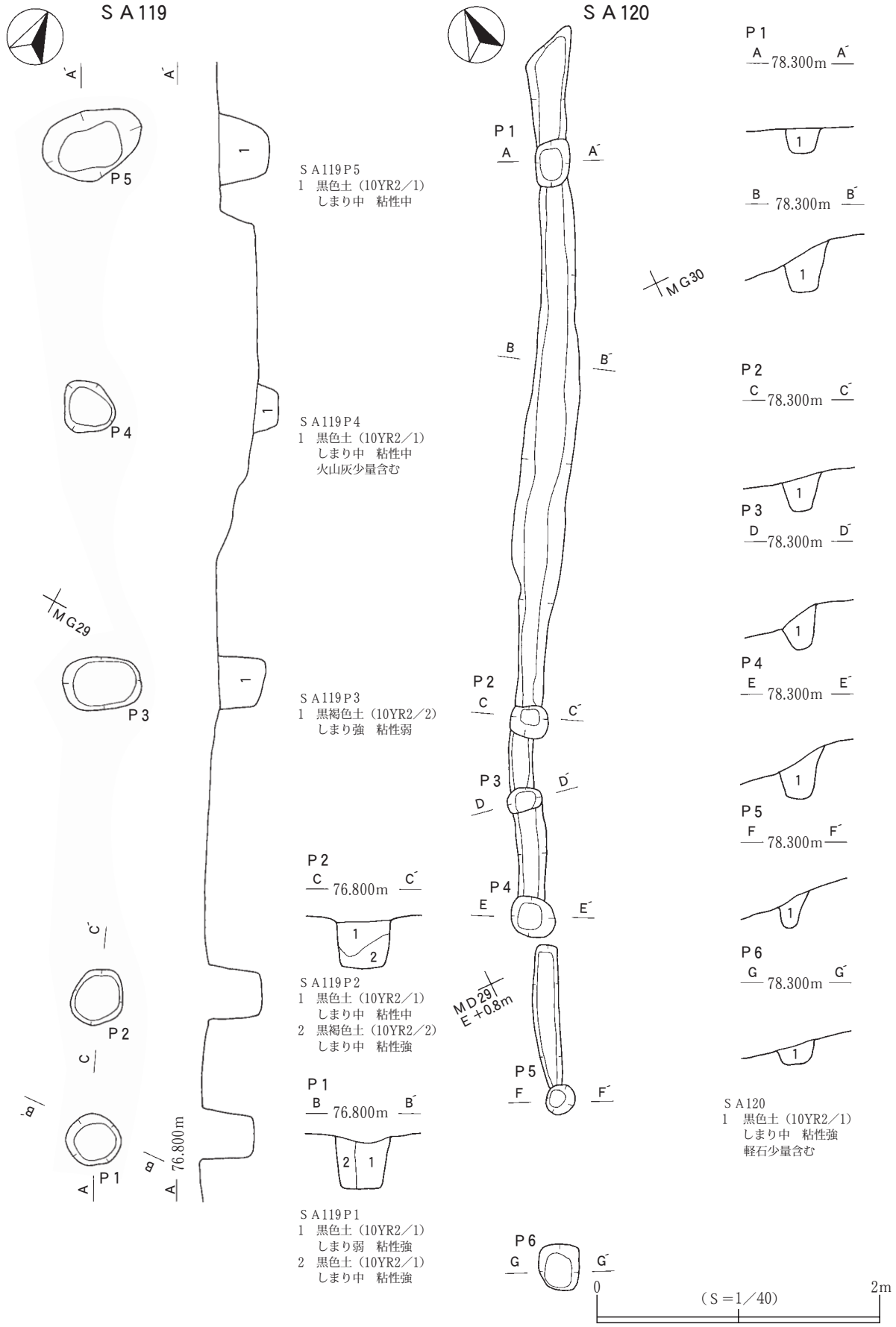
確認した柱穴は５個で、いずれの柱穴も地山面をわずかに削って底面としている。これら５個の柱穴中心を結んだ主軸方位は、Ｎ－29°－Ｗである。確認できた全体の長さは、Ｐ１－５間で約7.0mである。各柱穴間の距離を柱穴中心間で測ると、Ｐ１－２間がやや短く約1.0m、Ｐ２－３間約2.2m、Ｐ３－４間約2.0m、Ｐ４－５間約1.8mで、Ｐ１－２間を除いて間隔は概ね一致する。

本遺構は、５個の柱穴で構成される柱列である。Ｐ５から北西は調査区外であり、調査区外に延びる可能性もある。主軸方位では、ＳＩ24・26とほぼ同じであることから、本遺構はこれらを区画する板塀等の施設だったと考えられる。なお、Ｐ１－２間の間尺が短いのは、調査区外丘陵部から延びる山麓緩斜面に当たることに関わる可能性がある。

遺　物　本遺構に伴う遺物は検出できなかった。

ＳＡ120（第71図、図版27）

遺　構　ＭＣ28～30グリッドの第Ⅴ層中位で確認した。本遺構の立地点は、調査区外丘陵部の北西山麓緩斜面に当たり、北西側へ傾斜している。ＳＩ28と重複すると考えられるが、重複部分が撹乱により壊されているため、新旧関係は不明である。周辺にはＳＩ24・25・112・114・115、ＳＤ33・38がある。



第71図　ＳＡ 119・120

当初は溝跡と考えたが、溝の底面に柱穴があることから柱列に伴う布掘跡と考えた。溝状の掘り込み内部と外部で柱穴を６個確認した。Ｐ１とＰ６の中心を結んだラインを主軸線とした場合、主軸方位はＮ－26°－Ｅとなる。確認できた全体の長さは約9.0mである。各柱穴間の距離を柱穴中心間で測ると、Ｐ１－２間約3.9m、Ｐ２－３間約0.5m、Ｐ３－４間約0.8m、Ｐ４－５間約1.3m、Ｐ５－６間約1.3mで、間尺は不規則である。

溝状の掘り込みは北北東－南南西方向に延びている。Ｐ４－５間で一度途切れ、Ｐ５－６間はつながっていない。Ｐ４－５間で浅くなることから、南西部にかけては上部が欠失していると考えられる。幅は0.2～0.4m、深さは浅いところで約0.1m、深いところで約0.2mである。

各柱穴・溝の堆積土は、軽石を含む黒色土の単層であり、各柱穴に柱痕を確認できなかったことから、本遺構は廃絶時に柱を抜き取ったと考えられる。

本遺構は６個の柱穴と溝から構成される柱列である。各柱穴間の距離では、Ｐ４－５間とＰ５－６間の間尺が共通するが、他の柱穴間の間尺に整合性が見られない。特にＰ１－２間の間尺は間隔が開く。他の遺構との関係で検討すると、道跡と考えられるＳＤ38が、本遺構のＰ１－２間に当たっており、通路のための開放部と想定される。このことから、本遺構はＳＤ38と一体となる区画施設と考えられ、調査区外丘陵部北麓に位置するＳＩ112・113・114と、集落の主体部を区画する施設だったと想定される。おそらくＳＤ32・33掘削時には機能を失ったとみられる。

遺　物　本遺構に伴う遺物は検出できなかった。

（３）溝跡

ＳＤ32（第72図、図版27）

遺　構　ＭＨ25、ＭＩ24・25グリッドの第Ⅳ層中位で、黒色土の範囲で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の中央部に当たり、ほぼ平坦な地形である。ＳＩ21と重複し、本遺構の方が新しいが、ＳＩ21調査段階で明確に平面確認できなかったため一括して掘り下げており、ＳＩ21上部における形状は不明である。ＳＤ33は本遺構の北東にあり、検出面が低いため途切れているが、本来は一体の溝だったと考えられる。

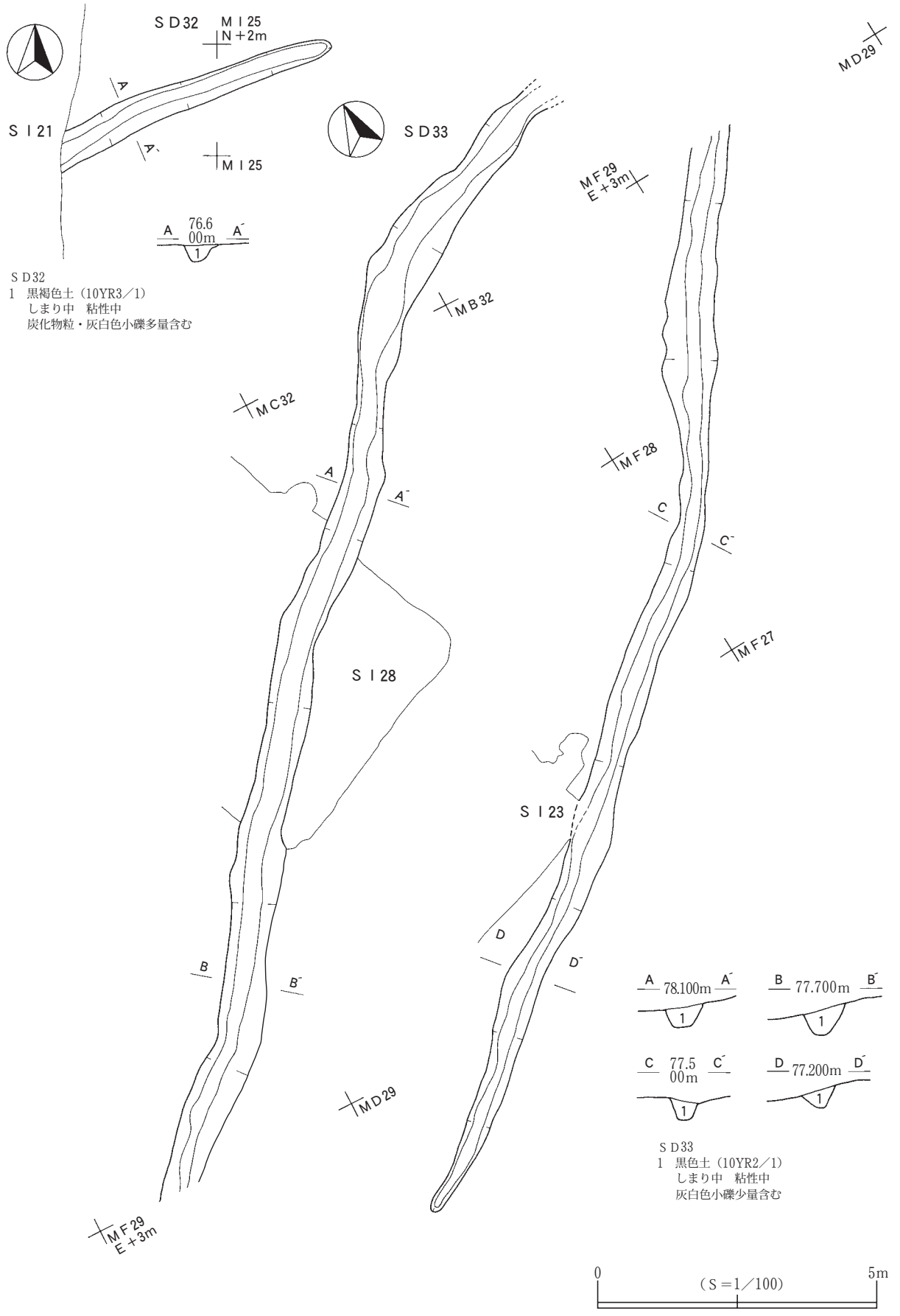
確認した範囲も、本来の検出面以下での検出になっている。基本土層確認断面の観察では、断面形がＶ字で、本来の検出面からは約0.6mの深さで堆積土が２層に分かれることを観察した。その堆積状況から自然堆積による埋没が想定される。確認した範囲での規模は、全体長約5.1m、幅約0.5m、検出面からの深さは約0.3mである。

本遺構は、全体長約5.1m以上の溝である。本来はＳＤ33と一体で、北西－南東方向に延びる台地を横断するとみられる。調査区外丘陵部との関係から、集落範囲の東端を区画する施設と考えられる。一部竪穴住居跡を掘り込むことから、集落の新しい段階に伴うと想定される。

遺　物　本遺構に伴う遺物は検出できなかった。

ＳＤ33（第72図、図版27）

遺　構　ＭＡ32グリッドを北東端とし、ＭＨ25グリッドを南西端とする範囲で、小礫を含む黒色土の広がりで確認した。確認面は場所により違いがあるが、基本的に第Ⅳ層中位である。本遺構の立地点


ＳＤ32
ＭＩ25
Ｎ＋2m
ＳＩ21
ＭＩ25
ＳＤ33
ＭＤ29
ＭＦ29
Ｅ＋3m
A
76.6
00m
A´
1
ＳＤ32
1　黒褐色土（10YR3／1）
しまり中　粘性中
炭化物粒・灰白色小礫多量含む
ＭＢ32
ＭＣ32
ＭＦ28
ＭＦ27
ＳＩ28
ＳＩ23
B
B´
D
D´
ＭＤ29
ＭＦ29
Ｅ＋3m
A
78.100m
A´
B
77.700m
B´
C
77.5
00m
C´
D
77.200m
D´
ＳＤ33
1　黒色土（10YR2／1）
しまり中　粘性中
灰白色小礫少量含む
0
（Ｓ＝1／100）
5m

第72図　ＳＤ 32・33

は、台地上部平坦面の北東端から中央部にかけてである。ＳＩ23・28と重複し、いずれよりも本遺構の方が新しい。周辺にはＳＩ21・22・24・25・112・115、ＳＡ119・120、ＳＤ38がある。なお、ＳＤ32とは本来一体の溝だったと考えられる。

堆積土は１層のみ確認した。灰白色の小礫を含む黒色土で、自然流入土と考えられる。規模は、全長約40.4m、幅は0.4～1.0m、検出面からの深さは浅いところで約0.1m、深いところで約0.7mである。第Ⅵ層の地山面を底面とする北東部では、工具痕が認められる。

本遺構は、全体長約40.4mの溝である。本来はＳＤ32と一体で、本来はより深くＶ字の断面形状であり、北西－南東方向に延びる台地を横断するとみられる。調査区外丘陵部との関係から、集落範囲の東端を区画する施設と考えられる。一部竪穴住居跡を掘り込むことから、集落の新しい段階に伴うと想定される。

遺　物　内部から土師器甕が出土しているが、小破片のため図示しなかった。

ＳＤ38（第73図、図版27）

遺　構　ＭＡ29、ＭＢ29・30グリッドの第Ｖ層中位で、軽石粒を含む黒色土の広がりで確認した。本遺構の立地点は、調査区外丘陵部の北麓緩斜面に当たるため北西側に傾斜する。本遺構はこの傾斜方向に延びている。なお、本遺構の北西端は撹乱により削平されている。ＳＩ114と重複するが、明確な新旧関係は不明である。周辺にはＳＩ28・112、ＳＡ120、ＳＤ33がある。

堆積土は２層に分けた。１層は軽石粒を少量含む黒色の流入土で、自然堆積によって埋没したと考えられる。２層は軽石粒を少量含むにぶい黄褐色土で、強く硬化している。人為的な踏み締まりとみられ、２層は使用段階に堆積していたと考えられることから、人為的な造成土の可能性が高い。規模は、全長約6.4m、幅0.8～1.5m、検出面からの深さは浅いところで約0.1m、深いところで約0.2mである。

なお、２層を掘り下げた底面でピットを２個確認した。配置に規則性がなく、浅いことからみて、構築段階に地山にめり込んでいた礫を撤去した痕跡の可能性が高い。

本遺構は、全長約6.4mの溝である。２層硬化面の存在や、幅が0.8～1.5mあること、傾斜方向に平行して延びることから、道だったと考えられる。

遺　物　本遺構に伴う遺物は検出できなかった。

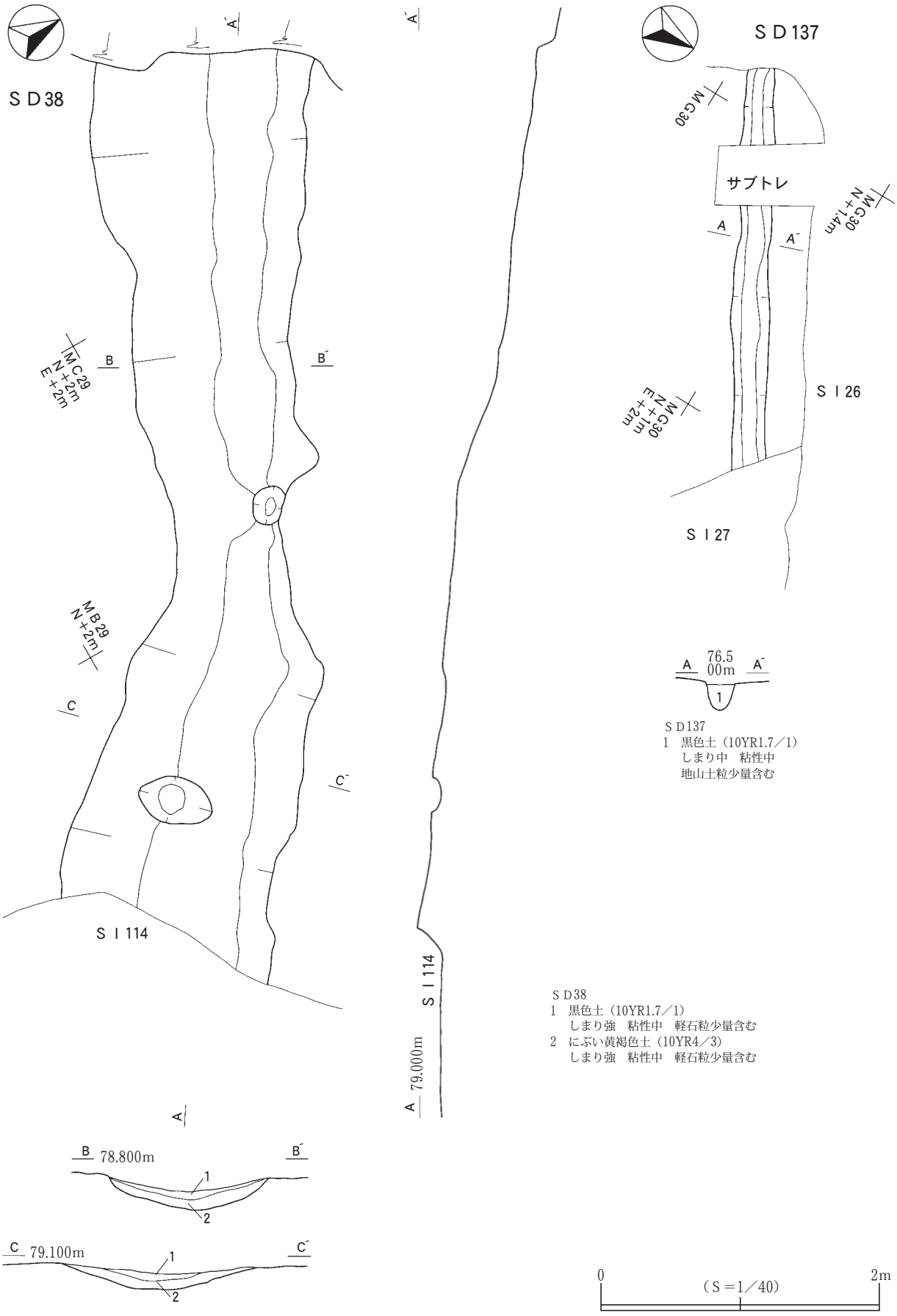
ＳＤ137（第73図）

遺　構　ＭＦ・ＭＧ30グリッドの第Ⅳ層で黒色土の広がりで確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面の中央部に当たりほぼ平坦である。ＳＩ26・27と重複するが、ＳＩ26よりも古いが、ＳＩ27との新旧関係は不明である。周辺にはＳＩ24・25・115・28・29、ＳＡ119がある。

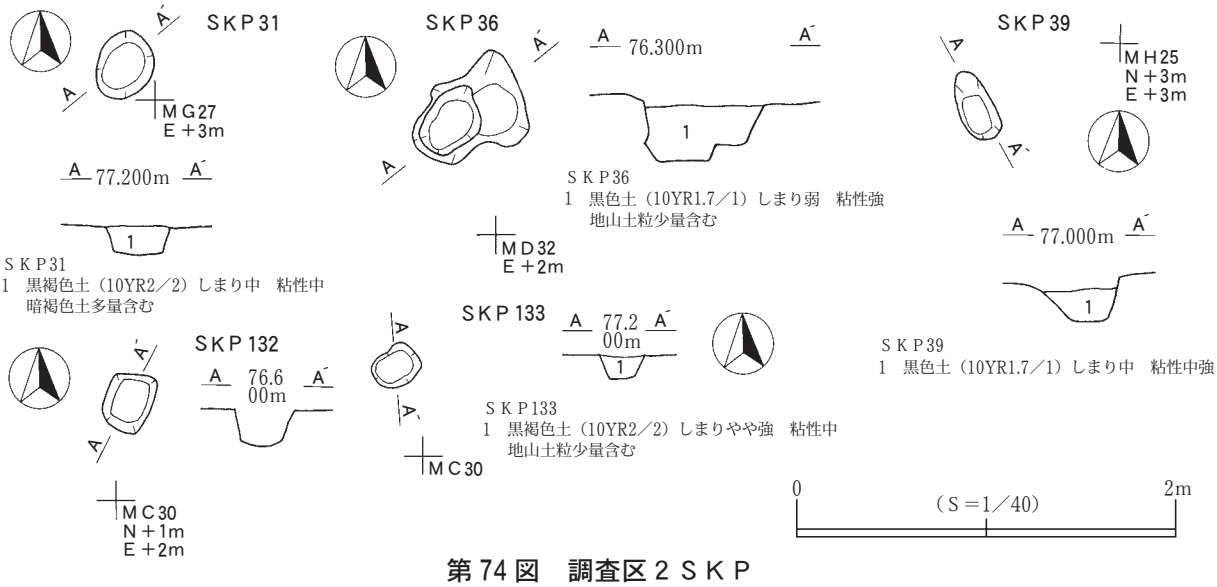
堆積土は１層のみで流入土とみられる。確認できた規模は、全体長約2.8m、幅0.2～0.3m、検出面からの深さは約0.2mである。

本遺構は全体長が約2.8m以上の溝で、本来はもっと長かったと想定される。

遺　物　本遺構に伴う遺物は検出できなかった。



第73図　ＳＤ 38・137



第74図　調査区２ＳＫＰ

（4）柱穴様ピット

本調査区で確認できた柱穴様ピットは５個である(第32・74図)。数が少ないため配置に規則性を見い出し難いが、ＳＫＰ132・133はＳＩ28の南東壁に平行して２個並ぶことから、これに伴う張り出し状の施設になる可能性がある。ＳＫＰ36はＳＩ27の北東側にあり、抜き取ったような痕跡が認められる。ＳＫＰ31・39は、ＳＤ33よりも南東側の調査区外丘陵部に近い位置に点在する。敢えて２個を関連付けて考えれば、ＳＤ33と平行するような配置であり、２個の延長線を北東側に進むとＳＡ120に当たることから、ＳＡ120が南西側に長く連続していたことを示す可能性がある。

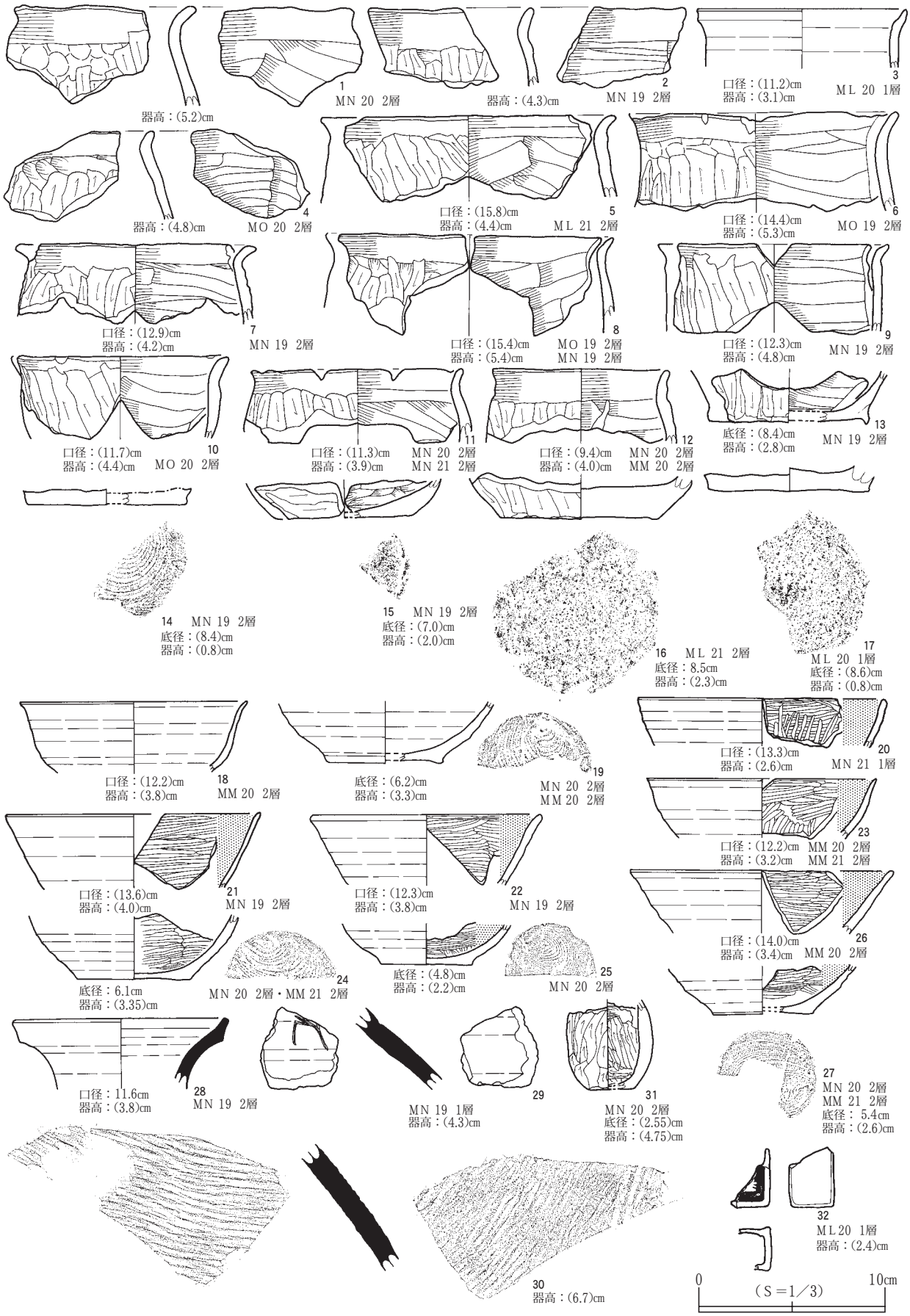
（5）捨て場

ＳＴ141（第32・75図）

遺　構　MK20・21、ML～MN19～22、MO18～21、MP18～20の範囲で確認した遺物包含層である。本遺構の立地点は、台地上部平坦面の南西縁に当たり、ＳＩ21南西部から続く緩い傾斜地である。本遺構下部には埋没沢があり、この埋没沢上層には比較的平坦に十和田ａ火山灰が堆積していることから、本遺跡集落の存在した平安時代には、沢地形は完全に埋没していたことが窺える。沢を最も厚く埋め尽くすのがⅣ層相当の土で、傾斜が緩く黒色土が深いことから、施設建設には不適と判断したため、廃棄物の捨て場として利用したものと考えられる。

主な遺物分布範囲は22ラインより南側である。

遺　物(第75図)　堆積土から縄文土器、土師器、須恵器、磁器が出土した。縄文土器は本節２に掲載したが、おそらく平安時代の集落造営に絡んで、排土にまぎれて投棄したものと考えられる。磁器は小破片が１点のみであり、後世のまぎれ込みと考えられる。出土量からみて平安時代のものが圧倒的に多く、本遺構が平安時代に形成された捨て場であるのは明らかである。遺物の主体は土師器甕と坏で、いずれもⅢ層火山灰上部から出土している。出土した遺物のほとんどが小破片であり、あまり接合しないことから投棄段階で破片の状態だったと想定される。なお､最も出土量の多い土師器甕だが、中でも比較的小型のものが目立つ。また土師器坏では、Ａ類が少なくＢ類が多い傾向にある。須恵器は少量出土しているが、鉄製品はほとんど出土していない。



第 75 図　ＳＴ 141 出土遺物

75図１・２・４は土師器甕の口縁部破片である。いずれも胴上部が内傾し、頸部がくびれて口縁部が外反する器形で、１・２が比較的長く、３が比較的短く口縁部が外反する。75図３・５～12は復元実測できた口縁部資料で、比較的小型の土師器甕である。３は内外面共にロクロ目をとどめる。４～８は胴上部が内傾して、頸部でくびれて口縁部が短く外反する。９は胴部が直立気味に立ち上がる。10は胴部から外傾し、頸部がわずかに段状にくびれて、口縁部が短く外反する。11・12は口縁部が直立気味に立ち上がる器形である。以上の口縁部資料は、３を除いていずれも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。75図13～17は土師器甕の底部で、14は回転糸切痕を、15は木葉痕をとどめる。16・17は砂底である。13は上底状で、底面はナデにより調整している。

75図18～27は土師器坏で、18・19がＡ類、20～23がＢ類である。18は胴下部が張り出して胴部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。20は口縁部が内湾気味に立ち上がり、21は口端がわずかに外反する。22～24は直線的に外傾する器形である。内面のミガキは、20・23で胴下部に縦方向のミガキが認められる以外、横位に施している。19・24・25・27は全て回転糸切痕をとどめる。

75図28～30は須恵器である。28は壺の口縁部破片で、口縁部側面には斜位の面を形成する。29・30は甕の肩部破片とみられる。29は破片上部に線刻が認められるが、全体像は不明である。75図31は小型土器で、内外面共に縦位ケズリ調整である。

75図32は磁器で、箱型のものの破片である。上面には染付けによる模様の一部が認められる。

（６）遺構外出土遺物

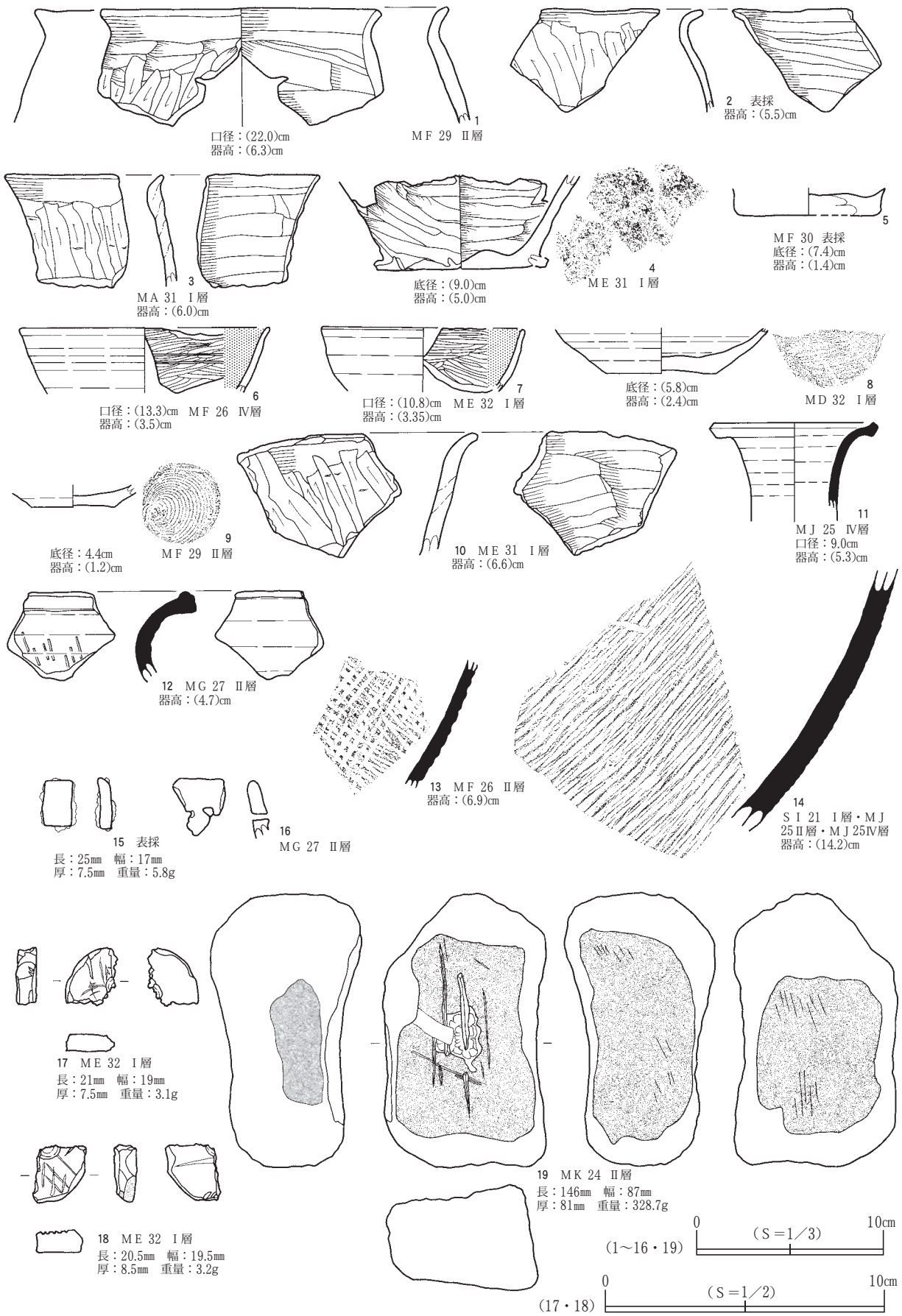
遺構外出土遺物は少なく、また主な出土位置は遺構周辺の確認面付近である。

76図１は比較的大型の土師器甕で、胴上部が内傾して頸部で屈曲し、口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。76図２・３は土師器甕の口縁部破片である。２は胴上部が内傾して頸部で直立気味に立ち上がり、口縁部が強く外反または外折する。３は口縁部まで内湾し、口端がわずかに外反する。どちらも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。76図４・５は土師器甕の底部である。４は砂底で、５はケズリによる再調整を施す。４は底部外縁が張り出す形状である。

76図６～９は土師器坏で、８はＡ類、６・７・９はＢ類である。６・７は口縁部資料で、７は口縁部が内湾直立し、６はわずかに外反する。どちらも内面には横・斜位のミガキを施す。８・９は底部資料で、８は静止糸切痕を、９は回転糸切痕をとどめる。76図10は土師器鍋の口縁部破片である。胴上部は直線的に外傾して、口縁部が弱く外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

76図11～14は須恵器である。11は壺の口縁部破片である。頸部は直立して口縁部が強く外反し、口端が肥厚する。12は甕の口縁部破片で、頸部から口縁部にかけて強く外反し、口端が肥厚する。13・14は甕の胴部破片である。

76図15は鉄製品で、長方形の板状のもので用途は不明である。76図16は土製品で、扁平な円盤形の部分的な破片で、一部に貫通孔が認められる。76図17・18は石製品で、おそらく同一個体とみられる。扁平な円盤形で、円中央部には円形の抉りがある。また、平坦面には不規則に擦痕が認められる。76図19は砥石である。角柱状の礫を用いており、四側面に摩擦の痕跡がある。また一側面には、敲打痕や筋状の擦痕も認められる。

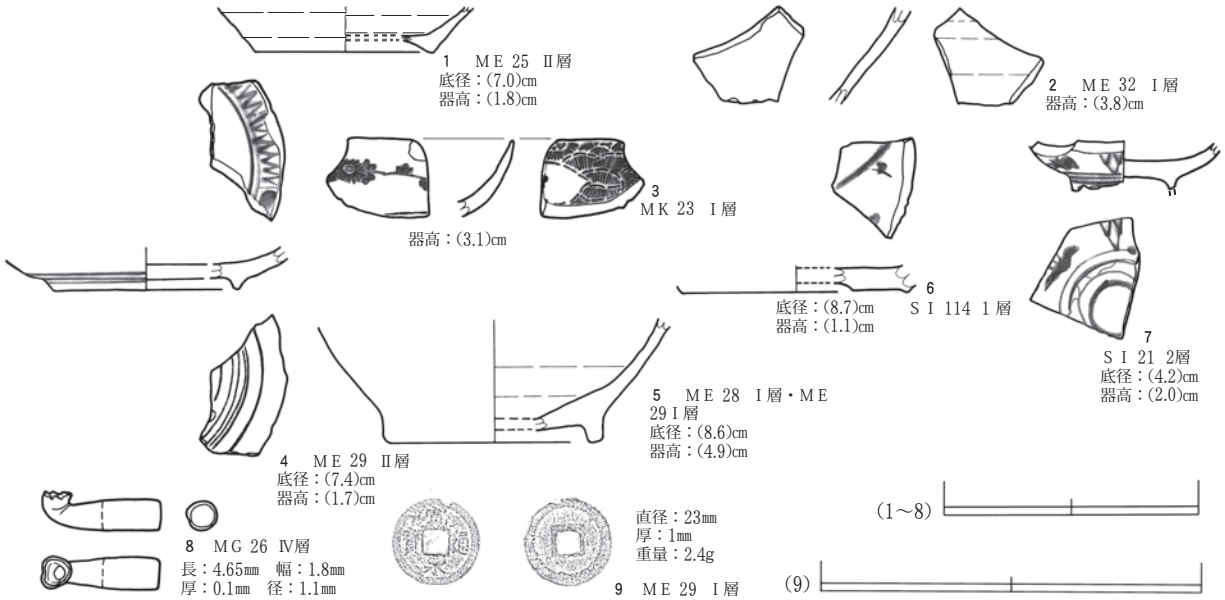


第 76 図　調査区２遺構外出土遺物（平安時代）

４　平安時代以降の出土遺物

平安時代以降の遺物は、ほぼ全て近世以降のものとみられる。調査区内から散発的に出土しており、いずれも破片であることから、近世以降には本調査区範囲内が荒地またはゴミ捨て場と化していたものと思われる。

77図１・２は陶器である。器種は不明だが、１は底部破片で、２は胴部破片である。77図３～７は磁器である。５は内面に釉がかからないことから、壺の底部破片とみられる。７は埦の底部破片で、外面側面に植物文が認められる。３・４・６は皿とみられる。３は口縁部破片で、内外面に植物文を施している。４は高台をもつ底部で、内外面に文様が認められる。６は蛇の目高台で、内面に文様がある。77図８はキセル、77図９は寛永通宝である。



第 77 図　調査区２遺構外出土遺物（平安時代以降）

第５章　自然科学分析

第１節　出土試料の放射性炭素年代測定

㈱加速器分析研究所

はじめに

狼穴Ⅲ遺跡から出土した炭化物を、加速器質量分析（AMS）法による放射性炭素（^{14}C）年代測定を実施した。

１　測定の意義

狼穴Ⅲ遺跡で出土・検出した試料をもとに、遺跡が営まれた時期および性格を特定するための客観的資料を得る。

２　遺跡の位置と測定対象試料

狼穴Ⅲ遺跡は、秋田県大館市釈迦内字狼穴21－１外（北緯40°18′23″、東経140°34′38″）に所在する。測定対象試料は、ＳＫ01底面堆積土（No.１：IAAA－62072）、ＳＫＦ03堆積土７層（No.２：IAAA－62073）、ＳＩ06カマド付近（No.３：IAAA－62074）、ＳＩ07堆積土１層（No.４：IAAA－62075）、ＳＫＦ92堆積土１層（No.５：IAAA－62076）、ＳＫＦ93堆積土１層（No.６：IAAA－62077）、ＳＩ21床面ＲＣ82（No.７：IAAA－62078）、ＳＩ22床面堆積土（No.８：IAAA－62079）、ＳＩ23堆積土４層上面（No.９：IAAA－62080）、ＳＩ24堆積土１層（No.10：IAAA－62081）、ＳＩ25床面堆積土（No.11：IAAA－62082）、ＳＩ26カマド付近（No.12：IAAA－62083）、ＳＩ27床面堆積土（No.13：IAAA－62084）、ＳＩ 28堆積土１層（No.14：IAAA－62085）から出土した炭化物、合計14点である。

なお、ＳＩ26カマド付近から出土した炭化物（No.12：IAAA－62083）は、炭素重量不足のため測定できなかった。

３　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001 ～ 1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90 ℃で乾燥する。

３）試料を酸化銅１gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し、グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

４　測定方法

測定機器は、㈱加速器分析研究所白河分析センターの３MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用した。この装置は、134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により$^{13}C/^{12}C$の測定も同時に行う。

５　算出方法

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

２）BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

３）付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、χ２検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

４）$\delta^{13}C$の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される$\delta^{13}C$の値を用いることもある。

$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R) / ^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB}) / ^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$ は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = ^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、$\Delta^{14}C$は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である（１）式の^{14}C濃度を、$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$$ **（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）**

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$$ **（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）**

$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - ^{14}A_R) / ^{14}A_R] \times 1000(‰)$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon)がよく使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000 (‰)$

$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100 (\%)$

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age；yrBP)が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln (pMC / 100)$

５）^{14}C年代値と誤差は、１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

６）較正暦年代の計算では、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv3.10較正プログラム(Bronk Ransey1995 Bronk Ransey2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001)を使用した。

６　測定結果

ＳＫ01底面堆積土から出土した炭化物(No. １：IAAA－62072)が980±30yrBP、ＳＫＦ03堆積土７層から出土した炭化物(No. ２：IAAA－62073)が3520±40yrBP、ＳＩ06カマド付近から出土した炭化物(No.3：IAAA－62074)が1360±30yrBP、ＳＩ07堆積土１層から出土した炭化物(No.4：IAAA－62075)が1100±40yrBP、ＳＫＦ92堆積土１層から出土した炭化物(No.5：IAAA－62076)が3490 ± 40yrBP、ＳＫＦ93堆積土１層から出土した炭化物(No.6：IAAA－62077)が3560±40yrBP、ＳＩ21床面ＲＣ82から出土した炭化物(No. ７：IAAA－62078)が1230±30yrBP、ＳＩ22床面堆積土から出土した炭化物(No.8：IAAA－62079)が1140±30yrBP、ＳＩ23堆積土4 層上面から出土した炭化物(No.9：IAAA－62080)が1110±30yrBP、ＳＩ24堆積土１層から出土した炭化物(No.10：IAAA－62081)が1200±40yrBP、ＳＩ25床面堆積土から出土した炭化物(No.11：IAAA－62082)が1270±30yrBP、ＳＩ27床面堆積土から出土した炭化物(No.13：IAAA－62084)が1390 ± 30yrBP、ＳＩ28堆積土１層から出土した炭化物(No.14：IAAA－62085)が1320±30yrBPの^{14}C年代である。ＳＫＦ03、ＳＫＦ92、ＳＫＦ93は最も古い年代の遺構であり、縄文時代後期中葉に相当する。ＳＩ06、ＳＩ27出土試料は、暦年較正年代(1σ)で620AD ～ 685ADであり、飛鳥時代後半に相当する。ＳＩ25、ＳＩ28出土試料は、650AD ～ 775ADに含まれ、飛鳥時代末～奈良時代に相当する。ＳＩ21、ＳＩ24出土試料は、710AD ～ 890ADであり、奈良時代から平安時代前期前半に相当する。ＳＩ22、ＳＩ23出土試料は、880AD ～ 980AD

であり、平安時代前期後半に相当する。ＳＩ07出土試料は、895AD ～ 925AD（25.8 %）・935AD ～ 985AD（42.4%）であり、平安時代中頃に相当する。ＳＫ01出土試料は、1010AD ～ 1050AD(30.4%)・1080AD ～ 1150AD(37.8%)であり、平安時代後期後半に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代であると考えられる。

《参考文献》
Stuiver,M.and Polash,H.A.(1977)Discussion:Reporting of 14C data.Radiocarbon,19:355-363
Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2) 425-430
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A) 355-363
Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates , Radiocarbon, 43 (2A) 381-389
Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058

IAA Code No.	試料番号	Libby Age（yrBP）	補正なし（ｙｒBP）	δ^{13}C（‰）	暦年較正１σ（yrcalBP）	暦年較正２σ（yrcalBP）
IAAA-62072	1	980±30	710±30	−8.58±0.79	1010AD-1050AD(30.4%) 1080AD-1150AD(37.8%)	990AD-1160AD(95.4%)
IAAA-62073	2	3520±40	3490±40	−23.29±0.84	1910BC-1860BC(21.7%) 1850BC-1770BC(46.5%)	1950BC-1740BC(95.4%)
IAAA-62074	3	1360±30	1370±30	−26.05±0.85	645AD-685AD(68.2%)	610AD-710AD(89.1%) 740AD-770AD(6.3%)
IAAA-62075	4	1100±40	990±30	−18.53±0.87	895AD-925AD(25.8%) 935AD-985AD(42.4%)	880AD-1020AD(95.4%)
IAAA-62076	5	3490±40	3470±40	−23.94±0.92	1880BC-1750BC(68.2%)	1920BC-1730BC(90.5%) 1720BC-1690BC(4.9%)
IAAA-62077	6	3560±40	3460±40	−18.93±0.83	1960BC-1870BC(54.3%) 1850BC-1820BC(8.3%) 1800BC-1780BC(5.6%)	2020BC-1990BC(4.5%) 1980BC-1770BC(90.9%)
IAAA-62078	7	1230±30	1170±30	−21.43±0.93	710AD-750AD(16.3%) 760AD-870AD(51.9%)	680AD-890AD(95.4%)
IAAA-62079	8	1140±30	1050±30	−19.88±0.84	880AD-975AD(68.2%)	780AD-790AD(2.1%) 800AD-990AD(93.3%)
IAAA-62080	9	1110±30	1100±30	−24.33±0.81	890AD-925AD(28.2%) 935AD-980AD(40.0%)	870AD-1020AD(95.4%)
IAAA-62081	10	1200±40	1220±40	−26.21±0.77	770AD-890AD(68.2%)	680AD-900AD(91.4%) 920AD-950AD(4.0%)
IAAA-62082	11	1270±30	1200±30	−20.55±0.81	685AD-730AD(37.7%) 735AD-775AD(30.5%)	660AD-820AD(94.3%) 840AD-860AD(1.1%)
IAAA-62083	12	測定不可	−	−	−	−
IAAA-62084	13	1390±30	1350±30	−22.62±0.81	620AD-665AD(68.2%)	595AD-675AD(95.4%)
IAAA-62085	14	1320±30	1320±30	−24.47±0.69	650AD-710AD(53.2%) 740AD-770AD(15.0%)	640AD-780AD(95.4%)

第２表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

第２節　出土炭化材の樹種調査結果

㈱加速器分析研究所

1　試料

試料は秋田県狼穴Ⅲ遺跡から出土した用途不明品40点である。

2　観察方法

炭化材の数㎜立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3　結果

樹種同定結果（針葉樹３種、広葉樹２種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica D.Don*）（図版31）

（遺物No.1,3,7,9 ～ 12,17,18,20,21,24,26,27,31 ～ 33,36,40）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis sp.*）（図版32）

（遺物No.2,4 ～ 6,13,19,22,23,35,38）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3）ヒノキ科クロベ属クロベ（*Thuja standishii Carriere*）（図版34）

（遺物No.25,28,34）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に偏って接線状に存在する。柾目では放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に２～６個ある。放射柔細胞の水平壁が接線壁と接する際に水平壁は山形に厚くなり、接線壁との間に溝のような構造（インデンチャー）ができ、よく発達しているのが認められる。板目では放射組織は全て単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。クロベは本州、四国に分布する。

4）ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*）（図版33）

（遺物No.14 ～ 16,30,37）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～ 500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは２～３個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

５）ツバキ科ツバキ属（*Camellia sp.*）（図版34）

（遺物No.39）

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～ 40 μm）が、単独ないし２～３個接合して均等に分布する。放射組織は１～３細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔（とくに直立細胞）は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。板目では放射組織は１～４細胞列、高さ～１㎜以下からなり、平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ、サザンカ、チャがあり、本州、四国、九州に分布する。

６）針葉樹

（遺物No.29）

試料が微小であった為、木口面しか確認出来なかった。木口は仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。

７）針葉樹を含む炭化材の粉の塊

（遺物No.8）

炭化材が粉になったものが固まったもので、中に微小な木片が見られる。木片は板目面が見られ単列の放射組織と仮道管からなり、針葉樹と考えられる。

◆参考文献◆

島地　謙・伊東隆夫　「日本の遺跡出土木製品総覧」　雄山閣出版（1988）
島地　謙・伊東隆夫　「図説木材組織」　地球社（1982）
伊東隆夫　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」　京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田源　「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」　保育社（1979）
深澤和三　「樹体の解剖」　海青社（1997）
奈良国立文化財研究所　「奈良国立文化財研究所史料第27冊木器集成図録近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所　「奈良国立文化財研究所史料第36冊木器集成図録近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115

No.	出土地点	品名	樹種	No.	出土地点	品名	樹種
1	SI21 RC01	炭化材	スギ科スギ属スギ	21	SI21 RC63	炭化材	スギ科スギ属スギ
2	SI21 RC02	炭化材	ヒノキ科アスナロ属	22	SI21 RC65	炭化材	ヒノキ科アスナロ属
3	SI21 RC05	炭化材	スギ科スギ属スギ	23	SI21 RC66	炭化材	ヒノキ科アスナロ属
4	SI21 RC07	炭化材	ヒノキ科アスナロ属	24	SI21 RC67	炭化材	スギ科スギ属スギ
5	SI21 RC08	炭化材	ヒノキ科アスナロ属	25	SI21 RC68	炭化材	ヒノキ科クロベ属クロベ
6	SI21 RC09	炭化材	ヒノキ科アスナロ属	26	SI21 RC69	炭化材	スギ科スギ属スギ
7	SI21 RC10	炭化材	スギ科スギ属スギ	27	SI21 RC71	炭化材	スギ科スギ属スギ
8	SI21 RC11	炭化材	針葉樹を含む炭化材の粉の塊	28	SI21 RC72	炭化材	ヒノキ科クロベ属クロベ
9	SI21 RC13	炭化材	スギ科スギ属スギ	29	SI21 RC73	炭化材	針葉樹
10	SI21 RC20	炭化材	スギ科スギ属スギ	30	SI21 RC75	炭化材	ブナ科クリ属クリ
11	SI21 RC21	炭化材	スギ科スギ属スギ	31	SI21 RC76	炭化材	スギ科スギ属スギ
12	SI21 RC27	炭化材	スギ科スギ属スギ	32	SI21 RC77	炭化材	スギ科スギ属スギ
13	SI21 RC35	炭化材	ヒノキ科アスナロ属	33	SI21 RC79	炭化材	スギ科スギ属スギ
14	SI21 RC43	炭化材	ブナ科クリ属クリ	34	SI21 RC81	炭化材	ヒノキ科クロベ属クロベ
15	SI21 RC44	炭化材	ブナ科クリ属クリ	35	SI21 RC82	炭化材	ヒノキ科アスナロ属
16	SI21 RC45	炭化材	ブナ科クリ属クリ	36	SI21 RC84	炭化材	スギ科スギ属スギ
17	SI21 RC52	炭化材	スギ科スギ属スギ	37	SI21 RC86	炭化材	ブナ科クリ属クリ
18	SI21 RC53	炭化材	スギ科スギ属スギ	38	SI21 RC91	炭化材	ヒノキ科アスナロ属
19	SI21 RC57	炭化材	ヒノキ科アスナロ属	39	SI21 RC93	炭化材	ツバキ科ツバキ属
20	SI21 RC60	炭化材	スギ科スギ属スギ	40	SI21 RC94	炭化材	スギ科スギ属スギ

第３表　樹種同定結果

第６章　まとめ

今回の調査では、主に縄文時代と平安時代の遺構・遺物を確認した。

縄文時代の遺構は、全て貯蔵穴とみられるフラスコ状土坑で、出土遺物からみてⅢ群期以降のものである。意識的に小舌状台地先端部を利用している。同様に貯蔵穴が台地先端に集中的に分布する傾向は、本遺跡から北東へ約2.5㎞にある谷地中遺跡でも確認されている。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、柱列、溝跡などを確認した。集落を形成していたことは明らかで、調査区１と調査区２を結ぶ調査区外の範囲にも、同様な遺構が展開すると想定される。また住居には重複が認められ、調査区２のＳＩ24Ａ・ＢとＳＩ25・115では３回の重複を数える。このことから、集落の存続期間は比較的長いと考えられる。ただし調査範囲が狭く、その様相を細かく検討することは困難である。

大きな傾向として調査区ごとに遺構群変遷を概観すると、調査区１では、ＳＩ06･07が比較的古く、ＳＩ05・08・17が比較的新しい。調査区２では、住居群の南東側を画するＳＤ32・33との関係から、これと重複関係にあるＳＩ21・23・28や、溝の南東側に位置するＳＩ112・113・114が比較的古いとみられる。以上のことから、調査区１は一般的な住居が展開する区域から、小型の建物を主体とする区域に変わり、その区画施設としてＳＤ67が出現すると考えられる。調査区２も集落南東端部の区画施設であるＳＤ32・33の出現に合わせ、居住域を北西側へとずらしており、区画施設の出現が集落の一つの画期とみることができる。

今回の調査区は、調査区外南東部に小丘陵があることから、狼穴Ⅲ遺跡における平安時代集落の南東端に当たるとみられる。同じ台地上の北西側には狼穴Ⅳ遺跡が位置しており、そこまで集落が連続する可能性もある。狼穴Ⅳ遺跡で認められる住居群は、構造や時期がほぼ同じであり、また平成14年度調査範囲は集落の北西端に当たると考えられることから、本遺跡と併せて同じ集落跡の範囲に属する可能性が高い。そう考えた場合、南西側に隣接する台地上に展開する釈迦内中台Ⅰ遺跡と同様に、比較的大規模な集落であったことが想定される。

釈迦内中台Ⅰ遺跡と比較すると、土師器甕Ａ類が比較的古手の住居に伴う点、集落の比較的新しい段階に区画施設が出現する点で一致しており、似通った変遷過程を辿ることが想定される。遺跡の間隔が、最短距離で約20mしか離れておらず、ほぼ同時期とみられる出土遺物相からみて、両遺跡は狭い沢を挟んでほぼ同時期に存在し、緊密な関係にあったと考えられる。

《参考文献》
秋田県教育員会　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－上野遺跡－』秋田県文化財調査報告書第222集1992（平成４）年
秋田県教育員会　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－池内遺跡－遺構編』秋田県文化財調査報告書第268集 1997（平成９）年
秋田県教育員会　『一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－狼穴Ⅳ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第391集 2005（平成16）年
大館市教育委員会　『山王台遺跡』1990（平成２）年
大館市史編さん委員会　『大館市史』第１巻1979（昭和54）年

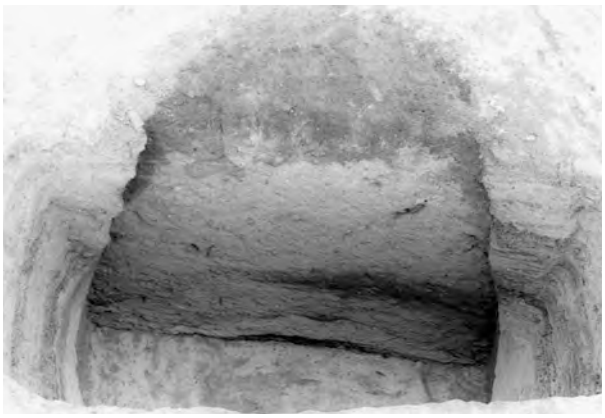
狼穴Ⅲ遺跡全景（北→）

調査区１・調査区２全景（真上→）

図版2

調査区１全景（真上→）

調査区２全景（真上→）



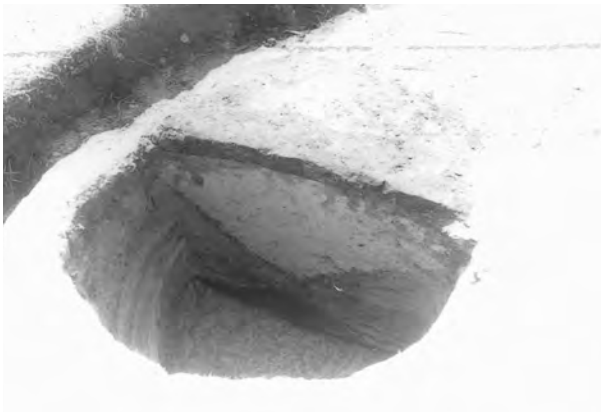
ＳＫＦ02断面（南→）

ＳＫＦ03断面（南→）

ＳＫＦ02全景（南→）

ＳＫＦ03全景（南→）

ＳＫＦ04断面（南西→）

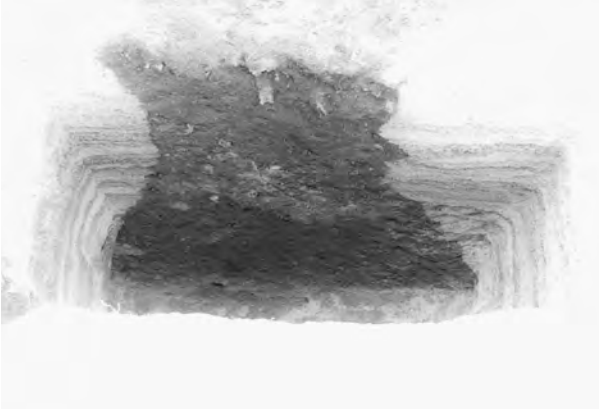


ＳＫＦ09断面（北→）

ＳＫＦ04全景（南東→）

ＳＫＦ09全景（西→）

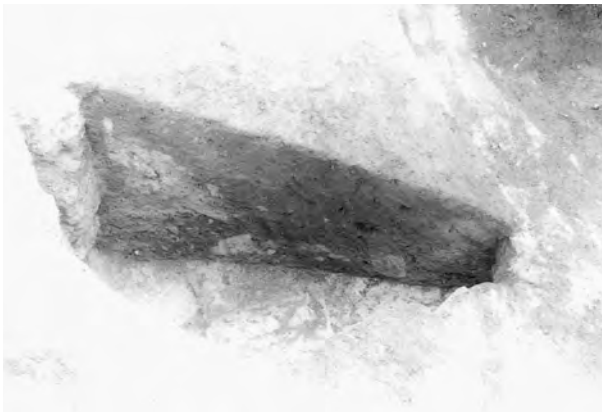
ＳＫＦ19断面（南→）



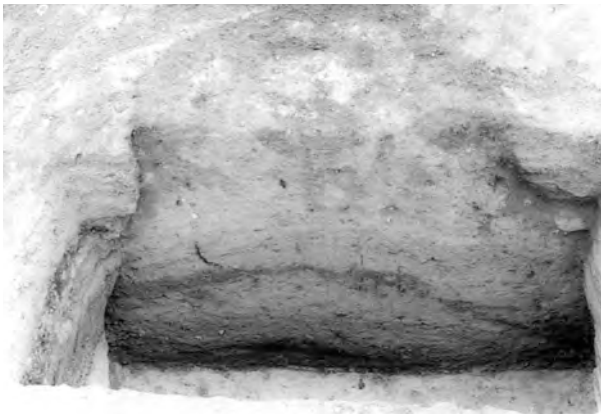
ＳＫＦ84断面（西→）

ＳＫＦ19全景（南→）

ＳＫＦ84全景（西→）



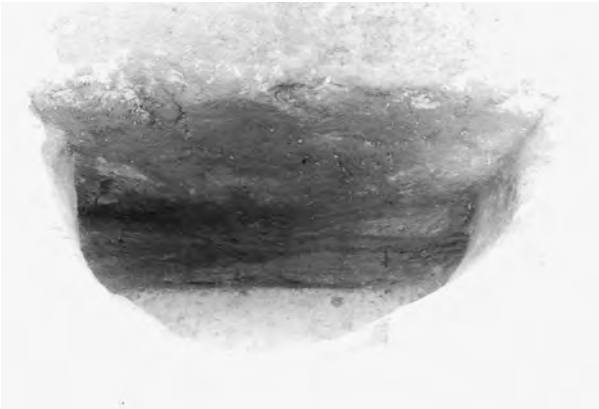
ＳＫＦ92断面（南→）



ＳＫＦ93断面（南東→）

ＳＫＦ92全景（西→）

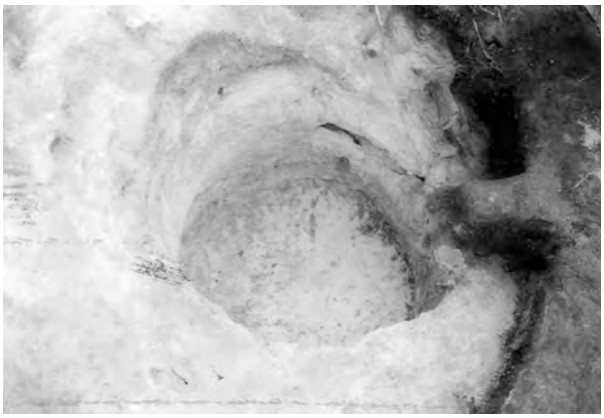
ＳＫＦ93全景（南東→）



ＳＫＦ94断面（南西→）

ＳＫＦ96断面（南→）

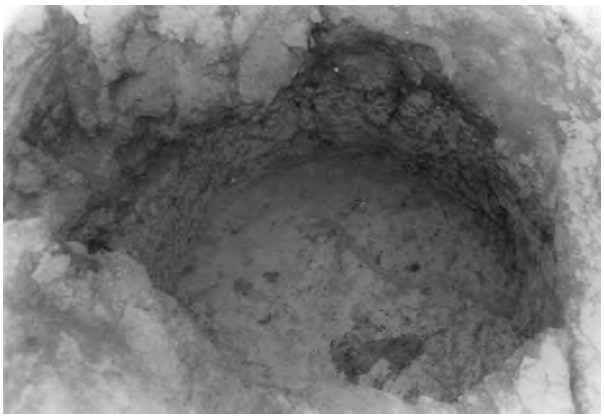
ＳＫＦ94全景（南西→）



ＳＫＦ96全景（西→）

ＳＫＦ128断面（南→）

ＳＫＦ34断面（西→）



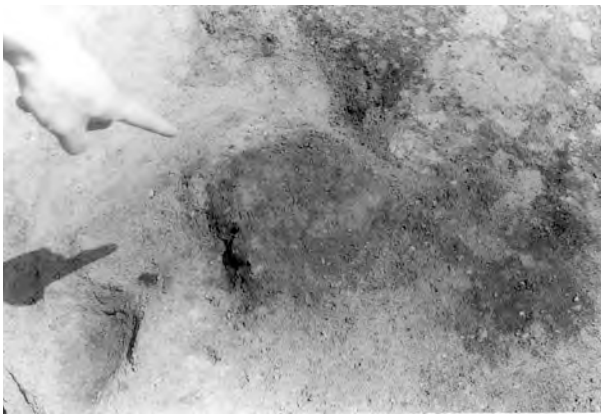
ＳＫＦ128全景（南→）

ＳＫＦ34全景（南西→）

ＳＩ05全景（南→）

ＳＩ05断面（南東→）

ＳＩ05・07確認（南→）



ＳＩ05焼土（南西→）

ＳＩ06全景（南→）

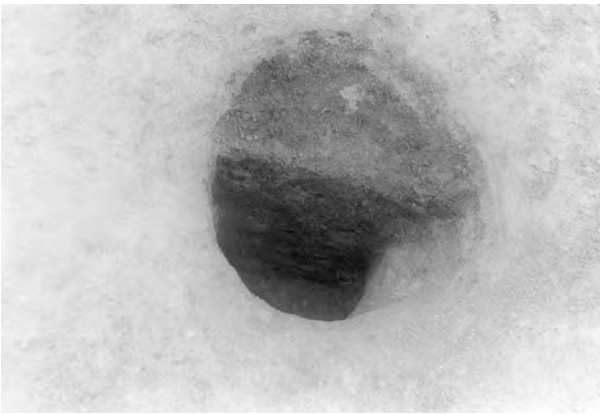
ＳＩ06断面（南東→）

ＳＩ06カマド遺物出土状況（北西→）

ＳＩ06カマド全景（北西→）

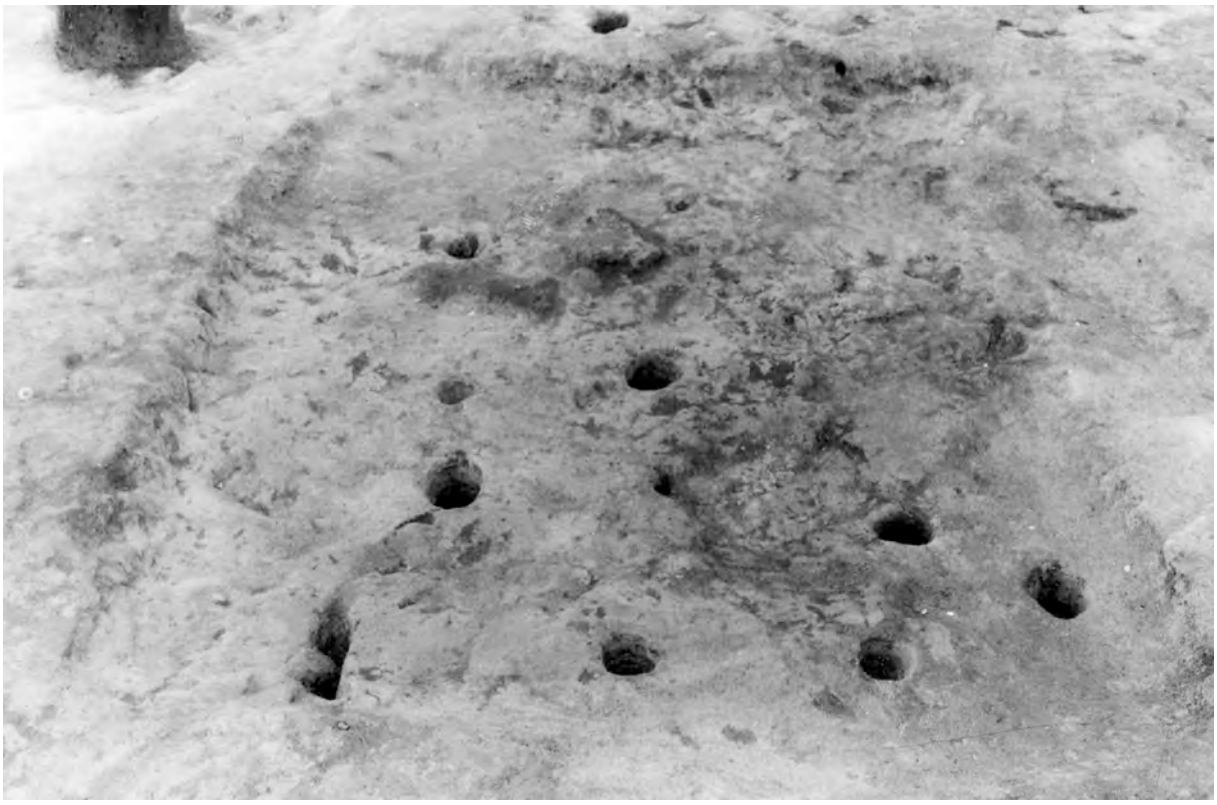
ＳＩ07全景（南→）

ＳＩ07断面（南東→）



ＳＩ07Ｐ3断面（北→）

ＳＩ07カマド全景（北→）

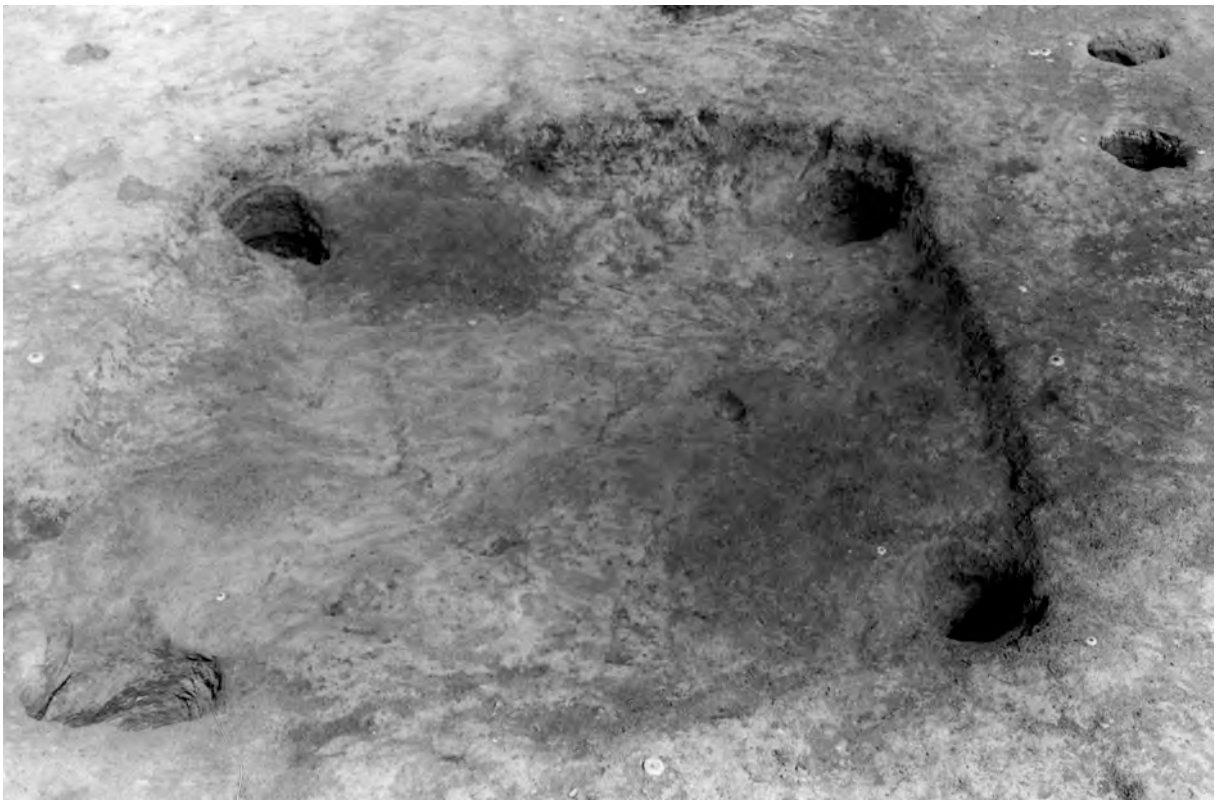


ＳＩ08全景（南東→）

ＳＩ08断面（南西→）

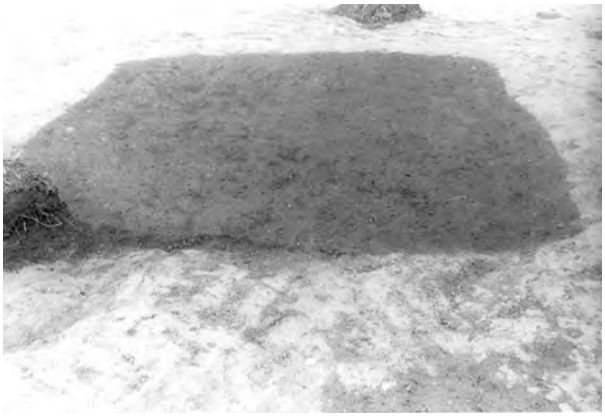
ＳＩ08・掘立柱確認（南西→）

ＳＩ08焼土（西→）



ＳＩ17全景（南東→）

ＳＩ17断面（南東→）

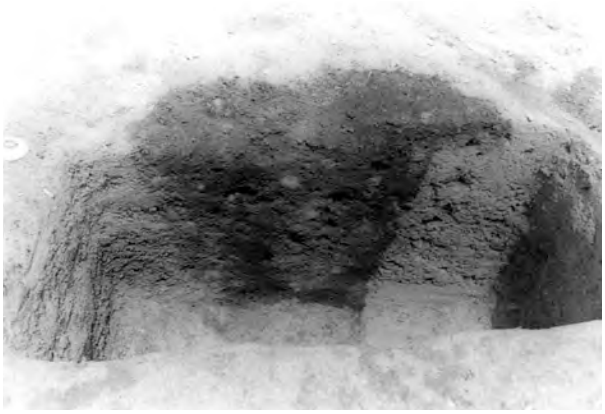


ＳＩ17確認（南東→）

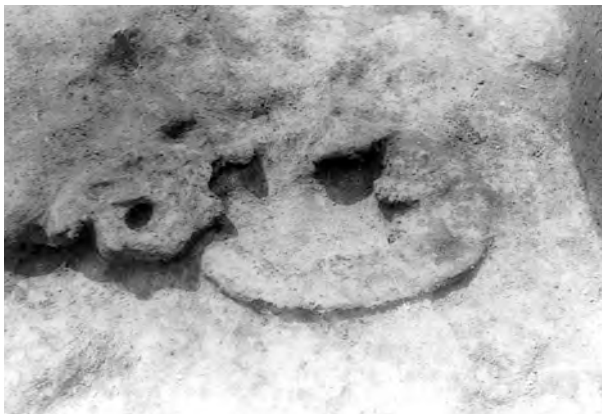
ＳＩ17Ｐ4断面（南東→）

ＳＢ101全景（北→）

ＳＢ102全景（南東→）

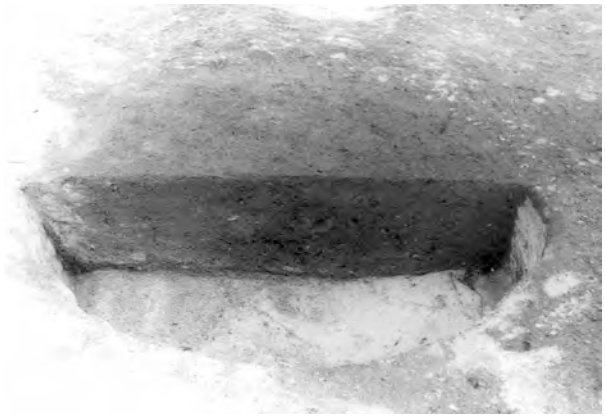


ＳＢ101Ｐ2断面（南東→）



ＳＢ102焼土（北→）

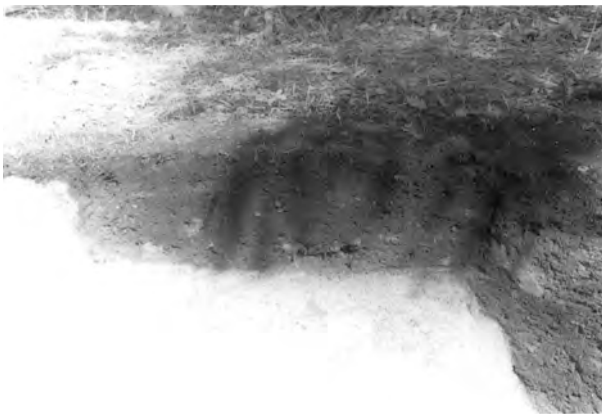
ＳＡ103全景（南→）



ＳＫ01断面（南→）

ＳＡ104全景（南→）

ＳＫ01全景（南→）



ＳＫ10断面（南東→）

ＳＫ18断面（南東→）

ＳＫ10・11全景（南西→）

ＳＫ18全景（南東→）

ＳＫ95全景（南→）

ＳＤ67全景（南東→）

ＳＫ110全景（南西→）

ＳＸ106全景（南→）

ＳＩ21全景（東→）

ＳＩ21断面（南→）

ＳＩ21カマド全景（北→）

ＳＩ21カマド支脚（北→）

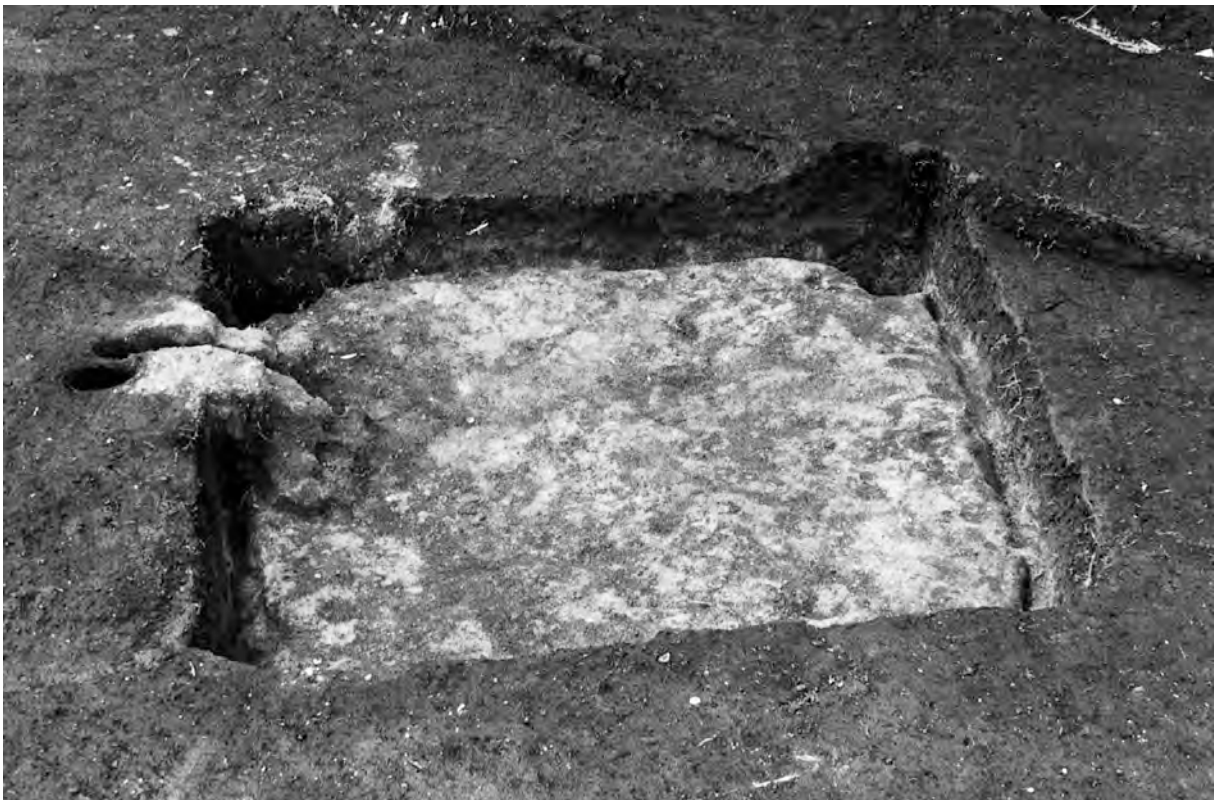
ＳＩ21炭化材出土状況（東→）

ＳＩ21出土炭化材１（東→）

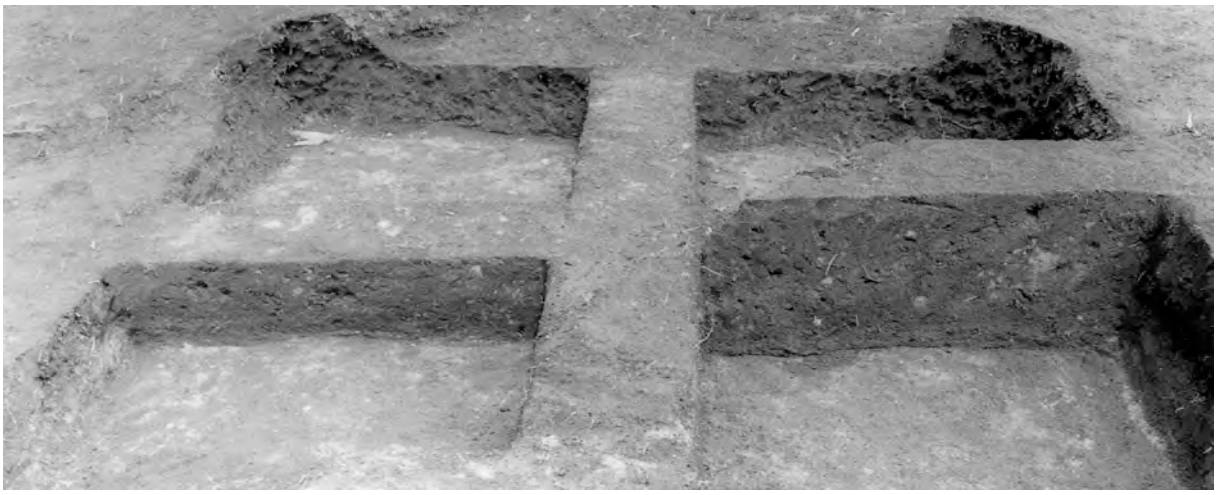
ＳＩ21出土炭化材２（南→）

ＳＩ21出土鉄製品１（東→）

ＳＩ21出土鉄製品２（東→）



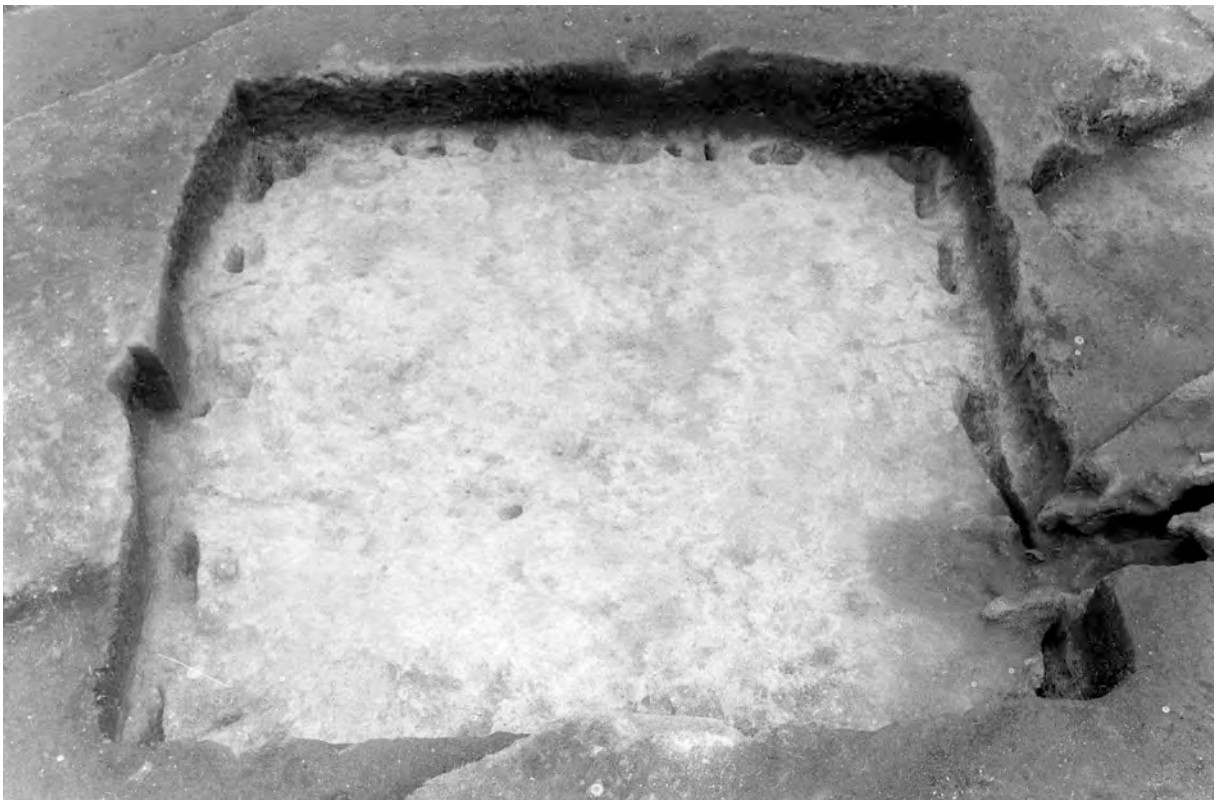
ＳＩ22全景（東→）



ＳＩ22断面（南→）

ＳＩ22確認（東→）

ＳＩ22カマド全景（北→）

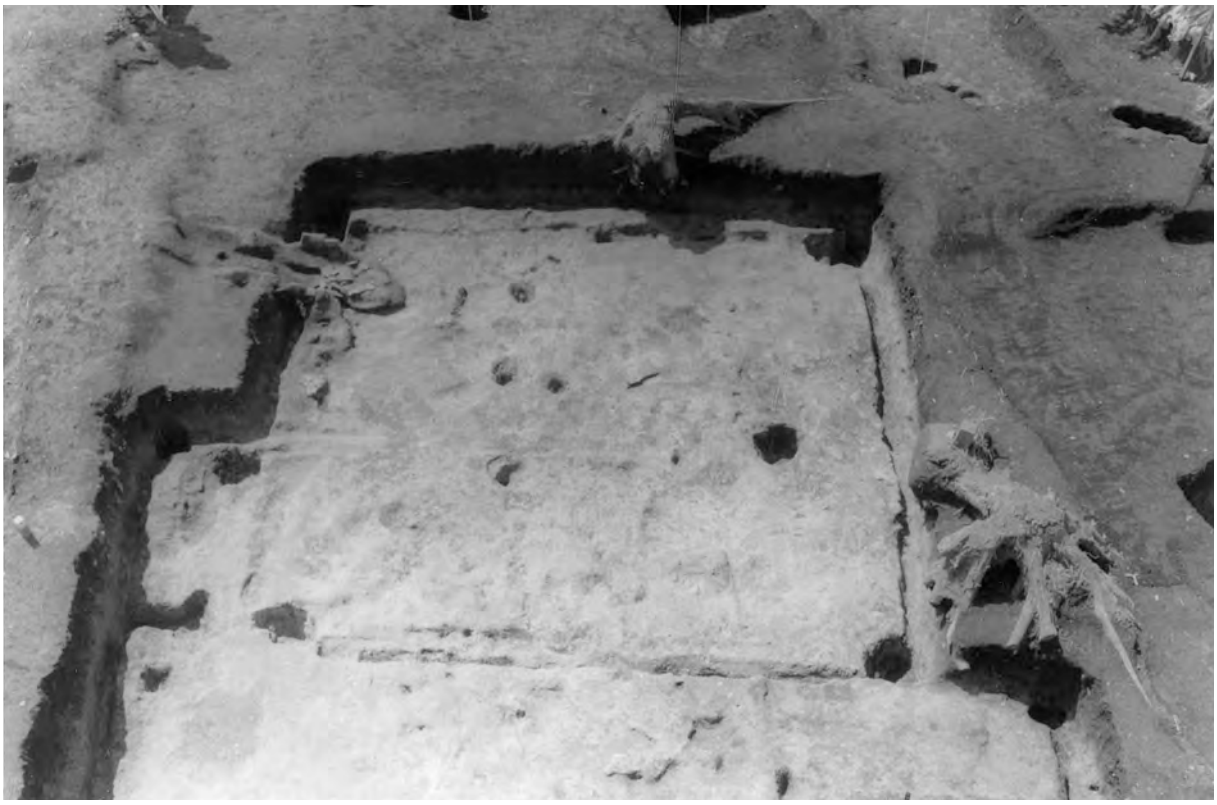


ＳＩ23全景（南→）

ＳＩ23断面（南→）

ＳＩ23確認（南→）

ＳＩ23カマド全景（西→）



ＳＩ24全景（北→）

ＳＩ24断面（南→）

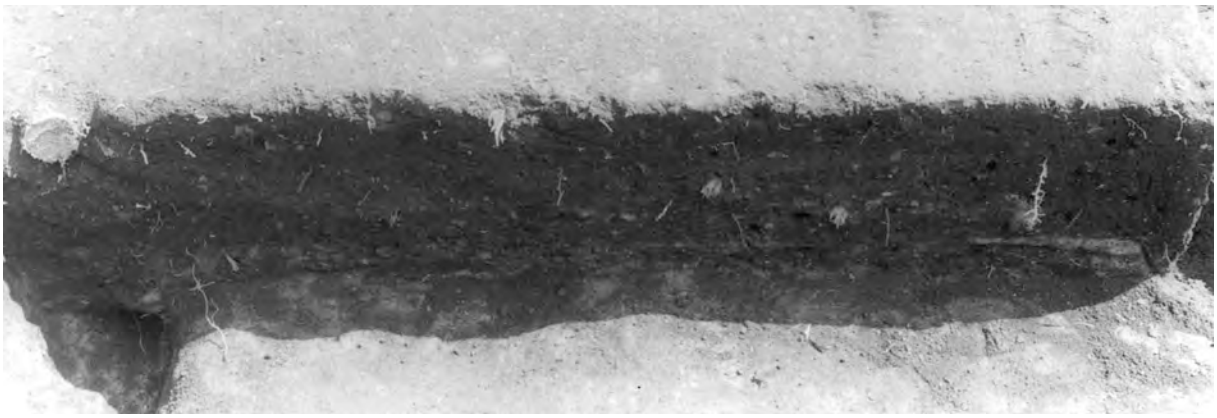
ＳＩ24工具痕確認（北→）

ＳＩ24カマド全景（西→）

ＳＩ25全景（北→）

ＳＩ115全景（北→）

ＳＩ25断面（南→）

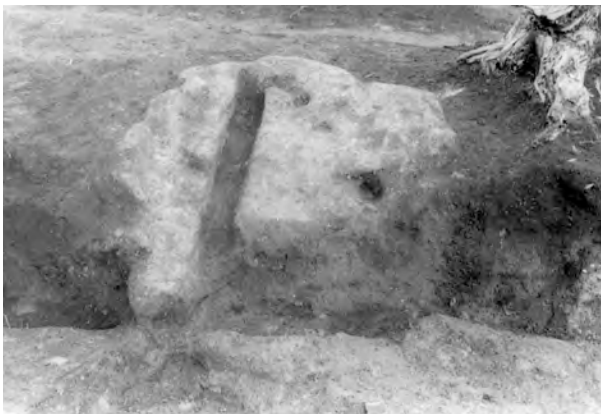


ＳＩ115張り出し部断面（南→）

ＳＩ24・25・115確認（東→）

ＳＩ115カマド確認（南→）

ＳＩ115カマド断面（西→）



ＳＩ115カマド全景（南→）

ＳＩ26全景（北東→）

ＳＩ26断面（北東→）

ＳＩ26確認（東→）

ＳＩ26カマド全景（北東→）

ＳＩ27全景（東→）

ＳＩ27断面（南→）

ＳＩ27確認（南東→）

ＳＩ27Ｐ2断面（西→）

ＳＩ28全景（南西→）

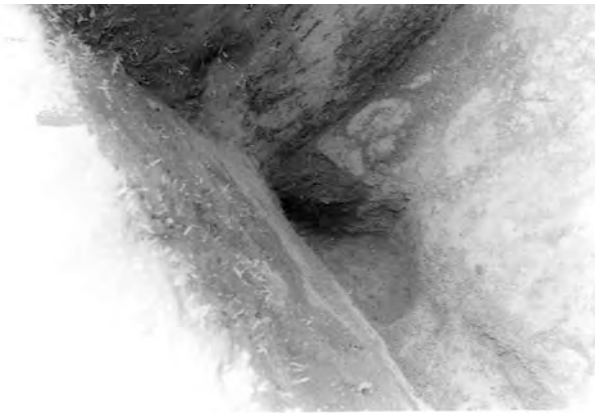
ＳＩ28断面（南西→）

ＳＩ28工具痕確認（南西→）

ＳＩ28カマド全景（南西→）

ＳＩ29全景（北東→）

ＳＩ29断面（東→）



ＳＩ29Ｐ1断面（北→）

ＳＩ112全景（北西→）

ＳＩ112断面（南西→）

ＳＩ112Ｐ3断面（東→）

ＳＩ112カマド全景（北西→）

ＳＩ113全景（北西→）

ＳＩ113断面（西→）

ＳＩ113鉄床石出土状況（西→）

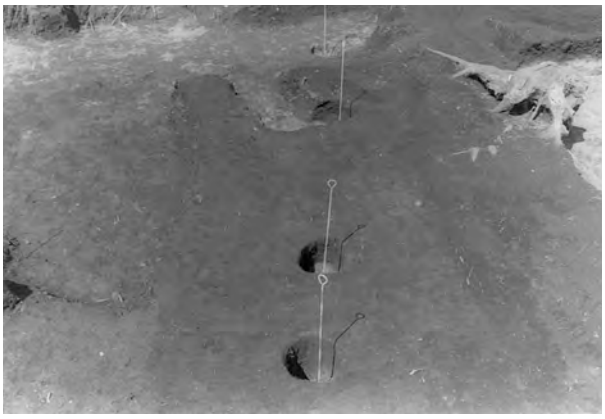
ＳＩ113カマド全景（北西→）

ＳＩ114全景（北西→）

ＳＩ114断面（北西→）

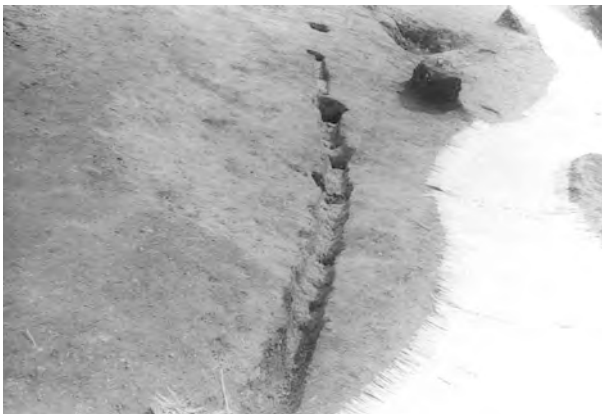
ＳＩ114土師器坏出土状況（南→）

ＳＩ114土師器坏出土状況（南→）



ＳＡ119全景（南東→）

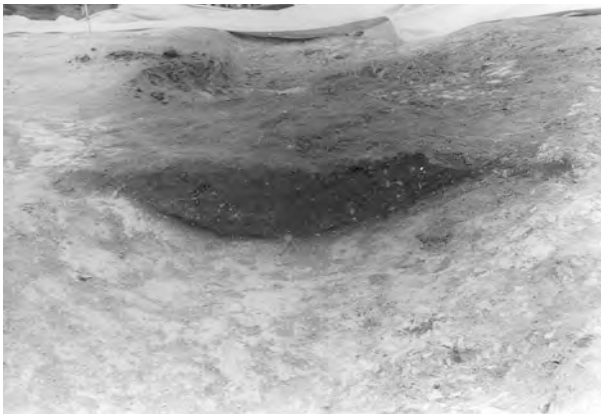
ＳＤ32断面（西→）



ＳＡ120全景（北→）

ＳＤ32全景（南→）

ＳＤ33断面（南西→）



ＳＤ38断面（西→）

ＳＤ33全景（北→）

ＳＤ38全景（西→）

第16図ー3

第39図ー5

第66図ー1

第49図ー2

土師器甕（大型）

第49図ー4

第40図ー4

第50図ー1

第70図ー1

第40図ー9

第40図ー10

第40図ー8

第16図ー11

土師器甕（小型）・土師器坏

第40図ー14

第40図ー16

第40図ー15

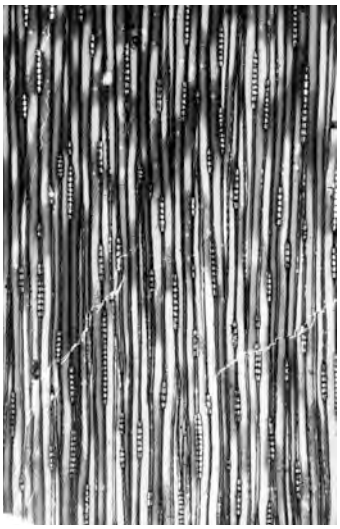
第40図ー20

第40図ー17

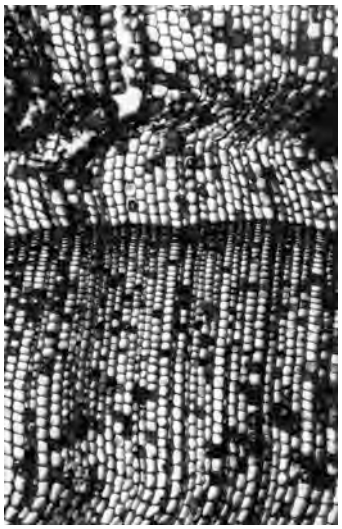
第40図ー18

第70図ー3

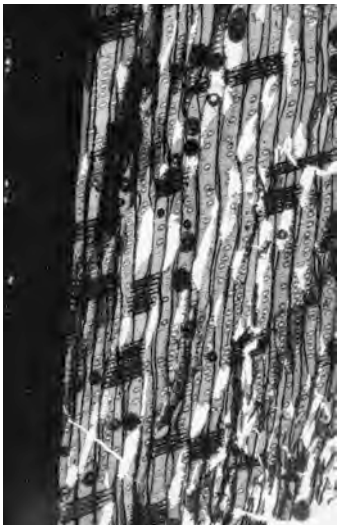
鉄製品



NO-3
スギ科スギ属スギ　木口×40　柾目×40　板目×40

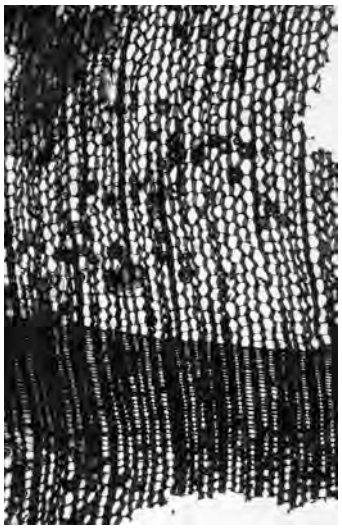


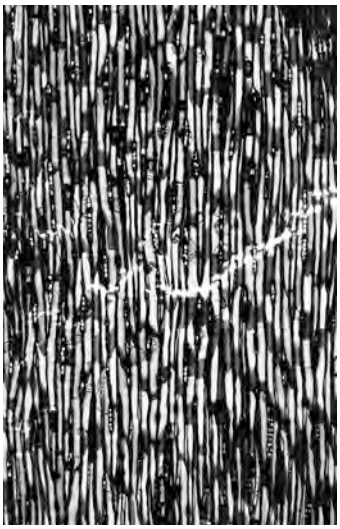
NO-7
スギ科スギ属スギ　木口×40　柾目×40　板目×40



NO-10
スギ科スギ属スギ　木口×40　柾目×40　板目×40

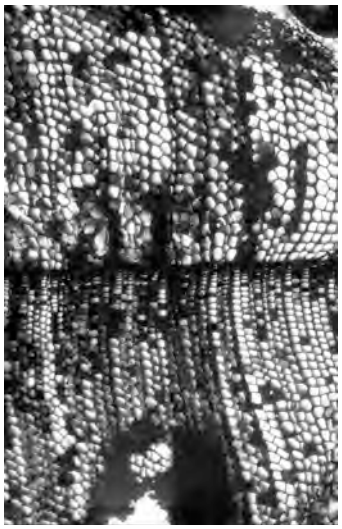
出土材樹種 1





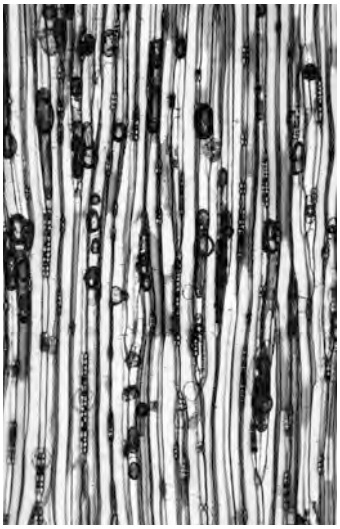
NO-2
ヒノキ科アスナロ

木口×40　柾目×40　板目×40



NO-4
ヒノキ科アスナロ

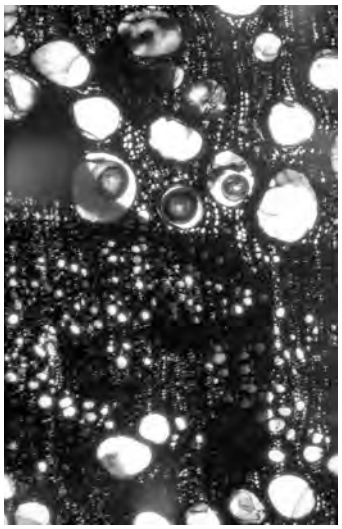
木口×40　柾目×40　板目×40



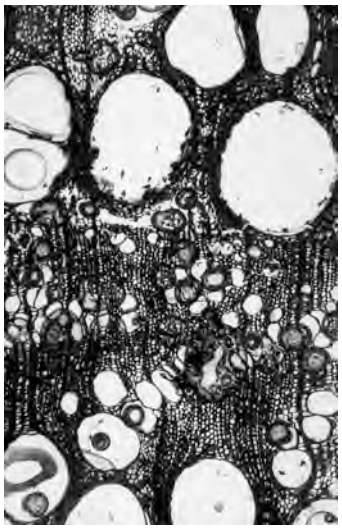
NO-5
ヒノキ科アスナロ

木口×40　柾目×40　板目×40

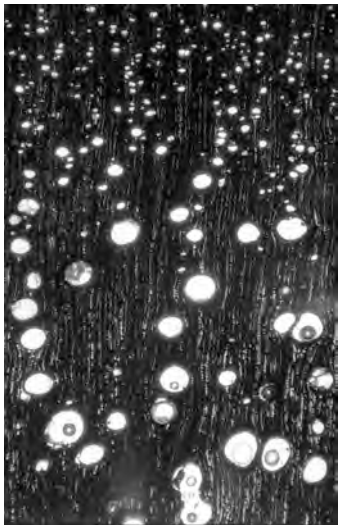
出土材樹種 2

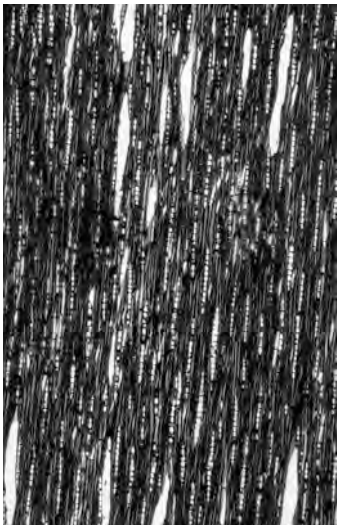


NO-14
ブナ科クリ属クリ　木口×40　柾目×40　板目×40



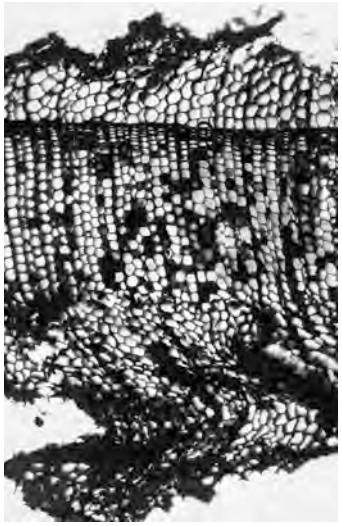
NO-16
ブナ科クリ属クリ　木口×40　柾目×40　板目×40



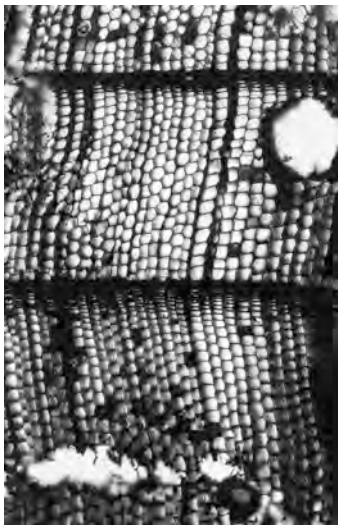


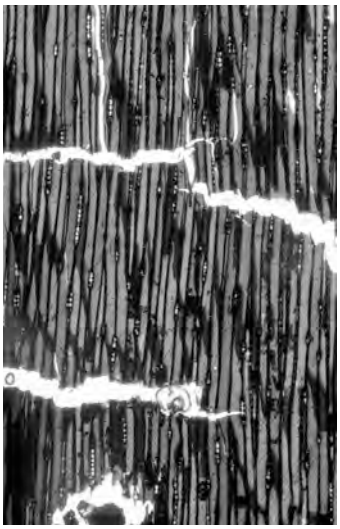
NO-37
ブナ科クリ属クリ　木口×20　柾目×20　板目×20

出土材樹種 3

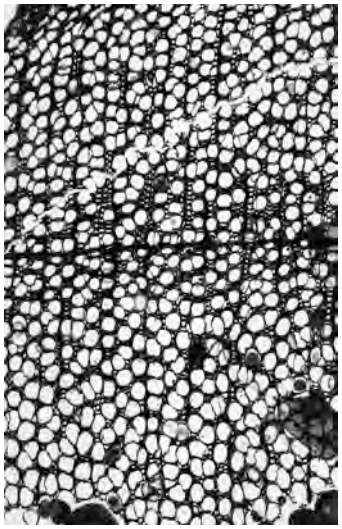
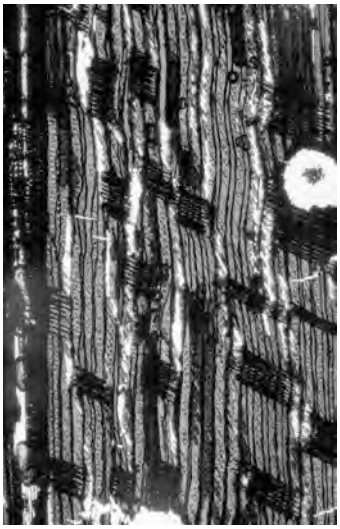
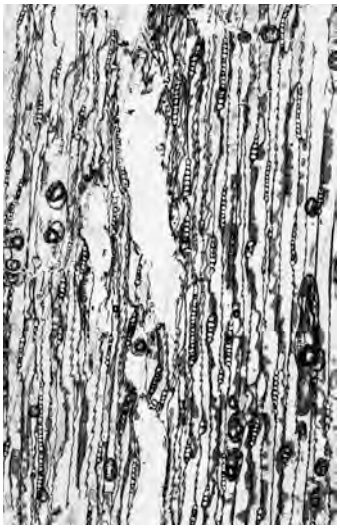


NO-25
ヒノキ科クロベ属クロベ　木口×40　柾目×40　板目×40





NO-28
ヒノキ科クロベ属クロベ　木口×40　柾目×40　板目×40

NO-39
ツバキ科ツバキ属　木口×40　柾目×40　板目×40

出土材樹種 4

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおかみあなさんいせき
書名	狼穴Ⅲ遺跡
副書名	一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅵ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第427集
編著者名	新海和広・小松田博嗣・巴亜子
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20　　TEL　0187－69－3331
発行年月日	西暦2008年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおかみあなさんいせき 狼穴Ⅲ遺跡	あきたけんおおだてし 秋田県大館市 しゃかないあざおおかみあな 釈迦内字狼穴 21－１ほか外	05204	204- 4 -136	40° 18′ 23″	140° 34′ 38″	20060614 ～ 20060905	1,600㎡	一般国道７号大館西道路建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おおかみあなさんいせき 狼穴Ⅲ遺跡	採集地・ 貯蔵域 集落跡	縄文時代 平安時代	フラスコ状土坑　13基 計13遺構 竪穴住居跡　19軒 掘立柱建物跡　２棟 土坑　７基 柱列　４条 溝跡　４条 捨て場　１か所 柱穴様ピット　37基 性格不明遺構　１基 計75遺構 総計88遺構	縄文土器・石器 土師器・須恵器 鉄製品 近世陶磁器	縄文時代の貯蔵穴群と平安時代の集落跡を検出した。 縄文時代の貯蔵穴は台地先端部に集中的に配置する傾向が窺えた。 平安時代の集落跡は、今回の調査範囲が南東端に当たるとみられ、より北西側へ連続する比較的大規模の集落跡になることが予測される。なお、本遺跡北西部に位置する狼穴Ⅳ遺跡と一体になる可能性もある。

秋田県文化財調査報告書第427集
狼　穴　Ⅲ　遺　跡
－一般国道７号大館西道路建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－

印刷・発行　平成20年３月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802 大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187) 69－3331 FAX(0187) 69－3330

発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580 秋田市山王三丁目１番１号
電話(018) 860－5193

印　　刷　株式会社三森印刷